



# 青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究

神野, 雄

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2025-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7071号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007071>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究

平成 30 年 1 月

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

神野 雄

## 目次

序	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第1章	本論文の問題と目的・・・・・・・・	4
第1節	心理学的研究における嫉妬研究の概観・・・・・・・・	5
第2節	嫉妬研究の残された課題：嫉妬の経験・表出の 測定と関連要因についての考察・・・・・・・・	37
第3節	本論文の目的と構成・・・・・・・・	45
第2章	多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討・・・・・・・・	48
第3章	青年の恋愛関係における嫉妬傾向は自尊感情に規定されうるか —自己愛的観点からの検討—・・・・・・・・	64
第4章	嫉妬傾向と関係満足感・関係効力感の関連・・・・・・・・	87
第5章	架空の浮気場面への予測行動尺度の作成・・・・・・・・	104
第1節	架空の浮気場面への予測行動尺度の 信頼性・妥当性の検討・・・・・・・・	105
第2節	架空の浮気場面への予測行動尺度と 一般コーピングの関連・・・・・・・・	126
第3節	浮気場面への予測された行動の 類型に関する探索的検討・・・・・・・・	139
第6章	嫉妬傾向，架空の浮気場面への予測行動と愛着の関連・・・・・・・・	153
第7章	嫉妬傾向，架空の浮気場面への予測行動と 恋愛関係上の問題行動との関連・・・・・・・・	174
第8章	総合的考察・・・・・・・・	198

謝辞

博士論文に関わる研究業績

APPENDIX

## 序

恋愛関係において個人が経験する嫉妬は、今日の嫉妬研究の基礎となった見方を提供した White(1981)や White & Mullen(1989)によると、それは“知覚された脅威に対しての相互に関連のある思考・感情・行動の complex での反応”であるとされる。

嫉妬は Buss(2000)や Pines(1992), Bevan(2013)など多くの研究者が示すように、個人や関係に対して時に破壊的で悲惨な結末を与える原因ともなりうるが、時に嫉妬を覚えるがゆえに関係を自らがどれほど重要に考えているかを知り、関係を維持する行動につながる点では建設的な側面もあるのではないかという見方が根強く存在する。さらに Bevan(2013)が指摘するように嫉妬は日常的で、誰もが経験しうる強い精神的な力動であるため、今日までに精神分析・精神病理学的観点や進化心理学的観点、社会心理学的観点など、数々の理論的観点から嫉妬についての検討や研究が行われてきた。

本研究では、恋愛関係の中で個人が嫉妬をどのように経験し、また表出するかというプロセスに着目したい。その理由として、まず嫉妬の経験に関しては、恋愛関係の中で経験される嫉妬、個人の嫉妬深さを捉えるにあたり、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)などによれば嫉妬を認知・情動・行動の多次元から捉える手法は単次元で捉えたり、嫉妬の性差のみを捉えるような観点に比べ、個人差を測定する上で有用であるとされる。この捉え方は、もともとはストレス理論を援用する形で嫉妬を認知・情動・行動で捉えることを考案した White(1981)をさらに批判する形で尺度作成の研究を行った Pfeiffer & Wong(1989)や、同じく先行研究をまとめて嫉妬の捉え方について整理した Buunk(1997)による尺度に由来するものである。そして、今日の嫉妬研究においても、この両者の作成した尺度は、そのまま用いられることも多いほど、現在では支配的な尺度となっている。

次に嫉妬の表出に関しては、Bevan(2013)によれば個人が嫉妬を覚えた際にそれをどう表出するかといった、嫉妬の表出に関する研究は、Guerrero による一連の研究が存在するが、嫉妬の経験に関する研究と比較すると研究の絶対数が少ないのが現状である。しかし、現実場面にて個人が嫉妬をいかに経験し、それを表出するかというプロセスを検討することは、個人がいかにこのネガティブな結果をもたらしうる心理的現象を処理しうるかを考える上で有用であると考えられる。そのため、嫉妬の表出について捉える研究やそのための尺度開発についても、実証的な研究の中でさらに発展させていく必要があると考えられる

だろう。

日本の嫉妬研究では、まず Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)による認知・情動・行動の多次元から嫉妬を捉えるような研究がそもそも存在せず、それに代わるような代表的な嫉妬を検討する体系的な研究もほぼ見受けられない。そのため、日本で嫉妬の経験・表出について検討する研究を行うためには、まず嫉妬の経験・表出を測定しうるような信頼性・妥当性ともに確認された尺度を作成することが必要であると考えられる。

上記にて紹介した海外の嫉妬の先行研究にも、解決されるべき課題や知見の不一致によって未だ検討され尽くしていない問題が複数存在する。本博士論文では、これらの問題や課題を踏まえ、嫉妬の経験および嫉妬の表出について、測定する尺度の作成を行い、関連する要因について実証的に検討することで、個人が恋愛関係上で示す嫉妬が「何によってもたらされうるのか、そして関係に対して何をもたらしうるか」について考察することを大きな目的とする。なお、この目的を達成するため、先行研究の整理から考えられる嫉妬研究の具体的な問題点と、本博士論文で行う研究の大まかな方針を以下に紹介する。

第一に、既存の嫉妬の経験を測定する尺度については、尺度を構成する上での概念設定や回答形式に関する問題点が挙げられる。この点については第2章で取り上げ、千九研究の知見をもとにした新たな尺度の作成を行うこととする。

第二に、既存の嫉妬の表出を測定する尺度について、尺度の構成上の大きな問題点や、葛藤に際して「別れる」行動を検討できない問題点が挙げられる。この点については第5章で取り上げ、嫉妬研究以外の文脈の知見も援用することで新たな尺度の作成を行い、その尺度の測定する内容について詳細に検討する。

第三に、嫉妬研究の黎明期から関連が指摘され続けてきたものの、一貫した知見が得られていない自尊感情との関連の検討が考えられる。この問題については第3章で取り上げ、自己愛を考慮することでの知見の整理を試みる。

第四に、同様にさほど一貫した知見が報告されていない関係満足感との関連の検討も必要といえるだろう。この問題については第4章で取り上げ、関係効力感やネガティブな反すうとの関連からそのプロセスについて考察する。

第五に、嫉妬の経験や表出の傾向に対して影響を及ぼしうる理論的観点として、愛着との関連の検討も必要であろう。この点については第6章で取り上げ、作成した二つの尺度と愛着との関連を詳細に検討することとする。

第六に、嫉妬の経験や表出の傾向によってどの程度実際の恋愛関係上での問題が説明さ

れうるかを検討することで、嫉妬が果たして本当に恋愛関係上のトラブルや問題につながるかを検討することも、今日的な課題であると考えられる。この点については第7章で取り上げ、複数の種類の恋愛関係上の問題行動に対して作成した嫉妬の経験・表出に関する尺度がどのように関わるかを検討していく。

上述のように、本博士論文ではこれら6つの点について実証的に検討を行ったうえで、最後の第8章において、それぞれの章で得られた知見や章を超えた考察を行うことで、嫉妬の経験や表出に関する知見の統合を行うこととする。

## 引用文献

- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦 彊子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences*, 23, 997-1006.
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, 63, 243-251.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Pines, M. A. (1992) *Romantic Jealousy*. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- White, G. L. (1981). A model of romantic jealousy. *Motivation and Emotion*, 5, 295-310.
- White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.

## 第1章 本論文の問題と目的

ここでは、これまで行われてきた嫉妬に関する心理学的研究や指摘を概観し、それらのもたらす知見と今なお残された課題について紹介することで、本論文の問題意識と目的を明確にし、さらに本論文の構成について述べる。

第1節では、嫉妬の心理学的研究に関する様々な理論的観点を概観し、嫉妬がどのように捉えられてきたかを紹介する。

第2節では、第1節で紹介した内容を踏まえ、特に社会心理学的な実証研究における嫉妬研究と、その残された課題を紹介する。

第3節では、第2節で論じた課題を踏まえ、本論文の全体的な目的と構成について論じる。

## 第1節：心理学的研究における嫉妬研究の概観

### 1. 本論文全体の目的・はじめに

本博士論文においては、青年が恋愛関係の中で嫉妬をどのように捉え、またもし嫉妬を引き起こすような葛藤が起きてしまった場合にはどのように対処するかという嫉妬の経験と表出のプロセスに焦点を当て、実証的な研究を重ねることで、青年の示す各種の嫉妬の経験およびその表出が何によってもたらされるのか、そして関係や個人に何をもちこたせるのか、検討することを大きな目的とする。第1章では、第2章以降の実証的な研究に先立ち、まずは嫉妬という言葉の定義、類縁感情としての妬みとの相違、複数存在する嫉妬研究の流れの紹介を行う。そして本博士論文が主に取り組む社会心理学的視点からの嫉妬研究についてレビューする。さらにその中で今日の社会心理学的観点から取り組まれている嫉妬研究の問題や、日本における嫉妬研究の問題について述べることで、本研究の問題意識を紹介する。その後、本論文の構成を説明することとする。

さて、恋愛関係や夫婦関係におけるやきもち=嫉妬は、その程度が過剰なものとなれば個人が守ろうとした重要な人間関係そのものの崩壊につながりかねないが、果たして嫉妬は経験しない方が良いものとしてしまっても良いのだろうか。Guerrero & Andersen(1998a)が表すように嫉妬は否定的な感情により関連が深いとされるが、同時にGuerreroらによると嫉妬はパートナーへの愛と感謝を示し、倦怠期の恋愛に活気をもたらし相手をどれだけ慮っているか気づかせられるとも表されている。Buss(2000)が示すように嫉妬は愛し合うカップルを固く結びつけることもできるが、時として昨日まで優しかったパートナーを残忍な復讐者に変えることもある。私たちが嫉妬について考察する際、その破滅的な要素が着目されがちではあるが、それと表裏一体になって含まれるポジティブな要素が指摘されていることにも着目すべきであろう。

しかし荻野(1983)が指摘するように、嫉妬者がその嫉妬的情念から、恋人や恋敵に殺意を抱いたり、程度の大小はあれ、実際に危害を加えるような行動に及んだり制裁を加えることはまれではない。相手を束縛し、身体的・心理的暴力を振るうDomestic Violence(以降DVと略記)も国内外を問わず近年大きく取り上げられる問題の一つになっている。遠藤(2007)や瀧田(2009)によればDVの大きな要因の一つにはパートナーの嫉妬が挙げられ、嫉妬は関係の崩壊のみならず、時に個人の身体を傷つけ、生命すらも脅かしかねない事態に

つながることもあるといえる。

この20年ほどでインターネットと携帯電話の普及により「いつでもどこでも誰とでもつながることのできる」世の中にはなりつつあるが、一方でこれらの技術を悪用する形でパートナーの監視や束縛、プライバシーの侵害が簡単に可能となってしまう。海外ではSNSサイト Facebook の利用と恋愛関係における嫉妬を絡めた研究論文も複数発表されており(e.g., Muise, Christofides, & Desmarais, 2009 ; Elphinston & Noller, 2011), 恋愛関係も嫉妬も、それに由来する関係内の葛藤も科学技術等の進歩と共に複雑性・多様性を増してきている。「嫉妬」というこのとかく思い通りにならない、されど多かれ少なかれ私たちが普遍的に経験する感情について理解していくことは、恋愛関係・夫婦関係にある人々の葛藤の低減や人生を通じて私たちが大切な他者へ持つこの強い執着の理解につながる点で重要だろう。

青年にとって、恋愛関係は特に重要な関心事とされており、Erikson(1959)が漸成発達理論の青年期に続く第VI段階の課題として親密性を設定し、また青年期の自我同一性と親密性の密接な関係について論じていることから、長期にわたって円満で成熟した親密な関係を形成できることは、青年やその次の発達段階において自我発達の適応を示す部分があると考えられる。Erikson(1959)の記述をもとにした大野(1995)は、大学生のレポートを分析することで、青年期初期の未熟な恋愛の様相として「アイデンティティのための恋愛」を示した。「アイデンティティのための恋愛」とは、大野(2010)によれば「親密性が成熟していない状態で、かつアイデンティティの統合の課程で、自己のアイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする、または補強しようとする恋愛行動」と定義される(pp.84)。大野(1995,2010)はこの状態にある青年は相手愛しているというよりは、相手を通して自分の姿を確認することに関心を寄せているため、賞賛や好意が得られなくなると相手への監視・嫉妬につながり、最終的には「アイデンティティのための恋愛」は長続きしにくいとしている。すなわち、恋人の心変わりを過剰に警戒する青年は、自我発達の観点からすれば自己愛的で未熟な自己を、恋人の心変わりによって同年代の同性と比較した上で選ばれないという自らの個性が否定される傷つきから防衛するために、そのような嫉妬を経験しているのだとも捉えられるだろう。この意味で、青年が恋愛関係で嫉妬を経験・表出するプロセスが何によってもたらされ、何をもらおうのかを検討することには、単なる恋愛関係上の心理過程のみならず、青年の発達の適応を考える上でも意義のあることであると考えられる。

嫉妬に関しては心理学的な研究や書籍も数多く、国内でも嫉妬について触れている文献の数は 20 世紀初頭から比較的多く見受けられる。田中(1989)は精神病理学的な観点から病的嫉妬に関する研究をレビューする際、第二次世界大戦以前の国内の嫉妬研究について、注目すべきものは見当たらないとまで表している。確かに精神病理学や心理学等、今日的な学問の俎上に乗る内容ではないにしろ、現在のそれに続く嫉妬研究の第一歩として、その当時の人々の「嫉妬」観や夫婦観等について理解を深められるという点で過去の文献を参照する価値は大いにあると考えられる。国内ではそういった資料的文献として、日本に心理学自体が輸入されて間もない明治 38 年(1905 年)に石田孫太郎によって『嫉妬の研究』が、そして大正 2 年(1913 年)には同じく石田孫太郎により『嫉妬論』が、『嫉妬の研究』を大幅に加筆する形で執筆されている。これらは先述のように必ずしも実証的なデータに基づいた今日的な心理学的研究とはいえませんが、当時としても既に同じ「嫉妬」として表現されていた嫉妬と妬み(石田によれば『變形的嫉妬』)の異同や嫉妬のもたらす功罪について考察を行っていることは大変興味深い。その後も半田(1920)や大橋(1921)などにより、第二次大戦以前でも嫉妬を家族関係、恋愛関係の観点から考察する書籍は国内だけでも多数発刊されている。こういった明治時代末期や大正時代の文献を引くまでもなく、現在に至るまで洋の東西を問わず様々な嫉妬論が展開されてきた。今回問題とする心理学的な観点での嫉妬への言及・研究は精神病理学・精神分析学的立場から嫉妬妄想に着眼する形で始まり、実証的な研究においては堤(2006)が指摘するように社会心理学的な研究が主流となっているように見受けられる。特に恋愛関係や夫婦関係など、親密な二者関係における嫉妬については、この 30~40 年ほどで特に海外において数多くの心理学的研究がなされてきた。その数々の嫉妬研究の中でも多くを占めるのが尺度を用いた質問紙法による実証的なアプローチである。

White(1981)や White & Mullen(1989)によれば、嫉妬は知覚された脅威に対しての相互に関連のある思考・感情・行動の complex での反応であるとされる。この他にも数々の先行研究における「嫉妬」の定義や表現がなされているが、ここで Bevan(2013)による嫉妬を総合的に捉える優れた試みを軽く紹介しておきたい。それは先行研究の膨大な知見を総合して、混乱しがちな嫉妬への捉え方を 4 つの次元に(多少の重複などはあれ)分けて整理を試みるものである。その 1 つ目が嫉妬の①Source 原因で、すなわちこの次元は嫉妬の原因が情愛的/性行為を伴うようなものか、感情的/親密さに由来するものか、友人関係や家族関係におけるものか、活動や重点を置いている何かに関するものか、ということである。

次は嫉妬を生起させる関係への脅威の②Nature 性質についてで、この次元はそもそも認識された脅威（三角関係のライバルなど）が実在するものに対する反動的なものか、非実在・不特定なライバルへの妄想的なものか、といった次元である。続く次元となる③Component 要素は後々詳しく述べるが、White(1981)に端を発し Pfeiffer & Wong(1989)が実証的な尺度を作成した嫉妬の捉え方で、嫉妬を経験し表出・出力するプロセスを指し、多くは認知的要素・情動的要素・行動的要素の3つで捉えられる。最後が④Degree 程度の次元で、こちらは嫉妬の程度が正常な範疇にとどまっているか、病的にまでなっているかという次元を表す。嫉妬について総合的に捉えようとする研究は数あれど、この Bevan(2013)による嫉妬の4次元への分類は嫉妬を考察する際に非常に役立つものとなるだろう。

嫉妬に関する心理学的研究の優れた日本語でのレビューとしては中里(1991, 1992a, 1992b, 1992c, 1993)による初期の社会心理学的な先行研究のレビューを含む一連の論文や、坪田・深田(1991)や坪田(1998)による初期的な嫉妬研究に関するレビュー、岩脇(2000)による進化心理学的観点に特化してレビューを行った論文、澤田(2009)による嫉妬と妬みの弁別・それぞれの発達についての論文、木村(2010)による嫉妬の臨床的研究における意義の提唱を旨とした論文、加藤(2017)による進化心理学的観点から浮気・嫉妬を扱った研究に対するメタ分析の論文などが存在する。これらの論文では、いずれも嫉妬という概念を理解するにあたり有用な理論や研究が紹介されている。度を越えた嫉妬や事実に基づかない妄想的な嫉妬が時には大切な二者関係を破壊しうることは周知の通りであるし、また時には適度な嫉妬が関係を維持しうることもあるという点については上で既に軽く触れている。こういった嫉妬のもたらす功罪については各立場から様々な考察が寄せられている。しかしこれらの論文はいずれも海外の実証的な嫉妬研究で頻繁に用いられる嫉妬の要素やプロセス、あるいは嫉妬の経験と表出 (Bevan(2013)の分類の③に該当する部分) についての言及が不十分であるようにも見受けられる。これらの問題点はそもそも国内ではまだ嫉妬研究に対する興味関心が比較的薄いことによる部分もあると考えられる。そこで本博士論文でこの嫉妬の経験と表出に関する研究に焦点を当てることに先立って、本節では嫉妬にまつわる複数の学術的立場からの先行研究をレビューする。

そもそも嫉妬とは何なのか？嫉妬は心理学における一つ概念であると同時に日常生活でも頻繁に用いられる単語でもあり、非常に広義的な言葉である。嫉妬について心理学的に研究・考察されているほとんどの論文では「嫉妬」と「妬み」や「羨望」といった類縁の感情との弁別について紹介することで嫉妬の語義を整理・明確化してから、本論に入っ

ている。先述した石田(1905)でも、近年執筆された最新の論文でもその一点については非常に似通っているといえる。そのため、嫉妬の病理的・非病理的側面について論じる前段階として、そもそも嫉妬とはどういう言葉・概念であるのかということへの理解を深めるために、まずは「嫉妬」と「妬み」、あるいは「羨望」の異同について先行研究を用いて論じることからはじめたい。

## 2. 「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の異同に関する言及・研究

「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の異同について、Delpierre(1954)は精神分析的立場から“羨望とは、自分が望みながらもまだ所有していない事柄を楽しんでいる者に対して感ずるところの憎しみの感情である”(p.41)、また“嫉妬とは、自分自身の所有物を持ちつづけようとするときの邪推深い気遣いである”(p.44)と表した。また中里(1992b)は1980年代ごろから興った社会心理学的な嫉妬研究を概観して“嫉妬は、自分が享受し、以降も保持し続けたいと望んでいる財貨(財産、地位、業績、愛など)が、他者に転ずるかもしれないという、疑念や惧れに苛まれている状態の感情であり、他方、羨望は、そうした望ましい財貨に関しては、自分ではなく、他者が優位な立場にあることに対する不快や恨みがましさを含意する”(p.117)と表した。このように、先人たちは各立場から「嫉妬」とその類縁関係にある感情を様々な言い回しで弁別している。定義の紹介はこの程度に留め、まず言葉の意味の整理から、これらの違いに目を向けてみよう。

石川(2009)によれば、語義としては我が国の「嫉妬」と「妬み」という言葉自体の間にはほとんど違いはないことが指摘されている。広辞苑(第6版)では、「嫉妬」は“①自分よりすぐれた者をねたみそねむこと。②自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと。また、その感情。りんき。やきもち”とある。一方「妬む」は“①他人のすぐれた点にひけ目を感じたり、人に先を越されたりして、うらやみ憎む。そねむ。また、男女の間でやきもちをやく。②癢だと感ずる。くやしいと思う”であり、両者に明確な違いを見出すことはできない。一方で「羨望」は“うらやましく思うこと”とされ、「嫉妬」「妬み」とは少し違った性質で男女の情に直接的に絡む語義は持たないようである。「妬み」と「羨望」は論者により微妙に異なって受け取られるが、近年の日本語での論文・研究を参照する限りこれらはひとまとめに“他人のすぐれた点をうらやむこと”を指す意味として用いられることが多い。「羨望」は「妬み」と比べられる場合においては、「妬み」に比べ対象

への悪意や敵意が薄いものとして弁別されることが多いように見受けられる。これら「妬み・羨望」との弁別を図るため、本論文では“自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと”の方の意味を「嫉妬」、 “他人のすぐれた点をうらやむこと”を基本的に「妬み・羨望」と定義して論を進めることとする。

Ben-Ze'ev(2010)が指摘するように、何かを独占したい心の動きを表す言葉として、英語圏でも jealousy と envy は混同して用いられているようである。こちらについても語義の整理を試みた石川(2009)によれば、 jealousy は“自分の持ち物、あるいは自分に所属するものを誰かに奪われるのではないかという怖れ”を意味し、 envy は“誰かが持っているもの、あるいは誰かに帰属するものに対する願望と、誰かが持っていることへの怒り”を意味する。これら jealousy と envy は意味合いとして嫉妬と妬み・羨望の関係に厳密に対応しているわけではないようだが、訳語においては jealousy を嫉妬、 envy を妬みや羨望とすることが多い。

上記のように「嫉妬」を“自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと”とし、「妬み・羨望」を“他人のすぐれた点をうらやむこと”と考えると、これら「嫉妬」と「妬み・羨望」の間には大きな違いがあり、語義を混同する理由はないように見受けられるかもしれない。しかしやはり嫉妬と妬みの経験には混同されるだけの通底する部分があると考えるのが自然であろう。この点に関してはどちらも自分にとって重要で望ましい価値ある何かの所有に関する彼我の違いを問題として比較するものであるため、という共通項を挙げるのみの説明もできるが、ここで岡野(1988)による精神分析的立場からの性愛関係における嫉妬の苦痛に関する文章を引用する。

まず嫉妬者は第一段階として、第三者（後の嫉妬対象者）が愛情対象を奪い去ろうとしているとき、その状況を把握する過程で一瞬その第三者に対して同一化し、自らの手元を離れつつあるその愛情対象との満足体験をまざまざと想像、想起する（この現象は哲学的には他我ないしは主体他者の体験ということになる）。そして次の瞬間に嫉妬者は我に返り自らをその第三者から切り離し、そのいわば幻覚的な満足体験に見合っただけのものを実は逆に自らが失いつつあることを自覚するのが第二段階である。そしてこの意味で嫉妬の体験とは、二相性なのである。(p.317)

嫉妬者はそこで嫉妬対象者が味わおうとしている快樂を一瞬擬似的に体験するというだけでなく、嫉妬対象者のなかに自分には不足ないし欠如している属性を見出し、敬愛の

念をすら抱く可能性がある。その属性とは、まさに愛情対象を魅了しその愛を保証するものであり、愛情対象もそれが嫉妬者本人には不足していたために嫉妬対象者へと走ったのである。いわば嫉妬者は同一化の相で相手の中に自己の理想像を見出し、その対象者に一時的に魅せられる(pp.320-321)

つまり岡野(1988)によれば、今まさに愛情の対象や望ましい価値を奪われんとしている、あるいはその疑惑の渦中にある嫉妬者は、対象を自分から掠め取っていくであろう第三者(ライバル)に「同一化」して自分が第三者として愛情の対象と満ち足りた状態を想起、ないしは想像する。しかし次の瞬間には自らの「危機的」状況に意識を戻すのである。文脈的に岡野(1988)の本意からは少し外れるだろうが、ここで(恐らくは自分よりも遥かに満ちに)愛情対象を体験しているであろう(=望ましい価値を保有している可能性のある)想像上の第三者と、対象を奪われつつある(=既に望ましい価値が奪われつつある)自分との差に嫉妬者が衝撃を覚え、愛情の篡奪者たる第三者へ苛烈な妬みを向けることも想像に難くない。また木村(1975)は三角関係の状態で経験される嫉妬について、古事記の表現を参考に、嫉妬者の恋敵へ向けられる感情は劣等感を含むネタミで、一方で恋仇とも関係のある恋人へ向けられる感情はウラミであると指摘している。これらの指摘から、嫉妬の経験には時に恋敵へ向けられる感情として妬みの要素も色濃く内包され、それがために混同されがちであることについても理解ができるのではないだろうか。

この「嫉妬」と「妬み」あるいは「羨望」の相違点・共通点については実証的な心理学的研究でも検討がなされている。例えば、Smith, Kim, & Parrott(1988)は、jealousy(嫉妬)とenvy(妬み・羨望)という言葉に関連する感情として、嫉妬に特有なものは疑惑、拒絶、怒り、損傷、喪失の恐れ、報復への願望で、一方の妬みに特有なものは向上志向、切望、劣等感、自己批判とする結果が得られている。更に、Smith, Kim, & Parrott(1988)は得られたデータをもとにenvy(妬み・羨望)は単一の意味合いでのみ使われることが多いが、一方でjealousy(嫉妬)はenvy(妬み・羨望)の意味合いでも用いられることを明らかにした。つまり、jealousyの一語の方が意味合いが広く、意味する内容としてenvyを包含しうることを実証的に示したのである。中里(1992a)も日本の大学生を対象としてこのSmith, Kim, & Parrott(1988)と同様の調査を行い、「羨望」と「嫉妬」に共通する感情項目として「孤独を感じる」「興奮を覚える」「絶望にとらわれる」「感情を抑圧する」などを抽出した。また嫉妬に特徴的な感情項目として「憎しみを持つ」「恨みを抱く」「裏切られる」

「敵意を持つ」「怒りを覚える」「傷つけたいと思う」「不快に思う」が、羨望に特徴的な感情項目として「憧れる」「向上を努力する」「所有物を切望する」「劣等感を覚える」「自分を恥ずかしく思う」「不運を嘆く」「自分を意識する」が抽出された。この結果は Smith, Kim, & Parrott(1988)を支持する方向の結果といえよう。

また、Festinger(1954)の社会的比較理論に端を発する形でいわゆる狭義の嫉妬を「社会的関係における嫉妬 social-relation jealousy」、妬みや羨望にあたるものを「社会的比較における嫉妬 social-comparison jealousy」とする見方も存在する(e.g., Bers & Rodin, 1984; Salovey & Rothman, 1991)。近年の日本国内の実証的な嫉妬研究も中里(1991, 1992a, 1992b, 1992c, 1993)をはじめとして社会的比較と社会的関係における嫉妬の異同について検討するものが多く見受けられる。例えば堤(2006)は具体的な状況に基づく「社会的比較における嫉妬」「社会的関係における嫉妬」の2因子構造を持つ嫉妬傾向尺度を作成し、両因子ともに自己愛の健康的な側面よりも、自己愛の病理的な側面との関連が考えられることなどを実証的に示している。

本節では嫉妬と妬みあるいは羨望との異同について論じたが、嫉妬の中でも特に論じられることの多い親密な二者関係における嫉妬についてまず考察をしてから各論に移ることとする。

### 3. 親密な二者関係における嫉妬

Parrott(1991)によれば、嫉妬はパートナーの関係がライバルによって喪失の脅威に晒されたとき経験される感情とされる。この親密な関係における嫉妬ほど日常的で、かつ私たちを非日常的な精神状態へと揺り動かす経験・感情があるだろうか。南(1949)によれば嫉妬の起源は子どもが愛情の対象を独占しようとする欲求にあり、子どもが愛情への競争者(同性の親や兄弟など)を意識しはじめた際に起こるとされる。その後の人生でも、まず青年期や成人期において、嫉妬は友人関係や恋愛関係・夫婦関係において経験される。老年期においても、様々の精神障害の症状として配偶者が浮気しているという妄想を抱く嫉妬妄想は船山・濱田(2006)によれば若い人より高齢者に、倉持(1979)によれば圧倒的に既婚者に多いとされる。そのため、人は老いても嫉妬から無縁ではいられないであろうと考えられる。上杉・榎場・馬場(2002)が大学生に「今までの体験の中で、嫉妬の感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して」記述してもらったところ、幼児では

「父母の愛情が兄弟姉妹などに向けられた場合」、幼児～中学生では「自分にとって大切な友達の好意が他の子どもに向けられた場合」、そして中学生～青年では「好意を抱いている異性の好意が他の人に向けられた場合」の嫉妬が主となっていた。

この生涯に渡り経験される嫉妬の中でも、特に恋愛関係や夫婦関係におけるそれは疑わしさと確信、愛しさと憎しみの両面的で複雑な感情に満ち、最も激しいものであるとされる（三浦・奥山，2003）。西平(1965)の指摘を参照するならば、その理由の一つとしては友人関係ならば第三者を排斥しなくても関係は成立するが、恋愛関係や夫婦関係はどうしても（少なくとも近現代日本においては）「ふたりだけ」を要求し、相手を他の同性から独占することを求める性質を持つためであろう。

親密な二者関係で経験される嫉妬は時に容易に苛烈さを伴い、その性質が全く事実無根の本人の思い込みに過ぎない証拠に基づいたいわゆる妄想的なものになった際、あるいは対処行動があまりに（社会・文化的に受容されないほどの）過剰な形を取った際に、「病理的な」嫉妬と評されるのである。シェイクスピアによる『オセロー』などは「病理的な」嫉妬の最も有名な例の一つである。旗手イアゴの悪巧みにより、将軍オセローは徐々に自らの妻デズデモーナが副官キャシオと通じているのではと疑いだすようになり、最後はオセロー自らの手で無実のデズデモーナを殺し、真実を明かされた後で自殺を遂げる。高橋(2014)も指摘するように DV の一つの原因は極端な嫉妬心ともされ、『オセロー』の悲劇はもちろん創作物とはいえ、嫉妬が時にここまでの激情を孕み、現実的に惨劇を起こしかねないことを示唆している。

嫉妬を過剰に経験する場合、嫉妬者には多大なストレスがふりかかる。また多大な嫉妬の処理過程がパートナーやその関係に対して不適切な形を取っていれば、嫉妬者の周囲にもストレスが拡大する。そういった意味で嫉妬は『オセロー』がごとく破壊的な性質を持つものであるとも表されることも多い。オセローのように根拠なくパートナーの不実を疑う病理的な嫉妬の側面について検討していくことは親密な関係で生まれる悲劇や葛藤を未然に防ぐ観点からも意義があるといえるだろう。またこのように嫉妬は「否定的な」側面が強調されて考えられやすい。その一方で、親密な二者関係においては適度に嫉妬を経験しそれを適切に処理することには、関係の維持や関係の質の向上につながる肯定的な側面も嫉妬には存在するのではないかとする見方や、嫉妬喚起状況（家に帰ると妻が見知らぬ男と不倫していた等）に反応的に嫉妬を覚えることには嫉妬の正当性こそあれ、病理性はないとする見方も根強く存在する。こちらの観点での嫉妬について深く検討することも、

嫉妬の意義を考える上で有用になると考えられる。

荻野(1983)によれば、人間の感情や情念が問題となる時、それがどこまで正常か病的かは必ずしも明確に区別できない場合が多いが、こと性愛関係における嫉妬の問題では、それが正常か異常かを判断することは実際の精神医学の臨床においては非常に重要であるとされる。それでは何が嫉妬を「正常」たらしめて、何が嫉妬を「異常」たらしめるのか。例えば特に根拠や証拠はないがふと恋人が自分に隠れて浮気をしているというような疑念が頭から離れなくなった場合、それは「異常な」嫉妬なのだろうか。宮城(1963)が指摘するように嫉妬は私たちの意識をくもらせ正常な判断力を奪い、嫉妬にかられた離婚、殺人や傷害事件、ストーカーなど思いもよらぬ行動を取らせることがあるが、破滅的な行動を取ることが「異常な」嫉妬と見なされるのだろうか。

次に正常な嫉妬、異常な嫉妬を考えるうえで重要な精神分析学及び精神病理学的観点からの紹介を行う。

#### 4. 精神分析学・精神病理学的観点における嫉妬、嫉妬妄想

先述の嫉妬の経験(jalousy experience)に関する病理性・非病理性を検討する際に嫉妬妄想を取り上げて論じることは特に有用な知見をもたらすと考えられる。嫉妬妄想について言及する大きな観点としては精神分析的観点と精神病理学的観点が存在する。宮城(1963)や山本(1967)、古城(2014)などによれば嫉妬妄想あるいは病的嫉妬の研究は古くは嫉妬そのものではなくアルコール中毒の症状や統合失調症の症状の問題としてとりあげられ、注目されてきたとされる。

宮城(1963)や Kingham & Gordon(2004)が指摘するように、嫉妬妄想は一つの病気ではなく症状としてみるべきであり、熱や発疹と同じように様々な場合に出現する。最も頻繁に関連が示唆されているのが慢性的なアルコール中毒であり、古くから嫉妬妄想はアルコール中毒の特徴の一つにもなっている(宮城, 1963)。他にもパラノイア、妄想型精神分裂病(統合失調症)、躁うつ病など様々な疾患によっても嫉妬妄想が見られる(三好, 1993)。嫉妬妄想は①パラノイア性の嫉妬妄想、②分裂病性または統合失調症の嫉妬妄想、③中毒性ならびに器質性の原因による症候性の嫉妬妄想に分けられるとされる。岡野(1988)が嫉妬妄想患者の生活史を辿って分析したところによると、嫉妬妄想の発現前に患者が種々の原因で愛情対象との性愛関係の維持に困難を感じていた場合が多いとされる。それは嫉妬妄

想の初期的研究におけるアルコール性の性的能力の低下と残存する性欲との乖離の話にも整合するところがある。嫉妬妄想患者はこのように性的能力の低下や自信喪失、家庭内の力関係の逆転などの要因により、妄想の発現する前から愛情対象を喪失する苦痛を嫉妬とは独立した形で体験する。山本(1967)が病的嫉妬の成立背景に配偶者との夫婦生活に対する不信や失望があるとしていることから、解釈するに愛情対象が存在しているのに対象を喪失してしまったような不満・不信や空虚感の理由を探すような形で、嫉妬妄想患者にはある時自分が占有すべき愛情対象の愛情を裏で密かにせしめている憎い第三者の存在がふと思いつかれて、一気に嫉妬の三者構造が妄想として成立してしまうのであろう。岡野(1988)は“通常の恋愛の嫉妬による苦痛は相手の浮気がそもそもの出発点であるが、嫉妬妄想の苦痛は(妄想的)嫉妬対象者の出現で一つの結論をみる”(p.325)と嫉妬妄想に関する考察を結んでいる。直接の原因の違いや確信の程度の差はあれど、関係に対する不満感の理由を探す形で相手の不実を妄想する点においては、一般的な恋愛関係における根拠のない「病的な」程度の嫉妬と嫉妬妄想の間には大きな違いは存在しないように考えられる。

また精神分析的な観点では Freud(1922)は、嫉妬を情動状態の一つとしてとらえ、競合的な嫉妬つまり正常な嫉妬と、投影された嫉妬と、妄想性の嫉妬の三種が三層に重なっていると表した。この観点は精神病理学的観点とは立場を異にしながらも嫉妬妄想に関して参照すべき有用な知見を提供していると考えられる。

競合的な嫉妬について、Freud(1922)は精神分析として大して言うことはないと評している。解釈するに、これは私たちの日常生活で一番体験されうる種類の嫉妬である。それはすなわち愛情対象が自分以外の対象に注意を向けており、自分がそれに対する反動的な怒りや愛情の対象が失われたのではという苦痛、ライバルへの敵意を体験する種類のものである。岡野(1988)によればこの苦痛の特徴としては多分に刹那的で実際の知覚像に依存し状況に即応したもので、嫉妬者は深刻なナルシズムの傷つきというよりは置かれた状況を不当であると主張するような種類のもものとされる。一方でこの正常な嫉妬も、Freud(1922)によれば決して完全には合理的なものでなく、それは嫉妬が深く無意識に根を張り、エディプス期の最初の情緒的な同様の延長だからであるとされる。幼児はエディプス期に初めて性欲を感じ、その欲動を最も身近な異性、つまり異性の親にぶつける。しかし、その異性の親の愛を得るためには、自分にとって非常に強力な競争相手ともいえる同性の親と争う必要がある。必然的に幼児は同性の親との競争に負ける。また、自分が異性の親に好意を寄せることが同性の親に露見してしまいはしないかと恐れ同性の親と同一化することで

それを乗り越えようとする。そして後に成人してからも、第三者が自分にとって重要な恋愛関係をおびやかすごとに、この時味わった無力感、ほしいものは何一つ手に入らないという自覚、成功したライバルに対する敵意などがふたたびよみがえり、嫉妬にかられる、とされる。これが、エディプス（エレクトラ）コンプレックスといわれる葛藤と、それに由来する嫉妬であるといわれる。

また、Freudによれば投影された嫉妬とは、自らの実際の不実や、抑圧されていた不実への衝動から出てくるもので、このような事実や衝動への罪悪感を和らげる方法として自分の衝動を相手に投影すること、つまり相手もそれほど善良でない、不実を働こうとしていると考えることで、自己正当化することができることとされる。この場合の投影から生まれる嫉妬は、ほとんどが現実的に何の根拠もないものであるとされ、この場合の愛情の対象の恋人や恋敵は嫉妬者が心の中で作り出した悪玉であると宮城(1963)も指摘している。そのためPines(1992)によれば、このような投影された嫉妬は、しばしば精神分析的セラピーに好反応を示すとし、自分の嫉妬は不倫をしたいという衝動を抑えた結果生じたものであり、自分の相手は不実ではないのだということを認識さえすれば、嫉妬の悩みは十分に解決されると述べている。

妄想性の嫉妬も、Freudによれば不実への衝動を抑圧することから出てくるものとされるが、この場合の対象は同性であるとされる。このことについてFreudは、幼いころに同性の親に惹かれていた、自分の中の異性的な素質が、大人になってから嫉妬するとき、自分と同性のライバルに対して魅力を感じるというかたちで再現されることがあるとした。異常に強い同性愛的な衝動から自分を守るため、嫉妬深い男性は「彼を愛しているのはわたしではない。彼女なのだ」と考えるとされる。ただし、この妄想性の嫉妬については、Pines(1992)や宮城(1963)、高橋(2006)も指摘するように、一般化して理解することの困難さゆえに後世の多くの論者から疑問視ないし批判がなされている。

結論として、精神分析的・精神病理学的な観点では嫉妬の経験のされ方について、嫉妬の極致ともいえる嫉妬妄想をその射程に入れる形で幅広く考察を行っている点で大変興味深い。Freud(1922)も示す通り嫉妬には正常な側面と病理的な側面があり、相手の浮気を出発点にしない嫉妬は嫉妬妄想にもつながりうる。二つの観点を強引に結び付けるならば、ある程度の素因や環境下で現在のパートナーとの関係において理想の関係像を見失った場合、他の相手とならば理想の関係を築けるかもしれないのという心理を自らで引き受けることができず、パートナーに投影することから嫉妬妄想が鎌首をもたげるのかもしれない

い。ただ、嫉妬妄想が病理的とされ、正常な嫉妬と区別される決定的な境界は、正常の嫉妬とされるような場合には疑いの中でひたすら自らのパートナーが不実であったかどうかについて一挙一動から確かめようとする、暗中模索の試みであるとされるのに対して、嫉妬妄想においてはパートナーの裏切りを半ば以上「確信」して責める点にあるとされる。

次に、個人が経験する嫉妬の起源に着目した理論的観点として、重なる部分はあるが精神分析的観点と愛着理論的観点による知見の紹介を行う。

## 5. 精神分析・愛着理論的観点からみた嫉妬の起源

先述のエディプス・コンプレックスのように男根期、あるいは子どもの頃の経験・固着が後の人生や、成人後の人格・振る舞いに影響を及ぼすという考え方は、精神分析やその流れを汲んだ理論的観点では個人の性格を理解する際の大きな鍵となる。この観点による嫉妬への言及としては、例えば Delpierre(1954)では “子供と同じく嫉妬者は、万有精神論（アニミズム）的な非論理的思考様式を持っている。子供は、過去の不安体験を劇化して、かれが予想する状況、特に『愛の喪失』、あるいはむしろ助けや保護の欠如に対する恐れを、空想的に現実化してしまう。このような強烈な非合理的な恐れは、安全性に対する欲求から生じてくる” (pp.118-119)と指摘されており、嫉妬者は幼い子供と同じように、過去の経験を無意識的に現実場面に当てはめ、安全・安心感を求めて過剰に、嫉妬することが考察されている。また、Mahler, Pine, & Bergman(1975)によれば2,3歳頃に母親からの分離と分離不安を繰り返す中で母子分離が達成され、個人は個体化を進めていくとされる。また母親が分離不安に対して適当な安心感を与えなかった場合には子供に対象恒常性が獲得されず、不全感が蓄積し、思春期以降の精神病理の要因となりうるともされる。

Klein(1957)は乳幼児の臨床実践を精神分析的立場から進める中で、母親（養育者）と乳児の関係について、乳児は生まれた時から必要な全てのものを母親に求めるとし、関係が愛情に満ちて満足なものであったならば、乳児は基本的な信頼感を得ることができるが、逆に愛情が欠けており不満足なものであった場合には、その乳児の将来には根深い不安や初期的な「羨望」が生じるとしている。Kleinはこの「羨望」と「嫉妬」について独自の理解を示している。Kleinによれば、「羨望」とは「望ましい対象を持っている対象に対する怒りで、その所有物を取り上げたい、ぶち壊したい」とする、嫉妬に先行する原始的で破壊的な感情である。「嫉妬」は少なくとも二人の他者との関係で生じるとされ、「当然、自

分のものと思っていた愛情が奪われた、あるいは奪われそうな危険がある、ということと主に関係がある」とされる。これらの言葉の定義自体は先に紹介した嫉妬・羨望（妬み）に関する基本的な言説と変わらないが、Klein がそもそも初期的な「羨望」を乳児が母親（の乳房）に対して持つものであると仮定した点に着目したい。乳児は無力で、生きることに必要な全ての要素を母親の乳房から取り入れることになる。その場合、母親の乳房は快の状態をもたらす「よい乳房」である一方で、どうしても自分の要求を満たしてくれない「悪い乳房」でもあることが考えられる。羨望は対象への依存に気づき始めたときに起こる（真崎, 2015）。この羨望が強く刺激されると対象への依存の否認や対象への破壊性につながる。とされ、本来であれば満足が得られるはずの「よい乳房」に対する同一化すら阻まれ、過剰に理想化された「最上のものを手に入れようとする見さかない同一化に向かわせる (p.9)」（岩橋, 2015）とされる。すなわち、岩橋(2015)が指摘するような「よい対象」「悪い対象」の選択と識別の能力が阻害されており、混乱をきたした状態である。

Klein や先述の Mahler の理論的な観点なども踏まえると、Klein の指摘する「羨望」が思春期以降の親密な関係に当てはめられるのであれば、愛情対象との関係で恒常的な愛情・充足感が感じられず、自分に対して理想的な愛情を注いでくれないように感じるパートナーに対する破壊的な感情と捉えることができるのかもしれない。Klein の定義によれば「嫉妬」は「元の満足な状態を取り戻したい感情」と考えられるのに対して、「羨望」は「嫉妬」と重複する部分はあるながらも、理想的な状態に比べると不満足しかもたらしめてくれない愛情の対象と、その愛情対象なしには少しも満足ができない自己にも向けた「全方位的に強く不満を持った、破壊的な感情」と捉えることができるだろう。実証的な嫉妬研究においては疑い深い嫉妬の側面こそが破壊的・病的であるとする見方が根強いが(e.g., Pfeiffer & Wong, 1989; Attridge, 2013), そういった破壊的な疑い深さを持つ個人は、乳幼児期における主観的に不満足な養育者との関係に根差した、理想化された対象との過剰な同一化を求めるがあまり、自分のパートナーを「よい対象」として選択・識別しきれない状態にある、と捉えることもできるのではないだろうか。

精神分析学者でもあった Bowlby(1969, 1973)による愛着理論に基づくと、乳幼児期の親子関係の相互作用によって個人の基本的な他者に対する期待、内的作業モデルが形成されるとされる。Hazan & Shaver(1987)では、恋愛関係は少なくとも部分的には幼児期の養育者との関係に類似しているために、恋愛関係の状態は愛着のプロセスによって形成される部分があることや、不安定な愛着（特に両価型）を持つ個人は強い嫉妬を示すことなどが

指摘されている。Harris & Darby(2010)が指摘するように、嫉妬は重要な二者関係が第三者によって脅かされた際に発生するものであり、また愛着スタイルが個人の関係への期待の違いを形成するものであることを考慮すると、各スタイルによって関係の脅威に対する反応が異なることは容易に想像できるだろう。Sharpsteen & Kirkpatrick(1997)によると、愛着と嫉妬の共通点は、(1)親密な関係を維持するためのメカニズムであり、(2)愛着対象(世話を焼いてくれる人や恋人)との分離や分離の脅威によって顕在化されるもので、(3)基本的な感情としてともに恐怖や怒り、悲しみを伴い、(4)親密な関係と自己の心的表象に関わる定量的な苦悩の個人差を示すものである、という点である。Guerrero(1998)によれば愛着スタイルの違いは嫉妬への対処の違いを説明することに有用であるとされ、愛着スタイルの違いによる嫉妬傾向や嫉妬への対処行動の違いを検討するような実証的研究が、後に紹介する社会心理学的文脈の嫉妬研究において現在までに数多くなされてきている(e.g., Buunk, 1997, Sharpsteen & Kirkpatrick, 1997, Guerrero, 1998)。上記のように、精神分析や、愛着理論的観点では成人後の嫉妬は乳幼児期の体験と関わる部分があるとされ、今日の実証的な嫉妬研究でも取り入れられている点で、愛着理論は嫉妬の根源を検討する上で重要な意味を持つ観点であるといえよう。

## 6. 進化心理学的観点における嫉妬

進化心理学的な観点から解釈をすれば、嫉妬は(進化心理学的な観点の特質からしても)病理的な感情としても考えられる一方で、生物としてのヒトが自分の遺伝子や子孫を残すのに非常に重要で役立つ手立てとしても考えられている。1980年代ごろから、男女が嫉妬を感じる手がかりには性差があることが論じられてきた(Daly, Watson, & Weghorst, 1982など)。

長谷川・長谷川(2000)によれば、嫉妬は自分が愛する相手、大切に思っている相手を自分だけのもとにとどめておきたいとする感情で、ヒトの配偶者防衛行動(一方の性の個体が配偶相手を他の同性個体から防衛し、自分としか配偶しないようにする行動)を引き起こすものであるとされる。Buss, Larsen, Westen, & Semmelroth(1992)やBuss(2000)によれば、男性がより子に大きな投資を行う場合ほど、配偶者から生まれる子の父性の確実性を担保するために配偶者防衛を行うとも考えられる。女性にとっては自分が出産した子どもは少なくとも自分の子であることは確実であるが、DNA鑑定などがなかった時代では男性

は配偶者の女性から生まれた子どもが自分の子かどうか、確かめる術はなかった。そのため、もしも男性 A の配偶者が男性 A を性的に裏切り、他の男性 B との間の子どもをもうけて男性 A に育てさせることがあれば、男性 A が子どもを育てる時間的・精神的・物理的なエネルギーは全て男性 B の遺伝子・子孫に捧げられることになる。そのため、父権制度の強い社会では子孫の血統の不確定性をもたらすことになるので男性が性的な嫉妬を示す＝女性の性的不貞を未然に防ぐことで、父親である確信を高めることにつながり、結果として男性は女性の情緒的な浮気よりも身体的な浮気に抵抗感・危機感を覚えるとされる。また一方で、女性の場合でも男性の浮気を見過ごす不利益を被ることになる可能性がある。それは、妊娠してから子どもの父親となるべき人物がよその女性のもとへ行ってしまって帰ってこない場合、女性は情緒的・経済的支援を男性から一切受け取ることができず、出産にもその後の育児にも配偶者の男性と二人で取り組むよりもずっと重い負担を抱えることになるためである。そのために女性は男性の身体的な浮気よりも情緒的な浮気に対して抵抗感を覚えるとされる。こういった考えは EJM (sex-specific evolved jealous mechanism) 仮説とされ、今日の進化心理学的研究にも多大な影響を及ぼしているといえる。これらの意味で、男女ともに嫉妬を覚えることにはメリットがあるからこそ現在までその性質が受け継がれてきているとするのが代表的な進化心理学的なアプローチである。

進化心理学的なアプローチから嫉妬を考える際には男女で経験される嫉妬の質的な差を問うものが多い。例えば Buss Shackelford, Kirkpatrick, Choe, Lira, Hasegawa, Hasegawa, & Bennett(1999)の研究では、アメリカと韓国と日本の男女の嫉妬の性差を検討した。「身体的な浮気と情緒的な浮気、パートナーがしていたらより嫉妬を強く感じるものはどちらか」という強制選択式の回答結果を Table1 に示す。結果は Buss et al.(1999)の仮説通り、文化差はあるものの、男性は女性に比べより身体的浮気に、女性は男性に比べより情緒的浮気に対し、0.1%水準で有意に嫉妬を強く感じると回答していた。しかし一方で日本の男性ではアメリカ・韓国の男性とは違い、身体的浮気よりも情緒的浮気に嫉妬をより感じるとする結果が示されていることも注目に値する。この結果は進化心理学者の全ての男性が情緒的浮気の危険性を低く見積もるといふ仮説とは食い違う形になる。こういった進化心理学的アプローチの研究には例えば Elphinston, Feeney, & Noller(2011)などが指摘するように身体的浮気か情緒的浮気かといった強制的に二者択一の形式で選択させるような回答形式にはじまる方法論的な問題や、そもそも本能的な部分が現代の嫉妬にどれほどの根拠を持って説明できるか (木村, 2010) ということなどについても疑問や批判が

寄せられていることも事実である。近年では加藤(2017)がそれまでの進化心理学的観点から論じられた嫉妬研究を概観・メタ分析を行い、メタ分析の結果として総じて EJM 仮説は支持されなかったことを報告している。Kato(2014)では従来の研究知見を整理し、このような嫉妬の性差に関する言説は性的な想像力の男女差によるものであるとする性の想像力仮説 *sexual imagination hypothesis* を打ち立てた。これは身体的・情緒的浮気に対する反応の性差に対する性差が観察される場合があるのは、男性が女性に比べて性的浮気あるいは性的場面を想起しやすい傾向があるためであるとする考えで、Kato(2014)では女性が性的・身体的な浮気場面を十分想像できるようにした条件では性差が見られないことを実証している。この結果から、EJM 仮説に関してはまだ海外では論争が続いているものの、Kato(2014)の実験結果や加藤(2017)のレビューおよびメタ分析は進化心理学的観点からの嫉妬・浮気に関する言説を考える際に非常に有用であると考えられる。

Table1-1 嫉妬の内容についての性差(Buss, et al., 1999)

	男性		女性	
	身体的浮気	情緒的浮気	身体的浮気	情緒的浮気
米国	76%	24%	32%	68%
韓国	59%	41%	19%	81%
日本	38%	62%	13%	87%

## 7. 実証的な社会心理学的研究における「嫉妬」の捉え方

Buss(2000)は White & Mullen(1989)の理論を援用する形で嫉妬のメカニズムには情報の入力、処理、出力の過程が不可欠であるとしている。Bevan(2013)による嫉妬の分類では③の Component 要素にあたる次元がこれに該当する。他の海外の研究(e.g., Andersen, Eloy, Guerrero, & Spitzberg, 1995)などでは嫉妬の経験と表出(*jealousy experience and expression*)等と表されるが、嫉妬をどう認知・経験するかという点(根拠のない疑念から妄想的に嫉妬するのか、証拠をつかんで反応的に嫉妬するのか)と、その経験に対しどうコーピングしていくか(関係を維持しようとするか、穏便に別れようとするか、DV と目されるような破壊的な行動を取るか)という点の二点に嫉妬の病理性が発揮される場面があ

のように考えられる。以降は実証的な社会心理学的研究において、基礎的な知見を提供してくれるであろう先行研究を紹介することとする。

### 7-1. 嫉妬の経験について

まず、嫉妬の経験(jalousy experience)の方から検討する。Bringle(1991)は一般に経験される嫉妬には二種類の性質があるとして、一つは reactive jealousy (反応的嫉妬)で、もう一つは suspicious jealousy (疑念的嫉妬)であるとした。なお、Parrott(1991)も同様の特徴を持つ fait accompli jealousy (既成事実に基づいた嫉妬)と suspicious jealousy の存在を仮定しているが、この二つの表現はほぼ同じと考えて良いだろう。Bringle(1991)の表す reactive jealousy は、実際の嫉妬を喚起するような=適切な場面に対する適応的な嫉妬の反応である。目の前で自分のパートナーが自分以外の第三者と浅からぬ関係にあることを目の当たりにすること等がその一例で、明確な証拠や事実に基づいた誰もが覚えうる嫉妬である。一方の suspicious jealousy は、根拠もなく、あるいは「疑わしい」恋人の言動などを強引に解釈した結果表される不適応的で病理的な嫉妬とされる。家に帰ってみたら配偶者の着衣に乱れがあったように見えた、いつもと何か様子が違ったように思う等がこの例にあたる。しかし、恋人の行動のどこからが「浮気」か(=この場合、reactive jealousy の起爆剤となる確固たる証拠となりうるか)、どこまでが正常な異性の友達との付き合いとするか(=suspicious jealousy でいわれる「些細な」証拠となるか)がその社会・文化・世代によって大きく変動しうることはもちろん、個人間でもその閾値が違うことは心理学者の言葉を借りるまでもない。何をもちて正当に嫉妬するだけの根拠があるか・ないかを区別することは難しい。ゆえに嫉妬が正常であるか異常であるかの客観的な判断は時として困難を究めるとも言われている。これら二つの嫉妬の経験の仕方の異同については次節で紹介する Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)をはじめとした実証的な研究でも検討が行われており、現在の社会心理学的アプローチによる嫉妬研究には不可欠のものとなっている。

### 7-2. 嫉妬の経験を多次元的に捉えるアプローチ

White(1981)は、過去の臨床家や Lazarus によるストレス理論の記述をもとに、嫉妬状況を自己評価が脅かされることへの恐怖と価値ある関係を失うことへの恐怖を原因とした一

つのストレス状況とみなし、認知・情動・行動の三側面から嫉妬を包括的に捉えるモデルを提案した。White(1981)の嫉妬モデルでは、まず価値ある関係を脅かすものが認識されると嫉妬の認知的側面が働き、その程度を評価する。次にこの認識から否定的な感情が生起し、同時に脅威への対処法とその結果を考え、最終的に個人はこの恐怖に対して何らかの行動的・認知的な対処をすることで否定的な感情を減衰させるという流れを想定している。

この White(1981)のモデルに対して、Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬が多次元的事象であることには賛同したうえで、いくつかの観点から White(1981)を批判し、独自のモデルを提唱している。まず第一点目として、White(1981)のモデルでは基本的に関係への脅威の存在によって嫉妬感情が生起するとされているが、Pfeiffer & Wong(1989)ではそれに加えて、例として離婚後に元夫が自分とは別の女性と歩いているのを見て嫉妬を感じる、という再婚後の女性を提示し、特定の刺激に対する、条件づけられた反応としての嫉妬感情が存在することを指摘している。第二点目として、White(1981)が実際の場面における脅威への評価を嫉妬の認知的側面としているのに対して、Pfeiffer & Wong(1989)では、嫉妬者の、恋人の不貞についての妄想的な心配や疑いが嫉妬の認知的側面であり、これらの疑念は必ずしも脅威の評価に縛られず、時には存在しないライバルとの関係性に対する嫉妬が生起する可能性もある、と主張している。第三点目として、White(1981)は嫉妬の行動的側面を感情的な高ぶりへの認知的・行動的な対処としているのに対し、Pfeiffer & Wong(1989)では、実際・想像上のライバルが認識された時に行われる、探知的・防衛的な行動であるとした。探知的な行動とは、恋人について調べ上げたり、恋人が自分のものであることを確認する行動で、一方防衛的な行動とは、恋人とライバルが親しくなるのを妨害したり、ライバルを貶めたり、恋人とライバルの会話に割って入るような行動を指す。最後に、White(1981)が嫉妬を認知→情動→行動と、順次的なプロセスとして概念化しているのに対し、Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬の認知・情動・行動的側面は同時に並行して生じうるもので、それらは相互に影響を及ぼすものだということを主張している。

更に上記に関連した実証的な研究として、Pfeiffer & Wong(1989)は自分たちの提案したモデルに基づき、嫉妬の認知・情動・行動的側面を包括的に捉える尺度として Multidimensional Jealousy Scale(以降 MJS と略記)を作成し、想定通りの 3 因子構造を見出して、信頼性・妥当性についても確認した。3 因子とは、主に恋人の不貞を心配する・疑う度合いとしての「認知」と、主に嫉妬喚起場面に対して否定的な感情を覚える度合いとしての「情動」、そして主に恋愛のライバルを認識することで、恋人が自分から離れないよ

うにと行動する度合いとしての「行動」である。Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬傾向を単次元でしか捉えられていない場合よりも、多次元で捉えた方が、様々な変数と嫉妬の関係についてより包括的に検討できるために、MJSは、当時の既存の単次元の嫉妬尺度よりも、より包括的に嫉妬傾向を捉えられる尺度と考えられるとした。

Pfeiffer & Wong(1989)はまた、このMJSは各因子において、その構造から、正常な嫉妬に加え、病的な嫉妬を捉えることもできると強調している。たとえば、正常な嫉妬者は適度に嫉妬喚起場面に対して反発的な「情動」を示し、恋人との関係を維持しようと、「行動」においてライバルと恋人の関係を阻むような、防衛的な行動をとり、関係を維持しようとするが、一方で病的な嫉妬者は、想像上の嫉妬を繰り広げる「認知」、高い「情動」的な反応、そして「行動」において恋人について調べ上げ、不実の証拠を追い求めるような、探知的な行動を示す、とされている。

MJSは、Pfeiffer & Wong(1989)によって作成されてから、現在に至っても使用されている最も代表的な嫉妬尺度の一つといえ、特に恋人の不貞を心配し、疑うCognitive Jealousyの項目については、その後の多くの研究(e.g., Bevan & Lannutti, 2002; Gehl, 2010; Guerrero, 1998; Knobloch, Solomon & Cruz, 2001)でも、そのまま使用されている。Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が示す通り、恋人が自分から離れていってしまうのではないかというような妄想的・病的な嫉妬を限定的に捉えうる尺度は、Pfeiffer & Wong(1989)以前にはさほど作成されておらず、それ以前では嫉妬尺度は、具体的な嫉妬喚起場面に対してどれほど情動的・行動的な反応を示すか、という形をとったものが多かった。その後、Pfeiffer & Wong(1989)の研究結果や、Bringle(1991)などにより suspicious jealousy すなわち疑念的な嫉妬についても言及されることにより、現在のように広く用いられるようになったと考えられる。

MJSを用いた実証的な研究の結果として、Cognitive jealousyとEmotional jealousyで得られた結果が対比されることがある。例えばPfeiffer & Wong(1989)ではCognitive jealousyがパートナーへの愛情と負の相関係数を示したのに対してEmotional jealousyがパートナーへの愛情と正の相関係数が得られたことや、Knobloch et al.(2001)ではEmotional jealousyが関係の親密度と正の相関係数を示していたのに対しCognitive jealousyが関係の不透明性と正の相関係数を示した。Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)の研究では、反応的な嫉妬(Emotional jealousyに類似した概念)の経験は、肯定的な関係の現象で、それは関係満足感と正の関係にあるとされる。このような調査結果を踏まえ

Emotional jealousy, つまり具体的な嫉妬喚起場面に対して否定的な気持ちを覚える度合い (Bringle(1991)が reactive jealousy と表す種類の嫉妬) は猜疑的な嫉妬の側面である Cognitive jealousy (Bringle(1991)が suspicious jealousy と表す種類の嫉妬) に比べ、潜在的に健全な嫉妬の側面として言及されることもある(e.g., Elphinston, Feeney, & Noller, 2011; Barelds & Barelds-Dijkstra, 2007)。Attridge(2013)では、これら二つの種類の嫉妬は関係満足感やパートナーへの愛情などとの関連においてはっきりと Emotional jealousy はだいたい「良い」嫉妬の側面として、Cognitive jealousy は「悪い」嫉妬の側面として捉えられていた。これら二つの変数は少なくとも英語圏においては嫉妬の病理的側面と非病理的側面をうまく反映したものと考えられるのではないだろうか。

しかし、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が指摘するように MJS は恋愛関係における嫉妬を捉える際、そのまま使用されることが少なかった。かなりの数の研究者がこの尺度を使用したにもかかわらず、彼らはたいてい修正を加えて使用したと報告している。このように MJS には何点か問題点も見受けられる。第一に、各下位尺度で質問の仕方が違うため、因子分析にかける際、そのバイアスによって各下位尺度ごとに項目がまとまってしまう可能性が考えられる点である。第二に、そういった形式上の問題点から、質問紙の中でランダムに配置することができず、同様の質問を調査協力者に連続して答えさせてしまうことで、調査者の意図が伝わり、回答にバイアスがかかってしまう可能性も予測される点である。また第三に、emotional jealousy, すなわち情動的な嫉妬に関しては、Pfeiffer & Wong(1989)では嫉妬を喚起させるような状況について、その場面に対する自分の感情として”very pleased”から”very upset”の7件法で回答するよう問われていたが、Guerrero, Eloy, Jorgensen, & Andersen(1993)も指摘しているように、嫉妬喚起場面にて嫉妬者が稀に性的興奮や解放感などの快の感情を抱くことは先行研究でも指摘されているが、その出現頻度からして質問形式に取り入れるのは不適切と考えられる。そのため、回答の得点が極端に偏る可能性が懸念されるという点があげられる。

また、MJS に続く多次元的に嫉妬を捉える尺度作成の研究としては、Buunk(1997)によって MJS とほぼ同様の下位因子を持つ嫉妬尺度も作成され、Pfeiffer & Wong(1989)では検討されていなかった愛着やその他の人格特性などとの関連が見られている。Elphinston, Feeney, & Noller(2011)は MJS の妥当性の検討が薄く、その因子構造と信頼性・妥当性を確認した尺度を作成するためにオーストラリアのサンプルで MJS の改訂版として Short-Form MJS を構成し、その信頼性と妥当性について確認している。神野(2013)も

Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)などを参考に、それぞれの尺度の問題点について配慮し、また現代の日本の青年が回答しやすい形となるように「認知的嫉妬」「情動的嫉妬」「行動的嫉妬」の3因子からなる多次元嫉妬尺度を試験的に開発し、その信頼性と妥当性の一部について確認しており、今後の国内での実証的な嫉妬研究や更なる尺度の開発研究が望まれるところである。

### 7-3. 嫉妬の表出について

次に、嫉妬の表出(jealousy expression)の紹介に移る。倉田(1926)の言葉を借りると、嫉妬が正しいとされるような場合も嫉妬の感情を抱くことが正しい、あるいは当然とされるのみであり、相手に対して憎しみを覚えることや暴力をもって復讐する事までが是認されるわけではない。どろどろとした嫉妬を抱えてしまった際に如何にしてそれを表出し、またその感情に対処していくかということもまた重要である。

既に紹介した Pfeiffer & Wong(1989)による MJS の下位尺度である Behavioral Jealousy においても嫉妬者の行動的特徴は捉えられるとされているが、Attridge(2013)や Elphinston, Feeney, & Noller(2011)などの研究結果を参照すると、この Behavioral jealousy については他の嫉妬の2下位尺度に比べ、比較的明確な結果を示していないようにも捉えられる。嫉妬を経験した個人がどのようにそれに対してコーピングをするかということについては実に様々なパターンが報告されており、MJS の Behavioral jealousy のように一つの下位尺度で一次的に捉えきれない性質のものではない可能性が十分に考えられる。先述の Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)以外にも多くの嫉妬研究者が取り組んできたが、その一つの集大成として Communicative Responses to Jealousy Scale=嫉妬へのコミュニケーション的反応尺度(CRJS; Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995)を挙げる。CRJS は70項目からなり、14パターンからなる嫉妬への様々な人と人が関わる形での反応を測定する下位尺度で構成されている。この尺度は嫉妬感情が表されたときの様々な詳しい反応を測定することができるが、項目数が多く、複雑な構造をしていることから、まだ妥当性を確認している段階であろうと Elphinston, Feeney, & Noller(2011)は表している。実際 Guerrero 自身も Guerrero, Hannawa, & Babin(2011)で調査者側にも研究協力者側にも負担があることについては言及しているが、Guerrero et al.(1995)がそれまでの先行研究を精力的に調べ、実際の調査において因子分析的手法で得たコーピングの分類には注目しておくべきだろう。Guerrero et al.(2011)で最終的に CRJ

は 11 の下位尺度からなる 52 項目の尺度として再構成されたが、それらは Guerrero et al.(1995)や Guerrero & Andersen(1998a)を改訂する形でまず4つの直接パートナーに向き合う形での相互作用的な反応があるとされる。①否定的なコミュニケーション（傷ついたことを示す、パートナーの前で泣く、距離を取る等）、②沈黙（嫉妬を感じたことを伝えない、嫉妬状況を避けようとする）、③否認/抑圧（嫉妬していないかのようにふるまう等）、④嫉妬させる行動をとる（パートナーを嫉妬させたり自分から浮気の脅威を作り出す）である。更に他の 7 つの反応として⑤ライバルへの接触（パートナーへの接触をやめるように伝える、ライバルにパートナーが自分と恋仲にあることを伝える）、⑥ライバルを貶める（パートナーの前でライバルについて悪く言う）、⑦暴力的な行動（皿を割る、パートナーの物を放り投げる）⑧監視/束縛行動（パートナーのことを調べ上げようとする、パーティーでライバルと接触しないようにする）、⑨所有のサイン（「私のパートナーです」と見せて回る、顕在的/潜在的ライバルの前でキスを試みせる）、⑩統合的なコミュニケーション（自分が嫉妬していることを相手に伝えて分かり合おうとする）、⑪補償的な関係修復（パートナーに花やプレゼントを贈ったり、より魅力的になろうとする）が示された。Andersen, Eloy, Guerrero, & Spitzberg(1995)によれば上記のような嫉妬に対する行動的な反応のうち否定的な情動の表出が単独で伝達される場合や分配的なコミュニケーション、明確に距離を取る行動とともに伝えられる場合は関係満足感に負の影響を及ぼすことが見出されているが、一方で統合的コミュニケーションとのみ共に投入された場合は（つまり腹を割ってうまく否定的な感情を相手に伝えられた場合は）関係満足感が高まることも見出されていた。この結果から、嫉妬を感じたとしてもそれを衝動的に嫌味や暴力といった形で伝えるのではなく、適切に処理することができれば関係の満足感や幸福感は高められる可能性が示唆されているといえよう。

これらの恋愛関係上の嫉妬の経験と表出に関しては、Guerrero & Andersen(1998b)がそれまでの先行研究をまとめ、Figure1-1 のようなモデル *jealousy componential model* を提案している。このモデルでは、嫉妬のプロセスに関して個人の認知、情動、そして表出の 3 要素の相互関係が重要視されており、また 6 つの先行要因が、個人の嫉妬状況に対する態度を形成するとしている。6 つの先行要因は、生物学的要因とは自然淘汰や性淘汰、（子どもに対する男性側の）血縁関係の不確かさなどの社会生物学的な要因を、文化的要因は個人や状況を取り巻く社会文化的な影響を、人格的な要因は先述した愛着スタイルや、自尊心感情などの自己評価を、関係性の要因はコミットメントや性的な排他性を、状況的要因は

浮気行為の有無や浮気が身体的か情緒的かといった要因を、戦略的な要因は嫉妬が誘発されたものか、嫉妬を引き起こすことで何かを達成しようとしているか、といったものを示す。Guerrero & Andersen(1998b)によればこれらの先行要因は嫉妬のプロセスのうちの、脅威の知覚に特に影響を及ぼすとしており、先行要因に影響を受けた脅威の知覚が、嫉妬に関する認知と情動を引き起こすとされている。嫉妬に関する認知は葛藤の処理をどう行うかという選択から、また情動はより直接的に、嫉妬の表出につながるとされる。これらの影響を受け、個人は嫉妬に対する具体的な反応を取り、それが関係の行く末につながっていくと jealousy componential model では想定されている。

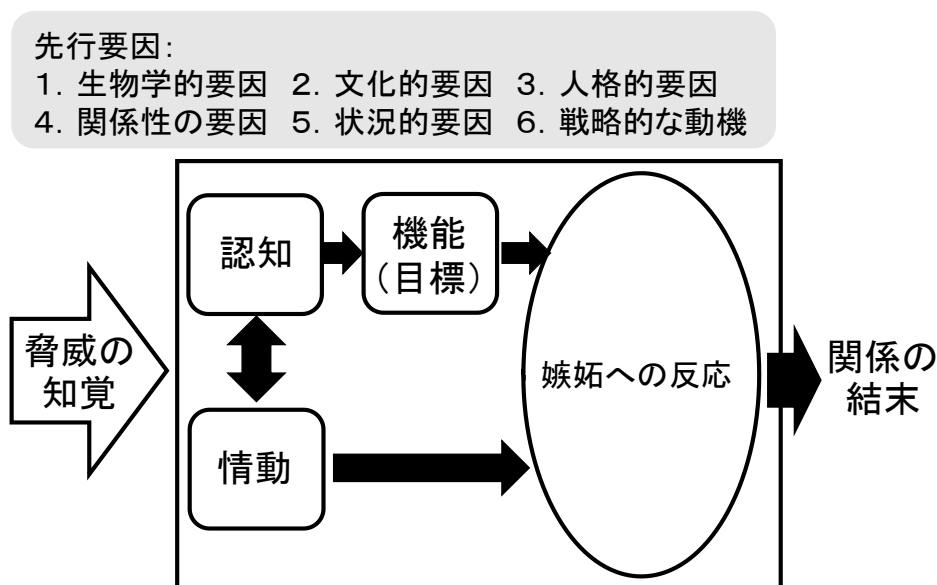


Figure1-1 嫉妬のComponential Model  
 (Guerrero & Andersen, 1998より)

## 8. まとめ

本節では恋愛関係・夫婦関係のような親密な二者関係における嫉妬について、多様な観点からの研究や理論的指摘を紹介した。本節で扱った嫉妬に関する言及は未だ心理学的な領域におけるごく一部の観点の表層的な部分にとどまっているが、嫉妬はその他の様々な観点からも言及がなされているため、今後より広い知見から包括的に取り組まれるべき課題であろう。

恋愛関係の規範が文化や時代によって大きく影響を受けるように、嫉妬もまた文化や時代によって強く規定されるものであると考えられる。Buss et al.(1999)で日本の青年は米国や韓国の青年と比べても男女ともに情緒的浮気により抵抗感を示していたように、文化における自己の在り様によって情動の体験様式が違う(Markus & Kitayama, 1991)ことにも留意しながら嫉妬について研究がなされるべきであろう。その点で、今回は深くその内容に触れられなかった古い時代から現在までの資料的論文にも目を通し、近現代日本の社会情勢や家族体制の流動とも照らし合わせながら恋愛関係・夫婦関係と嫉妬の関連について検討することも有意義であると考えられる。

本節では詳しくは言及できなかったが、近年では Hart(2010)や Markova, Stieben, & Legerstee(2010), Hart(2014)など、恋愛関係・夫婦関係以外の嫉妬研究として乳幼児の嫉妬研究がなされている。私たちと重要な他者との密な関係は何も青年期に唐突に始まるものではなく、乳幼児期の保護者が私たちにとって最初期の重要な他者とされる。人がいかにして大切な相手に対して良くも悪くも執着していくのか、その詳細なプロセスを解明するためには乳幼児に始まり友人関係における嫉妬なども含め検討していくことが将来的な嫉妬研究の大きな課題といえよう。

さて、嫉妬研究は既述の通り、特に嫉妬と妬みの経験を区別するような感情心理学的研究、進化心理学的観点に根ざした形での身体的・情緒的浮気に対する不快感情の性差に関する検討、そして社会心理学的観点から個人差変数として嫉妬の経験や表出を捉える研究が存在する。Elphinston et al.(2011)が指摘するように、嫉妬の経験を多次元的に捉える観点として嫉妬深さを個人が内的に有する連続変数として捉える理論的観点は、多次元的な構造を持つと考えられる嫉妬の経験を多次元のまま捉えることに適しており、性別に限らず個人の嫉妬深さを捉えるためには現状最も有力な捉え方であると考えられる。

次節ではこの嫉妬の経験および表出について捉える心理学的研究について紹介を行い、その問題の所在について明らかにする。

## 引用文献

Andersen, P. A., Eloy, S. V., Guerrero, L. K., & Spitzberg, B. H. (1995). Romantic

- Jealousy and Relational Satisfaction: A Look at the Impact of Jealousy Experience and Expression. *Communication Reports*, 8, 77-85.
- Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good(Reactive) and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open*, 3, 1-17. doi:10.1177/2158244013476054
- Barelds, D.P.H. & Barelds-Dijkstra.P. (2007). Relations between different types of jealousy and self and partner perceptions of relationship quality. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 14, 176-188.
- Ben-Ze'ev, A. (2010). Jealousy and Romantic Love. In Hart, L. S and Legerstee, M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. pp.40-54. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Bevan, L. J. & Lannutti, J. P . (2002). The Experience and Expression of Romantic Jealousy in Same-Sex and Opposite-Sex Romantic Relationships. *Communication Research Reports*, 19, 258-268.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田 実郎・大羽 稔・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1991). 母子関係の理論 I. 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bringle, R.G. (1991). Psychosocial Aspects of Jealousy: A Transactional Model In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. pp.103-131. New York: The Guilford Press.
- Buss, D. M., Larsen, R. J., Westen, D., & Semmelroth, J. (1992). Sex differences in jealousy: evolution, physiology, and psychology. *Psychological Science*, 3, 251-255.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦 彊子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Buss, D. M., Shackelford, T. K., Kirkpatrick, L.A., Choe, J., Lira, H. K., Hasegawa, M., Hasegawa, T., & Bennett, K. (1999). Jealousy and the nature of beliefs about infidelity: Tests of competing hypotheses about sex differences in the United States, Korea, and Japan. *Personal Relationships*, 6, 125-150.

- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences*, *23*, 997-1006.
- Daly, M., Wilson, M., & Weghorst, S. J. (1982). Male sexual jealousy. *Ethology and Sociology*, *3*, 11-27.
- Delpierre, G. (1954). *De le jalousie : Ses causes, ses conséquences, ses remèdes*. Paris: Aubier Montaigne (荻野 恒一・杉田 英一郎 (訳) (1961). 嫉妬の心理 中央出版社)
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, *63*, 243-251.
- Elphinston, R. A., & Noller, P. (2011). Time to Face It! Facebook Intrusion and the Implications for Romantic Jealousy and Relationship Satisfaction. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, *14*, 631-635.
- 遠藤 智子 (2007). デート DV—愛か暴力か, 見抜く力があなたを救う KK ベストセラーズ
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York; W. W. Norton & Company. (西平 直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human relations*, *7*, 117-140.
- Freud, S. (1922). “Uber einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualitat,” *Gesammelte Werke XIII*, Frankfurt am Main: S.Fischer. (須藤 訓任 (訳) (2006). 「嫉妬, パラノイア, 同性愛に見られる若干の神経症的機制について」『フロイト全集 17』東京: 岩波書店)
- 船山 道隆・濱田 秀伯 (2006). 嫉妬妄想・被愛妄想 こころの科学, *126*, 56-59.
- 古城 慶子 (2014). 人生後半期の嫉妬妄想 老年精神医学雑誌, *25*, 1083-1090.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment-style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships*, *5*, 273-291.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the Green-Eyed Monster: Conceptualizing and Measuring Communicative Responses to Romantic Jealousy. *Western Journal of Communication*, *59*, 270-304.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998a). The Dark Side of Jealousy & Envy: Desire,

- Delusion, Desperation, and Destructive Communication. In Spitzberg. B. H. & Cupach. W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships*. Mahwah, NJ. Taylor & Francis e-Library. (谷口 弘一・加藤 司 (監訳) (2008). 親密な関係のダークサイド 北大路書房 pp.35-67.)
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998b). Jealousy experience and expression in romantic relationships. In Andersen, P. A., & Guerrero, L. K. (Eds.), *Handbook of communication and emotion: Research, theory, applications, and contexts* (pp.155-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Guerrero, L. K., Eloy, S. V., Jorgensen, P. F. & Andersen, P. A. (1993). Hers or his? Sex differences in the communication of jealousy in relationships. In P. Kalbfleisch(Ed.), *Interpersonal communication in evolving interpersonal relationships*. (pp.109-132). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The Communicative Responses to Jealousy Scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, 5, 223-249.
- 半田 孝海 (1920). 嫉妬の研究 古文堂
- 長谷川 寿一・長谷川 眞理子 (2000). 進化と人間行動 東京大学出版会
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Harris, C. R., & Darby, R. S. (2010). Jealousy in adulthood. In Hart. L. S and Legerstee. M. (Eds.), *Handbook of jealousy: Theory, research, and multidisciplinary approaches*, pp.547-571. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Hart, S. L. (2010). The Ontogenesis of Jealousy in the First Year of the Life: A Theory of Jealousy as a Biologically-Based Dimension of Temperament. In Hart. L. S and Legerstee. M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, research, and multidisciplinary approaches*. pp.57-82. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Hart, S. L. (2014). *Jealousy in Infants –Laboratory Research on Differential Treatment*. New York: Springer Publishing.
- Hendrick, S.S. & Hendrick, C. (1986). A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 392-402.

- 石田 孫太郎 (1905). 嫉妬の研究 丸山舎書籍部
- 石田 幽南 (石田 孫太郎) (1913). 嫉妬論 弘學館書店
- 石川 実 (2009). 嫉妬と羨望の社会学 世界思想社
- 岩橋 宗哉 (2015). 対象との同一化を創造的に機能させる基盤としての結合対象へ—よい対象との失われた共通基盤を求めて— 福岡県立大学心理臨床研究: 福岡県立大学心理教育相談室紀要, 7, 3-19.
- 岩脇 三良 (2000). 進化心理学による嫉妬研究: 展望 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 3, 29-43.
- 神野 雄 (2013). 新たな多次元嫉妬尺度の作成 日本社会心理学会大会発表論文集, 54, 305.
- Kato, T. (2014). A reconsideration of sex differences in response to sexual and emotional infidelity. *Archives of sexual behavior*, 43, 1281-1288.
- 加藤 司 (2017). メタ分析による浮気に対する性差の再考 行動科学, 55, 137-149.
- 木村 彩子 (2010). 嫉妬の臨床的研究の意義: 嫉妬の臨床的問題と心理学的研究のまとめお茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 12, 35-46.
- 木村 俊夫 (1975). 恋愛の心理 牛島 義友・桂 広介・依田 新 (編) 青年心理学講座 2—恋愛と結婚— 金子書房 pp.1-86.
- Kingham, M., & Gordon, H. (2004). Aspects of morbid jealousy. *Advances in Psychiatric Treatment*, 10, 207-215.
- Klein, M. (1927) Criminal tendencies in normal children. In Money-Kyrle, R., Joseph, B., O'Shaughnessy, E., & Segal, H. (Eds.), *The Writings of Melanie Klein Vol.1.* (1975). The Hogarth Press, London. (西園 昌久・牛島 定信 (1983). M.クライン著作集 1 子ども心の心的発達 誠信書房 pp.205-224.)
- Knobloch, K. L., Solomon, H. D., & Cruz, G. M. (2001). The role of relationship development and attachment in the experience of romantic jealousy. *Personal Relationships*, 8, 205-224.
- 倉持 弘 (1979). 愛と嫉妬—感性体験の精神病理— 創元社
- 倉田 百三 (1926). 一夫一婦か自由恋愛か 岩波書店
- Mahler, M., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant.* Basic books, New York. (高橋 雅士・織田 正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心

理的誕生 黎明書房)

- Markova, G., Stieben, J., & Legerstee, M. (2010). Neural Structures of Jealousy: Infants' Experience of Social Exclusion with Caregivers and Peers. In Hart, L. S and Legerstee, M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. pp.83-100. West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 南 博 (1949). 自我・愛情・嫉妬—社会心理学的考察 婦人の世紀, 9, 37-43.
- 三浦 香苗・奥山 紗世 (2003). 女子大学生の恋愛関係における嫉妬感情およびそれへの対処—性差および恋愛関係・恋愛観との関連の分析— 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 6, 1-16.
- 宮崎 音弥 (1963). 愛と憎しみ—その心理と病理— 岩波新書
- 三好 功峰 (1993). オセロ症候群 老年精神医学雑誌, 4, 439-441.
- Muise, A., Christofides, E., & Desmarais, S. (2009). More Information than You Ever Wanted: Does Facebook Bring Out the Green-Eyed Monster of Jealousy? *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 12, 441-444.
- 中里 浩明 (1991). 嫉妬と羨望: W.G.Parrott の類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)— 神戸女学院大学論集, 38, 49-66.
- 中里 浩明 (1992a). 嫉妬と羨望の意味構造—嫉妬と羨望の心理学(2)— 神戸女学院大学論集, 38, 129-134.
- 中里 浩明 (1992b). 嫉妬・羨望と社会的比較の過程—嫉妬と羨望の心理学(3)— 神戸女学院大学論集, 39, 115-130.
- 中里 浩明 (1992c). 嫉妬・羨望と自己評価の維持—嫉妬と羨望の心理学(4)— 神戸女学院大学論集, 39, 79-90.
- 中里 浩明 (1993). 嫉妬と羨望の対処方略—嫉妬と羨望の心理学(5)— 神戸女学院大学論集, 39, 63-78.
- 荻野 恒一 (1983). 嫉妬の構造 紀伊國屋書店
- 岡野 憲一郎 (1988). 嫉妬における苦痛の精神病理 臨床精神病理, 9, 315-326.
- 大橋 正太郎 (1921). 嫉妬ロマンス—變體心理研究第二編— 精華堂書店
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 4節 青年期における他者との関連性にお

- ける自己 講座 生涯発達心理学—4. 自己への問い直し 青年期 金子書房, pp.89-121.
- 大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久 (編) エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房, pp.79-105.
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. New York: The Guilford Press, pp.3-30.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Pines. M. A. (1992) *Romantic Jealousy*. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- Salovey, P. & Rothman, J. (1991). Envy and jealousy: Self and society. In Salovey, P.(Eds.).*The psychology of jealousy and envy*. pp.271-286. New York: Guilford Press.
- 澤田 匡人 (2009). 妬みと嫉妬 有光興記・菊池章夫 (編著) 自己意識的感情の心理学 北大路書房 pp.160-180.
- Sharpsteen, D. J. & Kirkpatrick, L. A. (1997). Romantic jealousy and adult Romantic attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 627-640.
- Smith, R. H., Kim, S. H. & Parrott, W. G. (1988). Envy and jealousy : Semantic problems and experimental distinctions. *Personality and Social psychology Bulletin*, 14, 401-409.
- 高橋 英彦 (2014). なぜ他人の不幸は蜜の味なのか 幻冬舎ルネッサンス文庫
- 高橋 俊彦 (2006). 病的嫉妬の臨床研究 岩崎学術出版社
- 田中 雄三 (1989). 病的嫉妬に関する精神病理学的研究の流れ 精神医学, 31, 1126-1137.
- 瀧田 信之 (2009). それ, 恋愛じゃなくてDVです WAVE 出版
- 詫摩 武俊 (1993). 嫉妬の心理学—人間関係のトラブルの根源— 光文社文庫
- 坪田 雄二 (1998). 嫉妬感情 現代のエスプリ, 368, 131-140.
- 坪田 雄二・深田 博己 (1991). 嫉妬感情に関する実証的研究の動向 広島大学教育学部紀要, 39, 167-173.
- 堤 雅雄 (2006). 嫉妬と自己愛 : 自己愛欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), 39, 39-43.
- 上杉 喬・榎場 真知子・馬場 史津 (2002). 感情体験の分析—嫉妬・憎い・怒りについて—

生活科学研究, 24, 25-40.

山本 巖夫 (1967). 病的嫉妬, とくにその成立について—現象学的精神病理学の試み— 精神誌, 69, 1210-1236.

White, G. L. (1981). A model of romantic jealousy. *Motivation and Emotion*, 5, 295-310.

White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.

## 第2節：嫉妬研究の残された課題：嫉妬の経験・表出の測定と関連要因についての考察

第1節においては国内外の嫉妬に関わる心理的研究を各理論的観点から分けて紹介を行い、最後に本論文では嫉妬の経験と表出を測定・検討することのできる社会心理学的観点を重視することについて述べた。

第2節では、本論文にて実証的な嫉妬研究を行うにあたり必要となる嫉妬の経験および表出を測定するアプローチについての考察と、本論文で取り組まれるべき課題について紹介を行うこととする。

### 1. 嫉妬の経験 *jealousy experience* の測定方法 (第2章)

Pfeiffer & Wong(1989)による *Multidimensional Jealousy Scale* (以降 *MJS*) は先にも述べたように、今日に至っても最も利用されている代表的な嫉妬の経験を捉える尺度である。*MJS* は三つの下位尺度から構成され、それぞれ *cognitive jealousy*, *emotional jealousy*, *behavioral jealousy* と、認知・情動・行動の次元から嫉妬を測定する尺度であるとされる。*Cognitive jealousy* は恋人が第三者に惹かれていないか、第三者が恋人を誘惑していないかと疑い心配する度合を表すものである。*Emotional jealousy* は、嫉妬喚起場面に直面した場合、どれだけ不快な感情を感じるかというものであり、また一方で *Behavioral jealousy* はパートナーに質問したり監視したりと、探知的・防衛的な行動をとる度合を表すものである。同様の下位尺度を持つ尺度は Buunk(1997)でも作成されており、それぞれ順に *Anxious jealousy*, *Reactive jealousy*, *Preventive jealousy* が得られている。Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)では *MJS* と Buunk の嫉妬尺度が別の因子構造を持つものとされているが、他の研究での扱いを参照する限り、両者は似た心的力動を測定しているものと考えられるだろう。Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が指摘するように、*MJS* は、そして Buunk の尺度も、個人が関係内で示す嫉妬を測定するのに適した尺度であるとされるが、第1節でも論じたように何点か問題点も見受けられる。例えば尺度の構成時に幅広い年齢層によって調査がなされていることや、回答形式が下位尺度によって異なる点などである。さらに尺度得点としても Elphinston et al(2011)などの結果を参照する限りでは、特に病理的な側面を持つとされる *cognitive jealousy* や *behavioral jealousy* については床効果のみ

られるような得点分布を示していたため、概念的な内容についても現代の回答者が回答しやすいよう、見直しがなされる必要がある可能性も考えられるだろう。嫉妬の経験については、MJS や Buunk の嫉妬尺度などで散見される問題点をクリアすることで、個人の嫉妬の経験について捉えることのできる尺度が作成されるだろう。

## 2. 嫉妬の表出 *jealousy expression* の測定方法 (第5章)

恋愛関係・夫婦関係にてパートナーの浮気や嫉妬を認識した際の対処行動を検討する研究の中でも最も代表的なアプローチとして、Guerrero の一連の研究がある(e.g., Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995; Guerrero, Hannawa, & Babin, 2011; Guerrero, 2014)。Guerrero は「現在のパートナーとの間で嫉妬した際に過去に自分が取った行動的反応」の回答を集め *Communicative Responses to Jealousy Scale* (以下 CRJS) を作成し、研究と改訂を重ねている。Guerrero et al. (2011)では、CRJS の 11 個の下位尺度について確認的高次因子分析を行い、4 つの高次因子を得ている。それらは、パートナーや物への暴力や攻撃を含む「破壊的コミュニケーション」、関係修復を図る「建設的コミュニケーション」、パートナーへ沈黙を保ち対話を避ける「回避的コミュニケーション」、ライバルへの接触やパートナーの占有行動を含む「ライバルに向かうコミュニケーション」である。一方で CRJS は未だ下位尺度の数も項目数も多いため、改訂の途中にあると考えられる。さらに Bevan(2013)が指摘するように、Guerrero の一連の CRJS に関する研究は、その項目数の多さや因子構造の複雑さから、Guerrero の研究チームから独立して CRJS を用いるような研究者がおらず、個人が嫉妬を覚えた際にどのようにそれを表出・対処するかということに関してより詳細に検討するためには、研究の積み重ねが必要であるとされている。

この CRJS には現在でも下位尺度が多いことに由来して項目数が多い問題点がまず挙げられるが、「現在のパートナーとの関係で葛藤が起きた(嫉妬した)際どんな行動を取ったか」の観点から尺度が構成されるため、基本的に回答者は現在まで継続したパートナーとの関係において嫉妬した際の行動について回答を求められる。そのため、不誠実な行いをした、あるいは疑わしかったパートナーとの関係を切り捨てるような「別れる」行動はほぼ考慮されず、事実、尺度内容にそのような項目は含まれていないことがわかる。今日的な問題として、社会心理学的研究においては恋愛関係や夫婦関係の継続と個人の最終的な

適応を半ば同一視した研究が散見されるが(Eastwick, 2016), デート DV など, 関係の放棄・崩壊を選んだ場合に個人の適応が促進される可能性があることも考えられる。Feldman & Cauffman(1999)にてパートナーに浮気をされた個人の 50%近くが別れを選択しているからも, 浮気や嫉妬にまつわる問題への対処, 嫉妬を表出する行動の一つとして関係の崩壊を選択する行動が考えられるだろう。そのため嫉妬や浮気に関する対処・表出を測定する尺度には尺度内容として関係を放棄するような行動も概念的に包含されるべきであろうと考えられる。また, 併せて CRJS の「嫉妬した際にどんな行動を取ったか」という回答形式では, 個人が想起する刺激のレベルが個人により異なる問題点も考えられる。そのため, 嫉妬の表出を測定するアプローチにおいては, CRJS を参照する場合には簡便に測定可能な尺度構造を想定することと, この「別れ」をどう考慮に入れるべきかといった課題, 表出すべき刺激となる「嫉妬」をどう扱うかといった問題が多重に内包されているといえよう。

### 3. 嫉妬研究の他変数との関連における残された課題

本節においては嫉妬の経験・表出の測定方法に関する, 解決されるべき課題について論じてきた。ここでは, 本論文にて明らかにすべき嫉妬研究の他変数との関連における残された課題について具体的に取り上げる。

#### A, 自尊感情との関連についての知見の整理 (第3章)

嫉妬の経験について, 海外で研究が行われ始めたのは 1970~1980 年代と考えられるが, それらの初期的な嫉妬研究において盛んに議論されたのが当時開発された自尊感情, あるいは各種の肯定的な自己評価尺度との関連であった。古典的な嫉妬研究においては, 自尊感情の低い者ほど嫉妬する, と嫉妬の根源を自己評価の低さに帰属するような指摘や研究が散見されるが, Guerrero & Andersen(1998b)や坪田(2011)が指摘するように, これらの関連については今日まで一貫した知見が提供されていないといえる。これまでに, 実証的な先行研究で自尊感情(または肯定的な自己評価)と嫉妬傾向(多くは今日では嫉妬の情動的側面と捉えられるような概念である)との間に負の関連を示す研究が複数見られている一方で, 両者には関連が見られないとするような研究もまた複数存在する。

これらの知見の不一致は, 古典的な心理学的研究では見落とされてきた一次元的な自尊感情の測定に関する曖昧さと, 一次元的な自尊感情の測定では測定しきれない自己評価の

側面に関する限界が関与している可能性が考えられるだろう。この問題は、今後作成した尺度において測定される多次元的な嫉妬がどのような概念であるのかを考えるために、解決されるべき問題と考えられる。

## **B. 関係満足感との関連についての知見の整理（第4章）**

さらに、上記の自尊感情との関連とも類似したテーマとなるが、嫉妬研究は海外では研究の数が多い割に嫉妬との関連において一貫した知見が得られていない心理的概念も多く存在する。先の自尊感情の他に、関係満足感もその例として挙げることができる。これらの変数との関連についての知見が一貫しない理由としては、用いられる尺度の種類が多く、測定する概念の内容に幅が考えられることや、そもそも嫉妬との関連が指摘されている概念との関わりのメカニズムについての考察が不十分で、関連を媒介するような潜在的な変数の存在を仮定せずに直接的に関連を検討してしまうことで、一貫しない結果が提供されている可能性も考えられるだろう。Guerrero & Eloy(1992), Guerrero & Andersen(1998a), Attridge(2013), Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)などの研究を概観すると、疑い深い嫉妬の側面とされる嫉妬の経験の認知的側面は概ね一貫して関係満足感と正の関連を示すのに対し、嫉妬の経験の情動的側面、行動的側面に関する下位尺度については関係満足感との関連が一貫しないという結果が得られている。これらの知見の不一致に関しても、やはり作成した尺度が関係満足感とどのような関連を示すか、またどのような変数との関連によって関係への満足感と嫉妬傾向の関連が考えられるかを示すことによって、尺度が測定する嫉妬傾向についてより理解することが可能となるだろう。

## **C. 嫉妬の経験・表出と愛着との関連の検討（第6章）**

個人の嫉妬の経験や嫉妬の表出など、嫉妬全般と密接な関わりにあるとされる理論的観点が Bowlby(1969)に端を発する愛着理論である。Sharpsteen & Kirkpatrick(1997)によると、愛着と嫉妬はともに(1)親密な関係を維持するためのメカニズムであり、(2)愛着対象(世話を焼いてくれる人や恋人)との分離や分離の脅威によって顕在化されるもので、(3)基本的な感情としてともに恐怖や怒り、悲しみを伴い、(4)親密な関係と自己の心的表象に関わる定量的な苦悩の個人差を示すものである、という点で共通するとされ、Guerrero(1998)

によれば個人の愛着のスタイルの違いが個人の嫉妬への反応の違いを説明するのに役立つと指摘されている。しかし Bevan(2013)が示すように、これらの嫉妬や嫉妬時の行動を愛着的観点から捉える研究領域は実際の間人間関係上の力動を捉える上で非常に重要であるにも関わらず、その研究の絶対数は少ない。そのため、個人の愛着傾向が嫉妬の経験にどのように影響を及ぼし、また分離の危機によって顕在化されると考えられる個人の愛着傾向は最終的に分離の危機に対するどのような行動を促進・抑制するのか検討することには、恋愛・嫉妬研究のみならず、愛着理論そのものにも寄与する部分があると考えられる。日本においては嫉妬という言葉は用いられていないものの、金政(2006)によって愛着傾向が個人の排他感情に影響を及ぼし、さらにそれらが浮気に対する個人の行動の予測に影響を与えるプロセスを検討するという類似の検討が行われている。本論文において信頼性・妥当性の確認された嫉妬の経験・表出を測定できる尺度がともに作成された際には、上記のように愛着理論的観点から嫉妬がどのように経験・表出されるかを検討し、その結果を先行研究と比較しつつ考察することが求められるだろう。

#### D. 嫉妬の経験・表出と恋愛関係上の問題行動との関連の検討（第7章）

親密な関係の中で経験される嫉妬は、時に凄惨な事件を引き起こすこともある。それは嫉妬がパートナーやライバルに対する嫌がらせや、暴力につながった時である。先行研究では暴力傾向と嫉妬深さとの関連を報告するような研究も数多く存在し、嫉妬を一次的に捉えた尺度による報告が多く見受けられるが、Rodriguez, Dibello, Øverup, Neighbors(2015)ではMJSのcognitive jealousyとbehavioral jealousyとIPV加害傾向とが有意な正の関連を示し、emotional jealousyとIPV加害傾向とは無関連であった。そのため、多次的に捉えた場合の嫉妬の中では疑い深さや実際に相手を詮索するような行動を取る傾向は個人の親密な相手への暴力を促進する要因となる可能性が考えられる。上記のように嫉妬を多次的に捉え、さらに嫉妬に対してどのように対処する個人が、恋愛関係上の問題行動や暴力につながるような行動を起こしやすいかを検討することには、一般的な青年の恋愛関係において生じるトラブルを未然に予測しうる知見が得られるという点で有益であると考えられ、また本論文にて作成した嫉妬の経験に関する尺度と、嫉妬の表出に関する尺度の有用性を示す上でも、意義のあることであると考えられる。

以上の議論から、嫉妬の経験と嫉妬の表出を測定しうるような尺度を作成することで、恋愛研究のみならず、多様な理論的観点と嫉妬を絡めた研究を行うことができ、それによって個人の恋愛関係上の行動が様々な問題とどのように関連するか検討が可能となるだろう。そこで、次章からは実証的研究では、上記の議論をさらに発展させ、実証的な検討を行っていく。そのために次節では、以上の議論を踏まえ、本論文の全体的な構成について説明する。

## 引用文献

- Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good(Reactive) and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open, 3*, 1-17. doi:10.1177/2158244013476054
- Barelds, D.P.H. & Barelds-Dijkstra, P. (2007). Relations between different types of jealousy and self and partner perceptions of relationship quality. *Clinical Psychology and Psychotherapy, 14*, 176-188.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田 実郎・大羽 葵・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1991). 母子関係の理論 I. 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田 実郎・岡田 洋子・吉田 恒子 (訳) (1991). 母子関係の理論 II. 分離不安 岩崎学術出版)
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences, 23*, 997-1006.
- Eastwick, P. W. (2016). The emerging integration of close relationships research and evolutionary psychology. *Current Directions in Psychological Science, 25*, 183-190.
- Elphinston, A. R., Feeney, A. J., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy:

- Validation of the multidimensional jealousy scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, *63*, 243-251.
- Feldman, S. S., & Cauffman, E. (1999). Sexual betrayal among late adolescents: Perspectives of the perpetrator and the aggrieved. *Journal of Youth and Adolescence*, *28*, 235-258.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment-style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships*, *5*, 273-291.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication*, *78*, 586-611.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998a). The Dark Side of Jealousy & Envy: Desire, Delusion, Desperation, and Destructive Communication. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships*. Mahwah, NJ. Taylor & Francis e-Library. (谷口 弘一・加藤 司 (監訳) (2008). 親密な関係のダークサイド 北大路書房 pp.35-67.)
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998b). Jealousy experience and expression in romantic relationships. In Andersen, P. A., & Guerrero, L. K. (Eds.), *Handbook of communication and emotion: Research, theory, applications, and contexts* (pp.155-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the green - eyed monster: Conceptualizing and measuring communicative responses to romantic jealousy. *Western Journal of Communication*, *59*, 270-304.
- Guerrero, L. K., & Eloy, S. V. (1992). Relational satisfaction and jealousy across marital types. *Communication Reports*, *5*, 23-31.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The communicative responses to jealousy scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, *5*, 223-249.
- 金政 祐司 (2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について. *社会心理学研究*, *22*, 139-154.

- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, *6*, 181-196.
- Rodriguez, L. M., Dibello, A. M., Øverup, C. S., & Neighbors, C. (2015). The price of distrust: Trust, anxious attachment, jealousy, and partner abuse. *Partner abuse*, *6*, 298-319.
- Sharpsteen, D. J., & Kirkpatrick, L. A. (1997). Romantic jealousy and adult romantic attachment. *Journal of personality and social psychology*, *72*, 627-640.
- 坪田 雄二(2011).妬みの生起における予期の役割 対人社会心理学研究, *11*, 101-108.

### 第3節 本論文の目的と構成

#### 1. 本論文の目的

本章第1節で述べたように、本論文全体の目的は、青年が恋愛関係の中で嫉妬をどのように捉え、またどのように対処するかという嫉妬の経験と表出のプロセスに焦点を当て、「嫉妬の経験・表出のプロセスが何によってもたらされ、何をもたらしうるか」、検討することである。この主目的を達成することで、青年がどのように恋愛関係の中で生じる不安や相手との葛藤を経験・対処していくかが先行研究と比較して位置づけることになるため、青年心理学・人格心理学的知見の蓄積に貢献する研究となることが見込まれる。さらにこの主となる目的を達成するためには、まず嫉妬の経験と表出について、それぞれ測定可能な尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認することが必要となる。日本語の研究では、このような嫉妬の経験と表出を測定しうる有用な尺度はほぼ見受けられないため、信頼性と妥当性を兼ね備えた青年の恋愛関係における嫉妬の経験、嫉妬の表出を捉えることのできる尺度の作成は、今後の研究に大いに貢献する、意義のあることといえよう。

なお、本論文で調査協力者を青年に限定する理由は2つ存在する。まず1点目に、本章第1節冒頭で示した通り、特に青年の恋愛関係がいかに経験されるかを検討することには発達の観点からも重要な意義がある点が挙げられる。また第2点目に、青年期以降の恋愛関係・夫婦関係では、子ども・同居の有無や収入等、社会的・経済的要因などのデモグラフィックデータによって親密な関係に対する個人の態度・行動が左右されてしまう可能性が考えられるが、青年の未婚の恋愛関係ではそれらの影響を比較的受けにくく、心理学的な観点による嫉妬のプロセスの解明が行うことが可能と考えられる点が挙げられる。

#### 2. 本論文の構成

そこで、本論文では上記の目的を達成するために、本章第2節で紹介した嫉妬研究の残された課題に基づき以下の実証的研究を行うこととする。

まず第2章では、嫉妬の経験を多次的に測定する「多次元恋愛関係嫉妬尺度」を作成し、その妥当性について多角的に検討することを目的とする。

続く第3章では、第2章で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いて先行研究にて特に

知見の混乱が見られる嫉妬傾向と自尊感情との関連について、自己愛を測定する尺度を用いることで知見の整理を試みることにする。

同じく第 4 章では、多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いて嫉妬傾向と関係満足感との関連について、ネガティブな反すうと関係効力感を測定する尺度をともに用いることで、両変数の関連のメカニズムについて検討を行う。この第 2~4 章の研究を行うことで、嫉妬の経験に関する尺度の信頼性・妥当性の確認と、尺度の有用性を多角的に検討することができるだろう。

続く第 5 章の第 1 節では、先行研究では嫉妬の表出とされるようなプロセスについて測定する「架空の浮気場面に対する予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity(以降 ABSII)」の作成を行い、複数の観点から信頼性と妥当性について検討を行う。また、第 2 節では ABSII の各下位尺度が一般的な友人関係におけるコーピング尺度とどのような関連を示すのか検討することで、尺度の測定する内容の独自性を確認することとする。さらに第 3 節では ABSII で個人が示す予測行動がどのように類型化して捉えうるか、クラスター分析を行い、得られた類型について比較検討を行うこととする。

第 6 章では本研究の一つの大きな目的である、「嫉妬の経験・表出のプロセスが何によってもたらされるか」ということについて、嫉妬研究の黎明期から嫉妬先行要因として着目される愛着の観点から、個人の持つ愛着傾向が、多次元恋愛関係嫉妬尺度で測定される嫉妬傾向に及ぼす影響と、さらにこれらの愛着傾向と嫉妬傾向が ABSII で測定される各種の行動の予測に及ぼす影響について検討する。

第 7 章では、もう一つの大きな目的であった「嫉妬の経験・表出のプロセスが何をもちたらしうるか」ということについて、多次元恋愛関係嫉妬尺度で測定される個人の嫉妬傾向と、ABSII で測定される予測行動の傾向が恋愛関係上の問題行動である「恋人支配行動」に対してどのように影響を及ぼしうるか、検討を行う。

第 8 章では、第 2 章から第 7 章までの研究を通して全体的討論を行い、今後の課題についても述べることにする。

次ページに、以上の本論文の各章の流れ・構成について図示する(Figure1-2)。

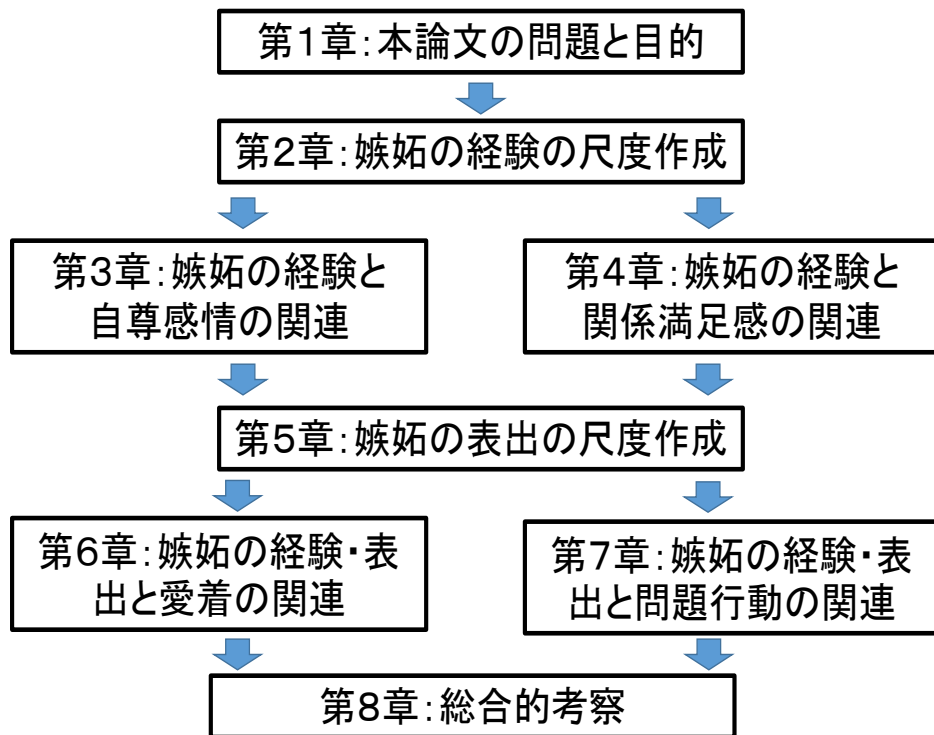


Figure1-2. 博士論文の構成

## 第2章 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と 信頼性・妥当性の検討

第1章第1節および第2節において、個人の嫉妬の経験 *jealousy experience* を測定する尺度の紹介や、その問題点の指摘を行ってきた。ここでは、それらの議論を踏まえ、多次元からなる新たな嫉妬尺度として多次元恋愛嫉妬尺度を作成し、作成した尺度の信頼性と妥当性について確認・検討を行うこととする。

## 問題

親密な関係の嫉妬について社会心理学的研究では White(1981)以降、認知・情動・行動的要素から捉える研究が多い。認知的要素は親密な関係への第三者の侵入を疑う病的・妄想的過敏さ、情動的要素は認知的要素より幾分正当とされる嫉妬喚起状況への感情反応、行動的要素は関係への第三者の侵入や関係崩壊を防衛・警戒しようとする行動である。

White(1981)が嫉妬を浮気場面などの刺激の認知→情動→行動と、Lazarus のストレス理論に基づいた順次的なプロセスとして概念化しているのに対し、Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬の認知・情動・行動的側面は同時に並行して生じうるもので、それらは相互に影響を及ぼすものだということを主張している。それに関連した実証的な研究として、Pfeiffer & Wong(1989)は、自分たちの提案したモデルに基づき、嫉妬の認知・情動・行動的側面を包括的に捉える尺度として Multidimensional Jealousy Scale(以降 MJS と略記)を作成し、想定通りの 3 因子構造を見出して、信頼性・妥当性についても確認した。3 因子とは、主に恋人の不貞を心配する・疑う度合いとしての「認知」と、主に嫉妬喚起場面に対して否定的な感情を覚える度合いとしての「情動」、そして主に恋愛のライバルを認識することで、恋人が自分から離れないようにと行動する度合いとしての「行動」である。Pfeiffer & Wong(1989)は、嫉妬傾向を単次元でしか捉えられていない場合よりも、多次元で捉えた方が、様々な変数と嫉妬の関係についてより包括的に検討できるために、MJS は、当時の既存の単次元の嫉妬尺度よりも、より包括的に嫉妬傾向を捉えられる尺度と考えられるとした。MJS は、Pfeiffer & Wong(1989)によって作成されてから、現在に至っても使用されている最も代表的な嫉妬尺度の一つといえ、特に、恋人の不貞を心配し、疑う Cognitive Jealousy の項目については、近年の多くの研究(Bevan & Lannutti, 2002; Gehl, 2010; Guerrero, 1998; Knobloch, Solomon & Cruz, 2001 など)でも、そのまま使用されている。恋人が自分から離れて行ってしまわないか、というような認知的な嫉妬を限定的に捉えうる尺度は、Pfeiffer & Wong(1989)以前には作成されておらず、それ以前では嫉妬尺度は、具体的な嫉妬喚起場面に対してどれほど情動的・行動的な反応を示すか、という形をとったものが多く、認知的な嫉妬を測るような尺度はあまり検討されていなかったように見受けられる。その後、Pfeiffer & Wong(1989)の研究結果や、Bringle(1991)などにより

suspicious, すなわち疑念的な嫉妬についても言及されることにより、現在のように広く用いられるようになったと考えられる。

また、MJS に続く多次元的に嫉妬を捉える尺度作成の研究としては、Buunk(1997)によってMJS とほぼ同様の下位因子を持つ嫉妬尺度も作成され、Pfeiffer & Wong(1989)では検討されていなかった、愛着やその他の人格特性などとの関連が見られている。上記の観点から嫉妬を測定する代表的な尺度には、他に類似した因子構造を持つ Buunk(1997)の Jealousy Scale がある。

一方で既存の嫉妬尺度には Elphinston, Feeney, & Noller(2011)が指摘するように全般的に妥当性の検討が不十分なものが多いことや、それ以外にも様々な問題点が考えられる。例えばMJS では嫉妬喚起状況に対する感情を”very pleased”から”very upset”で回答を求めするため Guerrero, Eloy, Jorgensen, & Andersen(1993) により回答形式の不適切さが指摘されており、概念設定を見直す必要がある。またその点に関連する問題点として、各下位尺度で質問の仕方が違うため、因子分析にかけるとき、そのバイアスによって回答結果に不当な偏りが生じ、下位尺度ごとに項目がまとまってしまう可能性が考えられる点である。またそういった形式上の問題点から、質問紙の中でランダムに配置することができず、同様の質問を調査協力者に連続して答えさせてしまうことで、調査者の意図が伝わり、回答にバイアスがかかってしまう可能性も予測される。他に Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)では青年～老年に幅広く調査を行い尺度を構成したが、年齢や婚姻等で嫉妬の意味は異なる可能性があり、各年齢層での尺度構成を確認すべきであろう。

また日本国内の研究で嫉妬を多次元的に捉えて検討している実証的研究としては、深澤らの一連の研究（深澤・篠崎・越川, 1992; 深澤・越川・篠崎, 1993; 越川・篠崎・深澤, 1993; 篠崎・深澤・越川, 1993）以外は見当たらない。深澤らの研究では、White(1981)のモデルや White & Mullen(1989)を参考に、嫉妬感情生起以前の行動、嫉妬感情生起以前の認知、嫉妬感情の強さ、嫉妬感情に対する行動的コーピング、嫉妬感情に対する認知的コーピングの5つの因子について測る、包括的な嫉妬尺度の作成が試みられている。しかし、深澤らの作成した嫉妬尺度はその後に続く研究は見当たらない。またこれらの研究においては White(1981)に対する、Pfeiffer & Wong(1989)からの批判と同様に、特に恋人への不安・疑念を表すような傾向を示す嫉妬について、はっきりと捉えられる下位尺度はないように見受けられる。

先行研究からの改善点として多角的な妥当性の検討、対象年齢層の限定、概念設定及び

回答形式等に配慮した尺度の作成は個人の嫉妬傾向を捉えていくことに有用であろう。本研究では青年を対象に恋愛関係の嫉妬を多次元的に捉える尺度として多次元恋愛関係嫉妬尺度を新たに作成し、信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

尺度の併存的妥当性の検討には、まず日本で信頼性・妥当性の確認された広く用いられている恋愛関係における嫉妬尺度が存在しないため、嫉妬深い恋愛傾向の尺度として松井その他(1990)の Lee's Love Type Scale 2nd version (以降 LETS-2 と略記)の Mania 項目を用いることとする。Lee(1973)の恋愛の6類型では、Mania 型の恋愛は独占欲が強く、嫉妬しやすい型とされている(松井その他, 1990)。この Mania 型の恋愛の型と嫉妬との関連をみた実証的な研究としては、篠崎・深澤・越川(1993)が、White(1981, 1989)の理論などを参考に多次元的な恋愛嫉妬尺度を作成し、そのほぼ全ての因子と、Mania との間で男女ともに有意な正の相関を示したため、やはり嫉妬傾向全般と Mania 型の恋愛傾向はおおむね正の関係にあると考えられる。そのため、篠崎・深澤・越川(1993)の嫉妬尺度と因子構造は異なるものの、本研究において作成された多次元恋愛関係嫉妬尺度の3因子全てについても同様に、Mania 型の恋愛傾向と正の相関を示すのではないかと考えられる。

構成概念的妥当性に関して、「見捨てられ不安」は関係からの孤立を恐れる点で嫉妬傾向と共通すると考えられるため、本研究では益子(2008)による見捨てられ不安尺度との関連を検討する。「見捨てられ不安」や「見捨てられ恐怖」といわれるような、「見捨てられることへのなりふりかまわぬ努力」(frantic efforts to avoid real or imagined abandonment)は、DSM-IV-TR において境界性パーソナリティ障害の診断基準の一つに設定されている構成概念であるが、斎藤・吉森・守谷(2009)によれば、境界性パーソナリティ障害の診断基準に基づく「ほとんど恐慌状態に近い不安」を「見捨てられ恐怖」とするならば、その延長上にありながらも、比較的健康な青年期心性の範疇ではそういった特性を「見捨てられ不安」と表現し、両者を区別し理解しうる方向性を見出している。また、嫉妬に特徴的な感情的反応としても、関係の崩壊や変化の可能性に対する恐怖、不安、狼狽があげられ、嫉妬への対処方略として、そういった恐怖や不安に対する行動が嫉妬者においては病的になりやすいことが指摘されている(Pfeiffer & Wong, 1989)。White & Mullen(1989)によれば嫉妬状況で生起する恐怖は、見捨てられることや対人関係を喪失することの恐怖であるとされており、それは相手を失うことで、自らの対人関係的な安心感などを失うことへの恐怖につながっていると考えられる。そのため、他者から見捨てられることへの恐怖・不安の傾向も、嫉妬傾向との関連が想定され、多次元恋愛関係嫉妬尺度の3因子全てにおいて、見捨

てられ不安とは正の相関を示すのではないかと考えられる。

また「再確認傾向」も重要な他者からの評価に不安を持つ点で嫉妬傾向と共通するため改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度（勝谷，2004）との関連を検討する。重要他者に対する再確認傾向とは，勝谷(2007)によれば“自分は愛されているのか，自分は価値ある存在なのかについて，すでに確認をしたかどうかにかかわらず，他者に対して過度に，しつこく確認を求める比較的安定した傾向のことをさす。これは，重要他者に対して比較的安定してみられる動機づけと行動の傾向である”（p.161）とされる。勝谷(2007)は，こうした働きかけは，“自分の存在価値に対する確信が揺らいでいるために，重要他者からの反応を通じて自分の存在価値を確かなものとするためではないかと考えられる”（p.162）と考察している。こうした重要他者に対する確認傾向は，もちろん恋愛関係も想定に入れられていると考えられ，岸田(2008)によれば，人間は他者の評価などを得て，“自分という存在が存在することに値することを信じていることができるのでなければ，生きてゆけない”（p.5）が，一方で“恋人が他の男（女）に心を移せば，自分は人に愛される価値があるのであろうかと疑われ，自分の愛される価値は崩れかかる”（p.5）と指摘されている。しかし西平(1965)によれば，「愛されている絶対の自信」とは，恋人の場合まずありうべくもない，とされる。それは，恋愛は結婚とは違い拘束力を待たず，口約束の関係と評することもできるためである。また，宮城(1963)によれば，嫉妬の原因には不安やそれに由来する強すぎる愛情欲求（愛情飢餓）があるとされ，嫉妬者はいくら愛情を受けても，まだ十分という感じがしないために，その不満足感や自分を満たしてくれない相手への不安から，相手の言動を勝手に解釈することになる。総合して，恋愛関係において，特に嫉妬者は，何度恋人が自分のことを望ましいと評価しても，十分愛情を受けていると感じることが難しいと考えられる。そして不意に（たとえば恋人が異性と会話する光景を見るなど，些細な嫉妬状況でも）恋人からの愛情の確かさに不安を感じると，自分の存在価値が揺らぐような不安を覚える。その不安を埋めるため，相手にとって自分は価値があること，愛情の保障や評価を何度も相手に求めたり，相手の気持ちが自分に向いていることを何度も確認しようとする傾向があるのではないかと考えられる。よって，嫉妬は再確認傾向とも関連が想定され，多次元恋愛関係嫉妬尺度は 3 因子全てにおいて再確認傾向と正の相関を示すのではないかと考えられる。

最後に「親密性」は Erikson 理論に基づく異性や周囲と親密になれる特性で，他人を心の底からは信頼できず，疑い深い嫉妬の認知的側面とは負の関係にあると考えられるため

親密性尺度（谷・原田，2011）との関連も検討する。青年期から移行する若い成人期の発達課題として Erikson（1959）が提唱したのが、親密性 Intimacy の獲得である。親密性とは異性との親密な関係を形作り、配偶者を選択し、最終的には異性との性的な親密さのみならず、相手の個人性を尊重し相互の欲求を満足させ合うという相互性を築くことのできる特性である。この時期には、それまでの成長過程の中で出会った重要な他者との同一化を主体的に見直し、さまざまな自己探求や模索を経て、独自の自己の在り方、生き方を主体的に選択することとなる。また、Erikson(1959)は親密性の発達において、自我同一性の役割を強調し、真に他者と親密な関係を築くには自我同一性の獲得が不可欠であるとしている。その一方で、同一性がうまく形成されておらず、親密性の危機に直面した結果、同一性の喪失を引き起こしそうな対人的融合を恐れる、呑みこまれ不安が生じて内的に孤立し、形式的な人間関係を持つだけとなるとされる。このような、主に異性との関係を中心とした対人関係についての発達課題である親密性と、交際関係における嫉妬深さとはどのような関係を示すだろうか。過剰な嫉妬深さは、対人関係を破壊しかねない危険なものであるとされるが、一方で適度な嫉妬は恋愛関係におけるスパイスとして、関係維持の方略として役立つという言説は数多く存在する(Pfeiffer & Wong, 1989; Pines, 1992 など)。

海外の研究では、Intimacy と表現される変数と嫉妬の関連が検討されている研究ならば少なからず存在するが、その多くが Rubin(1970)の Love Scale の得点を Intimacy と表して、嫉妬尺度との関連を見た研究である。たとえば Pfeiffer & Wong(1989)では Rubin(1970)の Love Scale と MJS の各因子間の相関が見られており、cognitive jealousy とは負の相関、emotional jealousy とは正の相関、behavioural jealousy とはほぼ無相関、という結果が示されている。Knobloch et al(2001)では同じく MJS の cognitive jealousy とは負の相関、emotional jealousy とは無相関、という結果であった。しかしこれらはあくまで Rubin(1970)の Love Scale との関連であり、Erikson の提唱した親密性と、嫉妬尺度との関連ではない。Love Scale で測定される、特定の他者への好意の評価ではなく、Erikson の親密性のような、一人の対象に縛られず、他人全般とうまく対人関係を築くことができるような特性と嫉妬深さとの関連が見られている研究は見当たらない。このような発達指標となるような親密性と多次元的な嫉妬深さとの関連を見ることで、嫉妬のそれぞれの側面が人格的な発達とどのような関係にあるのかを検討することも、今後の嫉妬研究における嫉妬の役割を考えるにあたり、意義のあることであると考えられる。理論的な考察として、特に嫉妬の認知的側面に関しては関係満足感や相手への好意という意味での親密性と

おおむね一貫して負の関連が指摘される(Pfeiffer & Wong, 1989; Elphinston, Feeney, & Noller, 2011)ため、他者への信頼・好意とは負の関係にあることが予測される。そのため、Erikson の提唱した自我発達の指標となる親密性に関しても同様に負の関連を示すのではないかと予測される。一方で嫉妬の情動的側面は Pfeiffer & Wong(1989)などでも嫉妬の幾分正常な側面と見なされており、また嫉妬の行動的な側面も少なくとも上記の Pfeiffer & Wong(1989)の研究においては Rubin(1970)の Love scale とは無関連であったことから、他者への信頼や好意とは直線的な関係を示しにくい可能性が考えられる。

上記をまとめると、本研究では多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成および信頼性・妥当性の検討を目的とする。尺度の妥当性については上記の複数の尺度を用いることで、多角的に検討することとする。

## 方法

### 1. 調査協力者

現在もしくは過去数年以内に恋愛関係を経験していると回答した兵庫県内の大学生 234名（男性 109名、女性 125名、18～23歳、平均年齢 19.53歳、 $SD=1.04$ ）。

### 2. 測定内容

#### (1) 交際経験

「あなたは、今、恋人同士として交際されている特定の方がいらっしゃいますか。あなた自身に当てはまる数字を選んで、その数字に○をつけてください。」という質問を設け、それに対して「1. 現在、いる。」「2. 過去数年以内に、いた。」「3. 今までに、いない。」「4. その他」の4つの中から回答を求めた。その際、次に続く認知的嫉妬尺度の回答に際して、恋愛経験の質問に対して「1. と答えた方（現在、特定の交際相手がいる方）は、その方のお名前を X とし、X さんとの関係において、普段あなたがどのような傾向にあるかをお答えください。 2. と答えた方（過去数年以内に特定の交際相手があった方）は、特に心に残っているおひとりの方のお名前を X とし、X さんとの関係において、当時、普段あなたがどのような傾向にあったかをお答えください。 3. や 4. と答えた方（今までに特定の交際相手がいなかった方やその他）は、これから自分に恋人の X さんができたと

して、Xさんとの関係において、あなた自身はどのような傾向にあるだろうと思うかを、できる範囲でお答えください。答えにくい場合は、無理に回答していただく必要はございません」という教示文を示し、これに注意して回答するよう求めた。

#### (2) 多次元恋愛関係嫉妬尺度の暫定項目

作成する多次元恋愛関係嫉妬尺度の暫定項目として、MJSやBuunk(1997)などを参考に先行研究の問題点に配慮して3因子構造を仮定に構成した36項目を使用した。現在恋人がいると回答した協力者には恋人の名前を「Xさん」として現在の心境について、過去数年以内に恋人がいたと回答した協力者には特に心に残っている恋人の名前を「Xさん」として当時の心境について「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の7件法にて回答を求めた。

#### (3) Lee's Love Type Scale 2<sup>nd</sup> version (以降、LETS-2と略記)のマニア項目

Hendrick & Hendrick(1986)をもとに、松井その他(1990)が作成したLETS-2(Lee's Love Type Scale 2<sup>nd</sup> version)の6つの因子のうちの1つで、マニアとは、Lee(1973)の恋愛の6類型のうち、独占欲が強く、嫉妬、執着、悲哀などの激しい感情を伴うとされる恋愛のタイプとされる。回答の際は、家族以外の、恋人など、最も親しい異性を思い浮かべた上でその人との関係について回答してもらった。そういう人物に心当たりがない場合、回答はしなくていいということについても指示した。9項目からなる「まったく当てはまらない」～「よく当てはまる」の5件法。本研究における $\alpha$ 係数は、 $\alpha=.93$ であった。

#### (4) 見捨てられ不安尺度

他者に拒絶されたり、他者に見捨てられることを恐れて、対人関係上の適応を重視する傾向を測る尺度で、Lutz & Hock(2002)を益子(2008)が邦訳した一次元尺度。7項目からなり、「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の5件法。本研究における $\alpha$ 係数は、 $\alpha=.64$ であった。

#### (5) 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度

“自分は愛されているのか、自分は価値がある存在なのかについて、すでに確認をしたかどうかにかかわらず、重要他者に対して過度に、しつこく確認を求めてしまう比較的安定した傾向”を測る、勝谷(2004)が作成した尺度で、再確認への願望と実際に再確認をする行動の2因子各6項目、計12項目からなる。本研究の分析においては、再確認傾向全般と多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度との関連を検討するため、一次元性の尺度として分析に用いた。「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の7件法の尺度で、本研究にお

ける  $\alpha$  係数は,  $\alpha=.87$  であった。

#### (6) 親密性尺度

谷・原田(2011)が作成した 10 項目からなる尺度で, Erikson(1959)の漸成発達理論における第VI段階の発達課題である親密性の獲得の度合いを測る尺度。「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の 7 件法。本研究における  $\alpha$  係数は,  $\alpha=.84$  であった。

## 2. 調査手続き

2012 年 11～12 月に上記の質問紙を大学の講義中に実施した。倫理的配慮として調査の匿名性・非強制性等を説明し, 回答に不備のない協力者を分析の対象とした。

## 結果・考察

### 1. 探索的因子分析・確認的因子分析

暫定項目の 36 項目について探索的因子分析(主因子法, Promax 回転)を行った結果, 固有値 1 以上となる 3 因子解が適切と判断した。各因子 5 項目での構成を目標とし, 因子負荷量と項目内容に配慮し選定した 15 項目を「多次元恋愛関係嫉妬尺度」とした。15 項目を因子分析した Promax 回転後の因子パターンを Table2-1 に示す。回転前の 3 因子の累積寄与率は 59.68%と十分高い値を示した。第 1 因子は恋人が第三者に奪われることを疑う認知的な過敏さの「猜疑的認知」, 第 2 因子は関係への第三者の侵入に対する否定的感情の強さの「排他的感情」, 第 3 因子は関係の裏に第三者の存在を警戒・詮索する度合いの「警戒行動」と命名した。なお項目 3, 4, 7, 14 では天井効果, 床効果がみられたが特に嫉妬の認知・行動的側面は病理性を内包し複数の先行研究で尺度得点が低かったこと(e.g., Elphinston, Feeney, & Noller, 2011)や項目内容・因子負荷量を考慮し削除は行わなかった。また探索的因子分析では因子間に正の相関が見られたので, 3 因子構造を仮定して確認的因子分析を行った。モデルの適合度は GFI=.91, AGFI=.87, CFI=.94, RMSEA=.07 となり, 多次元恋愛関係嫉妬尺度は概ね想定通り 3 因子構造を有するといえる。

Table2-1 多次元恋愛関係嫉妬尺度のPromax回転後の因子パターンおよび確認的因子分析結果（主因子法）（N=234）

No.	項目	F1	F2	F3	$h^2$	CF <sup>a)</sup>	Mean	SD
第1因子 猜疑的認知								
1	誰かにXさんをとられるかもしれないと考えることがある。	.85	-.04	-.07	.66	.81	2.75	1.67
2	Xさんが、自分を置き去りにして誰かのもとへいってしまうのではないかとすることがある。	.82	-.04	.04	.65	.80	2.87	1.68
3	Xさんが誰かに夢中になっているのではないかと思いがちである。	.73	.03	-.05	.53	.72	2.34	1.35
4	自分の知らないうちに、誰かがXさんを誘惑しているのではないかとすることがある。	.64	.01	.02	.43	.67	2.51	1.55
5	Xさんが、誰か他の人に魅力を感じているかもしれないとすることがある。	.61	.06	.05	.45	.67	3.54	1.81
第2因子 排他的感情								
6	Xさんが誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる。	-.08	.92	.02	.78	.87	4.79	1.86
7	誰かがXさんとデートしていたら、嫌な気持ちになる。	-.04	.76	.02	.57	.77	5.30	1.71
8	Xさんが誰かに寄り添って楽しそうにしていたら不機嫌になる。	-.04	.73	-.03	.49	.69	4.63	1.77
9	誰かがXさんに対して恋愛感情を持っていると知ったら、不愉快になる。	.16	.53	-.01	.39	.60	3.62	1.94
10	Xさんが誰かに対してとても愛想よく微笑んでいたら不機嫌になる。	.24	.50	.01	.43	.62	3.16	1.74
第3因子 警戒行動								
11	Xさんに、誰と何をしていたのか、何を話していたのかを聞くことが多い。	-.04	-.03	.74	.51	.69	2.63	1.54
12	Xさんがどこへ行くのか、どこにいるのかを聞くことが多い。	.07	-.03	.69	.49	.71	2.79	1.54
13	Xさんにかかってきた電話が、誰からの着信だったのかを聞くことがある。	-.07	.02	.68	.44	.66	2.93	1.66
14	Xさんに、過去や今の恋愛関係についていろいろと聞くタイプである。	-.03	-.01	.58	.32	.56	2.58	1.66
15	Xさんと仲が良い人たちのことについて、詳しく聞くことが多い。	.12	.07	.54	.40	.62	3.12	1.59
		因子間相関						
		F1	.51	.34				
		F2		.45				

注. a) CF列における値は確認的因子分析における項目の因子負荷量を表す。他の因子への負荷量は0として分析を行った。

## 2. 相関結果による妥当性の検討

各尺度間の相関分析の結果と基礎統計量を Table2-2 に示す。多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度の  $\alpha$  係数は  $\alpha=.78\sim.85$  と高く、内的整合性の観点からの信頼性が示されたといえよう。その他の尺度の  $\alpha$  係数についても  $\alpha=.64\sim.93$  と、十分分析に耐えうる値であったため、分析を続行した。

多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度と Mania 項目との間には  $r=.29\sim.48$  の 0.1%水準で有意な正の相関係数が得られたため多次元恋愛関係嫉妬尺度の併存的妥当性が示されたといえよう。この結果は異なる嫉妬尺度と Mania 項目との関連を検討した篠崎・深澤・越川(1993)がほぼ全ての下位尺度において嫉妬深さと Mania 的恋愛傾向の間に正の関連を見出したことに沿う結果であった。結果から、本研究で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度は全て Mania 的恋愛傾向に共通する部分のある尺度であり、嫉妬に関わる心理的変数を測定していることが確認されたといえる。

多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全てと見捨てられ不安尺度の間には有意な正の相関 ( $r=.18\sim.29$ , 「警戒行動」とは  $p<.01$ , 他は  $p<.001$ ) がみられた。この結果は Pfeiffer & Wong(1989)や White & Mullen(1989)の理論的考察に沿う結果であったといえる。つまり、

嫉妬傾向は全般的に特定の重要な対人関係への執着を表し、その対人関係から孤立してしまうことを過剰に恐れ、回避しようとする傾向であることが本研究の結果からも示唆されたといえよう。この結果は多次元恋愛関係嫉妬尺度の全ての下位尺度の構成概念的妥当性を支持する結果であったといえる。

また多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全てと再確認傾向尺度との間にも有意な正の相関( $r=.26\sim.31$ ,  $p<.001$ )がみられた。既述の通り、勝谷(2007)によれば「自分は愛されているのか、自分は価値ある存在なのか」について、すでに確認をしたかどうかにかかわらず、他者に対して過度に、しつこく確認を求める比較的安定した傾向のことをさす。嫉妬深い個人はパートナーが自らに対してどれほど価値を感じているか、心移りを起こしていないかが重要な問題となるとされる。「見捨てられ不安」が嫉妬傾向全般と関連したように、嫉妬深い個人ほど、パートナーから見捨てられたくないがために、重要な他者となるパートナーに確認をせずにはいられない傾向があることが本研究の結果から示唆された。この結果も多次元恋愛関係嫉妬尺度の構成概念的妥当性を支持する結果であった。

親密性尺度は「猜疑的認知」とのみ、有意な負の相関( $r=-.21$ ,  $p<.01$ )を示したが、他の下位尺度とはほぼ無関連であった。これは裏切りを疑うほど対人関係で親密さを感じられないことを示唆し、疑い深い嫉妬の認知的側面が関係満足感やパートナーへの好意と負の関係にあるとするような数々の先行研究の知見(Pfeiffer & Wong, 1989; Elphinston et al., 2011)と整合する部分がある。自我発達の観点から考えれば、いつまでも自分のパートナーに裏切られる可能性を考え続ける個人は、親密性の課題を達成しきれておらず、第VI段階の危機である孤立の状態にも陥りかねないのかもしれない。一方で「排他的感情」や「警戒行動」と「親密性」が無関連であったことに関しては、先述の通り特に嫉妬の情動的側面は Pfeiffer & Wong(1989)で指摘されるように、幾分正当で正常な嫉妬の側面とも考えられていることや、「警戒行動」の項目内容にはさほど病的に強い嫉妬に動機づけられた行動を含んでいないことが関連している可能性が考えられる。この結果は特に「猜疑的認知」の構成概念的妥当性を支持する方向の結果であったといえる。

Table2-2 多次元恋愛関係嫉妬尺度と他変数の相関(N=234, ManiaのみN=223)

	2.	3.	4.	5.	6.	7.	<i>a</i>	Mean	SD
1.猜疑的認知	.48 ***	.29 ***	.29 ***	.22 ***	.28 ***	-.21 **	.85	2.80	1.28
2.排他的感情		.38 ***	.48 ***	.29 ***	.26 ***	.01	.84	4.30	1.40
3.警戒行動			.41 ***	.18 **	.31 ***	.02	.78	2.81	1.17
4.Mania				.27 ***	.32 ***	-.05	.93	2.44	1.03
5.見捨てられ不安					.58 ***	-.06	.64	3.36	0.58
6.再確認傾向						-.21 **	.87	4.44	0.93
7.親密性							.84	5.28	0.79

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 3. 本研究の意義と今後の課題

以上の結果から、本研究で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度の内的整合性の観点からの信頼性は十分に高く、併存的妥当性や構成概念的妥当性を支持する結果も多角的に確認できた。今回作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度は今後の研究において、青年の重要な葛藤となりうる嫉妬を多次元で捉えるための足がかりとなるだろう。

一方、今後の研究では一般成人への適用に関する検討も必要であろう。また本研究では妥当性の検討で得られた相関係数は有意ではあったが十分に高いものは少なかったため、今回用いた変数と嫉妬傾向との関連について今後より詳細に関係を明らかにしていくことも課題といえる。そして今回作成した尺度の項目表現が下位尺度ごとに幾分類似しており、回答結果に影響が考えられる点は本研究の限界点として留意する必要があるだろう。さらに、今回作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度は、Pfeiffer & Wong(1989)と同様に、厳密には「個人が（特性や恋人との関係を踏まえて）特定の恋愛関係の中でどのように嫉妬を経験しているか」を測定する尺度であるため、個人の特性としての嫉妬傾向のみを抽出して測定することを目的とした尺度ではないことに留意する必要があるだろう。また、「排他的感情」に含まれている項目内容はPfeiffer & Wong(1989)やBuunk(1997)の形式を継承する形で、各項目で異なる程度の浮気に関する刺激を項目内容として使用しており、総合得点が高いほど「排他的感情」が高い、と捉えることができるとした。しかしこの項目ごとに刺激の程度が異なることへの是非、刺激のバランス等に関しては本研究では検討しきれてい

ない。そして、多次元恋愛関係嫉妬尺度では、嫉妬のライバルが同性であるとは限らない(White & Mullen, 1989)可能性に留意して「誰かに X さんをとられるかもしれないと考えることがある。」等、ライバルの性別を特定するような記述を意図的に省いている。この点に関しては、尺度の回答者が想像で補って回答する必要があるためにやや投影的な表現となってしまうっており、回答のしづらさや回答の偏りを生んでいる可能性も考えられる。尺度の精緻化という意味では、これらの尺度項目の表現の妥当性について、今後の研究で繰り返し試行をする必要性も考えられるだろう。その他、得点分布に歪みが考えられる項目の再検討や再検査信頼性の確認により尺度を洗練していくことも今後の課題といえよう。

#### 4. 本章のまとめと次章への導入

Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)に代表されるような嫉妬を多次元的に捉える観点は海外において支配的ともいえるが、そういった観点に基づいて個人の嫉妬深さを多次元的に測定可能な日本語の尺度は存在していなかった。この問題意識に基づき、本章では青年が恋愛関係においてどのように嫉妬を経験するかを測定する尺度として、Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)などの先行研究の問題点に配慮したうえで「多次元恋愛関係嫉妬尺度」を作成した。多次元恋愛関係嫉妬尺度は3つの下位尺度から構成され、「猜疑的認知」は親密な関係への第三者の侵入やパートナーの心変わりを疑う病理的・妄想的過敏さ、「排他的感情」は「猜疑的認知」より幾分正当とされる、嫉妬喚起状況への否定的感情の強さ、「警戒行動」は関係の裏の第三者を警戒・詮索する度合いを示す。

分析の結果、探索的因子分析・確認的因子分析によって15項目が抽出され、下位尺度の $\alpha$ 係数は全て十分な値を示したため、多次元恋愛関係嫉妬尺度は十分な内的整合性の観点からの信頼性を持つことが確認された。尺度の妥当性の検討として、多次元恋愛関係嫉妬尺度の全下位尺度が松井他(1990)の LETS-2 の Mania 項目群と正の関連を示したため、尺度の併存的妥当性が確認された。また同様に多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全てが益子(2008)の見捨てられ不安尺度、勝谷(2004)の再確認傾向尺度と有意な正の関連を示したこと、「猜疑的認知」のみが谷・原田(2011)の親密性尺度と有意な負の相関が得られたため、尺度の構成概念的妥当性が確認されたといえよう。そのため、今後の研究においてはこの多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いることで、青年の恋愛関係における嫉妬に対する更なる知見を提供することができるだろう。

次の第 3 章では、嫉妬研究の黎明期から嫉妬との関連が指摘されるものの知見の不一致がみられ、しかし嫉妬がいかなるものかを考える上で重要と思われる自尊感情と嫉妬深さの関係について、本章で作成した尺度を用いて知見の整理を試みることにする。

## 引用文献

- Bevan, L. J. & Lannutti. J. P. (2002). The Experience and Expression of Romantic Jealousy in Same-Sex and Opposite-Sex Romantic Relationships. *Communication Research Reports, 19*, 258-268.
- Bringle, R. G. (1991). Psychosocial Aspects of Jealousy: A Transactional Model In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. New York: The Guilford Press.
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences, 23*, 997-1006.
- Elphinston, A. R., Feeney, A. J., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: Validation of the multidimensional jealousy scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology, 63*, 243-251.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (小此木 啓吾 (訳編) (1983). 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 深澤 道子・篠崎 信之・越川 房子 (1992). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (I) 大学生の恋愛嫉妬について 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 650.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment-style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships, 5*, 273-291.
- Guerrero, L. K., Eloy, S. V., Jorgensen, P. F., & Andersen, P. A. (1993). Hers or his? Sex differences in the communication of jealousy in relationships. In P. Kalbfleisch (Ed.), *Interpersonal communication in evolving interpersonal relationships*. (pp.109-132). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 勝谷 紀子 (2004). 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 13, 11-20.

- 勝谷 紀子 (2007). 重要他者に対する再確認傾向は抑うつ, 不安, 自尊心を変化させるのか パーソナリティ研究, 15, 161-170.
- 岸田 秀 (2008). 嫉妬とは何か 児童心理—特集: 子どもの嫉妬心— 金子書房, 2-9.
- Knobloch, K. L., Solomon, H. D., & Cruz, G. M. (2001). The role of relationship development and attachment in the experience of romantic jealousy. *Personal Relationships, 8*, 205-224.
- 越川 房子・篠崎 信之・深澤 道子 (1993). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (IV) —多面的嫉妬尺度作成に関して— 第 57 回 日本心理学会大会発表論文集, 672.
- Lee, J. A. (1974). The style of loving. *Psychology Today*, 1974, October, 43-51.
- Lutz, W. J. & Hock, E. (2002). Parental emotions following the birth of the first child: Gender differences in depressive symptoms. *American Journal of Orthopsychiatry, 72*, 415-421.
- 益子 洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と, 性格特性, 見捨てられ不安, 承認欲求との関連 カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 松井 豊・木賊 知美・立澤 晴美・大久保 宏美・大前 晴美・岡村 美樹・米田 佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 宮崎 音弥 (1963). 愛と憎しみ—その心理と病理— 岩波新書
- 西平 直喜 (1965). 友情・恋愛 依田 新 (編) 青年の心理② 大日本図書
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships, 6*, 181-196.
- Pines, M. A. (1992) Romantic Jealousy. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology, 16*, 265-273.
- 斎藤富由起・吉森丹衣子・守谷賢二 (2009). 青年期における見捨てられ不安と愛着の関連性 千里金蘭大学紀要 生活科学部・人間社会学部, 6, 35-41.
- 篠崎信之・深澤道子・越川房子 (1993). 嫉妬・羨望に関する基礎的研究 (V) —恋愛尺度による妥当性の検討— 第 57 回日本心理学会大会発表論文集, 673.
- 谷 冬彦・原田 新 (2011). 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5, 1-7.

White, G. L. (1981). A model of romantic jealousy. *Motivation and Emotion*, 5, 295-310.

White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*.

New York: The Guilford Press.

### 第3章 青年の恋愛関係における嫉妬傾向は 自尊感情に規定されるか —自己愛的観点からの検討—

ここでは、嫉妬研究の黎明期から続く自尊感情と嫉妬深さとの関連に関わる知見の不一致について、自己愛という観点を新たに用いることで、両変数の関連についての知見の整理を試みることにする。

## 問題

### 1. 嫉妬傾向と自尊感情を巡る先行研究の整理

自信のない者ほど嫉妬すると言われることがあるが、嫉妬深さは自信のなさの表れなのだろうか。本研究ではこの関連における先行研究の知見の不一致について自己愛的な観点から整理を試みる。

White & Mullen(1989)では、嫉妬とは“親密な関係で現在自分が持っている自尊感情や価値ある関係への喪失や脅威の認知に応じて現れる思考、感情、行動のコンプレックス”(p.9)とされる。嫉妬研究の黎明期では嫉妬喚起場面への不快感情を覚える程度を嫉妬深さとして一次的に嫉妬を捉える研究が多かったが、White & Mullen(1989)や Pfeiffer & Wong(1989)以降、認知・情動・行動の三次元から個人の嫉妬傾向を捉える研究が増加した。嫉妬の三次元の詳細については、Pfeiffer & Wong(1989)や神野(2016)によれば嫉妬の認知的側面はパートナーの裏切りへの認知的な過敏さを、情動的側面は測定されてきたような嫉妬喚起場面で排他的な感情を覚える程度、行動的側面はパートナーを探るような行動、ライバルを意識した行動の程度を表す。このように親密な関係における嫉妬を三次元から捉えることは、一次的に嫉妬を捉える場合に比べ嫉妬という現象についてより包括的に検討を行うことが可能である点で優れていると考えられる(Elphinston, Feeney, & Noller, 2011)ため、本研究においても嫉妬を多次的に捉えることとする。

実証的な嫉妬研究の初期段階では嫉妬深さを規定する個人的要因を検証する研究が多く行われ、なかでも自尊感情が低い者ほど嫉妬深いとする指摘や研究が多くみられる。しかしこの関連は今日まで知見が一貫していないといえる(坪田, 2011)。自尊感情は、「感情的な側面を含んだ自己に対する肯定的な評価」(市村, 2012)と捉えることができ、White & Mullen(1989)の定義に含まれるように嫉妬の重要な要素として捉えられてきた。何人もの研究者が指摘したように親密な関係は個人の自己や自己価値を規定する重要な役割を担っている(Harris & Darby, 2010)。そのため恋愛関係の崩壊は上記の White & Mullen(1989)による嫉妬の定義のように、個人がその関係で得ていた報酬の喪失や、また自尊感情の傷つきにつながりかねない。さらにパートナーに浮気された上で関係が崩壊する場合は Parker, Low, Walker, & Gamm(2005)が指摘するように第三者と自分を比較された上で選ばれず、パートナーから拒絶されるということになるため、浮気による関係の崩壊は個人

の自己評価ないし自尊感情に対して強い脅威となりうると考えられるだろう。ゆえに自信のない者ほど関係に対して良い期待を持たず、嫉妬を喚起する状況を警戒する(Bringle, 1981)とするような多くの先行研究の指摘にも理解ができよう。一方で White & Mullen(1989)等では総合的な肯定的自己評価である自尊感情と一時的な脅威への反応である嫉妬傾向とを関連付けて捉える難しさが指摘されており、理論的な考察においても論議がなされている。

実証的な先行研究で自尊感情（または肯定的な自己評価）と嫉妬傾向（多くは嫉妬の情動的側面）との間に負の関連を示す研究には、Stewart & Beatty(1985), Jaremko & Lindsey(1979), Bringle(1981, 1991), Mathes(1991), Buunk(1995)等がある。また Zeigler-Hill, Britton, Holden, & Besser(2015)では自尊感情と嫉妬深い恋愛の Mania 傾向との間に有意な負の相関が見出されている。一方自尊感情と嫉妬傾向が明確な関係を示さなかった研究もあるため(e.g., Buunk, 1981; Mathes & Severa, 1981; Shettel-Neuber, Bryson, & Young, 1978), 両者の関係は頑健とは考えられないだろう。さらに坪田(1993)では嫉妬傾向と一次元的な自尊感情に関連は見出されず、自尊感情の安定性が低い女性のみ有意傾向で嫉妬深いという結果が得られている。上記の実証的な研究結果から、嫉妬傾向と自尊感情との関連は知見が一貫しておらず、検討の余地があるといえよう。

先行研究にて嫉妬傾向と自尊感情の関連についての知見が一致しない理由として、Rosenberg 自尊感情尺度のように自尊感情を一次元的に捉えることに関する二つの限界点に配慮してこなかったことが考えられる。その第一の限界として考えられるのが、自尊感情尺度で測定される状態の曖昧さに関する限界である。Baumeister, Heatherton, & Tice(1993)や Baumeister, Smart, & Boden(1996)等多くの先行研究から、自尊感情が必ずしも適応的な側面ばかりでなく不適応的な側面さえ持ちうるということが指摘されてきている(森尾・山口, 2007)。さらに高い自尊感情は怒りや攻撃性、自己愛傾向や自律性のなさ等と関連する部分があることも先行研究(e.g., 伊藤・小玉, 2005; Kernis, Grannemann, & Barclay, 1989; 小塩, 2001)より示されている。そのため Kernis(2003)が指摘するように自尊感情を一義的に適応的な指標として捉えることには限界がある可能性が考えられる。中山(2008b)は自尊感情に関する知見の混乱の要因について、自尊感情尺度が肯定的な自己評価を広く捉えており、概念的に指摘される自尊感情の範囲のみならず、自己愛と関連する肯定的自己評価の範囲を含んでいることが予想されると考察している。中山(2008b)によれば、自己愛と関連する肯定的自己評価とは、現実のレベルからさらに高揚された自己評価を指す。本

研究で問題とする嫉妬との関連についても、先行研究では現実的なレベルから高揚された自己評価を持つ個人と現実的レベルに基づいた肯定的自己評価を持つ個人の示す嫉妬傾向が一次元的な自尊感情の測定で混同され知見が混乱した可能性がある。

第二の限界として考えられるのが、一次元的な自尊感情の高低では捉えきれない自己評価の要素に関する限界である。自尊感情に関する知見の限界への取り組みとして、自尊感情の不安定性など(小塩, 2001)の性質・特徴にも着目し、適応的な自尊感情のあり方を検討する研究が行われてきている。中山(2008b)によれば、そういった研究は肯定的な自己評価としての自尊感情と、肯定的自己評価を持つことに含まれる、外的な評価に敏感で影響を受けやすい性質を扱うものであるとされる。恋愛関係に関する研究では自尊感情の高低のみを問題とする研究が多い(Zeigler-Hill et al., 2015)が、Zeigler-Hill et al. (2015)では **Mania** 傾向に対し自尊感情の高さが負の、自尊感情の不安定性が正の影響を示す結果が得られている。また坪田(1993)では自尊感情の高さよりも不安定性が嫉妬傾向や嫉妬行動を左右する方向の結果が得られたため、嫉妬研究でも自尊感情の高さの他に自己評価の不安定性・脆弱性への着目が必要だろう。総合して一次元的な自尊感情の測定の限界点として自己愛的な自己評価の高さとの重複や、自己評価の不安定性・脆弱性を検討できないことが考えられる。

## 2. 自己愛的観点からの検討

そこで本研究では、自己評価の高さや自己評価の不安定性・脆弱性と密接な関係にあり、両側面について検討できると考えられる概念として自己愛に着目する。自己愛は精神分析的立場から人格障害の一つとして提唱されたが、Raskin & Hall(1979)が自己愛人格目録(Narcissistic Personality Inventory, 以降 NPI と略記)を開発して以降、人格障害というより非臨床群に適用可能なパーソナリティ特性として研究が活発になっている。従来の研究では NPI が主に捉えるような誇大的で自己顕示的なパーソナリティが自己愛的人物の特徴とする扱が多かったが、最近では他者評価に過敏で不安定な自己愛人格の特徴も注目されている。Gabbard(1994)では無関心型 (oblivious)と過敏型(hypervigilant)の自己愛が考察されており、無関心で誇大な型の自己愛が他人に無関心で攻撃的、注目の的になっていないといわれず、有能感が高く他の人々によって傷つけられたと感じることに鈍感であること等に特徴づけられるのに対し、過敏な自己愛とされる型の特徴は、自己評価が低く、他の人々の反応に過敏で内向的、自己より他人に注意を向け、自分を傷つけられたという感情を持ちやすいとされ、共通しているのは自己評価を維持するための強い動機づけであ

るとされる。近年ではこれらの特徴は自己愛の「誇大性」「過敏性」等の名称で議論されている。

### 2-1. 自己愛の誇大性

まず自己愛の誇大性と嫉妬傾向との関係について、自尊感情との異同を踏まえた上で検討する。自己愛傾向を測定する尺度として、小塩が邦訳した NPI(1998)やその短縮版 NPI-S(小塩, 1999)では「優越感・有能感」「自己主張性」「注目・賞賛欲求」の3因子構造が得られているが、自己愛の誇大性についてはそのうちの「優越感・有能感」「自己主張性」などで最も代表的に測定されるものと考えられる。この自己愛の誇大性と自尊感情は、自己を価値あるものとして捉え(森尾・山口, 2007), 「肯定的自己評価」(中山, 2008b)であるという点で共通し、実証的な研究でも誇大な自己愛と自尊感情は概ね正の関係にあるとされる(e.g., 小塩, 2001; 岡田, 2011)。一方で NPI や NPI-S に含まれる「注目・賞賛欲求」については必ずしも「優越感・有能感」「自己主張性」と同様の結果を示さず、自尊感情ともほぼ無相関を示していた(小塩, 1998)。したがって NPI や NPI-S に含まれる「注目・賞賛欲求」は「優越感・有能感」や「自己主張性」とは異なる部分があり、誇大的な自己愛の側面と考えるには疑問が残るといえる。さて、自尊感情と自己愛の誇大性の概念的な重複は既述の通り、自尊感情が自己愛的傾向も含む肯定的な自己評価全般を捉えていることに起因する部分があるだろう。両者の相違点としては Baumeister et al. (1996)の自己本位性脅威モデルを紹介した中山(2008b)によれば、自己愛者は自尊感情を高い状態で維持することに動機づけられているとされるため、高揚された自己評価の維持のためにネガティブな情報に対して自我脅威を感じやすくなり、自己評価を回復するための様々な自己調整機能を働かせるとされる。一方で中山(2008b)では現実に根ざした肯定的な自己評価(自尊感情)を持つ者はネガティブな情報を自我脅威として結び付けにくく、ゆえにネガティブな情報にも極端な態度を取りにくいと考察されている。しかし Baumeister et al. (1996)の理論については、中山(2008a)によれば自己愛的自己調整プロセスの中での脅威への評価という点について考察されていないことについて留意する必要がある。すなわち自己愛者は自己に関するネガティブな情報全てに対して自己調整機能を働かせるのではなく、知性や身体的魅力など個人にとって重要な自己の側面に対するネガティブな評価を受けた時ほど、自己評価への脅威となりやすいために結果として自己愛的な自己調整過程が発動されやすいと解釈できる。

また岡田(2011)では自己愛者は支配的な対人方略を採り、周囲からの関係評価を得ること

で自尊感情の維持を図ることがソシオメーター理論の観点から考察されている。この背景には自分では自己評価を保つことが難しいがゆえに他者からの評価を維持しなければならない、自己防衛的・他者依存的な自己評価の脆さがあると考えられる。そのため誇大的な自己愛者は自己評価を高く評定するが、関係評価を揺るがず、恋人からの明確な拒絶には過剰に反応することが考えられる。自己充足的な自己評価を持つ者は、恋人からの拒絶や浮気は重大な損失とはなりえても、自己評価の大きな喪失には直結せず、過剰に嫉妬を示さないだろう。

質問紙法で測定された自己評価が自己防衛的に歪められた回答か否か区別はできないが、自尊感情と自己愛の誇大性との概念的な重複については両者を統制しあうことで詳細な検討が可能となるのではないだろうか。Bushman & Baumeister(1998), 川崎・小玉(2007), 加藤・五十嵐(2016)では自己愛尺度を用いる際、自尊感情を統制して分析を行うことで自己愛と自尊感情の概念的な重複に配慮した形の分析が行われている。本研究でも上記の複数の先行研究と同様に、自尊感情と自己愛の誇大性に関わる変数を一緒に分析に用いて統制しあうことで、先に述べた自己評価の測定に関する第一の限界点として紹介した、「自尊感情」として捉えられる内容の曖昧さに関する限界点に対し一定の配慮ができるものと考えられる。

## 2-2. 自己愛の過敏性

次に自己愛の過敏性は自己愛の誇大性とは独立した形で存在を指摘される、既述の通り他者の反応に過敏な自己愛の側面で、その概念的な共通点から嫉妬傾向との正の関係が予測される。小松(2004)では過敏型の自己愛者の特徴として、他者からの無条件の肯定的な反応を求めており、また自らが無価値であると見抜かれるのではないかと怖れるため、他者からの無関心及び否定的な反応に非常に敏感で、傷つきやすく落ち込みやすいとされる。この特徴から、自己愛の過敏性は自己評価が外的な評価によって変動しやすい不安定さ、脆弱さの一側面と捉えることができるだろう。常に他者評価に敏感で脅威を感じやすい自己愛の過敏性と、恋人の裏切りを過剰に恐れ不快に感じ、何とか対処しようとする嫉妬傾向（特に情動的な嫉妬傾向）には、どちらも対人関係上の自分へのネガティブなフィードバックやその兆候に影響を受けやすいために、そういったフィードバックやその兆候に対し過敏に反応するという点において、概念的な共通性があるといえるだろう。実際に Besser & Priel(2009)では浮気場面への否定的な感情反応に対して過敏な自己愛傾向からの有意な正の影響が確認されていることから、自己愛の過敏性と嫉妬傾向は正の関係にあること

が考えられる。

上記から、まず自己愛の過敏性は嫉妬傾向全般と正の関係にあると考えられる。また自己評価の測定に関する第二の限界点である、一次元的な自尊感情の測定では捉えきれない外的な評価に脆弱で不安定な自己評価の性質については、自己愛の過敏性を考慮に入れることで一定の配慮ができると考えられる。そのため本研究では先述の自尊感情や自己愛の誇大性に加え、自己愛の過敏性についても検討を行うことで、個人の持つ種々の自己評価と嫉妬傾向とがどのように関わるかということについて、より理解を深めることとする。

### 2-3. 自己愛の注目・賞賛欲求

さらに誇大性・過敏性に共通する自己愛者の特徴として、注目や賞賛への欲求がある。実証的な研究に用いられる自己愛尺度には、日本語版の NPI-S(小塩, 1999)における「注目・賞賛欲求」や谷(2004a, 2004b, 2006a)の Narcissistic Personality Scale(以降, NPS と略記)における「注目・賞賛欲求」等、他者からの過剰な賞賛や注目を期待する(小塩, 1999)自己愛的な心の働きを示す下位尺度が存在する。なお、NPI-S に含まれる「注目・賞賛欲求」と NPS に含まれる「注目・賞賛欲求」は項目内容が異なり、厳密には異なる概念が想定されている可能性について留意する必要があるが、どちらも他者から注目や賞賛を求める下位尺度であるという点では共通している。このように他者から注目されたい、賞賛されたいという自己愛的な側面は先行研究では高い自己価値と他者からの評価過敏に関連するとされ(小塩, 1998)、自己愛の誇大性や過敏性を表す他の自己愛の下位尺度と異なる関連を示す結果が見出されている(e.g., 小塩, 2004a ; 谷, 2004b)。谷(2006b)では NPS の下位尺度得点として、「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」「注目・賞賛欲求」「自己愛性抑うつ」「自己愛的憤怒」の 5 つを因子分析にかけた結果として「誇大性」「過敏性」の 2 因子を抽出し、両因子はほぼ無相関であった一方で「注目・賞賛欲求」が両因子に負荷を示したと報告している。また落合(2009)では自己愛の誇大性・過敏性の 2 種類の自己愛の関係について明らかにするため、NPI-S と自己愛的脆弱性尺度(上地・宮下, 2005)、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)、対人不安として石川・佐々木・福井(1992)による Social Avoidance and Distress Scale 日本語版の尺度得点をクラスター分析にかけている。その結果として、自尊感情尺度、NPI-S の「自己主張性」「優越感・有能感」が分類されたクラスター1 と自己愛的脆弱性尺度と対人不安が分類されたクラスター2、さらにクラスター3 には NPI-S の「注目・賞賛欲求」と自己愛的脆弱性尺度の「潜在的特権意識」「承認・賞賛への過敏さ」が同じクラスターとして分類された。これらの結果から、NPI-S や NPS で測

定される「注目・賞賛欲求」はどちらも「誇大性」と「過敏性」の二種の自己愛に共通して存在する可能性が考えられる。

注目・賞賛欲求の高い者は他者の自分自身に対する評価に非常に敏感であり(小塩, 2001), それゆえ恋人に浮気をされることは多大な自己評価の傷つきにつながりやすいと考えられる。そのため注目・賞賛欲求の高い者ほど恋人の浮気やその兆候を過敏に警戒し, また些細な「裏切り」にも反応しやすく, 嫉妬深さを示すだろう。堤(2006)では社会的関係の嫉妬に対し小塩(1998)の NPI-S の各下位尺度を投入する形で重回帰分析を行った結果, NPI-S の「注目・賞賛欲求」が嫉妬傾向に対して有意に正の影響を与えており, 「優越感・有能感」, 「自己主張性」に関しては有意な結果は見出されなかった。そのため, 注目や賞賛を求め自己愛の側面は自己愛の誇大的側面よりも個人の嫉妬傾向により強い正の影響を及ぼすと考えられる。さらに小塩(2001)では NPI-S の下位尺度のうち, 「注目・賞賛欲求」のみが自己像の不安定性に正の影響を与え, 自己像の不安定性が日常的な自尊感情の低さや変動性の高さに影響するという結果が得られている。したがって, 自己愛的な注目・賞賛欲求の高さは必ずしも自己評価に対して適応的ではなく, むしろ自己像の不安定性に寄与するという点で, 自己評価の不安定性に関わる自己愛の側面の一つであると考えられる。

上記の理論的考察から, 本研究では一貫した知見が提供されてこなかった自己評価, 自尊感情と嫉妬傾向の関連の検討に際して, 自己愛の誇大性・過敏性に加え, 自己愛の注目・賞賛欲求的側面も, 自己評価の不安定性・脆弱性への配慮として自己愛の誇大性・過敏性とは独立した形で考慮することとする。

総合して, 本研究では先述の適応的な自己評価の測定に関わる先行研究の第一の限界点として, 自尊感情が測定する状態の曖昧さへの配慮として自己愛の誇大性を考慮し, また第二の限界点として一次元的な自尊感情では検討しきれない自己評価の不安定性・脆弱性の表れとして自己愛の過敏性と自己愛の注目・賞賛欲求をともに考慮することとする。これらの対処により, 自尊感情の測定に関する二つの限界点を自己愛という観点から解決し, 嫉妬傾向との関連について知見の混乱を整理できる可能性が考えられる。自尊感情や自己愛の諸側面が嫉妬傾向をどう規定するか検討することは, 先行研究の知見を整理し直し, 青年の嫉妬について基礎的知見を得られるため意義のあることと考えられる。

### 3. 本研究の目的

本研究の目的は, 自尊感情と嫉妬傾向との関連について, 嫉妬を多次的に捉え, また自己愛という観点をを用いて検討することで混乱した知見を整理し直すことである。本研究

では一般的な価値観としての嫉妬傾向ではなく、幾分現実的な交際関係に基づいた嫉妬傾向を扱うために、Pfeiffer & Wong(1989)に倣い交際経験のある個人を最終的な分析対象者とする。分析手法としては自尊感情や自己愛が多次的に捉えた嫉妬傾向とどう関連するか検討するためまず相関分析を行う。先行研究の結果を総合すると嫉妬傾向全般と自尊感情は無相関～弱い負の相関を示すことが予測され、また自己愛の過敏性や「注目・賞賛欲求」とは正の相関を示すことが予測される。次に多次的に捉える嫉妬傾向のそれぞれに関して、まず統制変数として性別を投入した後、自尊感情、自己愛の誇大性、自己愛の過敏性と注目・賞賛欲求を順に投入する階層的重回帰分析を行うことで、自尊感情が嫉妬傾向に対しどのような影響を示すか検討する。具体的には自尊感情と自己愛の誇大性が重回帰分析に投入された場合、嫉妬傾向に対し自尊感情は負の、誇大性は正の影響を示すと考えられる。また自尊感情、自己愛の誇大性に加えて過敏性に相当する変数が投入された場合、自己愛の過敏性と嫉妬傾向の概念的な類似性があることや、先述の Besser & Priel(2009)の結果などから、恐らくは自己愛の誇大性よりも過敏性に相当する下位尺度の方が強い正の影響を示す可能性が考えられる。最後に自尊感情、自己愛の誇大性、過敏性に加えて注目・賞賛欲求が投入された場合、堤(2006)の結果から誇大性に相当する変数よりも注目・賞賛欲求の方が、嫉妬傾向に対してより強い正の影響を与えることが予測される。しかし一方で注目・賞賛欲求が嫉妬傾向に対して示す影響力は自己愛の過敏性が示す影響力と比べてどのようなものであるかは未知数であるため、本研究ではその点についても探索的に検討を行うものとする。

最後に本研究の理論的な想定は古典的な嫉妬研究の流れを多分に汲むものであるため、上記の関連は古くから嫉妬深さとして捉えられてきた嫉妬の情動的側面にて特に顕著にみられるだろう。

## 方法

### 1. 調査協力者と手続き

近畿地方の18~27歳の大学生244名(男性128名,女性116名,平均年齢19.82歳, $SD=1.12$ )に大学の講義中に質問紙調査を実施し、その場で回収した。そのうち回答に不備がなく、

かつ質問紙中の設問で現在あるいは過去数年以内に恋愛関係を経験していると回答した18~23歳の大学生160名（男性75名，女性85名，平均年齢19.84歳， $SD=1.11$ ）を本研究の分析対象者とした。なお，調査期間は2013年10~11月であった。

## 2. 倫理的配慮

インフォームドコンセントを行い，本研究への協力に同意した者を調査対象者とした。回答の匿名性，回答は自由意志によるものであること，回答の拒否や中断は可能であり，それによる不利益は生じないことを質問紙の表紙に明記した。また調査の実施前には口頭で同様の旨が調査者によって説明された。

## 3. 調査内容

**(1) 多次元恋愛関係嫉妬尺度(神野, 2016)** 青年の嫉妬傾向を測定するために恋愛経験を尋ね，現在恋人同士として交際している人がいる場合現在の恋愛関係について，また過去数年以内に恋愛関係にあった場合その中で最も印象的な恋人との当時の恋愛関係について，恋人の名前をXさんとして項目内容に「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。この尺度は3つの下位尺度(各5項目)から構成され，「猜疑的認知」は「誰かにXさんをとられるかもしれないと考えることがある」など，恋人が第三者に奪われることや恋人の裏切りを疑う認知的な過敏さを表す。次に「排他的感情」は「Xさんが誰かといちゃいちゃしていたら，不機嫌になる」などの親密な関係に第三者が侵入してくることへの否定的感情の強さを表す。最後に「警戒行動」は「Xさんに，誰と何をしていたのか，何を話していたのかを聞くことが多い」などの親密な関係の裏の第三者を警戒・詮索する度合いを表す。

**(2) 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)** Rosenbergによる自尊感情尺度の日本語版を用いた。本研究では他の項目から異質である可能性が指摘され(e.g., 谷, 2001)，除外されること(e.g., 阿部・今野, 2007; 伊藤・小玉, 2005)の多い項目8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除外し，「少なくとも人並みには，価値のある人間である」など全9項目に「1. 当てはまらない」～「5. 当てはまる」の5件法で回答を求めた。

**(3) Narcissistic Personality Scale (NPS) 短縮版(谷, 2006a)** 本研究の目的から，自己愛を誇大性，過敏性，そして注目・賞賛欲求に分けて測定するため，それぞれに特化した因子構造を持つ自己愛尺度として，谷(2006a)によるNPS短縮版を用いた。この尺度は5つの下位尺度(各5項目)からなる。NPS短縮版の下位尺度として，まず誇大性に相当するとされる下位尺度として「私は，周りの人達より，優れた才能を持っていると思う」など，

自分が他者よりも優れているという自己肯定感を表す「有能感・優越感」と「私は、自分の考えをはっきり言う人間だと思う」など、自分の意見をはっきり主張し他者に配慮しない「自己主張性・自己中心性」が存在する。また過敏性に相当するとされる下位尺度として「自分の話を熱心に聞いてくれないと、自信がなくなる」など、些細な失敗をきっかけに落ち込む「自己愛性抑うつ」と「自分の意見を少しでも否定されると、すぐ頭に来る」など、自分が少しでも否定されたときに沸き起こる怒りを表す「自己愛的憤怒」がある。そして両者に関連するとされる「注目・賞賛欲求」は自分が他者から注目されたい、賞賛されたいという期待を表し、「私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある」などの項目から測定される。NPS 短縮版ではこれらの尺度項目について「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答を求めた。

## 結果

### 1. 基礎統計量・相関分析

まず多次元恋愛関係嫉妬尺度、自尊感情尺度、NPS 短縮版をそれぞれ探索的因子分析にかけた結果、先行研究と概ね一致した因子構造が得られた。そのため先行研究と同様に下位尺度得点を算出し、以降の分析に用いることとした。各尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数、平均値と標準偏差、および相関係数を算出したものを Table3-1 に示す。相関分析の結果から、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度と自尊感情尺度とはほぼ無相関であった ( $r = -.11 \sim .04, n.s.$ )。NPS 短縮版について、自己愛の誇大性では「有能感・優越感」が「警戒行動」のみ有意な弱い正の相関を示し ( $r = .16, p < .05$ )、他はほぼ無相関であった。「注目・賞賛欲求」と嫉妬尺度の下位尺度は全て有意な正の相関を示した ( $r = .18 \sim .33, p < .05 \sim .001$ )。過敏性の「自己愛性抑うつ」「自己愛的憤怒」とも嫉妬尺度はほぼ有意な正の相関を示した ( $r = .15 \sim .42, p < .10 \sim .001$ )。

Table3-1 各変数の $\alpha$  係数, 平均値, 標準偏差及び相関行列

	$\alpha$	Mean	SD	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 猜疑的認知	.90	3.23	1.55	.57***	.44***	-.07	.11	-.05	.25**	.19**	.22**
2. 排他的感情	.86	4.75	1.41	-	.38***	-.11	.13	.03	.42***	.33***	.32***
3. 警戒行動	.80	2.96	1.26		-	.04	.16*	.01	.16*	.15 <sup>†</sup>	.18*
4. 自尊感情	.87	3.20	0.74			-	.66***	.35***	-.19*	-.15 <sup>†</sup>	.20**
5. 有能感・優越感(誇大性)	.88	3.75	1.25				-	.41***	.20*	.23**	.46***
6. 自己主張性・自己中心性(誇大性)	.78	3.91	1.14					-	.01	.18*	.35***
7. 自己愛性抑うつ(過敏性)	.77	4.34	1.13						-	.55***	.54***
8. 自己愛的憤怒(過敏性)	.83	3.23	1.16							-	.32***
9. 注目・賞賛欲求	.91	4.57	1.33								-

<sup>†</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

## 2. 階層的重回帰分析

次に、自尊感情と自己愛が嫉妬傾向に及ぼす影響を検討するために、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度を従属変数として、4ステップからなる階層的重回帰分析を実施した。独立変数として、ステップ1では統制変数として「性別」を投入し、ステップ2では「自尊感情」を、ステップ3では「有能感・優越感」と「自己主張性・自己中心性」を、ステップ4では「自己愛性抑うつ」と「自己愛的憤怒」を、最後にステップ5では「注目・賞賛欲求」を順に投入した(Table3-2)。なお、「性別」は男性=1, 女性=0の形式でダミー変数を用いている。さらに、多重共線性の問題に配慮してVariance Inflation Factor(VIF)を算出したところ、VIFは最も高い値が2.61であった。小塩(2004b)によれば一般に $VIF > 10$ であると多重共線性が発生しているとされるため、本研究においては多重共線性の問題は認められないと判断した。

「猜疑的認知」はステップ2からステップ3、ステップ3からステップ4にかけて有意、有意傾向の決定係数の増分が見られた(ステップ3;  $\Delta R^2 = .04$ ,  $p < .05$ , ステップ4;  $\Delta R^2 = .03$ ,  $p < .10$ )。「猜疑的認知」はステップ4まで「性別」が有意または有意傾向となり、男性の得点が高い傾向が示唆された。ステップ3では「自尊感情」( $\beta = -.25$ ,  $p < .05$ ), 「有能感・優

越感」( $\beta = .27, p < .05$ )が有意な偏回帰係数( $\beta$ )を示したが、ステップ 4 では有意でなくなった。ステップ 4 の決定係数は有意となり( $R^2 = .11, p < .01$ )、「性別」と「自己愛性抑うつ」のみが有意傾向の偏回帰係数を示した( $\beta = .15, .18, p < .10$ )。ステップ 5 では決定係数は有意であったが( $R^2 = .12, p < .01$ )、有意な偏回帰係数を示す変数は得られなかった。

「排他的感情」ではステップ 2 からステップ 3、ステップ 3 からステップ 4、ステップ 4 からステップ 5 にかけて、有意な決定係数の増分が見られた(ステップ 3;  $\Delta R^2 = .08, p < .01$ , ステップ 4;  $\Delta R^2 = .11, p < .001$ , ステップ 5;  $\Delta R^2 = .02, p < .05$ )。ステップ 3 では「自尊感情」( $\beta = -.35, p < .001$ )、「有能感・優越感」( $\beta = .37, p < .001$ )が有意な偏回帰係数( $\beta$ )を示した。さらにステップ 4 では「自尊感情」「有能感・優越感」の示す偏回帰係数はともに有意でなくなり、代わって「自己愛性抑うつ」( $\beta = .31, p < .001$ )が有意な偏回帰係数を示した。最後にステップ 5 では「自己愛性抑うつ」は有意傾向となり( $\beta = .20, p < .10$ )、新たに投入された「注目・賞賛欲求」が有意となった( $\beta = .21, p < .05$ )。ステップ 5 の回帰式の決定係数は有意となり( $R^2 = .22, p < .001$ )、他の嫉妬尺度の下位尺度と比べ最も高い決定係数を示した。

「警戒行動」は決定係数、決定係数の増分はほぼ全てのステップで有意とならなかった。偏回帰係数が唯一有意となったのがステップ 3 での「有能感・優越感」( $\beta = .25, p < .05$ )であり、決定係数の増分が有意傾向となっていた( $\Delta R^2 = .03, p < .10$ )。

Table3-2 多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

投入の順序	変数	猜疑的認知				排他的感情				警戒行動			
		R <sup>2</sup>	ΔR <sup>2</sup>	B	β	R <sup>2</sup>	ΔR <sup>2</sup>	B	β	R <sup>2</sup>	ΔR <sup>2</sup>	B	β
ステップ1	性別	.03 *		.53	.17 *	.00		-.05	-.02	.01		.19	.08
ステップ2	性別	.04 *	.01	.59	.19 *	.01	.01	.02	.01	.01	.00	.18	.07
	自尊感情			-.17	-.11			-.16	-.11			.03	.02
ステップ3	性別	.08 *	.04 *	.46	.15 †	.09 **	.08 **	-.08	-.06	.04	.03 †	.04	.03
	自尊感情			-.52	-.25 *			-.49	-.35 ***			-.15	-.12
	有能感・優越感(誇大性)			.34	.27 *			.52	.37 ***			.32	.25 *
	自己主張性・自己中心性(誇大性)			-.13	-.10			.01	.01			-.06	-.05
ステップ4	性別	.11 **	.03 †	.47	.15 †	.20 ***	.11 ***	-.17	-.06	.05	.01	.07	.03
	自尊感情			-.28	-.14			-.19	-.10			-.06	-.03
	有能感・優越感(誇大性)			.19	.15			.14	.12			.17	.17
	自己主張性・自己中心性(誇大性)			-.13	-.09			-.01	.00			-.07	-.06
	自己愛性抑うつ(過敏性)			.25	.18 †			.39	.31 ***			.09	.08
	自己愛的憤怒(過敏性)			.03	.02			.15	.13			.08	.07
ステップ5	性別	.12 **	.01	.40	.13	.22 ***	.02 *	-.27	-.10	.06	.01	.02	.01
	自尊感情			-.30	-.14			-.21	-.11			-.07	-.04
	有能感・優越感(誇大性)			.16	.13			.09	.08			.15	.15
	自己主張性・自己中心性(誇大性)			-.17	-.13			-.07	-.06			-.10	-.09
	自己愛性抑うつ(過敏性)			.15	.11			.24	.20 †			.02	.02
	自己愛的憤怒(過敏性)			.04	.03			.18	.14			.09	.08
	注目・賞賛欲求			.15	.13			.23	.21 *			.10	.11

†p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001.

## 考察

### 1. 相関分析の結果について

本研究の目的は、自尊感情と多次元的な嫉妬傾向との関連について、自己愛という観点から先行研究の知見を整理し直すことであった。相関分析の結果から、自尊感情は多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全般と直線的な関係にないことが示された。これは坪田(1993)を支持する方向の結果であるが、この結果は本研究の問題部分で述べたように、適応的な自己評価と自己愛の誇大的な側面とが混同して捉えられていることによる影響を受けている可能性もあるといえよう。そのためやはり適応的な自己評価としての自尊感情と嫉妬傾向との関連を検討する際には、誇大的な自己愛やさらに自己評価の不安定性や脆弱性としての過敏的な自己愛、注目・賞賛欲求を含めて検討することで、個人の自己評価と嫉妬傾向との関係をより詳細に検討することができる可能性が考えられる。NPS 短縮版と多次元

恋愛関係嫉妬尺度との関連では、「注目・賞賛欲求」と自己愛の過敏性の「自己愛的憤怒」「自己愛性抑うつ」と嫉妬傾向の下位尺度全てがほぼ有意な正の関係を示し、その関連は特に「排他的感情」にて顕著であった。この結果は Besser & Priel(2009)と一致し、嫉妬喚起場面で過剰に不快に感じる傾向は青年では自己愛的に過敏で賞賛を欲する不安定な自己評価の側面と関与しているといえる。

## 2. 階層的重回帰分析の結果について

まず「自尊感情」と「自己愛の誇大性」を同時に投入した結果について考察する。「性別」と「自尊感情」に加えて「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」を投入したステップ3では、「自尊感情」は「警戒行動」を除いて「猜疑的認知」、「排他的感情」に有意な負の偏回帰係数を示し、また「有能感・優越感」は嫉妬尺度全般に対して有意な正の偏回帰係数を示した。このことから「自尊感情」については「有能感・優越感」が同程度である場合には、より自尊感情が高く自分に対する肯定的な評価を持てているほど、恋人の裏切りを疑ったりせず、嫉妬喚起場面に対して過剰に不快感を催さない傾向が示唆された。また「有能感・優越感」は、「自尊感情」が同程度である場合、より有能感・優越感が高いほど恋人の裏切りを疑い、嫉妬喚起場面に対して過剰に排他的になり、また関係の裏の第三者を警戒する行動に出やすいことが結果から示された。自己愛者が高い関係評価の維持に動機づけられている(岡田, 2011) ののであれば恋人の裏切りはその関係評価の重大な損失につながる。ゆえに自尊感情による肯定的自己評価が同程度の場合には自己愛的に高揚された自己評価の維持を求める個人ほど親密な関係の維持に執着する傾向が見出されるのかもしれない。このステップ3の結果は既述の嫉妬傾向と自尊感情との関連における先行研究の知見の混乱に結論をもたらすものである。先行研究では自尊感情を一次的に測定した研究が多く、中山(2008b)が指摘する純粋な自尊感情の高い者と、現実から高揚した自己評価を持つ者が「自尊感情の高い者」として混同され、結果として知見が矛盾した可能性がある。本研究ではこの点に配慮して自尊感情から自己愛の誇大性に相当する変数としてNPS短縮版の「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」も同時に投入した場合のみ、Bringle(1981)等先行研究で想定された通り、肯定的な自己評価が嫉妬を抑制する要因となりうる事が確認された。一方で誇大に高揚された自己評価としての「有能感・優越感」はむしろ嫉妬傾向を促進するという結果を示した。ゆえに一次的に測定された自尊感情は相関分析の結果から単体では個人の嫉妬傾向を規定するとはいえないが、自己愛の誇大性の「有能感・優越感」に関わる要素が同程度の場合、統制された場合においては、確か

に自尊感情が高いほど個人は嫉妬しない傾向にある、と考えることができるのかもしれない。上記の結果から、より自己充足的な自己評価の獲得、ないしは他者に対する過度な優越感からの脱却が嫉妬傾向の抑制につながる可能性が考えられる。

次に、「排他的感情」のステップ4及びステップ5の結果について考察する。ステップ4とステップ5ではどちらも有意な決定係数の増加量が確認されたため、自己愛の過敏性も、「注目・賞賛欲求」も、情動的な嫉妬傾向を説明するにあたり有用な概念である可能性が示されたといえよう。まず、ステップ4においてはステップ3にて有意な偏回帰係数を示していた「自尊感情」「有能感・優越感」はともに有意ではなくなり、「自己愛性抑うつ」のみが有意となった。そのため、ステップ3、ステップ4の結果から情動的な嫉妬傾向は単純な自己評価としての自尊感情や「有能感・優越感」が同時に投入される場合、それらに規定されうる部分が示された一方で、不安定な自己評価の表れとしての自己愛の過敏性も考慮に入れると、ネガティブな評価に敏感に反応を示し、落ち込んでしまう傾向にこそより強く規定されることが示されたといえよう。さらにステップ5では「注目・賞賛欲求」が「自己愛性抑うつ」とほぼ同程度の影響力を示していた。このように「注目・賞賛欲求」を後から投入したステップ5においても、「自己愛性抑うつ」から「排他的感情」への偏回帰係数の値は減少しても有意であり続けたため、「自己愛性抑うつ」「注目・賞賛欲求」はそれぞれ同程度に嫉妬傾向の「排他的感情」を規定しうるものと考えられる。そのため自尊感情と自己愛の誇大性に加え過敏性や注目・賞賛欲求までも考慮に入れると、恋人が「誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる」など「排他的感情」を覚える傾向は、外的な要因によって簡単に崩れるような脆い自己評価を持ち、しかしそれでも外的なフィードバックを求めることで自己評価を高めようとするような個人ほど高いことが結果から考察される。ゆえに青年が現実的な自己評価を身につけることで自己愛の高まりが発達的に解決されるならば、自己評価を映す鏡としての他者が不要になるにつれ感情的な嫉妬深さについては緩和される部分があるのかもしれない。

嫉妬傾向全般においてステップ3では有意な影響力を示した「有能感・優越感」や「猜疑的認知」「排他的感情」にて有意な影響力を示した「自尊感情」はステップ4以降では有意でなくなっていた。その理由としては、こういった自己評価の高低に潜在的に含まれる、外的な要因によって自己評価が簡単に崩れてしまうような不安定で脆い自己評価に関わる要素が新たに投入された「自己愛性抑うつ」や「自己愛的憤怒」によって統制されてしまったためと考えられる。そのため、先述したように「自尊感情」は確かに「有能感・

優越感」など、高揚された自己評価のみと同時に投入された場合に限って概ね嫉妬傾向を規定しうる可能性が示されたが、単純な「自己評価」は自己愛的な脆さ・不安定さを示すような傾向をも考慮した場合には嫉妬傾向全般に対して相対的に大きな規定因とはなりえないといえる。言い換えると、個人の嫉妬傾向（特に「排他的感情」に関わる情動的な嫉妬傾向）はそもそも重要な関係が大きく揺らぐ際に喚起されるものであるために、自己評価の脆さや他者からの評価を求める傾向に根差す部分が相対的にやや強く見受けられる。そして自己評価の低さによって嫉妬深さが規定されるという知見は、本研究の結果から部分的に支持される結果が見出されたものの、こういった過敏的な自己愛によって自己評価が揺らぐ個人ほど嫉妬しやすい方向にある、と捉えた方がより正確であろう。

最後に「自尊感情」と NPS 短縮版の下位尺度全てが投入されたステップ 5 にて、有意な偏回帰係数が得られなかった「猜疑的認知」「警戒行動」について考察する。「猜疑的認知」に関してはステップ 5 の決定係数は有意となったが有意な偏回帰係数を示す変数が得られない形であったため、嫉妬の情動的側面に比べ認知的側面は自己愛の過敏性や「注目・賞賛欲求」に強くは規定されないことが示された。「猜疑的認知」は日常的な心理として相手の浮気・裏切りを疑ってしまう心性であるため、自らへのネガティブなフィードバックとして自分を裏切ったと思われる際の過敏な反応を捉える「排他的感情」とは違い、「排他的感情」に比べ「自己愛性抑うつ」や「注目・賞賛欲求」とは概念的な共通性も薄かったことが結果から解釈できる。この関連については「警戒行動」に対して自己愛の過敏性や「注目・賞賛欲求」からの影響力がほぼ示されなかった結果についても同様の解釈をすることができるだろう。また「猜疑的認知」ではステップ 4 までは「性別」が有意、あるいは有意傾向の正の偏回帰係数を示していた。そのため他の下位尺度とは異なり男性は女性に比べ相手の裏切りを過剰に疑いやすい傾向にある可能性が考えられ、この点は追検討が必要であろう。「警戒行動」では全ステップで決定係数が有意とならず偏回帰係数もほぼ有意ならなかった。嫉妬の行動的側面は認知・情動的側面から進んで恋人に探りを入れる程度が焦点であるため、自己評価に関する尺度は関連が薄く規定要因とならなかった可能性が考えられる。

### 3. 本研究の意義と今後の課題

本研究では、嫉妬研究の最初期から関連が指摘され続け、しかし一貫した知見が提供されてこなかった嫉妬傾向と自尊感情との関連について自己愛という観点から整理し直すことが目的であった。本研究の結果から、一次元的に測定される自尊感情は、単独では特に

嫉妬傾向全般と直線的關係を示さないが、自尊感情と重複する部分がある自己愛の誇大性（特に「有能感・優越感」）を統制することで、嫉妬傾向に対して Bringle(1981)等の予測に沿った負の影響を示すことが明らかとなった。つまり、より肯定的な自己評価を持っていること自体は確かに多くの先行研究の指摘通り、より嫉妬しないことにつながりうる。しかしそれは比較に基づいた自己愛的な有能感・優越感というよりも自己受容的な自己評価に限ったものである可能性が考えられ、他者からの優越による高揚された自己評価の高さはむしろ嫉妬傾向を促進しうるものであった。そのため、個人の嫉妬傾向が自尊感情などの自己評価に規定されうるかという本研究の問いに対する答えとして、一次元的な自尊感情で測定される内容を現実に即した自己充足的な要素と自己愛的に歪められた自己高揚的な要素に弁別して捉えると、前者は嫉妬傾向を抑制し、後者は促進する方向で規定しうるものである、ということが本研究では見出されたといえる。このように先行研究を整理した上で、肯定的な自己評価を一次元的かつ曖昧に測定していたことが知見の混乱を招いた可能性を実証的に見出した点に本研究の意義がある。

また一方で、自己愛の過敏性や注目・賞賛欲求も加えより深く検討を行うと、自尊感情や誇大性の「有能感・優越感」の影響は弱まり、過敏性の特に「自己愛性抑うつ」や「注目・賞賛欲求」が情動的な嫉妬傾向を規定する要因になることが示された。この結果から古典的な先行研究で指摘されていたような自己評価の単純な高低よりも、自己評価が脆弱で些細な出来事に対しても落ち込みやすく、それでも自己愛的に他者から賞賛を求めずにはいられないような脆く不安定な自己評価傾向こそが、嫉妬深さとして長く捉えられてきた嫉妬の情動的側面を幾分規定しうることを見出した点も本研究の意義といえよう。

本研究の限界点としては第一に調査協力者の少なさが挙げられる。そのため統計的な有意性の確保が難しく、全般的に十分な説得力を以て検討することが困難であった可能性が考えられる。第二には、今回扱った変数が嫉妬傾向を規定する程度に限界点がある。本研究では嫉妬尺度の各下位尺度に対し他の変数が示す決定係数は値が低く、特に認知的・行動的側面を強く規定する要因には触れられていない。嫉妬の情動的側面に対する説明率からも、本研究で用いた自尊感情と自己愛のみでは、さほど大きな影響力が示されていない。そのため、本研究は先行研究の知見の混乱に対する整理という点では明確な結論をもたらしているため、意義のある研究と考えられる。しかし嫉妬を各種の自己評価からどの程度説明しうるかという観点で研究を振り返ると、さほど強い結果が得られていないとも考えられる点について、留意するべきであろう。嫉妬傾向に関しては、個人的要因による影響

は関係の質によって調整されることも考えられる(Guerrero & Andersen, 1998)ため、今後は関係性の要因等も踏まえ、総合的に検討することが必要であろう。

#### 4. 本章のまとめと次章への導入

本章では、嫉妬研究の黎明期に個人の嫉妬深さ・嫉妬傾向との関連が示唆されていた自尊感情との関連における知見の不一致について、自尊感情と自己愛の重複という観点を用いることで知見の整理を行うことを試みた。

相関分析の結果では、自尊感情は多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度とほぼ無関連を示したが、階層的重回帰分析では、性別、自尊感情の次に自己愛の誇大性変数を投入した Step3 にて、多次元恋愛関係嫉妬尺度の全下位尺度に対して自己愛の「有能感・優越感」が正の影響を示し、また「猜疑的認知」「排他的感情」に対して「自尊感情」が負の影響を示した。この結果は先行研究の論争に対し、明確な一つの結論をもたらしたと考えられる。つまり「自信がなければ嫉妬する」といった古典的な嫉妬に関する言説は確かに正しい部分があったが、自尊感情や肯定的な自己評価に内包されうる誇大な自己愛的側面を統制できていなかったために知見が一貫していなかった、という可能性があるだろう。

さらに一次元性の自尊感情では測定しきれない自己評価の不安定な側面に関わる自己愛の過敏性や「注目・賞賛欲求」を階層的重回帰分析に投入したところ、上記の「有能感・優越感」や自尊感情が嫉妬傾向の「猜疑的認知」「排他的感情」に対して示していた標準偏回帰係数の値が低減された。そのため、自尊感情や自己愛の誇大性の「有能感・優越感」が嫉妬傾向に対して影響力を持ちうるのはあくまでそれらのみを同時に考慮した場合であり、他者からのネガティブなフィードバックや注目を過剰に気にしてしまう不安定な自己評価傾向を同時に考慮に入れると、どちらかといえば後者がより（特に情動的な）嫉妬傾向に対して影響力を示しやすいことにも留意する必要があるだろう。

次の第 4 章では、本章と同様に嫉妬傾向とさほど一貫した知見が示されていない関係満足感について、その関連を関係効力感・ネガティブな反すうを考慮に入れることで検討を行っていくことで、多次元的に捉えられる嫉妬傾向がそれぞれどのような特徴を有するかを明らかにしていく。

## 引用文献

- Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. (1993). When ego threats lead to self-regulation failure: negative consequences of high self-esteem. *Journal of personality and social psychology, 64*, 141.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: the dark side of high self-esteem. *Psychological review, 103*, 5-33.
- Besser, A., & Priel, B. (2009). Emotional responses to a romantic partner's imaginary rejection: The roles of attachment anxiety, covert narcissism, and self-evaluation. *Journal of personality, 77*, 287-325.
- Bingle, R. G. (1981). Conceptualizing jealousy as a disposition. *Alternative Lifestyles, 4*, 274-290.
- Bingle, R. G. (1991). Psychosocial aspects of jealousy: a transactional model. In P. Salovey (Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. (pp.103-131). New York: The Guilford Press.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of personality and social psychology, 75*, 219-229.
- Buunk, B. (1981). Jealousy in sexually open marriages. *Alternative Lifestyles, 4*, 357-372.
- Buunk, B. (1995). Sex, self-esteem, dependency and extradyadic sexual experience as related to jealousy responses. *Journal of Social and Personal Relationships, 12*, 147-153.
- Elphinston, A. R., Feeney, A. J., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: Validation of the multidimensional jealousy scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology, 63*, 243-251.
- Gabbard, G. O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition. Washington D. C. American Psychiatric Press. (館 哲朗 (監訳) (1997). 精

精神力動的精神医学③臨床篇：Ⅱ軸障害岩崎学術出版)

- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998). Jealousy Experience and Expression in Romantic Relationships. In Andersen, P. A. & Guerrero, L. K. (Eds.), *Handbook of communication and emotion: Research, theory, applications, and contexts* (pp.155-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Harris, C. R., & Darby, R. S. (2010). Jealousy in adulthood. In Hart. L. Sand Legerstee. M. (Eds.), *Handbook of Jealousy-Theory, Research, and Multidisciplinary Approaches*. (pp.547-571). West Suzzex, UK. Blackwell Publishing.
- 市村 美帆(2012). 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究, 20, 204-216.
- 石川 利江・佐々木 和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み行動療法研究, 18, 10-17.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 日本教育心理学研究, 53, 74-85.
- Jaremko, M. E., & Lindsey, R. (1979). Stress-coping abilities of individuals high and low in jealousy. *Psychological Reports*, 1644, 547-553.
- 神野 雄 (2016). 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 25, 86-88.
- 加藤 仁・五十嵐 祐 (2016). 自己愛傾向と自尊心がゲームへの没入傾向に及ぼす影響 心理学研究, 87, 1-11.
- 川崎 直樹・小玉 正博 (2007). 親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向 パーソナリティ研究, 15, 301-312.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of personality and social psychology*, 56, 1013-1022.
- 小松 貴弘 (2004). 過敏で傷つきやすいタイプの状態像 上地 雄一郎・宮下 一博 (編著) もろい青少年の心 (pp.55-61) 北大路書房
- Mathes, E. W. (1991). A cognitive theory of jealousy. In P. Salovey (Eds.), *The psychology*

- of jealousy and envy.* (pp.52-78). New York: The Guilford Press.
- Mathes, E. W., & Severa, N. (1981). Jealousy, romantic love, and liking: Theoretical considerations and preliminary scale development. *Psychological Reports, 49*, 23-31.
- 森尾 博昭・山口 勸 (2007). 自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性—ナルシシズムとの関連から— 実験社会心理学研究, *46*, 120-132.
- 中山 留美子 (2008a). 自己愛的自己調整プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育心理学研究, *56*, 127-141.
- 中山 留美子 (2008b). 肯定的自己評価の諸側面—自尊感情と自己愛に関する研究の概観から— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, *55*, 105-125.
- 落合 萌子(2009). 2 種類の自己愛と自尊心, 対人不安との関係 パーソナリティ研究, *18*, 57-60.
- 岡田 涼 (2011). 自己愛と自尊感情:メタ分析と 3つの理論からの解釈 小塩 真司・川崎 直樹 (編著) 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係— (pp.134-150) 金子書房
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情,友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, *46*, 280-290.
- 小塩 真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, *8*, 1-11.
- 小塩 真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, *10*, 35-44.
- 小塩 真司 (2004a). 自己愛傾向と大学生活不安の関連 中部大学人文学部研究論集, *12*, 67-78.
- 小塩 真司 (2004b). SPSS と Amos による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで— 東京図書株式会社
- Parker, J. G., Low, C. M., Walker, A. R., & Gamm, B. K. (2005). Friendship jealousy in young adolescents: individual differences and links to sex, self-esteem, aggression, and social adjustment. *Developmental psychology, 41*, 235-250.
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships, 6*, 181-196.
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological*

- reports*, 45, 590.
- Shettel-Neuber, J., Bryson, J. B., & Young, L. E. (1978). Physical attractiveness of the "other person" and jealousy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 612-615.
- Stewart, R. A., & Beatty, M. J. (1985). Jealousy and self-esteem. *Perceptual and motor skills*, 60, 153-154.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦 (2004a). 新たなる自己愛人格尺度の作成(1)—因子構造と対人恐怖的心性との弁別妥当性の確認—日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 69.
- 谷 冬彦 (2004b). 新たなる自己愛人格尺度の作成(2)—自我同一性と自尊心との関連から—日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 52.
- 谷 冬彦(2006a).自己愛人格尺度(NPS)短縮版の作成 日本教育心理学会第 48 回総会論文集, 409.
- 谷 冬彦 (2006b). 自己愛人格と自己愛的甘えに関する研究 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 22.
- 坪田 雄二(1993). 自尊感情のレベルおよび安定性と嫉妬感情の関連性 日本社会心理学会第 34 回大会発表論文集, 228-229.
- 坪田 雄二(2011).妬みの生起における予期の役割 対人社会心理学研究, 11, 101-108.
- 堤 雅雄 (2006). 嫉妬と自己愛 : 自己愛欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学) , 39, 39-43.
- White, G. L., & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Zeigler-Hill, V., Britton, M., Holden, C. J., & Besser, A. (2015). How will I love you? Self-esteem instability moderates the association between self-esteem level and romantic love styles. *Self and Identity*, 14, 118-134.

## 第4章 嫉妬と関係満足感・関係効力感の関連

ここでは、先行研究にて知見が一貫しない部分のある嫉妬傾向と関係満足感の関連について、関係効力感とネガティブな反すうを考慮することで、より詳細な検討を行い、考察することとする。

## 問題と目的

### 1. 嫉妬と関係満足感

嫉妬はたいてい親密な関係における否定的な関係の状態や結末と結びつけて考えられがちで(Elphinston, Feeney, Noller, Connor, & Fitzgerald, 2013), 嫉妬は病理的なもの・社会的に望ましくなく, 経験されない方がよいものとして扱われることが多い(Guerrero & Andersen, 1998)。しかし嫉妬は全く経験しないべきものであるかといえば, Buss(2000)や Pines(1992), Guerrero, Eloy, Jorgensen, & Andersen(1993)などによれば, 嫉妬は関係の質や関係維持の問題にも影響を及ぼし, 過ぎた嫉妬は関係を破壊し, 幾分控えめな嫉妬は関係への気遣いや価値を示すことにもなる, とされる。さて, 嫉妬を良くないものとして扱う風潮は前の章での自尊感情との関連でも指摘され続けてきたことであり, また個人が関係をどのように評価しているか, 関係に満足しているか, という文脈でも嫉妬は否定的な状態をもたらす要因として指摘されることが多かった。特に Pfeiffer & Wong(1989)が仮定した嫉妬の認知的側面, あるいはそれに類するような疑い深い嫉妬の側面は Pfeiffer & Wong(1989)や Bringle(1991), Attridge(2013)その他さまざまな研究で病理的な嫉妬の側面と繰り返し指摘がなされている。このように嫉妬傾向, 特にその認知的側面が他の下位尺度と比較した時に個人の関係に持つ評価とどのように関わるかを新しく作成した嫉妬尺度によって検討することは, 尺度の更なる有用性や嫉妬の各側面の持つ特徴について知見を得るにあたり意義のあることであると考えられる。本章においては, 「嫉妬者は関係をどのように評価するか?」という点について基礎的な知見を提供する研究を行うこととする。

上記で述べている通り, 嫉妬との関連についてよく議論がなされている変数として, 関係満足感 *relationship/relational satisfaction* が挙げられるが, 嫉妬全般と関係満足感との関係についての知見は一貫しているとは言い難い。関係満足感は海外の先行研究において嫉妬と負の関係にあるとされる(e.g., Guerrero & Eloy, 1992; Guerrero & Andersen, 1998; Attridge, 2013)ことが多く, Guerrero & Eloy(1992)において, 関係満足感は Pfeiffer & Wong(1989)による MJS の認知・情動・行動全ての下位尺度と有意な負の相関係数を示していた。一方で嫉妬を詳細に捉えた際に, 全ての構成要素が関係への不満足と関わらない可能性も先行研究の結果から考えられる部分がある。例えば Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)の研究では, 嫉妬の認知的側面に概念的に類似している

(Elphinston et al., 2013)anxious jealousy が関係満足感と有意な負の関連を示したのに対し、emotional jealousy と概念的に類似した(Elphinston et al., 2013)reactive jealousy が関係満足感と有意な正の関連を、また関係内で探るような行動を概念的に含む(Elphinston et al., 2013)possessive jealousy は個人が自分で評定する関係満足感とは無関連であった。さらに Guerrero & Afifi(1999)が見出したように、恋愛関係を維持しようとする個人は幾分、嫉妬に関わる相手を探るような行動を取りやすいとされ、嫉妬の情動的・行動的側面については必ずしも関係に対する不満足と関わらない可能性も考えられる。このように嫉妬の認知的側面はある程度一貫して関係に対する不満足感と正の関連が指摘されているが、一方で嫉妬の情動的・行動的側面については一貫した知見がもたらされているわけではない。

この関係満足感と嫉妬全般の関連について知見が一貫しない理由としては、そもそも両者の関連についての理論的説明を曖昧にされたままであり、嫉妬の持つどのような特徴が関係への不満足感と関わるか、精査する必要があると考えられる。両者の関連についてよく見られる説明は過剰に恋人の裏切りを疑う傾向や些細な出来事にも嫉妬しやすい傾向は自身と相手に対して大きなストレスとなり、関係の質を悪化させる、といった類のものである。しかし、このプロセスには説明としてまだ不足があるようにも捉えられる。それでは嫉妬深い個人は何故関係に不満を感じやすいと考えられるのだろうか。

その一つの説明として、嫉妬の中でもおおむね一貫して関係への満足感との関わりが指摘されている嫉妬の認知的側面に着目することが必要だろう。Pfeiffer & Wong(1989)や Elphinston, Feeney, & Noller(2011)によれば、嫉妬の認知的側面は、相手が自分と具体的あるいは想像上のライバルとを比較し、ライバルのもとに行ってしまうのではないかと疑ってしまう傾向である。また Downey & Feldman(1996)は拒絶感受性の高い個人ほど、パートナーの些細な行動を過度にネガティブに解釈しやすく、結果的に自分とパートナー双方の関係満足感を低下させるとしている。そのため相手の裏切りを疑いやすい個人は、それだけ相手との関係が些細な出来事によっても破綻しかねないことを考えている、ないしは自分には些細な出来事が起こった場合でさえ、相手を繋ぎ止めておくだけの魅力がない、繋ぎ止めることができるだろうという自信を持つことができない傾向にある可能性が考えられる。疑い深い個人はまず「何かあれば相手と上手くやっけていけないかもしれない」というネガティブな観念に陥りやすく、またその観念から抜け出せないことによって関係への不満足という状態に陥るのではないだろうか。

本研究では嫉妬と関係満足感との関連を精査するにあたり、この「相手と上手くやっけて

いけるかもしれない」「相手と上手くやっていけないかもしれない」という観念に関わる変数として「関係効力感」を扱うこととする。「関係効力感」はMurray & Holmes(1997)によって提唱され、特定の関係への誇大した効力感・統制可能であるという感覚を示すとされる。Murray, Holmes, & Griffin(1996)によれば、例え不完全な部分のあるパートナーでも、そのパートナーとの関係においてより理想化 idealization し、ポジティブな期待を抱く傾向があることで、個人のみならずそのパートナーまでもが適応的な恩恵を受けられるとされる。このパートナーとの関係に対してポジティブな幻想を持つことのできる傾向と認知的な嫉妬の側面は正逆の性質を持つと考えられる。そのため特に認知的な嫉妬については関係満足感との関連より、「関係効力感」との関連がより強いことが理論的に予測される。この点について明らかにすることで、嫉妬深い個人が何故低い関係満足感を持ちやすいとされるかというメカニズムについての知見を得ることができるだろう。

## 2. 嫉妬と反すうと関係満足感

先行研究において嫉妬と関係満足感との関連を検討する際に同時に用いられることのある変数として、あるいは嫉妬と密接な関連が指摘される変数として、個人の反すう傾向がある。特定の物事について長く繰り返し考えることである反すうは抑うつとの関連が指摘されており(Martin & Tesser, 1989)、個人が特定の目的について諦めることができず、目的達成のための手段を模索しても入手できない状態に陥ると、学習性無力感につながり、抑うつ状態に陥る(Martin & Tesser, 1989)とされる。上記の嫉妬の認知的側面と関係満足感との関連についても、疑い深い嫉妬者が関係に不満足である状態とはすなわち、反すうされたネガティブな思考によってもたらされる学習性無力感に関わるネガティブな状態であるという可能性を考えると、より理解が及びやすいだろう。

Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)によれば、疑い深い嫉妬傾向を持つ個人は自分のパートナーの裏切りの光景を反すうして想像し、そして不安や疑念、不信などを経験するとされる。そのため、そもそも関係について何度も想いを巡らせてしまう傾向は嫉妬傾向全般、特に嫉妬の認知的側面と密接な関連にある(Elphinston, et al., 2011)と考えられる。嫉妬傾向や嫉妬の表出と関係満足感との関連を検討した Carson & Cupach(2000)や Elphinston et al.(2013)において、それらの変数の間に位置する心理的変数として恋愛関係に関してあれこれと考えを巡らせてしまう反すうが注目されている。反すうと嫉妬の認知的な側面についてはどちらもネガティブな思考に焦点化しており、そして関係に関する恐怖から生起するものとして共通することが指摘されている(Elphinston et al., 2013)。Elphinston et

al.(2013)では嫉妬の認知的側面は関係満足感に対し、直接的な負の効果と反すうを介した間接的な負の効果を示し、また嫉妬の行動的側面は関係満足感に対し直接的な正の効果と反すうを介した間接的な負の効果を示していた。なお、後者の行動的側面のもたらす正の直接効果については、Elphinston et al.(2013)では想定外の結果であるように記載されている。Elphinston et al.(2013)では疑い深さは関係への満足感を反すうを通して低減させるが、相手を探るような行動は、程度にもよるが反すうに関わらない部分では Buss(2000)が示すように関係への価値を示す行動となり得るため、関係の満足感を促進させうるのではないかと考察されている。上記を踏まえると、個人の反すう傾向は嫉妬傾向と重複する部分がありながらも、関係満足感を独自に左右しうる要因でもあることが考えられる。そのため、本研究ではこういったネガティブな事柄を反すうするような傾向は個人の嫉妬傾向とも関わり、関係満足感を左右するものとして考慮した分析を行うこととする。

なお、Elphinston et al.(2013)などの先行研究では「反すう」傾向はあくまで恋愛関係そのものやパートナーの心変わりを常に心配してしまう等の恋愛関係に特化したものを扱っているが、本研究ではより全般的にネガティブな出来事に関する反すうを行いやすい傾向としての「ネガティブな反すう」傾向を考慮することとする。伊藤・上里(2001)によればネガティブな反すう傾向の高い個人はネガティブな出来事に焦点化し、時に抑うつ状態にもつながりうる傾向であるとされる。恋愛関係に特化して反すうをしてしまう傾向および相手をむやみに疑って嫉妬してしまう傾向は、既述のように「ネガティブな物事を反すうして考えてしまう」共通点があることから、このようなネガティブな反すう傾向に影響を受ける部分があると考えられる。先行研究の知見の整理から、相手への疑いを繰り返してしまう個人は恋愛関係に対して不満足感を抱きやすいと考えられるが、この関連は認知的な嫉妬深さや恋愛関係に関して反すうする傾向よりも、むしろ根源的には個人の特性的なネガティブな反すう傾向による部分がある可能性も考えられるだろう。このようにネガティブな反すう傾向を考慮に入れて、個人の示す嫉妬傾向がどの程度関係満足感・関係効力感に寄与するかを検討することには、関係満足感と嫉妬との関連を検討する上で有用だろう。そのため、本研究においては個人の反すう傾向を捉えるにあたり、特に個人がネガティブな出来事を反すうして続ける傾向(伊藤・上里, 2001)である「ネガティブな反すう」傾向を検討に用いることとする。恋愛関係に特化した反すうではないが、「ネガティブな反すう」傾向を考慮することで、個人の関係への評価が嫉妬傾向やネガティブな反すう傾向のいずれによって左右されうるか、より詳細に検討することが可能となるだろう。

上記を総合して、嫉妬傾向全般については関係満足感とどのような関係にあるのか、先行研究ではまだ一貫した知見が提供されていないと考えられる。しかしその中で嫉妬の認知的側面とされるパートナーに対する疑い深さは関係満足感と比較的一貫して負の関連があるとされるため、本研究でも同様の傾向が見出されるだろう。しかし一方でこのように嫉妬者が関係に対してどのように評価しているのかを検討することは、嫉妬研究の基礎的な知見を収集する本論文の目的上、避けて通れない課題であり、また意義のあることであると考えられる。さらに本研究においては関係満足感と嫉妬傾向との関連を検討する際、「ネガティブな反すう」傾向も考慮に入れ、さらに「関係効力感」と嫉妬傾向との関連を検討することで、これらの変数の関連について、より詳細に捉えることを目的とする。

## 方法

### 1. 調査協力者

現在恋人がいると回答した 18~25 歳の兵庫県内の大学生 88 名 (男性 26 名, 女性 62 名, 平均年齢 19.61 歳,  $SD=1.10$ ) を分析対象とした。なお, 回答の際には現在の交際相手との交際期間の記入を求めた。交際期間の平均は 11.07 か月 ( $SD=15.43$ ) であった。

### 2. 測定尺度

#### (1) 多次元恋愛関係嫉妬尺度

Pfeiffer & Wong(1989)の MJS や Buunk(1997)などを参考に, 神野(2016)が作成した。恋人が第三者に奪われることを疑う認知的な過敏さの「猜疑的認知」( $\alpha=.87$ ), 関係への第三者の侵入に対する否定的感情の強さの「排他的感情」( $\alpha=.70$ ), 関係の裏に第三者の存在を警戒・詮索する度合いの「警戒行動」( $\alpha=.83$ )の 3 つの各 5 項目ずつの下位尺度からなる。「全く当てはまらない」~「非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。

#### (2) 関係満足感尺度

金政・大坊(2003)などを参考に独自に作成した尺度で, 3 項目からなる。「関係満足感」は主観的な関係での満足感(例: 私は X さんとの関係に満足している)で,  $\alpha$  係数は  $\alpha=.83$  であった。「全く当てはまらない」~「非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。

#### (3) 関係効力感尺度

Murray & Holmes(1997)により作成された尺度を浅野(2009)が邦訳し、その信頼性・妥当性を確認した次元性の尺度で、全 9 項目からなる。邦訳版の形式に則り、「当てはまらない」～「当てはまる」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど回答者の親密な異性との関係に対する効力感が高いことを示す(例:お互いに協力して、2 人にとって望ましい理想の関係を築くことができる)。本研究での  $\alpha$  係数は  $\alpha=.86$  であった。

#### (4) ネガティブな反すう尺度

伊藤・上里(2001)が作成した 6 件法の尺度で、嫌なことを繰り返し考えてしまう特性である「ネガティブな反すう傾向」( $\alpha=.88$ )、ネガティブな反すうを自分ではコントロールできない特性である「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」( $\alpha=.84$ )の 2 下位尺度から構成される尺度である。

### 3. 調査時期および手続き

2014 年 10 月～12 月に上記の尺度項目からなる質問紙を大学の講義時間中に配布・実施した。倫理的配慮として調査の匿名性、回答の非強制性、回答に困難を感じた場合に中断できることを説明した上で、回答に不備のない協力者を分析対象とした。

## 結果

### 1. 主成分分析と記述統計量

まず本研究において用いた関係満足感尺度は先行研究を参考して独自に作成したため、関係満足感尺度全 3 項目について、主成分分析を行った。結果、第 1 主成分から第 3 主成分までの寄与率は、順に 74.18%、14.65%、11.17%であり、固有値は 2.23、0.44、0.34 となった。寄与率、固有値ともに第 1 主成分から第 2 主成分にかけて大きな落ち込みが見られたため、これは関係満足感尺度が明らかに次元性構造を示す値であった。 $\alpha$  係数も  $\alpha=.83$  であったため、内的整合性の観点からの信頼性は高いと判断して、3 項目の平均得点を算出して以降の分析に用いることにした。本研究に用いた各変数について、記述統計量を算出したものを Table4-1 に示す。

Table4-1. 各変数の記述統計量(N=88)

	猜疑的認知	排他的感情	警戒行動	反すう	統制不可能性	関係満足感	関係効力感
平均	3.22	4.79	3.50	3.74	3.58	5.11	3.75
標準偏差	1.32	1.02	1.37	1.37	1.12	1.33	0.66
最小値	1.00	1.80	1.00	1.00	1.00	2.67	2.00
最大値	6.40	7.00	7.00	6.00	6.00	7.00	5.00

## 2. 相関分析

次に多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度，ネガティブな反すう尺度の各下位尺度，関係満足感，関係効力感の相関係数を算出した(Table4-2)。その結果，多次元恋愛関係嫉妬尺度とネガティブな反すう尺度，関係満足感尺度，関係効力感尺度との相関係数は，「猜疑的認知」は「ネガティブな反すう」と  $r=.31(p<.01)$ の有意な正の相関，「ネガティブな反すうの統制不可能性」とは  $r=.19(p<.10)$ と有意傾向の正の相関を示し，関係満足感とは  $r=-.14(n.s.)$ と有意な相関を示さず，関係効力感とは  $r=-.31(p<.01)$ と有意な負の相関を示した。「排他的感情」は「ネガティブな反すう」と  $r=.21(p<.10)$ と有意傾向の正の相関を示したが，「ネガティブな反すうの統制不可能性」とは  $r=.11(n.s.)$ ，「関係満足感」とも  $r=.11(n.s.)$ と有意な関連を示さず，「関係効力感」とは  $r=-.20(p<.10)$ と有意傾向ではあるが負の関連を示した。「警戒行動」は「ネガティブな反すう」と  $r=.19(p<.10)$ と有意傾向の負の関連を示したのみで，「ネガティブな反すうの統制不可能性」「関係満足感」「関係効力感」とは全て有意な関連を示さなかった  $r=-.05\sim.08(n.s.)$ 。また，ネガティブな反すう尺度の各下位尺度と「関係満足感」「関係効力感」との関連については，「ネガティブな反すう」は「関係満足感」と  $r=-.23(p<.05)$ ，「関係効力感」と  $r=-.21(p<.10)$ とほぼ同程度ではあるがそれぞれ有意な，あるいは有意傾向の負の関連を示した。一方で「ネガティブな反すうの統制不可能性」は「関係満足感」とは  $r=-.15(n.s.)$ で有意な関連を示さなかったが，「関係効力感」とは  $r=-.36(p<.001)$ と有意な負の関連を示した。

Table4-2. 各変数間の相関係数(N=88)

	I	II	III	IV	V	VI	VII
I 猜疑的認知	-	.40***	.31**	.31**	.19 <sup>†</sup>	-.14	-.31**
II 排他的感情		-	.39***	.21 <sup>†</sup>	.11	.11	-.20 <sup>†</sup>
III 警戒行動			-	.19 <sup>†</sup>	.08	.05	-.05
IV 反すう				-	.52***	-.23*	-.21 <sup>†</sup>
V 統制不可能性					-	-.15	-.36***
VI 関係満足感						-	.55***
VII 関係効力感							-

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### 3. 重回帰分析

次に、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度とネガティブな反すう尺度の各下位尺度が関係満足感、関係効力感に対しどのように影響を及ぼしうるか検討するため、強制投入法による重回帰分析を行った結果を Table4-3 に示す。その結果、まず「関係満足感」に対しては本研究で用いた多次元恋愛関係嫉妬尺度とネガティブな反すう尺度の下位尺度では「排他的感情」のみが  $\beta = .20 (p < .10)$  の有意傾向で正の標準偏回帰係数を示したのみで、他は有意な標準偏回帰係数を示さない結果となった。調整済み決定係数は  $R^2 = .05 (n.s.)$  で、今回用いた変数では関係満足感にほぼ寄与しない可能性が考えられた。一方「関係効力感」に対しては「猜疑的認知」が  $\beta = -.25 (p < .05)$  の負の標準偏回帰係数を示し、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が  $\beta = -.34 (p < .01)$  の負の標準偏回帰係数を示した。調整済み決定係数は  $R^2 = .16 (p < .01)$  となり、係数は低いながらも有意となったため、今回用いた変数の一部は「関係効力感」に寄与するものであったことが考えられる。

Table4-3. 関係満足感・効力感を従属変数とした  
重回帰分析結果(強制投入法)

	関係満足感	関係効力感
猜疑的認知	-.17	-.25 *
排他的感情	.20 †	-.11
警戒行動	.06	.09
反すう	-.20	.09
統制不可能性	-.04	-.34 **
調整済みR <sup>2</sup>	.05	.16 **

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

## 考察

### 1. 嫉妬傾向とネガティブな反すうの関連

本研究においては嫉妬傾向全般と「関係満足感」との関連について、「関係効力感」や「ネガティブな反すう」傾向などを考慮することで本研究なりの知見を見出すことを大きな目的としていた。

まず嫉妬傾向とネガティブな反すう傾向との関連について、相関分析の結果から考察する。先述したように、先行研究では反すうは『パートナーのことをいつも考えてしまう』など、親密な関係に特化した関係変数として捉えられることが多かった(e.g., Carson & Cupach, 2000; Elphinston, et al., 2013)。今回は「ネガティブな反すう」「ネガティブな反すうの統制不可能性」という特性から捉えたが、この2つの変数も、特にネガティブな出来事を繰り返し考えてしまう傾向である「ネガティブな反すう」は嫉妬傾向全般、特に認知的側面である「猜疑的認知」と正の関係にあることが示された。先述の通り嫉妬の認知的側面に含まれる疑い深さはパートナーとの関係における特に浮気にまつわるネガティブな結末、状態が起きる可能性について繰り返し考えてしまう傾向であり(Pfeiffer & Wong, 1989)、この傾向は親密な関係に特化した反すうのみならず「ネガティブな反すう」ともネガティブな過去や可能性を繰り返し考えるという点で通底する部分があったと考えられる。一方先行研究では嫉妬との関連がほぼ言及されていない「ネガティブな反すうの統制不可能性」について、嫉妬傾向は「猜疑的認知」において  $r = .19(p < .10)$  と有意傾向の正の関連し

か示さなかったため、親密な関係に対してネガティブなことが頭に浮かんで切り替えられない、という傾向は「猜疑的認知」に含まれるのみで、「排他的感情」「警戒行動」などの傾向はこういった侵入的思考や感情の切り替えの問題とは関わりが薄い変数であることが考えられた。

## 2. 嫉妬傾向、ネガティブな反すう傾向と「関係満足感」との関連

次に「関係満足感」「関係効力感」と他変数の関連について、相関分析と重回帰分析の結果から考察する。相関分析の結果で示された通り、「関係満足感」では多次元恋愛関係嫉妬尺度のどの下位尺度とも有意な関連は示されなかった。そのため例えば Guerrero & Eloy(1992)など、嫉妬傾向全般と関係満足感が負の関連を示すとするような先行研究や、Elphinston et al.(2013)など、嫉妬の認知的側面のみが「関係満足感」と関連を示す、とするような先行研究とも違う結果が本研究では示されたといえる。この違いについては、それぞれの研究で用いられている尺度、特に背景に明確な理論を持ちにくい関係満足感尺度等が研究によって統一されていないことがまず考えられる。また国籍、年齢層等によって、調査協力者の属性が異なることや関係流動性の認識の違いも要因として考えられるだろう。また、本研究においては調査協力者数の人数が少ない問題があり、統計的な有意性の確保が困難であった可能性も考えられるといえよう。「関係満足感」との関連では「ネガティブな反すう」のみが有意な負の関連を示していたため、特性としてネガティブな出来事を反すうして考えやすい傾向があると恋愛関係においても同様に頭の中でストレスが繰り返し経験されるような状態となり、結果として関係に関してもネガティブな状態に陥りやすいことが考えられる。一概に嫉妬深いからといって関係に不満足な状態に陥るわけではなく、全般的にネガティブな出来事を反すうしやすい傾向がある方が関係への不満足には結びつきやすい可能性が示されたといえよう。

「関係満足感」について、重回帰分析の結果を参照すると、Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)が示したように、嫉妬の反応的で情動的な側面である「排他的感情」のみが有意傾向ではあるが正の標準偏回帰係数を示した。嫉妬の情動的側面はパートナーの疑わしい行いへの嫌悪感情などを包含し、パートナーへの愛情や好意などとも関連が指摘される(e.g., Pfeiffer & Wong, 1989; Attridge, 2013)ため、嫉妬の幾分正常で正当な側面とも捉えられる(Attridge, 2013)。重回帰分析においては他の下位尺度が統制されることによってその正常な側面が強調され、結果的に有意傾向ながらも「関係満足感」への正の影響を示したと考えられる。Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)や Buss(2000)によれば、嫉

妬はもちろん関係の質に対してネガティブに働くと考えられるが、部分的にはポジティブな関係の現象であるともされる。その理由は嫉妬を示すことはそれだけその関係を守る価値があるということの証左であり(Barelds & Barelds-Dijkstra, 2007)、同時に嫉妬を示すことはその関係が危機に陥っていることを火災報知器のように知らせることができるからである(Buss, 2000)とされる。彼らがこの文脈で指す「嫉妬」はいずれも正当にパートナーに抗議するだけの証拠が揃っている場合の関係修復行動や怒りに類する「嫉妬」と考えられ、根も葉もない疑念に苛まれるような形の「嫉妬」ではないことが考えられる。そのため、この結果は Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)や Buss(2000)などの知見を一部支持する方向の結果であるといえよう。

### 3. 嫉妬傾向, ネガティブな反すう傾向と「関係効力感」

相関分析・重回帰分析の結果から、「関係効力感」と他変数の関連においては上述の「関係満足感」との関連に比べると幾分明確な関連も散見された。先述したようにもともと嫉妬の認知的な側面は Pfeiffer & Wong(1989)や Elphinston et al.(2011)や Attridge(2013)が指摘したように幾分他の下位概念に比べ妄想的な要素を帯びており、関係に対するネガティブな想像を繰り返す傾向と考えられていた。この関係に対するネガティブな想像を繰り返す傾向は「もしも自分がパートナーに裏切られたらパートナーを繋ぎ止めておくことができないかもしれない」という架空の浮気場面に対する自己効力感のなさに密接に関わっており、関係に不満足を感じやすい傾向につながる可能性が考えられる。結果で相関分析においても重回帰分析においても「猜疑的認知」と「関係効力感」の関連の方が幾分強かったことから、この理論的な想定についてはある程度支持されたといえよう。その他の変数については、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が最も「関係効力感」と強く負の関連を示し、また重回帰分析においても影響力を示していた。そのため、「関係満足感」とは違い、「関係効力感」では妄想的に裏切られるかもしれない、捨てられるかもしれない、という考えにとらわれやすく、そこから考えを切り替えることのできない侵入的思考に対する脆弱性が抑制要因となる可能性が示唆された。浮気場面に縛られない「ネガティブな反すう」は単相関では「関係効力感」と有意傾向ながらも負の関連を示したのに対し、重回帰分析においてはほぼ無関連ながらも正の標準偏回帰係数を示していた。この点については、概念的に通底する部分のある「猜疑的認知」と、もともと同じネガティブな反すう傾向の下位尺度である「反すうの統制不可能性」を同時に投入した結果、「ネガティブな反すう」が「関係効力感」に対して独自に関連する要素が薄まってしまった結果であると考え

られる。また「関係満足感」での結果ではほぼ無関連か、重回帰分析においてのみむしろ正の関連を示した「排他的感情」は「関係効力感」との関連においては無関連か、どちらかといえば負の関連を示しており、対照的な結果を示していたといえる。「排他的感情」など関係の危機に対して感情的になるような傾向が、Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)が指摘する通り幾分正当な関係への執着を示すような傾向であることを考えると、「関係満足感」「関係効力感」で得られた結果を総合して、大切な関係が危機に陥った時に、どうかなるだろうという根拠のない自信を持つことができないからこそ感情を露わにし、相手に抗議するという特徴を持つ心理的傾向であることが解釈できる。そういった意味では関係への不安を持つ中でも関係の維持や自身の幸福のために個人に行動を起こさせる、適応的な心の動きとしての働きを持つ可能性がこれらの結果からも考えられるといえるだろう。なお、嫉妬の行動的側面とされる「警戒行動」については「関係満足感」「関係効力感」ともほぼ明確な関連を示さなかった。Carson & Cupach(2000)では嫉妬を詮索するような行動で表現する場合は反すうにつながるとされ、また Elphinston et al.(2013)では反すうを統制した詮索行動はむしろ関係の満足感を高める結果が得られていたが、今回はそのどちらの結果も支持しない結果となっていた。「警戒行動」に関しては他の尺度とも明確な関連を示しにくいこと、Elphinston et al.(2013)の結果については理論的に立てられた仮説には含まれていない内容であったことを踏まえ、今後の研究において反すうや関係満足感、その他の変数とどのように関わるかを検討することで、これらの行動の持つ意味について慎重に検討したい。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究においては、従来から関連が検討されていながらも、一貫した知見が提供されてこなかった嫉妬傾向全般と関係満足感との関連について詳細に検討することを目的としていた。Guerrero & Eloy(1992)や Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)では嫉妬の認知的側面についてはおおむね一貫して関係満足感と負の関連を示していたため、疑い深い個人が関係に不満になりがちなのは、パートナーの些細な行動を裏切りの予兆と考えてしまいがちで、関係に対する一種の学習性無力感にも似た状態に陥りがちであり、結果として関係に不満な状態になるのではないかと考えられた。そのためそういった無力感とは正逆の「関係効力感」およびネガティブな事柄を繰り返し考え続けてしまう「ネガティブな反すう」傾向を考慮することで、嫉妬傾向と関係満足感が負の関係にあるとするプロセスを解明することを計画した。そこで新しく作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度を用い、また「関

係満足感」よりも嫉妬の認知的側面と密な関係にあると考えられる「関係効力感」や嫉妬の認知的側面と共通する部分のある概念として「ネガティブな反すう」傾向を考慮に入れ、詳細な関連について検討した。その結果、新しく作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度は全般的に「関係満足感」とほぼ明確な関連が示されなかったため、先行研究にさえなかった知見を投じることとなったともいえる。一方で重回帰分析においては有意傾向ながらも「排他的感情」が正の標準偏回帰係数を示したことから、嫉妬傾向全般が「関係満足感」と負の関係にあるとする Guerrero & Eloy(1992)などの先行研究ではなく、嫉妬にも部分的には関係に対して適応的に働く側面もあるとするような Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)や Buss(2000)などを幾分支持するような結果が得られた。更に理論的な整理から「関係効力感」との関連においては想定通りの結果が得られ、「猜疑的認知」など嫉妬の疑い深い側面は「関係満足感」に比べ「関係効力感」とより強い関連を示した。なお重回帰分析において「ネガティブな反すう」傾向は「関係効力感」とはさほど関わらず、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が独自に有意な負の影響を及ぼしていた。そのため、個人の「関係効力感」は嫉妬の「猜疑的認知」の側面と「ネガティブな反すうの統制不可能性」の2つの要因によって低減されることが示されたといえよう。まとめると、先行研究においてそのメカニズムがさほど詳細に語られてこなかった「関係満足感」と疑う嫉妬の負の関連にまつわる言説の一部は「関係満足感」と密接に関わる「関係効力感」が慢性的にパートナーを疑う状態によって低減させられている部分に由来する可能性が実証的に示されたといえる。

本研究では「関係満足感」「関係効力感」など、現在の関係に直接的に関わる変数を扱うため、現在恋愛関係にある大学生のみを調査協力者・分析対象としたため、人数の確保が難しく、結果的に分析結果の統計的有意性が危うい部分が散見される。また、「関係満足感」の測定には、概念的に背景となる理論に乏しいこともあり、今回は先行研究を参照した上での独自の尺度の使用という形になっていたことが結果に影響を及ぼした可能性も存在する。今後の研究においては、様々な関係の質を問うような尺度と嫉妬傾向との関連を調べることで、今回の「関係満足感」と嫉妬傾向の特に認知的な側面とがどのような関連にあるのか、多角的に検討することで、より日本における嫉妬傾向に関する基礎的知見を見出ししていくことが可能となると考えられる。

## 5. 本章のまとめと次章への導入

本章では、個人の親密な関係への満足感、関係満足感と嫉妬傾向との関連についても知見がさほど一貫していないことについて、関係効力感やネガティブな反すう傾向を考慮することで検討を行うことを目的とした。先行研究の知見の整理から、疑い深い嫉妬傾向を持つ個人が恋愛関係で不満足を覚えるのは、継続した疑いの念によって、関係に対して効力感を持ってなくなっているためではないかと考察したためである。

結果的に「関係満足感」と多次元恋愛関係嫉妬尺度の全ての下位尺度は相関分析では有意な関連が得られなかったが、「猜疑的認知」では「関係効力感」との有意な負の相関が示され、強制投入法による重回帰分析においても同様の結果が得られた。そのため、「関係満足感」との関連が想定以上に弱かったものの、嫉妬深さはまず関係に対する効力感と関わり、間接的に関係への不満足感につながりうるというプロセスを支持する方向の結果が実証的に確認できたといえる。重回帰分析においては「ネガティブな反すう」傾向は「関係効力感」に対してはさほど影響を示さず、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が有意な負の標準偏回帰係数を示していたため、関係に対する効力感は「猜疑的認知」「ネガティブな反すうの統制不可能性」の2つの要因によって低減されることが示された。

本章まではあくまで個人が嫉妬をどのように認識するかという *jealousy experience* に重きを置いた研究を行ってきたが、本来嫉妬研究は *jealousy experience* のみならず *jealousy expression*, つまりどのような個人が嫉妬をどのように表出するかについても検討を行うことが必要とされるだろう。Andersen, Eloy, Guerrero, & Spitzberg(1995)でも嫉妬に対する行動的な反応のうち、上手く腹を割って否定的な情動を表出した際にも関係満足感が高まることが見出されていたことから、関係の中で嫉妬をどのように表出するかということも関係満足感をどのように高めるかといった問題とも関わることが考えられる。次章以降では *jealousy expression* にも焦点を当てて、より広い嫉妬の研究を行っていくこととする。

## 引用文献

Andersen, P. A., Eloy, S. V., Guerrero, L. K., & Spitzberg, B. H. (1995). Romantic Jealousy and Relational Satisfaction: A Look at the Impact of Jealousy Experience

- and Expression. *Communication Reports*, 8, 77-85.
- Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good (Reactive) and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open*, 3, 1-17. doi:10.1177/2158244013476054
- Barelds. D.P.H. & Barelds-Dijkstra.P. (2007). Relations between different types of jealousy and self and partner perceptions of relationship quality. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 14, 176-188.
- Bringle, R.G. (1991). Psychosocial Aspects of Jealousy: A Transactional Model In P. Salovey(Eds.), *The psychology of jealousy and envy*. pp.103-131. New York: The Guilford Press.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦 彊子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Buunk, B. P. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences*, 23, 997-1006.
- Carson, C. L., & Cupach, W. R. (2000). Fueling the flames of the green - eyed monster: The role of ruminative thought in reaction to romantic jealousy. *Western Journal of Communication (includes Communication Reports)*, 64, 308-329.
- Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of personality and social psychology*, 70, 1327.
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, 63, 243-251.
- Elphinston, R. A., Feeney, J. A., Noller, P., Connor, J. P., & Fitzgerald, J. (2013). Romantic jealousy and relationship satisfaction: The costs of rumination. *Western Journal of Communication*, 77, 293-304.
- Guerrero, L. K., & Afifi, W. A. (1999). Toward a goal - oriented approach for understanding communicative responses to jealousy. *Western Journal of Communication*, 63, 216-248.
- Guerrero, L. K., & Eloy, S. V. (1992). Relational satisfaction and jealousy across marital

- types. *Communication Reports*, 5, 23-31.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. (1998). The Dark Side of Jealousy & Envy: Desire, Delusion, Desperation, and Destructive Communication. In Spitzberg, B. H. & Cupach, W. R. (Eds.), *The Dark Side of Close Relationships*. Mahwah, NJ. Taylor & Francis e-Library. (谷口 弘一・加藤 司 (監訳) (2008). 親密な関係のダークサイド 北大路書房 pp.35-67.)
- Guerrero, L. K., Eloy, S. V., Jorgensen, P. F. & Andersen, P. A. (1993). Hers or his? Sex differences in the communication of jealousy in relationships. In P. Kalbfleisch(Ed.), *Interpersonal communication in evolving interpersonal relationships*. (pp.109-132). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 伊藤 拓・上里 一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 34, 31-42.
- 金政 祐司・大坊 郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 59-76.
- Martin, L. L., & Tesser, A. (1989). Toward a motivational and structural theory of ruminative thought. In Uleman, J. S. & Bargh, J. A. (Eds.), *Unintended thought*. New York, NY: Guilford. pp.306-326.
- Murray, S. L., & Holmes, J. G. (1997). A leap of faith? Positive illusions in romantic relationships. *Personality and social psychology Bulletin*, 23, 586-604.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Griffin, D. W. (1996). The benefits of positive illusions: Idealization and the construction of satisfaction in close relationships. *Journal of personality and social psychology*, 70, 79-98.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Pines, M. A. (1992) Romantic Jealousy. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)

## 第5章 架空の浮気場面への予測行動尺度の作成

ここでは、具体的に嫉妬を喚起する浮気場面が提示された際、個人がどのような行動を選択するかについて、測定する尺度の作成を試みる。

第1節では、先行研究の知見の整理から新しく尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認することとする。

第2節では、作成した尺度は浮気場面に対する予測されたコーピングと捉えることもできるため、従来より一般的なコーピング尺度との関連を検討することで、作成した尺度の捉えるものがどの程度他の一般的なコーピングと共通するのかを検討する。

第3節では、作成した尺度の下位尺度の回答パターンから、実際に浮気場面を提示された個人がどのような類型で反応行動を予測するか、その類型の示す特徴について、嫉妬傾向や浮気場面への認知的評価を考慮に入れて検討することとする。

## 第1節 架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討

### 問題

浮気は恋愛関係・夫婦関係の境界と安寧を脅かし、個人の浮気への反応には関係の維持、相手への攻撃的態度、離愛等が考えられる。その行動の選択には関係への期待や、関係・個人の状態が関わるだろう。本研究では恋愛関係・夫婦関係で起こりうる葛藤のうち幾分経験されやすく (Bevan, 2013), かつ離婚や離愛の主要な要因の一つとされる (Buss, 2000) 浮気場面に着目し、恋人の浮気に遭遇した場面にて予測される種々の対処行動と、その関連要因について検討する。なお、本研究では浮気場面とは Buss(2000)などを参考に「自分のパートナーと第三者の心身の接近を示すような場面」と定義する。

恋愛関係・夫婦関係にてパートナーの浮気や嫉妬を認識した際の対処行動を検討する研究の中でも最も代表的なアプローチとして、Guerrero の一連の研究がある (e.g., Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995; Guerrero, Hannawa, & Babin, 2011; Guerrero, 2014)。Guerrero は「現在のパートナーとの間で嫉妬した際に過去に自分が取った行動的反応」の回答を集め Communicative Responses to Jealousy Scale (以下 CRJS) を作成し、研究と改訂を重ねている。Guerrero et al. (2011)では、CRJS の 11 個の下位尺度について確認的高次因子分析を行い、4 つの高次因子を得ている。それらは、パートナーや物への暴力や攻撃を含む「破壊的コミュニケーション」、関係修復を図る「建設的コミュニケーション」、パートナーへ沈黙を保ち対話を避ける「回避的コミュニケーション」、ライバルへの接触やパートナーの占有行動を含む「ライバルに向かうコミュニケーション」である。一方で CRJS は未だ下位尺度の数も項目数も多いため、改訂の途中にあると考えられる。

また恋愛関係をはじめとして対人葛藤全般への対処行動を理論化した Rusbult による Exit-Voice-Loyalty-Neglect モデル (以下、EVLN モデル) は、浮気場面に限定されず親密な関係における葛藤への対処行動を検討する観点である (e.g., Rusbult & Zembrodt, 1983; Rusbult, 1987; Rusbult, Yovetich, & Verette, 1996)。Rusbult によれば、対人葛藤に直面した個人の選択する行動は建設的—破壊的、積極的—消極的の 2 軸で説明可能とされ、”Exit”

(相手を責めて関係から離れる積極的で破壊的な行動), "Voice" (パートナーとの対話, 修復を志向する積極的で建設的な行動), "Loyalty" (事態が沈静化するのを待つ消極的で建設的な行動), "Neglect"(対話を拒否する消極的で破壊的な行動) の 4 類型がある。

対人関係における葛藤への対処行動を捉える EVLN モデルと嫉妬時のコミュニケーション反応を測る Guerrero の CRJS は並べて論じられることはほとんどなかった。しかし Demirtas-Madran(2011)が指摘するようにこれらの理論はともに先行研究の中でも嫉妬や浮気に関わる葛藤状況への対処行動を検討するにあたって有力な理論と考えられる。理論的な内容に着目すると, これらの理論は類似する点だけでなく, 互いに独自の観点を持ち合わせているといえる。そのためこれら 2 つの理論的観点を統合して捉えることは, 個人が特に浮気場面に直面した際にどのような行動を取りうるかという行動の類型について, 先行研究で得られてきた知見を再構成することにつながり, さらに先行研究の問題点を考察する上ででも有用であると考えられる。EVLN モデルと CRJS の共通点としては, 互いに関係を修復していこうとする EVLN モデルの"Voice"と CRJS の「建設的コミュニケーション」, 相手を攻撃することで関係を破壊する"Exit"と「破壊的コミュニケーション」がそれぞれ類似の内容を含み, また"Neglect"も CRJS の中では「破壊的コミュニケーション」に包含されるような内容となっている。これは恐らく相手を見捨てるという行動も結果的には葛藤を抱えた相手に対して攻撃的な振る舞いとなるということであると考えられる。さらに能動的には葛藤を解決する方向に動かないという意味では相手との関係が改善するのを待つ"Loyalty"は CRJS の「回避的コミュニケーション」と共通した内容を持つ。一方で両者を比較した際, CRJS の「ライバルに向かうコミュニケーション」は嫉妬状況に含まれる三角関係を扱うがゆえに包含される独自の要素である。また既述のように EVLN モデルの"Exit"は CRJS の「破壊的コミュニケーション」と同様に相手を攻撃する要素も含むが, 一方で関係から直接的に離脱を目指す要素も混同して含まれており, 後者については EVLN モデルのみに含まれる独自の要素であると考えられる。これらの EVLN モデルや CRJS に関わる尺度の内容を概観すると, 恋愛関係・夫婦関係の中で葛藤, 特に嫉妬するような場面に直面した際, 個人が取りうる行動として相手との対話で関係を修復する行動, パートナーを攻撃する行動, 自ら解決しない行動, ライバルや周りに向けての行動が見出されているといえる。これらの理論的観点を参照した国内の研究として, CRJS の一部を元にした和田(2015)では「非難・喧嘩」「所有の表示」「相手の反応確認」「否認・回避」が下位尺度として得られ, Rusbult の EVLN 尺度を独自に邦訳した相馬・山内・浦(2003)では「別

れ行動」「無視行動」「話し合い行動」「忠誠行動」が得られている。しかし国内の尺度は妥当性の検討がほぼなされていない点に問題がある。

さらに先行研究の大きな問題点として、実際の恋愛関係・夫婦関係においては相手の浮気やその他のトラブルに際して別れを告げることは十分あり得るが、先行研究では大きな葛藤に際して個人が恋愛関係・夫婦関係からの「別れを志向する」行動を取ることに關して、その測定や行動の持つ意味について検討する研究が Rusbult による EVLN モデルの他にはほぼ見受けられない、ということが挙げられる。Feldman & Cauffman(1999)ではパートナーの浮気を発見した調査協力者の 50%近くが苦悩から自ら関係の終結を選んだとされ、また不誠実な相手からの離脱は最終的な個人の適応に対してはポジティブに働くことが考えられるため、別れる行動とその行動の選択と關わる要因の検討には意義があるだろう。しかし Guerrero の CRJS 等、恋愛関係・夫婦関係での対処行動を測定する尺度の多くは「現在のパートナーとの関係で葛藤が起きた（嫉妬した）際どんな行動を取ったか」の観点から尺度が構成されるため、「別れる」行動はほぼ考慮されない。「別れる」行動を理論的に包含する先述の EVLN モデルの“Exit”でも、「別れる」行動は「精神的・物理的にパートナーを攻撃する」などの攻撃的な行動と混同して捉えられている(Rusbult et al., 1996)。しかし浮気などの葛藤が起きた際に考えられる「攻撃的な行動」と「別れを志向する行動」には質的な違いも考えられ、両者を混同することで特に知見の蓄積が薄い「別れを志向する行動」の独自性について見落としてしまっているという問題が考えられる。葛藤に際して別れる行動は葛藤そのものやそれまでの関係への不満足を理由に、関係の終了を目指す行動であるといえる。一方、嫉妬した際に攻撃的な態度を取る等のネガティブな行動傾向は関係の不満足と正の關連が示されているが(Guerrero, 2014)、パートナーへのネガティブな行動傾向が関係の継続に対しネガティブに働くとは限らない。例えば Buss(2000)では関係の中で振るわれる男性の暴力や、またパートナーがほかの人に興味を示した際に怒る・泣くなどして相手を責め、罪悪感を植えつける行動にパートナーを関係に引き留める機能がある可能性について指摘されている。また Guerrero et al.(2011)では「破壊的コミュニケーション」と「建設的コミュニケーション」は互いに無關であったことから、嫉妬した際に攻撃的な振る舞いをする傾向は必ずしも関係を修復しようとする傾向を抑制するものではない可能性も考えられる。そして Rusbult, Martz, & Agnew(1998)の投資モデルによれば、関係継続への意志を表す「コミットメント」は関係満足感に正の影響を受けるとされる。Rusbult et al.(1998)が示すように関係に満足している場合に個人は関係に留まりやすく、

関係の継続に寄与する行動へ動機づけられると考えられ、反対に関係に不満足である場合には個人は関係の継続を希望しにくく、むしろ別れる方向の行動に動機づけられかねないと考えられる。上記の知見を総合すると、葛藤時の攻撃的な行動、別れる行動はともに関係に不満足である場合にとられやすいと考えられる。しかし上記のように、別れを志向する行動は直接的に関係の終了を目指すのに対して、攻撃的な行動は相手を傷つけるような形で行使される一方で関係の終了に直接つながるとは限らないとも考えられる点で、両者は質的に異なる可能性が考えられる。この二者が弁別して捉えられるかどうか、また弁別して捉えた際に両者にどのような相違点が見られるかを検討することで、私たちの恋愛関係・夫婦関係の中で起こりうる問題として、「何故別れるのか」「何故傷つけるのか」といった点についてのより詳細な理解につながるだろう。

総合して、葛藤状況としての浮気場面に対し個人が取りうる行動には、関係を修復しパートナーとの対話を望む、パートナーを攻撃する、事態を受容する、ライバルや周りに向かうなどが考えられるが、直接的に別れを志向する行動も攻撃的な行動とは別に考慮する必要があるだろう。親密な関係の終了への意図をも測定可能な尺度の開発は、関係への期待と限界に関する知見を得る上で有用と考えられる。

上記の議論を受け、本研究では浮気場面に対する行動を測定する尺度として架空の浮気場面への予測行動尺度(Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity, 以下 ABSII)の作成と、その信頼性と妥当性の検討を目的とする。ABSII は個人が恋愛関係全般に対して漠然と持つ価値観を測定するものではなく、現在パートナーがいる個人が、パートナーと育んできた恋愛関係への満足・不満足等の関係の状態を前提として、その恋愛関係の中で仮にパートナーが裏切ったら自分はどうか行動すると思うか、という力動を捉えるための場面想定法を用いた尺度である。架空の浮気場面を想定して貰う理由としては、既述の通り CRJS などの現在のパートナーとの関係で過去に行った対処行動を問う形式では、そもそも他の葛藤への対処行動と並列して本研究で検討することを目的とする「別れる」行動を取ったかを問うことは不可能である。一方で架空の浮気場面という回答者全員に架空の同じレベルの刺激(浮気場面)を教示する方法では、過去の経験に関わらず回答を求めることができ、予測される行動についての個人差が捉えられる利点があることが挙げられる。また、「浮気場面」は先述の通り本研究では対人葛藤状況の中でも特に自分のパートナーと第三者の心身の接近を示すような場面を指すが、「浮気」と認識される行動の水準は個人により異なることが予測される。本研究においては浮気場面に際して予測する種々の行動の

個人差の測定を目的とするため、誰もが関係の維持や別れを選択するような極端な程度の刺激ではなく、回答が分散することが見込まれる刺激として、先行研究でも用いられることが多く (e.g., 相馬他, 2003; 和田, 2015), また浮気かどうかの境界線と考えられる(菅原, 2006)「パートナーと第三者とのデート場面」を採用することとした。さらに先行研究の知見の整理から, ABSII は「攻撃志向」「別れ志向」「沈黙志向」「対話志向」「ライバル志向」の 5 因子構造を想定する。なお, 夫婦関係では子どもや職業の有無, 居住形態等によって離婚の可能性が左右されることが報告されているため (e.g., 加藤, 2005), 本研究では基本的にそれらのデモグラフィックデータの影響下になく, 浮気場面に際して予測される種々の行動が現在の関係や個人の状態等と関連しやすいと考えられる, 現在未婚の恋愛関係にある大学生のみを分析対象とする。

ABSII の妥当性の検証として, 本研究では加藤(2001)のストレッサーへの認知的評価尺度, 鈴木他(1997)のストレス反応尺度 Stress Response Scale-18(以下 SRS-18), 第 2 章で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度, 古村・仲嶺・松井(2013)の投資モデル尺度との関連を検討することで作成した尺度の構成概念的妥当性を多角的に確認する。

まず架空の浮気場面に対し予測する行動と関連する要因として状況への認知的評価が考えられる。認知的評価には刺激と自身の利害を判断する一次的評価, 刺激に対処可能かという二次的評価が仮定され, それに伴い対処行動が決定する。認知的評価尺度は「脅威」「重要性」「対処効力感」からなり, 本研究では提示された葛藤状況としてのデート場面に対し, それが自らにとって脅威で重要な意味を持つと評価した場合はストレスを表現する攻撃行動, 葛藤を解決しようとする対話的行動やライバルに向かう行動が予測されるだろう。一方提示されたデート場面がそもそも個人の中で「浮気」やストレスフルな場面として見なされず重要視されない場合には, 個人はその状況を何らかの方向に解決する必要性を感じないために明確な対処を取らない行動が予測され, 逆に提示された場面が自身にとって重要であると考えられた場合にはそのような消極的な行動は予測されないだろう。ゆえに「脅威」「重要性」は ABSII の「攻撃志向」「対話志向」「ライバル志向」と正の関連を, また「重要性」は「沈黙志向」と負の関連を示すだろう (仮説 1)。さらに提示された刺激としてのデート場면을脅威と思わず, 対処可能と考えられた場合にはその刺激をいちいち問題視せず容認するような形で, 能動的に解決しない行動を取る可能性が考えられる。反面, Ysseldyk, Matheson, & Anisman(2009)が指摘するように葛藤状況やストレッサーに対する対処効力感がなく, 脅威と捉えるほどに抑圧・否認するような形で, 能動的に解決しな

い行動を取る可能性も考えられる。本研究ではこれら「対処効力感」「脅威」と「沈黙志向」がどう関連するかについても併せて検討することとする。

次に、ストレス反応については精神的に不適応状態にある個人ほど、対人場面で生じた葛藤に対し関係の放棄・崩壊に向かうネガティブな対処行動を取る傾向が見出されている(加藤, 2001)。ゆえに SRS-18 の下位尺度「抑うつ・不安」「無気力」「不機嫌・怒り」は、ABSII の「別れ志向」「攻撃志向」と正の関連を示すだろう(仮説 2)。

また嫉妬深さも浮気場面での対処行動と関わりが指摘されている要因である(Guerrero et al., 1995; Guerrero, 2014)。本研究では Pfeiffer & Wong(1989)に倣い嫉妬を認知・情動・行動の三次元から捉える。また本研究で用いる多次元恋愛関係嫉妬尺度は「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」からなる。まず嫉妬の行動的側面はパートナーと潜在的なライバルの関係を詮索する度合いを表す(Bevan, 2013)。また情動的な嫉妬深さ(浮気をされると腹が立つ等)は浮気場面への不快感情を示す傾向で、愛情の深さと関わる(Pfeiffer & Wong, 1989)。行動的・情動的な嫉妬深さの強い個人は葛藤状況を不快に感じ、ストレスや葛藤を解消する行動に出ると考えられるため、パートナーとの対話やライバルとの接触で積極的に解決を試みる行動、パートナーへの攻撃行動を予測しやすく、消極的な行動を予測しないと考えられる。さらに認知的な嫉妬深さは相手の裏切りを疑う嫉妬の病的な側面(Pfeiffer & Wong, 1989; Bevan, 2013)である。疑い深い個人は裏切りの兆候に過敏で極端な反応を示し、精神的健康や関係満足感、愛情の低さや高い攻撃性を示す(Bevan, 2013)。この傾向の強い個人は、架空の浮気場面に際してもパートナーへの攻撃的態度やライバルへの接触、また別れる行動をも予測しやすいと考えられる。仮説として「警戒行動」「排他的感情」は ABSII の「ライバル志向」「攻撃志向」「対話志向」と正の関連、「沈黙志向」とは負の関連を示し、「猜疑的認知」と「別れ志向」「攻撃志向」「ライバル志向」は正の関連を示すだろう(仮説 3)。

個人の恋愛関係との関わりも、浮気場面に際し予測される行動と関わりと考えられる。Guerrero(2014)では関係満足感と「建設的なコミュニケーション」は正の、「破壊的なコミュニケーション」「ライバルに向けたコミュニケーション」は負の関連を示していた。また EVLN モデルを提唱した Rusbult は、自身の提唱した投資モデルで、特定の親密な関係を継続する「コミットメント」を動機づける要因にはパートナーとの「関係満足感」の高さ、現在のパートナーに替わる代替的な関係への評価である「代替肢の質」の低さ、関係に種々の資源を投資した程度の「投資量」の高さが関わりとした(Rusbult et al., 1996; Rusbult et

al., 1998)。本研究の葛藤状況でも対話を予測するほど関係満足感や投資量が高く、代替肢の質が低く、別れを予測するほど関係満足感や投資量が低く代替肢の質が高いただろう。投資モデル尺度は「コミットメント」「関係満足感」「投資量」「代替肢の質」からなり、上記を総合した仮説として「コミットメント」「関係満足感」「投資量」の高さや「代替肢の質」の低さは ABSII の「対話志向」の高さ、「別れ志向」の低さと関連するだろう。また「関係満足感」と「攻撃志向」「ライバル志向」は負の関連を示すだろう（仮説 4）。

なお、親密な関係での嫉妬や、葛藤時の対処行動に対しては性差について言及した研究も複数存在するが、それらの知見は全体的に一貫しているとは言い難く (e.g., Bevan, 2013; 和田, 2015), 性差に関する考察には慎重になる必要があると考えられる。したがって本研究では作成した尺度の妥当性を他尺度との関連から検討するという目的との関係上、性別を統制変数として用いることで、個人の精神状態と恋愛関係の状態が予測される葛藤時の行動とどう関わるかを検討することとする。

## 方法

### 1. 調査協力者

大学生 442 名 (平均年齢 19.50 歳,  $SD=1.74$ , 18 歳~43 歳, 男性 177 名, 女性 265 名) に質問紙調査を行い, そのうち 25 歳未満で結婚しておらず, 恋人のいる 112 名 (平均年齢 19.59 歳,  $SD=1.05$ , 18 歳~22 歳, 男性 33 名, 女性 79 名) を分析対象とした。

### 2. 測定尺度

フェイスシートにて学年・年齢・性別について回答を求め, さらに現在交際中の恋人の有無と以下の質問紙への回答を求めた。

(1) **ABSII 暫定項目群**: Guerrero et al.(2011)や Rusbult(1987), 相馬他(2003), 和田(2015)などを参考に, 直接的にパートナーとの別れを目指す「別れ志向」, パートナーへネガティブな感情をそのまま表現する「攻撃志向」, パートナーと自分の気持ちを冷静に伝え合おうとする「対話志向」, 葛藤について触れずいつも通りの行動を取る「沈黙志向」, ライバルへの接触を試みる「ライバル志向」の 5 因子構造を仮定して構成した 40 項目を使用した。回答者への教示として, 現在交際している人物の名前を X さんとして想起させた上で, 「こ

の質問ではある場面を想像して回答して頂きます。《想像場面：あなたはとある土曜日の夜、あなたの恋人 X さんが、あなたの知らない人物 Y さんとデートしているように見える姿をたまたま目撃してしまいました。》もしも仮にこのようなことがあったら、あなたはその後、どんな行動を取ると思いますか。あるいはどんなことを考えると思いますか。」という教示を与えた。各項目に対して「1.当てはまらない」～「5.当てはまる」の 5 件法にて回答を求めた。

(2) **ストレッサーの認知的評価**：加藤(2001)の認知的評価尺度を用いた。ABSII 暫定項目群で想起した浮気場面をどのように認知的に評価するか、「対処効力感」4 項目、「脅威」3 項目、「重要性」2 項目について、「1.当てはまらない」～「5.当てはまる」の 5 件法にて回答を求めた。尺度の信頼性については加藤(2001)で確認されており、本研究での  $\alpha$  係数は順に、 $\alpha=.70, .62, .76$  であった。

(3) **嫉妬深さ**：第 2 章で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いた。現在の関係での嫉妬傾向を測定するために、ABSII 同様に現在交際している人物の名前を X さんとして想起させ、X さんとの普段の交際の中でどの程度当てはまるか、「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」各 5 項目で、「1.全く当てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。尺度の信頼性と妥当性は第 2 章で確認されている。本研究での  $\alpha$  係数は順に、 $\alpha=.90, .84, .88$  であった。

(4) **ストレス反応**：鈴木他(1997)のストレス反応尺度(SRS-18)を用いた。SRS-18 の「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」各 6 項目について、ここ 2,3 日の感情や行動の状態としてどの程度当てはまるか、「0.全くちがう」～「3.その通りだ」の 4 件法にて回答を求めた。尺度の信頼性と妥当性は鈴木他 (1997)で確認されている。本研究での  $\alpha$  係数は順に、 $\alpha=.90, .84, .88$  であった。

(5) **投資モデル**：Rusbult et al.(1998)の Investment Model Scale を古村他(2013)が邦訳した投資モデル尺度を用いた。「コミットメント」尺度、及び「関係満足感」「投資量」「代替肢の質」について、本研究では調査協力者の負担に配慮して項目負荷量の大きい順に各 3 項目を抜粋して用いた。いずれも多次元恋愛関係嫉妬尺度と同様、現在交際している恋人の名前を X さんとして想起させ、普段の X さんとの関係にどの程度当てはまるか、「1.全く当てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。尺度の信頼性と妥当性は古村他(2013)で確認されている。本研究での  $\alpha$  係数は「コミットメント」は  $\alpha=.90$  で、他は順に  $\alpha=.83, .63, .42$  であり、 $\alpha$  係数が極端に低い値となった「代替肢の質」につい

て吟味した結果、以降の分析からは除外することとした。

### 3. 調査手続き

2016年10月～11月に上記の質問紙を関西地方・北陸地方の複数の大学の講義中に実施した。倫理的配慮として調査の匿名性、回答の非強制性、回答に困難を感じた場合に中断できることを説明した上で、回答に不備のない協力者を分析対象とした。

## 結果

### 1. ABSIIの因子分析(Table5-1)と信頼性

ABSIIの暫定項目群40項目について、探索的因子分析（最尤法・promax回転）を行った結果、固有値の減衰状況は8.46, 6.73, 3.87, 2.88, 1.45, 1.38, 1.27...となった。因子数を3～6個に変えて結果を比較検討し、最終的に因子の解釈可能性から想定通りの5因子解が妥当であると判断した。因子数を5に固定した最尤法・promax回転の探索的因子分析を再度行い、各因子5項目前後での構成を目標に得られた22項目を最終的なABSIIの項目群とした。なお、回転前の5因子での累積寄与率は68.26%であった。第1因子は「自分が受けた心の痛みをXさんにぶつける」「Xさんに意地悪なことを言う」などの項目が負荷を示し、教示での浮気場面にて自分を裏切ったと思われるパートナーに対し攻撃的態度を予測する因子と考えられたため「攻撃志向」と命名した。第2因子は「Xさんが何も言わない限り、普段通りに接する」「自分の勘違い・見間違いだったことにする」などの項目に高い負荷がみられ、自分からは浮気場面について特に触れようとせず、また解決に出ようともしない因子と考えられたため「沈黙志向」と命名した。第3因子は「Xさんに別れ話をする」「Xさんに別れようと言う」などの項目に高い負荷がみられ、浮気場面を想定したパートナーとの別れを積極的に考える因子と解釈できるため「別れ志向」と命名した。第4因子は「自分の正直な考えや気持ちをXさんに伝える」「いつもよりXさんと話をするための時間をとる」などの項目に高い負荷がみられ、パートナーと真摯に向き合う行動を予測する因子と解釈できるため「対話志向」と命名した。第5因子は「Yさんと直接会える機会を作ろうとする」「もし次にYさんと会うことがあれば、自分がXさんの恋人であることを伝える」などの項目に高い負荷がみられ、パートナーではなく関係に侵入してきたライバルと接触

する方向での解決を予測する因子と考えられたため、「ライバル志向」と命名した。この因子構造は尺度項目の作成時に想定された構造と一致するものであり、また採用された 22 項目は全て想定通りの因子に最も高く負荷を示した。これらの下位因子間相関については Table1 に記述した通りである。最終的な探索的因子分析結果について、最尤法にて算出された適合度検定では  $\chi^2=144.79(df=131)$  で  $p$  値が .19 で有意とならなかったため、データとモデルの適合が示唆された。なお「沈黙志向」の項目 3 で床効果、「対話志向」の項目 3 で天井効果が見られたが、因子負荷量や項目内容を吟味した結果必要な項目と判断したため、本研究では採用した。各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出した結果、「攻撃志向」は  $\alpha=.90$ 、「沈黙志向」は  $\alpha=.84$ 、「別れ志向」は  $\alpha=.88$ 、「対話志向」は  $\alpha=.80$ 、「ライバル志向」は  $\alpha=.73$  であり、内的整合性の観点での信頼性は十分な値を示した。さらに ABSII の項目群について確認的因子分析を行った。下位因子間がほぼ無関連の「攻撃志向」「対話志向」間、「別れ志向」「沈黙志向」間、「沈黙志向」「ライバル志向」間の共分散を削除し、適合度指標は GFI=.801, AGFI=.751, CFI=.900, RMSEA=.072 となった。観測変数が多くなると自由度が大きくなりモデルとデータの適合が悪くなるが(豊田, 2002), 観測変数が多い場合でも RMSEA 等の参照で客観的基準のクリアが見込めるとされ(豊田, 2002), 本研究の RMSEA は .08 を下回り、許容できる値であった。ゆえに ABSII の 5 因子構造が概ね支持された。

Table5-1 ABSIIのPromax回転後の因子パターンと確認的因子分析結果(最尤法)  
および因子間相関(右上)・下位尺度間相関(左下)

No.	項目	F1	F2	F3	F4	F5	CF <sup>a)</sup>	Mean	SD
<b>F1 攻撃志向</b>									
1	自分が受けた心の痛みをXさんにぶつける。	.87	-.03	-.10	.21	-.10	.77	2.69	1.36
2	Xさんに意地悪なことを言う。	.86	.08	.01	-.06	-.10	.84	2.56	1.27
3	Xさんを傷つけるようなことを言う。	.85	.01	-.02	-.13	.06	.86	2.38	1.17
4	Xさんに対して乱暴な態度をとる。	.73	.05	.12	-.10	-.03	.78	2.20	1.17
5	その件についてXさんを責める。	.64	-.04	.16	.15	.12	.75	2.69	1.33
<b>F2 沈黙志向</b>									
1	Xさんが何も言わない限り、普段通りに接する。	-.15	.93	.12	.20	-.20	.86	2.72	1.31
2	自分の勘違い・見間違いだったことにする。	.11	.72	-.08	.01	.03	.70	2.36	1.17
3	この件は心に留めておくだけにする。	.17	.69	-.16	-.13	.09	.71	2.08	1.08
4	時間が解決してくれるのを待つ。	.09	.65	-.02	-.03	.15	.64	2.57	1.20
5	何もなかったかのように振る舞う。	-.20	.60	.11	-.11	.00	.68	2.55	1.27
<b>F3 別れ志向</b>									
1	Xさんに別れ話をする。	.01	.06	.91	.07	-.06	.85	2.54	1.32
2	Xさんに別れようと言う。	.03	.00	.89	-.07	-.01	.92	2.41	1.25
3	Xさんとどのように別れるかを考える。	.09	.09	.76	-.10	-.05	.82	2.38	1.22
4	Xさんに、しばらく距離を置くことを提案する。	-.03	-.09	.55	-.04	.17	.59	2.55	1.32
<b>F4 対話志向</b>									
1	自分の正直な考えや気持ちをXさんに伝える。	-.01	-.15	.02	.78	-.07	.80	3.83	1.10
2	いつもよりXさんと話をするための時間をとる。	.11	.08	-.14	.73	-.01	.74	3.56	1.10
3	この件をどう乗り越えるか、Xさんと話し合う。	.01	-.07	.13	.66	.19	.68	3.87	1.17
4	落ち着いてXさんの気持ちや事情について聞く。	-.12	.08	-.13	.61	-.02	.61	3.72	1.07
<b>F5 ライバル志向</b>									
1	Yさんと直接会える機会を作ろうとする。	-.04	.10	.02	-.05	.82	.76	2.13	1.12
2	もし次にYさんと会うことがあれば、自分がXさんの恋人であることを伝える。	-.07	.05	.01	.16	.64	.71	2.70	1.31
3	もし機会があれば、YさんにXさんのことをどう思っているのか聞こうとする。	-.04	-.10	-.08	-.14	.55	.46	2.93	1.26
4	Yさんについて、可能な限り調べようとする。	.06	.09	.08	.17	.50	.62	2.97	1.25
		F1	F2	F3	F4	F5			
		F1	-.23	.46	.03	.23			
		F2	-.20*	-.00	-.30	.04			
		F3	.46***	-.01	-.28	.34			
		F4	.03	-.26**	-.27**	.24			
		F5	.16	.06	.25**	.21*			

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$ .

注. a) CF列における値は確認的因子分析における項目の因子負荷量を表す。他の因子への負荷量は0として分析を行った。

これらの結果から、構成された ABSII の各下位尺度について平均値を算出し、下位尺度間相関を算出したところ、「沈黙志向」は「攻撃志向」「対話志向」とそれぞれ有意な負の相関を示し( $r=-.20$ ,  $p<.05$ ,  $r=-.26$ ,  $p<.01$ )、他の下位尺度とは無相関( $r=-.01 \sim r=.06$ ,  $n.s.$ )であった。また「ライバル志向」は「沈黙志向」との関連はほぼ無相関( $r=.06$ ,  $n.s.$ )で、

「攻撃志向」との関連も有意とはならなかったものの( $r=.16, n.s.$ ), 他の「別れ志向」「対話志向」とはそれぞれ有意な正の相関を示した( $r=.25, p<.01, r=.21, p<.05$ )。さらに「別れ志向」は「攻撃志向」と有意な正の相関を示し( $r=.46, p<.001$ ), また「対話志向」とは有意な負の相関を示した( $r=-.26, p<.01$ )。「攻撃志向」と「対話志向」はほぼ無相関であった( $r=.03, n.s.$ )。

## 2. ABSII と他尺度の記述統計と男女差の検討(Table5-2)

葛藤状況や嫉妬状況への対処行動には男女差を仮定する研究も複数存在する(e.g., Bevan, 2013; 和田, 2015)ため, ABSII の各下位尺度の平均値について男女差を検討したところ, 「攻撃志向」( $t=2.11, df=110, p<.05$ )にて女性が男性よりも有意に高い得点を示し, 「ライバル志向」( $t=-2.24, df=110, p<.05$ )にて男性が女性よりも有意に高い得点を示した。また, 本研究で用いた他の尺度にも男女で有意な得点の差がみられるか検討したところ, ABSII 以外の全ての変数では有意な得点の差はみられなかった。

Table5-2 各変数の男女別記述統計量

尺度	変数	男性(N=33)		女性(N=79)		t値
		Mean	SD	Mean	SD	
ABSII (1~5点)	1. 攻撃志向	2.18	0.97	2.64	1.07	2.11*
	2. 沈黙志向	2.68	0.92	2.36	0.94	- 1.62
	3. 別れ志向	2.46	1.12	2.47	1.09	0.04
	4. 対話志向	3.58	0.81	3.81	0.90	1.27
	5. ライバル志向	2.98	0.88	2.56	0.91	- 2.24*
認知的評価 (1~5点)	6. 対処効力感	2.95	0.76	2.68	0.72	- 1.74
	7. 脅威	3.73	0.68	3.98	0.83	1.54
	8. 重要性	3.89	0.88	3.80	0.96	- 0.46
ストレス反応 (0~3点)	9. 抑うつ・不安	0.84	0.72	0.77	0.69	- 0.51
	10. 無気力	1.13	0.63	0.97	0.60	- 1.23
	11. 不機嫌・怒り	0.78	0.64	0.61	0.62	- 1.30
嫉妬傾向 (1~7点)	12. 猜疑的認知	3.32	1.68	2.98	1.41	1.09
	13. 排他的感情	4.70	1.23	4.61	1.38	- 0.32
	14. 警戒行動	3.46	1.52	3.02	1.42	- 1.49
投資モデル (1~7点)	15. コミットメント	5.69	1.19	5.35	1.21	- 1.36
	16. 関係満足感	5.26	1.02	5.03	1.19	- 1.00
	17. 投資量	3.66	1.21	3.54	1.25	- 0.47

\*  $p<.05$

### 3. ABSII と他尺度の関連(Table5-3)

妥当性検討のため性別をダミー変数化し(男性=1, 女性=0), 統制変数として ABSII と他変数の偏相関を算出した。認知的評価尺度に関する仮説 1 では「脅威」「重要性」と「攻撃志向」「対話志向」とは正の関連( $pr=.25\sim.42, p<.01\sim p<.001$ )を示し, 「重要性」は「沈黙志向」との負の関連( $pr=-.35, p<.001$ )を示したが, 「脅威」「重要性」は「ライバル志向」と無関連だった( $pr=.12, .15, n.s.$ )ため仮説 1 は部分的に支持された。また「沈黙志向」は「対処効力感」と正の関連( $pr=.35, p<.001$ ), 「脅威」と負の関連( $pr=-.30, p<.001$ )を示した。

ストレス反応に関する仮説 2 では「攻撃志向」は「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」と正の関連( $pr=.23, .34, p<.05, p<.001$ )を示し, 「無気力」とは有意な関連を示さなかった( $pr=.18, n.s.$ )。「別れ志向」はストレス反応全般と正の関連( $pr=.23\sim.35, p<.05\sim p<.001$ )を示したため, 仮説 2 は概ね支持された。

嫉妬深さに関する仮説 3 について, 結果では「警戒行動」「排他的感情」は「ライバル志向」「攻撃志向」「対話志向」と有意な正の関連( $pr=.21\sim.40, p<.05\sim p<.001$ )を示し, 「排他的感情」と「沈黙志向」は有意な負の関連を示したが( $pr=-.31, p<.01$ ), 仮説に反し「警戒行動」と「沈黙志向」が無関連であった( $pr=-.17, n.s.$ )。「猜疑的認知」は「別れ志向」「攻撃志向」「ライバル志向」と有意な正の関連を示した( $pr=.19\sim.40, p<.05\sim.001$ )ため, 仮説 3 は概ね支持された。

投資モデルに関する仮説 4 について, 結果では「コミットメント」「関係満足感」「投資量」は「対話志向」と有意な正の関連( $pr=.29\sim.43, p<.01\sim.001$ )を示し, 「別れ志向」とは「コミットメント」「関係満足感」は有意な負の関連( $pr=-.38, -.36, p<.001$ )を示し, 「投資量」とは無関連であった。仮説に反し「攻撃志向」「ライバル志向」は「関係満足感」とは無関連となった。ゆえに仮説 4 は部分的に支持されたといえる。仮説にはないが, 「投資量」は「対話志向」の他, 「攻撃志向」「ライバル志向」と有意な正の関連を示した( $pr=.42, .29, p<.001, p<.01$ )。

Table5-3 ABSIIと各変数間の偏相関分析結果(性別を統制)

	攻撃	沈黙	別れ	対話	ライバル
対処効力感	-.10	.35***	-.04	-.04	.05
認知的評価 脅威	.29**	-.30***	.05	.25**	.12
重要性	.32***	-.35***	-.03	.42***	.15
抑うつ・不安	.23*	.06	.23*	.02	.02
ストレス反応 無気力	.18	.18	.25**	-.05	.11
不機嫌・怒り	.34***	.01	.35***	.05	.16
猜疑的認知	.40***	-.02	.19*	.09	.22*
嫉妬傾向 排他的感情	.40***	-.31**	-.01	.34***	.20*
警戒行動	.39***	-.17	.09	.22*	.21*
コミットメント	.08	-.10	-.38***	.43***	.14
投資モデル 関係満足感	.04	-.06	-.36***	.31**	.07
投資量	.42***	.08	-.01	.29**	.29**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

注: 仮説に沿う結果は太字で記し, 仮説に反する結果は点線で囲っている。

## 考察

### 1. 探索的因子分析・確認的因子分析の結果から

本研究の目的は、浮気場面としてのデート場面に対して個人が予測する対処行動を測定する尺度として ABSII を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。探索的因子分析の結果から、想定通り「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」に該当する項目群を抽出できたため、ABSII の 5 因子構造が確認された。この結果は最尤法の適合度検定に耐えうる結果であり、データとモデルの適合が示唆された。また ABSII の全下位尺度において十分に許容できる Cronbach の  $\alpha$  係数が算出されたため、ABSII の各下位尺度は内的整合性を持ち合わせることが確認された。確認的因子分析の結果では RMSEA は許容できる値であったため、ABSII の 5 因子構造が概ね支持されたといえよう。

因子間相関や下位尺度間相関の結果から、「攻撃志向」と「別れ志向」は互いに正の関係

にあるものの、因子分析の結果などからも弁別して捉えうることが示唆された。この「攻撃志向」と「別れ志向」は因子間・下位尺度間相関で特に「対話志向」との関係において違いを見せ、「攻撃志向」は「対話志向」とはほぼ無相関であったのに対し、「別れ志向」は「対話志向」と負の相関を示した。前者の結果は「建設的なコミュニケーション」と「破壊的なコミュニケーション」がほぼ無相関となった Guerrero et al. (2011)の結果と合致する部分がある。ゆえにパートナーに怒りをぶつける行動は別れる方向性も持ち合わせるが、関係の修復を阻害するかには関わらないこと、一方で別れを目指す行動を予測する場合はパートナーとの対話を試みない傾向にあることが結果から示された。また「ライバル志向」は「別れ志向」「対話志向」と正の相関を示した。この結果も Guerrero et al. (2011)と一致する部分があり、「別れ志向」とも関連したことを踏まえると、ライバルへの接触を予測する傾向は関係の継続・終了の行動予測と関連することが本研究でも示された。

## 2. 各変数の性差

各変数の平均値の性差について、「攻撃志向」では女性が男性よりも有意に高い得点を示したことに關しては、女性の方が男性よりも親密なパートナーに対して恋人との間でネガティブな感情の表出をしやすいとする先行研究(e.g., 和田, 2015)と合致する結果であった。また、「ライバル志向」は「攻撃志向」とは逆に男性の方が女性よりも有意に高い得点を示した。この結果は、男性は積極的にライバルへの接触を試み、パートナーと潜在的なライバルとを遠ざけようとする(Buss, 2000)という指摘とも一致する部分がある。しかし嫉妬の経験・表現の性差は全体的に知見の混乱が見受けられるため(Bevan, 2013)、性差の解釈には慎重な姿勢が求められるといえよう。

## 3. ABSIIの各下位尺度と他の尺度との関連について

ABSIIの構成概念的妥当性の検証に關して、結果からまずストレスの認知的評価に關する仮説1は部分的に支持された。つまり、ストレスとしてのデート場面を脅威と見なす傾向や自分にとって重要と評価する傾向は、攻撃的態度によってストレスを表現しようとする傾向や、対話によってストレスの源である葛藤状況の解決に努める行動を予測する傾向と正の関連にあり、逆に葛藤状況を重要視しない傾向を示す場合にはその状況に対して特に解決しない行動を予測するという傾向が示された。仮説に反して「ライバル志向」が認知的評価尺度全般と有意な関連を示さなかったが、本研究では見知らぬ第三者をライバルとして想定させたため、葛藤状況を脅威と感じても解決策として手がかりの少ない第三者への行動につながりにくい可能性が考えられた。「別れ志向」も認知的評価全般と

無関連であったが、関係に深くコミットしていないために浮気も重要と思わず別れを選択する場合と関係に深くコミットしており、葛藤を重く受け止めた個人が混在していたためと考えられる。また、「沈黙志向」は「対処効力感」と有意な正の関連、「脅威」と負の関連を示したため、本研究では「沈黙志向」を高く評定する者ほど提示されたデート場面を対処可能で自身にとって脅威でないと判断した傾向にあったといえよう。この結果から本研究で抽出された ABSII の「沈黙志向」は葛藤状況を対処不可能で脅威と感じた場合に抑圧・回避的に予測される行動というよりも、提示された場面を葛藤と認識せず、容認するような行動としての側面を持つと考えられる。

次にストレス反応全般に関する仮説 2 に関しては「攻撃志向」と「無気力」間の偏相関係数のみ有意とはならなかったものの、仮説は概ね支持された。すなわち、本研究の結果は加藤(2001)に沿う形で、パートナーの第三者とのデート場面を想像した際にパートナーへの攻撃的な態度や別れる行動を予測する傾向は個人のストレス反応と概ね正の関係にあることが示唆されたといえよう。

嫉妬傾向に関する仮説 3 は「警戒行動」と「沈黙志向」の関連が有意とはならなかったものの、概ね支持されたといえる。一般的に嫉妬深さは確かに葛藤時の相手への攻撃的な態度と関わり、関係の質を悪化させかねない(Bevan, 2013)傾向が示された。しかし「排他的感情」「警戒行動」と「対話志向」「ライバル志向」が正の関連を示したことから、情動的・行動的な嫉妬深さは関係を大事に思い、関係を続けようとする指標(Buss, 2000)としても捉えうること、「猜疑的認知」のような疑い深さのみが嫉妬深さの中では唯一別れる行動と関わりうるということが本研究の結果から示唆されたといえよう。

投資モデルに関する仮説 4 については、結果から部分的に支持されたといえる。まず「対話志向」との関連に関しては、「コミットメント」「関係満足感」「投資量」の 3 つが正の関連を示したため、概ね投資モデルで想定されている通り、関係に満足していて、投資量が多く関係の継続を望む個人ほどパートナーと冷静に対話する行動を予測することが示された。「別れ志向」に関しては「コミットメント」「関係満足感」との関連は理論的な仮説通り、負の関連を示したが、「投資量」に関しては仮説に反して無相関を示した。つまり関係に不満足な個人はパートナーの浮気というストレスを引き金に別れる行動を予測しやすいが、一方で別れる行動は投資量の多寡とは関わらず予測されるということである。さらに「攻撃志向」「ライバル志向」は仮説とは異なり「関係満足感」と無関連であった。これについて仮説で言及されなかったが「攻撃志向」「ライバル志向」と「投資量」の正の関

連や、投資量が関係の終結のコストとなるとする Rusbult et al.(1998)の知見も踏まえると、関係に投資した時間などの資源が多大な場合、パートナーの裏切りに際しても関係への満足感を問わず個人は関係を終了させるコストが多大になるために関係を維持する方向の行動を選びやすくなる。しかし、それだけ不可分な関係で裏切ったパートナーへの攻撃的態度は噴出されやすくなり、ライバルにも接触してストレスや葛藤状況を解決する傾向がこの結果から考察される。不誠実なパートナーとの関係継続を投資量ゆえに選ぶ場合、個人はパートナーやライバルに対し、時に過剰な手段で感情を表現するのかもしれない。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究では恋愛関係における葛藤状況としてのデート場面に際し予測する行動を測定可能な尺度 ABSII を構成し、その内的整合性の観点からの信頼性と構成概念的妥当性を支持する方向の結果について確認することができた。本研究では ABSII の信頼性は Cronbach の  $\alpha$  係数で検討したが、再検査信頼性の確認も尺度の有用性の保証には必要と考えられる。また得点に偏りのあった項目の再検討も望まれるだろう。さらに現実の浮気場面への行動と予測された行動の一致を検討していないことも課題に挙げられる。場面想定法の結果の一般化は難しい(相馬他, 2003)ため、結果の解釈は慎重に行う必要があるだろう。次に本研究では「沈黙志向」に関してはその妥当性を支持する結果を多くは得られなかった。相馬他(2003)や和田(2015)や Guerrero(2014)では類似の下位尺度については明確な結果が得られておらず、特に Guerrero(2014)ではこれらの行動の用いられ方が鍵となり、葛藤を避け話し合いを遅らせる場合には肯定的な、パートナーとの間に壁を作る場合には否定的な結果につながるだろうと考察されており、「沈黙志向」のような葛藤に対する消極的な行動には様々な動機が交絡している可能性も考えられる。そのため今後の研究においては「沈黙志向」がどのような動機により用いられうるか、解明していくことが必要とされるだろう。さらに本研究では浮気場面として「デート場面」を採用したが、他のレベルの浮気場面に對して予測される行動の強度と比較することで、予測される行動がいかに変化するか、検討することも求められるだろう。この教示の「デート場面」については、本研究では「デートしているように見える」という、回答者の受け取り方によって回答が変動する可能性のある、やや投影的な手法を用いていることにも留意する必要がある。「キスをしていた」「手をつないでいた」「手をつないだりはせず、ただ一緒に歩いていた」等、様々な具体的な場面を提示することで、反応がどう変わるか検討することも必要かもしれない。また、投資モデル尺度の「代替肢の質」に関しては本研究では抜粋した 3 項目での内的整合性の

観点からの信頼性係数の低さのため、分析から除外した。「代替肢の質」は元の尺度で作成された形のまま用いることで本研究での信頼性係数の問題を解決できると考えられるため、元の尺度の形で測定された「代替肢の質」と ABSII との関連を精査することで、本研究で想定されていた仮説の検証を行う必要があるだろう。最後に本研究では調査協力者の数が少なく、性差に関する安易な結論づけを避けるため、相関分析においては男女別の分析は行わず、性別を統制変数として用いた。今後より多く調査協力者を確保して、性別によって浮気場面に対して予測される行動がどう調整されるか、詳細な検討が必要とされるだろう。

## 5. 本節のまとめと次節への導入

本節では「架空の浮気場面に対する予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity(ABSII)」の作成と信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした。尺度の作成にあたって、先行研究をレビューし、Guerrero の一連の研究(e.g., Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995; Guerrero, Hannawa, & Babin, 2011; Guerrero, 2014)で作成されている CRJS と Rusbult の一連の研究で作成された(e.g., Rusbult & Zembrodt, 1983; Rusbult, 1987; Rusbult, Yovetich, & Verette, 1996)EVLN モデルとの統合を行い、さらに両モデルおよび先行研究でも解決されていない問題点として主に「別れる行動」を独自に測定する下位尺度を作成する必要性について指摘した。そのうえで、「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の5つの下位尺度からなる場面想定法を用いた尺度 ABSII の作成を行った。

分析の結果、ABSII は探索的因子分析・確認的因子分析の結果から、想定通りの5因子構造を有することが支持された。また Cronbach の  $\alpha$  係数から、内的整合性の観点からの信頼性を有することも確認された。尺度の妥当性の検討として、ストレスサーへの認知的評価、ストレス反応、嫉妬傾向、投資モデルを測定する各尺度との関連の検討によって概念的妥当性の検討を行った。その結果、仮説に沿わない結果も散見されたものの、先行研究の結果や理論的な考察に沿った結果が多く得られたため、全体としては作成した ABSII の妥当性を支持する方向の結果が多く得られたといえよう。ただし、本研究で作成された ABSII の結果には、場面想定法による現実場面での行動からの乖離の可能性、他の浮気レベルの刺激について検討できていないことや、調査協力者の少なさ等があり、課題は山積しているともいえる。

さて、本節で作成した ABSII は捉え方によっては架空の浮気場面というストレス場面への予測されたコーピングを測定する尺度とも考えられるだろう。作成した各下位尺度におけるコーピングは、果たしてどの程度既存の、一般的な対人関係におけるコーピングと関連を示すのだろうか。次節においては、このような ABSII で測定する内容の独自性・共通性を検討するため、既存の一般的なコーピング尺度との関連を検討することとする。

## 引用文献

- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press.
- Demirtas-Madran, H. A. (2011). Understanding coping with romantic jealousy: Major theoretical approaches. In Trnka, R., Baclar, K., & Kuska, M. (Eds.), *Re-constructing Emotional Spaces: From Experience to Regulation* (pp.153-167). Zal, Roku: Prague College of Psychosocial Studies Press.
- Feldman, S. S., & Cauffman, E. (1999). Sexual betrayal among late adolescents: Perspectives of the perpetrator and the aggrieved. *Journal of Youth and Adolescence*, 28, 235-258.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the green-eyed monster: Conceptualizing and measuring communicative responses to romantic jealousy. *Western Journal of Communication*, 59, 270-304.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The communicative responses to jealousy scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, 5, 223-249.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication*, 78, 586-611.

- 加藤 彰彦 (2005). 離婚の要因: 家族構造・社会階層・経済成長 熊谷 苑子・大久保 孝治 (編) 『コーホート比較による戦後日本の家族変動の研究: 全国調査「戦後日本の家族の歩み」(NFRJ-S01)報告書 No.2』 日本家族社会学会全国家族調査委員会, 77-90.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 古村 健太郎・仲嶺 真・松井 豊 (2013). 投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究, 46, 39-47.
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Rusbult, C. E. (1987). Responses to dissatisfaction in close relationships: The exit-voice-loyalty-neglect model. In D. Perlman., & S. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration* (pp.209-237). California: Sage.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M., & Agnew, C. R. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal relationships*, 5, 357-391.
- Rusbult, C. E., Yovetich, N. A., & Verette, J. (1996). An interdependence analysis of accommodation processes. In Fletcher, G. J. O., & Fitness, J. (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach* (pp. 63-90). Manwah, NJ: Erlbaum.
- Rusbult, C. E., & Zembrodt, I. M. (1983). Responses to dissatisfaction in romantic involvements: A multidimensional scaling analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 19, 274-293.
- 相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.
- 菅原 健介 (2006). 恋愛における嫉妬と浮気の心理 斉藤 勇 (編) イラストレート恋愛心理学(pp.94-103) 誠信書房
- 鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右馬 埜力也・坂野 雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.
- 豊田 秀樹 (2002). 「討論: 共分散構造分析」の特集にあたって 行動計量学, 29, 135-137.

和田 実 (2015). 恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応: 嫉妬の強さおよび性との関連. *応用心理学研究*, *40*, 213-223.

Ysseldyk, R., Matheson, K., & Anisman, H. (2009). Forgiveness and the appraisal-coping process in response to relationship conflicts: Implications for depressive symptoms. *Stress*, *12*, 152-166.

## 第2節 架空の浮気場面への予測行動尺度と一般コーピングの関連

### 目的

第2節においては、ABSIIの各下位尺度が、恋愛関係のみならず他の対人関係に関わる心理的変数との関連を検討することで、ABSIIが測定する心理的概念の特徴についてより詳細に捉えることを目的とする。

本研究では、既存の研究で用いられることの多い、一般的な友人関係におけるコーピング方略とABSIIの関連を検討する。本章第1節で作成されたABSIIは個人の実際の恋愛関係を下敷きにした形で、架空の浮気場面に対する各種の予測された行動を個人がどの程度取りうるかを測定するものである。これは予測された葛藤についてどのように対処行動—コーピング—を取るかというかを測定しているとも言い換えられるだろう。ABSIIではあくまで現在の恋愛関係に基づき、提示した刺激に対する予測としてのコーピングを測定していると考えられる。一般的な友人関係における個人の各種のストレスコーピング方略はその他の人間関係でのストレスコーピング方略としてもある程度適用されることが考えられるが、どの程度一貫してABSIIにも反映されているのだろうか。Seiffge-Krenke(2011)は青年のコーピング研究についてレビューした論文の中で、青年が親、友人、恋人とのそれぞれの関係で用いるコーピング方略がどの程度似ていて違うかについて研究した研究は極めて少なく、またその点について検討した研究では関係のタイプによってコーピング方略は異なると報告している。そのため本研究においても基本的にISI-AとABSIIで測定されるコーピング方略には隔たりがあると考えられるが、両者の共通点や独自の点について比較検討を行うことで、ABSIIが測定する内容についてより理解をすることが可能と考えられる。

コーピングについてはストレス理論に基づいた研究が国内外を問わず盛んに行われており、日本国内の代表的な一般的な対人関係、あるいは一般的な友人関係におけるコーピング尺度としてInterpersonal Stress-Coping Inventory(以降ISIと略記)が挙げられる(加藤, 2000, 2001, 2008)。ISIの下位尺度としては、「ポジティブ関係コーピング」「ネガティブ関係コーピング」「解決先送りコーピング」の3下位尺度が安定して得られている(加藤, 2008)。加藤(2001, 2008)によれば「ポジティブ関係コーピング」は対人関係で生じたストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善し、よりよい関係を築こうと努力するコー

ピング方略群で、「ネガティブ関係コーピング」とはそのような関係を放棄・崩壊するようなコーピングで、「解決先送りコーピング」はストレスフルなイベントを問題とせず、時間が解決するのを待つようなコーピング方略群とされる。これらの内容は本章第 1 節で作成した ABSII では直接的には参照されていないものの、ABSII の下位尺度にも共通する部分があると考えられる。例えば ABSII の「対話志向」はさしあたり関係の修復を目指す下位尺度と考えられるため「ポジティブ関係コーピング」と、「別れ志向」「攻撃志向」は関係の放棄・崩壊に関わると考えられるため「ネガティブ関係コーピング」と、「沈黙志向」はそのまま「解決先送りコーピング」と、それぞれ内容的に重複している可能性があるだろう。「ライバル志向」に関しては積極的な事態の解決を望むという点では「ポジティブ関係コーピング」と、ストレスをライバルにぶつけに行く可能性があるという点では「ネガティブ関係コーピング」との関わりも考えられる。

ISI で測定される個人の友人関係における全般的なストレスに対するコーピングと、ABSII で主に測定する現在恋愛関係にある個人が自分の実際の恋人の裏切りを想定した場合にどのように対処行動を予測するかということには、測定する心理的概念の間に様々な隔たりが存在する。例えば ISI ではストレスが過去に実際にあった友人関係における問題を漠然と問う形式であるのに対し、ABSII では実際の恋愛関係で、現実には起こっていない具体的な葛藤を指定している形式である。過去に実際に自分が取った行動の傾向と、まだ起こってもいない葛藤への予測では、対処行動が違う可能性は考えられる。また、友人関係と恋愛関係では、個人がその関係に求める役割や重要性がそれぞれ違うために、友人関係で特定のコーピング方略を用いるからといって、恋愛関係では同じような種類のコーピングを使用しない可能性も考えられる。更に ABSII では現在の恋愛関係を想定した上で回答を求めため、回答内容には多分に個人がその関係にどこまで執着しているか等の心理的要因が影響を及ぼしていることが考えられるが、ISI で回答を求めているのはあくまで一般的な対人関係あるいは友人関係における葛藤解決の方略であるため、特定の個人との関係に幾分準拠しない測定を行う尺度であることが考えられる。このように ISI と ABSII で測定する内容には概念的な隔たりがいくつも存在するが、対人関係上の葛藤場面に対する個人のコーピング方略を測定する点では共通する部分があるだろう。両者が測定している内容がどの程度一致しているのかを検討することには、基本的に実際の恋愛関係に準拠した行動を測定する ABSII の独自性を知る上で有用であると考えられる。

ISI で測定する内容と ABSII の測定する内容は上述のように隔たりが複数考えられる。

両者の大きな違いは、White & Mullen(1989)の嫉妬の定義とも重複する部分があるが、特定の恋愛関係で得ている利益あるいは損失と、それに関連して利益や損失を手放すことに対する恐怖あるいは解放等の違いである。それら関係固有で得られている要因により、一般的な友人関係で個人が用いる対処方略は、特定の恋愛関係における対処方略と異なりやすいことが考えられる。加藤(2009)ではそういった対処方略に影響を及ぼしうる要因をコーピング資源としており、それは恋人関係では性格、喫煙の有無、精神的な状態、知的能力、コミュニケーション、コミットメント、経済状態、サポート、余暇、子どもの有無、セックス妻の就労状況、両親の離婚の有無、遺伝やアタッチメントなどであるとしている。そこで本研究では ABSII の本来の使用用途に沿う形式で回答を求めた交際群の回答結果に加え、恋愛関係を経験していない個人に「自分に恋人ができたらどう行動すると思うか」という教示のもと、ABSII に回答を求めた結果を用いて、比較検討を行うこととする。交際なし群の ABSII への回答には、加藤(2009)の言うコーピング資源が交際群に比べ相対的に含まれづらいだろう。そのため、交際なし群では ABSII への回答においても、ISI で測定されるような個人のその他の人間関係に関わる対処方略による影響が交際群に比べ顕著である可能性が考えられる。すなわち、本研究においては交際なし群における ABSII と ISI の関連は交際群における ABSII と ISI の関連よりも全般的に強いと予測される。この点について確認を行うことで、関係固有のコーピング資源を含まない ABSII への回答と関係固有のコーピング資源を考慮に入れた ABSII への回答では一般的な友人関係における対処方略との関連がどのように変化しうるかを検討できるだろう。

なお、本研究においては「過去数年以内に恋愛関係にあったが、現在は恋人がいない」群の回答結果については、ABSII にて想起する恋人との関係が過去の特定の人物との恋愛関係で得られた経験に影響を受けやすく、かつ過去の恋人の浮気場面に対する反応を統制・分析することには困難が伴う可能性を考慮して、交際群・交際なし群のどちらにも加えず、分析に用いないこととする。

## 方法

### 1. 調査協力者

大学生 282 名 (平均年齢 19.27 歳,  $SD=1.15$ , 18 歳~26 歳, 男性 110 名, 女性 172 名) に質問紙調査を行い, そのうち 25 歳未満で結婚しておらず, 恋人のいる 93 名(平均年齢 19.57 歳,  $SD=1.24$ , 18 歳~23 歳, 男性 34 名, 女性 59 名)を交際群とし, 現在までに恋人がいたことがないと回答した 65 名 (平均年齢 19.00 歳,  $SD=.83$ , 18 歳~21 歳, 男性 19 名, 女性 46 名) を交際なし群とした。

## 2. 測定尺度

フェイスシートにて学年・年齢・性別について回答を求め, さらに現在交際中の恋人の有無と以下の質問紙への回答を求めた。

### (1) 交際経験:

「あなたは, 今, 恋人同士として交際されている特定の方がいらっしゃいますか。あなた自身に当てはまる数字を選んで, その数字に○をつけてください。」という質問を設け, それに対して「1. 現在, いる。」「2. 過去数年以内に, いた。」「3. 今までに, いない。」「4. その他」の 4 つの中から回答を求めた。その際, 次に続く ABSII の回答に際して, 恋愛経験の質問に対して「1. と答えた方 (現在, 特定の交際相手がいる方) は, その方のお名前を X として, X さんとの関係において, 普段あなたがどのような傾向にあるかをお答えください。 2. と答えた方 (過去数年以内に特定の交際相手があった方) は, 特に心に残っているおひとりの方のお名前を X として, X さんとの関係において, 当時, 普段あなたがどのような傾向にあったかをお答えください。 3. や 4. と答えた方 (今までに特定の交際相手がいなかった方やその他) は, これから自分に恋人の X さんができたとして, X さんとの関係において, あなた自身はどのような傾向にあるだろうと思うかを, できる範囲でお答えください。答えにくい場合は, 無理に回答していただく必要はございません」という教示文を示し, これに注意して回答するよう求めた。

### (2) ABSII:

第 1 節において作成された尺度を用いた。Guerrero, Hannawa, & Babin(2011)や Rusbult(1987), 相馬・山内・浦(2003), 和田(2015)などを参考に作成された尺度で, 直接的にパートナーとの別れを目指す「別れ志向」, パートナーへネガティブな感情をそのまま表現する「攻撃志向」, パートナーと自分の気持ちを冷静に伝え合おうとする「対話志向」, 葛藤について触れずいつも通りの行動を取る「沈黙志向」, ライバルへの接触を試みる「ライバル志向」の 5 因子構造を持つ 22 項目からなる。各項目に対して「1.当てはまらない」~「5.当てはまる」の 5 件法にて回答を求めた。本研究での  $\alpha$  係数は順に  $\alpha$

=.85, .82, .78, .86, .63 であった。最後の「ライバル志向」に関しては  $\alpha$  係数が若干低めであったものの、許容できる範囲内と判断して分析に用いた。回答の際には (1) の交際経験に基づき、実在の恋人あるいは自分に将来できた恋人の名前を「Xさん」として、回答を求めた。

### (3) ISI-A :

加藤(2001)による友人関係に起因するストレスフルなイベントに対するコーピングの個人差を測定する尺度で、3 下位尺度 15 項目から構成される、加藤(2000)の対人ストレスコーピング尺度 ISI の短縮版に相当する。加藤(2001)によれば「ポジティブ関係コーピング」はストレスフルなイベントに対してよりより関係を築こうと努力する因子、「ネガティブ関係コーピング」は、ストレスフルなイベントを抱えた友人関係を放棄・崩壊するような因子、「解決先送りコーピング」はストレスフルなイベントを問題とせず、無視するような行動を選択する因子とされる。本研究では加藤(2001)に倣い、「皆さんが実際に経験した、友人関係で生じた対人ストレスイベントに対して、普段、どのように考えたり、行動したりしていますか」という教示を与え、「0.あてはまらない」～「3.よくあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。本研究での  $\alpha$  係数は順に、 $\alpha$  = .79, .83, .79 であった。

## 3. 調査手続き

2016 年 11 月～1 月に上記の質問紙を関西地方・北陸地方の複数の大学の講義中に実施した。倫理的配慮として調査の匿名性、回答の非強制性、回答に困難を感じた場合に中断できることを説明した上で、回答に不備のない協力者を分析対象とした。なお、本研究では全ての調査協力者について、第 1 節と重複した回答がないように、既にもう片方の研究に協力している場合には回答をせずに質問紙を白紙で提出するよう、口頭で説明を行った。

## 結果

### 1. 記述統計量

用いる各変数の記述統計量を群別に算出したものを Table5-4 に示す。本研究の目的は各下位尺度の群別の単純な得点差を求めることではないが、複数の下位尺度において有意な差が得られた。ABSII の「沈黙志向」は交際群よりも交際なし群において 0.1%水準で有意に高い値を示した。また同じく ABSII の「対話志向」については交際群の方が交際なし群

よりも 1%水準で有意に高い値を示した。さらに ISI-A の「ポジティブ関係コーピング」では交際群の方が交際なし群よりも 1%水準で有意に高い得点を示していた。

Table5-4 各変数の群別の記述統計量

尺度	変数	交際群(N=93)		なし群(N=65)		t値
		Mean	SD	Mean	SD	
ABSII (1~5点)	1. 攻撃志向	2.47	0.92	2.37	0.77	0.77
	2. 沈黙志向	2.14	0.87	3.03	0.92	- 6.23***
	3. 別れ志向	1.81	0.78	1.73	0.60	0.69
	4. 対話志向	3.83	0.88	3.46	0.74	2.77**
	5. ライバル志向	2.64	0.91	2.79	0.76	- 1.08
ISI-A (0~3点)	6. ポジティブ	1.29	0.67	0.96	0.55	3.29**
	7. ネガティブ	0.94	0.68	0.89	0.71	0.40
	8. 先送り	1.56	0.65	1.41	0.69	1.38

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

### 3. 相関分析

#### (1) ABSII と友人関係におけるコーピングの関連

今回用いる各変数間の群別の相関係数、および群間の相関係数の差の検定結果を Table5-5 に示す。なお、異標本間の相関係数の差の検定には、岡田(1999)に倣い相関係数を  $z$  変換した上で  $\chi^2$  値を求め、相関係数の差の検定を行うこととした。まず交際群の結果について、ISI-A の下位尺度である「ポジティブ関係コーピング」は ABSII の「別れ志向」とのみ、 $r = .20 (p < .10)$  の有意傾向の正の相関を示したが、その他の下位尺度とはほぼ無関連となった( $r = -.05 \sim .04, n.s.$ )。一方で交際なし群では交際群と違い、「ポジティブ関係コーピング」は有意ではないものの ABSII の「攻撃志向」では  $r = .19 (n.s.)$  と係数では正の関連となり、「沈黙志向」では  $r = -.29 (p < .05)$  の有意な負の関連、「別れ志向」では  $r = .33 (p < .01)$  の有意な正の関連、「対話志向」では  $r = .41 (p < .001)$  の有意な正の関連を示し、「ライバル志向」ではほぼ無関連となっていた  $r = -.01 (n.s.)$ 。「ポジティブ関係コーピング」と「対話志向」の関連は Table5 全体の中でも唯一交際群と交際なし群の相関係数の差の検定が有意になった箇所であった。「ポジティブ関係コーピング」との関連では「別れ志向」との関連が両群

とも有意あるいは有意傾向の正の関連を示し、「ライバル志向」との関連が両群ともにほぼ無関連となった点では一致していたが、その他の下位尺度においては両群が幾分異なった関連パターンを示していたといえよう。

次に ISI-A の「ネガティブ関係コーピング」について、交際群では、「ネガティブ関係コーピング」は ABSII の全ての下位尺度とほぼ無関連であった( $r = -.01 \sim .08$ , *n.s.*)。その一方で交際なし群では、「ネガティブ関係コーピング」は「沈黙志向」と有意とはならずとも係数から見れば  $r = .20$ (*n.s.*)の正の相関を示し、また「ライバル志向」では  $r = -.33$ ( $p < .01$ )の有意な負の相関係数を示した。その他の「攻撃志向」「別れ志向」「対話志向」においては交際群と同様に無関連であった( $r = -.06 \sim .06$ , *n.s.*)。また相関係数の差の検定を行ったが、「ネガティブ関係コーピング」では ABSII の下位尺度との関連において両群の相関係数に統計的に有意な差は得られなかった。「ネガティブ関係コーピング」については、「攻撃志向」「別れ志向」「対話志向」では両群ともにほぼ無関連であった点では一致していたが、交際なし群のみで「沈黙志向」が有意ではないが正の相関係数を示した点、「ライバル志向」において交際なし群のみが有意な正の相関係数を示した点では統計的に有意な差は得られなかったものの異なった関連を示していたといえる。

最後に「解決先送りコーピング」について、交際群での「解決先送りコーピング」は ABSII の「沈黙志向」とのみ、 $r = .28$ ( $p < .01$ )の有意な正の相関を示したが、その他の下位尺度とはほぼ無関連となった( $r = -.03 \sim .09$ , *n.s.*)。交際なし群では「攻撃志向」と有意ではないが負の相関係数を示し( $r = -.18$ , *n.s.*)、また「沈黙志向」で有意傾向の正の関連を示して  $r = .22$ ,  $p < .10$ 、その他の下位尺度ではほぼ無関連であった( $r = -.08 \sim -.02$ , *n.s.*)。また相関係数の差の検定を行ったが、「解決先送りコーピング」でも ABSII の下位尺度との関連において両群の相関係数に統計的に有意な差は得られなかった。そのため、「解決先送りコーピング」では「沈黙志向」が両群において一貫して有意あるいは有意傾向の正の関連を示し、「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」がほぼ無関連であった点で一致しており、「攻撃志向」で交際なし群においてのみ有意でない負の相関係数が得られた点のみ両群において違った関連パターンを示していたといえる。

Table5-5. 交際群と交際なし群におけるABSIIとISI-Aの関連, および相関係数の差の検定

	ポジティブ			ネガティブ			先送り		
	交際群	なし群	$\chi^2$	交際群	なし群	$\chi^2$	交際群	なし群	$\chi^2$
攻撃	-.01	.19	<i>n.s.</i>	.04	.06	<i>n.s.</i>	.00	-.18	<i>n.s.</i>
沈黙	-.05	-.29*	<i>n.s.</i>	.00	.20	<i>n.s.</i>	.28**	.22 <sup>†</sup>	<i>n.s.</i>
別れ	.20 <sup>†</sup>	.33**	<i>n.s.</i>	-.01	-.06	<i>n.s.</i>	.02	-.02	<i>n.s.</i>
対話	.04	.41***	5.74*	.06	-.06	<i>n.s.</i>	-.08	-.02	<i>n.s.</i>
ライバル	.02	-.01	<i>n.s.</i>	.08	.33**	<i>n.s.</i>	-.07	-.08	<i>n.s.</i>

<sup>†</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

## 考察

### 1. 記述統計量から

交際群・交際なし群の両群の記述統計量について、まず ABSII の「沈黙志向」については交際なし群の方が交際群よりも有意に高い得点を示した。もちろん同じ ABSII に回答しているとはいえ、現実と想像の恋愛関係をもとに想定しているという違いはあることを前提に考える必要があるが、この結果は現実の恋愛関係を想定した者よりも、想像の恋愛関係を想定した者の方が、本研究で提示した浮気場面であるデート場面を目撃したとしても一旦静観する行動を取るだろうと予測したということである。この結果は交際群では事態を重く見て何とか問題を解決しようとする傾向が交際なし群より強かった可能性や、交際なし群では想像の恋人との関係において事を荒立てるよりもひとまず静観することで事態をやり過ごそうとする傾向にあった可能性などが考えられるだろう。「対話志向」では交際群が交際なし群に比べ有意に高い得点を示した結果から、交際群では浮気をしていたかもしれないパートナーとの関係の重要さから関係を繋ぎ止める努力を自分から行う傾向が交際なし群に比べて高かった可能性が考えられる。また ISI-A の「ポジティブ関係コーピング」においても交際群が交際なし群よりも有意に高い得点を示していたため、交際群の方が全般的に友人関係においても葛藤が起きた際に何とか事態の解決に向けて能動的に働きかける傾向が強いことが考えられた。この傾向は神菌・黒川・坂田(1996)や高坂(2011)などで恋愛関係にある青年が恋愛関係にない青年よりも自尊感情や精神的健康が高く、自我同一性の確立の度合いが高いとするような結果に符合しているとも考えられる。今回の結果

において交際群の方が「対話志向」や「ポジティブ関係コーピング」得点が有意に高かったことについては、交際している相手がいることで精神的な余裕や成長がもたらされ、結果として恋人や一般的な友人関係に対して現実場面でも想定場面の中でも向社会的な方向の行動を行いやすい傾向にある可能性が考えられるだろう。また同時にこれらの結果は、身近な人間関係における葛藤に対して積極的に働きかけて解決しようとするほど良好な対人関係を求める傾向にある個人が、恋愛関係を持つことを望みやすいことを反映している可能性も考えられる。

## 2. 相関分析から

一般的な友人関係における葛藤対処方略と ABSII の下位尺度にはある程度共通する部分と考えられ、概念的な内容から、例えば ISI-A の「ポジティブ関係コーピング」は「対話志向」「ライバル志向」と、「ネガティブ関係コーピング」は「別れ志向」「攻撃志向」「ライバル志向」と、「解決先送りコーピング」は「沈黙志向」と関わる可能性が考えられていた。相関分析の結果、まず交際群の結果から、ISI-A の各下位尺度は本章第 1 節において作成した ABSII を本来の使用用途に沿って測定した場合、一部を除きほぼ無関連であることが示されたといえよう。これは先述の Seiffge-Krenke(2011)の指摘に沿った結果であったといえる。つまり、個人が一般的な友人関係において過去に採ってきたコーピングの傾向は、個人が実在の自分の恋人が裏切ったと想定した際に取りうる各種の行動をどう予測するかということと、恐らくは加藤(2009)のいうコーピング資源の影響もあって、ほぼ無関連であることが示されたということである。

その中で、交際群において ISI-A の「解決先送り」コーピングは ABSII の「沈黙志向」とのみ有意な正の相関係数を示していた。この傾向は交際なし群においても有意傾向ではあったが一貫して見られる傾向であった。解決先送りコーピングは友人関係で起こったストレスフルなイベントがあった際にいったん解決を先送りにしてその場をおさめるコーピング傾向で、こちらの傾向が場面想定法による恋人との葛藤場面においても同様にその場で具体的な行動を起こさない傾向と関連していたということは、この解決を先送りにしてその場を静観する傾向だけは「ポジティブ関係コーピング」や「ネガティブ関係コーピング」とは違い、友人関係と恋愛関係、一般的な対人ストレスと限定的なストレス、経験と予測という尺度間の測定内容の溝や関係固有の要因であるコーピング資源を越えても幾分一貫して示される可能性が考えられた。この結果から、「沈黙志向」や「解決先送りコーピング」といった対処方略は他の対処方略に比べ、その場の状況やどんな関係での葛

藤か等の直接的な要因に幾分影響を受けにくく、もっと根本的な、個人の気質的な部分により影響を受けやすい対処方略である可能性が示唆されているといえるだろう。本章第 1 節で「沈黙志向」がそもそも自分の恋愛関係に執着しない傾向である可能性が見出されたことや、橋本(2000)で友人関係における「無関心群」のような、自分のことも他人のこともあまり顧みないが心理的不健康の低い群が得られたことから、これらの「解決先送りコーピング」や「沈黙志向」といった葛藤対処方略を採りやすい個人は愛着スタイルの回避型に分類されるような個人であった可能性も考えられる。

また、その他に交際群・交際無し群で一貫して有意、あるいは有意傾向の関連がみられた結果として、ISI-A の「ポジティブ関係コーピング」と ABSII の「別れ志向」の正の関連がある。尺度の内容として「ポジティブ関係コーピング」は一般的な友人関係において積極的にその関係を改善し、よりよい関係を築こうと努力する葛藤対処方略であるため、「別れ志向」のような葛藤時に別れを選択する傾向とはどちらかといえば正逆の傾向であるようにも捉えられ、想定外の結果であったといえる。今回の結果で両群においてもこの「ポジティブ関係コーピング」と「別れ志向」が正の関連を示した理由を考察するならば、例えば加藤(2008)が示すように、複数の先行研究において積極的に関係を改善させるようなコーピングが関係は改善する可能性はあるものの、かえって個人の精神的健康を悪くするか、ほとんど影響がなかったとする研究結果があったことと、本章第 1 節において「別れ志向」が「ストレス反応」の全ての下位尺度と一貫して有意な正の関連を示したことを参照すると、「ポジティブ関係コーピング」を一般的な友人関係で用いるような個人は対人関係上ストレスを貯めやすく、特に近い人間関係となる恋愛関係で相手に非があるような葛藤状況では別れを選択しやすい傾向があるのかもしれない。あるいは、それだけ良好な友人関係を維持しようとする個人ほど、恋愛関係の他にも良好な対人関係を複数維持しやすいために、自分の恋愛関係において不誠実な行いをするパートナーだと判明した際には、すぐにそのパートナーとの関係を切って他の良好な対人関係の中からパートナーを見つけようとするだけの一種のフットワークの軽さがある、とする見方もできるだろう。この点については概念的な内容からの考察ではもたらされない、興味深い結果であったため、今後の研究においても再現性の確認やプロセスの検討が必要とされるだろう。

交際なし群の相関分析結果との比較を見ると、コーピング資源の影響を比較的受けないと考えられる交際なし群ではやはり交際群に比べ想像上の恋愛場面の、浮気という特定の刺激を提示した際の反応においても ISI-A の各下位尺度と関連する部分が散見されたとい

える。概念的な内容に基づく予測はある程度交際なし群では支持されたようで、特に両群の相関係数の差の検定で有意な差まで見られた「ポジティブ関係コーピング」と「対話志向」の関連においては、交際なし群のみで有意な正の相関係数が得られていた。つまり、コーピング資源の影響を受けにくい交際なし群では友人関係において関係を改善しようとする傾向が如実に ABSII の場面想定においても適用されていたが、コーピング資源を考慮に入れる交際群では「対話志向」は全く別の要因の影響を受けるようになり、友人関係における葛藤対処方略とは無関連となる、ということである。同様の傾向は「ポジティブ関係コーピング」と「攻撃志向」「沈黙志向」との関連や「ネガティブ関係コーピング」と「沈黙志向」「ライバル志向」との関連、「解決先送りコーピング」と「攻撃志向」との関連においても観察された。そのため、やはり個人の一般的な友人関係における葛藤対処方略は、関係固有の要因であるコーピング資源を考慮しない場合においては恋愛関係の葛藤場面においてもある程度反映される部分があるが、コーピング資源を考慮した場合にはこれらの関連のほとんどには別の法則が適用されるようになり、他の人間関係での個人の対処方略からの予測が難しくなることが本研究の結果から示唆された。

### 3. 本研究の意義と今後の課題

本研究の目的は、本章第 1 節において作成した ABSII が既存の他の人間関係におけるコーピング尺度とどのような関係にあるのかを検討することで、ABSII の独自性を検討することであった。その結果、ABSII で特定の恋愛関係を想定して回答を求める場合には一般的な友人関係における葛藤対処方略による予測はほとんど意味をなさず、コーピング資源等の関係固有の要因を考慮することによって、個人が恋愛関係における特に浮気場面においてどのような行動を取りうるかを予測しうることが示されたといえよう。この結果は Seiffge-Krenke(2011)の指摘に沿ったもので、違った対人関係に対するコーピングは基本的には互いに関連しないという知見を支持するものである。しかし本研究の結果から、交際経験なしの群においては比較的一般的なコーピングと恋愛関係における具体的な葛藤場面に対する行動が関連する部分があったこと、「解決先送りコーピング」と「沈黙志向」が両群で幾分一貫して関連を示していたことから、違った領域のコーピング間でも、無関連を示しやすい種類とそうでない種類のものがある可能性についても考えられる。私たちが例えば恋愛関係に入った時、どこからその関係に固有のコーピングを行うようになるのかを検討していくことも、今後のコーピング研究、領域別の対人関係上の行動に関わる研究に資することになるだろう。

#### 4. 本節のまとめと次節への導入

ABSII で測定する内容は捉え方によっては架空の未だ起こってはいない対人ストレスへのコーピングであるとも考えられる。そのため、それが加藤(2001)の ISI-A で測定される一般的な友人関係におけるコーピング傾向とどの程度関連するかを検討することで、ABSII の測定する内容との共通性・独自性を見出すことを目的としていた。得られた結果から、現在恋愛関係にある群では ABSII の各下位尺度と ISI-A の各下位尺度は「沈黙志向」と「解決先送りコーピング」を除きほぼ無関連となった。一方で具体的な恋人ではなく仮想の恋人との葛藤を思い浮かべて貰った交際なし群においては ABSII への回答結果は ISI-A と比較的関連する部分があった。そのため回答する際に具体的な恋人との関係を想起して貰う場合には、個人がその関係で得てきた固有のコーピング資源などの影響によってか、ABSII で回答される内容は ISI-A によって測定されるような一般的なコーピング傾向とは違った法則に支配されることが示唆された。

本章第 1 節と第 2 節では、新たに作成した ABSII の各下位尺度が他の各変数とどのように関わるかを検討するものであったが、本来葛藤場面に際して個人が単一の行動のみをとるとは考え難く、葛藤場面に対して取られる行動には一定の類型があると考えられる。続く第 3 節では、ABSII の下位尺度得点によって得られる類型について検討を行うこととする。

#### 引用文献

Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The communicative responses to jealousy scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, 5, 223-249.

橋本 剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. *教育心理学研究*, 48, 94-102.

神薗 紀幸・黒川 正流・坂田 桐子 (1996). 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康との関連. *広島大学総合科学部紀要IV理系編*, 22, 93-104.

- 加藤 司 (2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
- 加藤 司 (2001). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究, 72, 57-63.
- 加藤 司 (2008). 対人ストレスコーピングハンドブック—人間関係のストレスにどう立ち向かうか— ナカニシヤ出版
- 加藤 司 (2009). 離婚の心理学—パートナーを失う原因とその対処— ナカニシヤ出版
- 高坂 康雅 (2011). " 恋人を欲しいと思わない青年" の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- Rusbult, C. E. (1987). Responses to dissatisfaction in close relationships: The exit-voice-loyalty-neglect model. In D. Perlman., & S. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration* (pp.209-237). California: Sage.
- Seiffge - Krenke, I. (2011). Coping with relationship stressors: A decade review. *Journal of research on adolescence*, 21, 196-210.
- 相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.
- 和田 実 (2015). 恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応: 嫉妬の強さおよび性との関連 応用心理学研究, 40, 213-223.
- White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.

### 第3節 浮気場面への予測された行動の類型に関する探索的検討

#### 問題と目的

親密な関係は個人に重要な影響を及ぼしうるものであり、ゆえに浮気は関係の崩壊に直結しうる(Feldman & Cauffman, 1999; Hall & Fincham, 2006)だけでなく、浮気による嫉妬や反応・行動が個人の精神状態も脅かしかねない。荻野(1983)が指摘するように、嫉妬の感情自体に問題があるわけではなく、その感情をどう処理するかにより問題が発生しうるといえよう。そのため、浮気場面に対する個人の選択する行動について検討することには、関係崩壊のプロセスや個人の精神的健康を検討する上ででも意義があるだろう。なお、本研究では浮気・浮気場面は Buss(2000)などを参考に「自分のパートナーと第三者の心身の接近を示すような行動・場面」とする。

浮気場面にて浮気された個人がどのように行動しうるか検討する尺度として、本章第1節では Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy(1995)や Guerrero, Hannawa, & Babin(2011)などによる Communicative Response to Jealousy Scale (CRJS)や Rusbult(1987)による Exit-Voice-Loyalty-Neglect(EVLN)モデルを統合して捉え、架空の浮気場面への予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity(ABSII)を作成した。ABSII は場面想定法を用いた尺度で、自分が現実のパートナーに浮気されたと考えた際に予測される行動の傾向を測定する。ABSII はパートナーに対し攻撃的態度を予測する「攻撃志向」、パートナーと真摯に向き合う「対話志向」、自分からは浮気場面について特に解決に出ようとししない「沈黙志向」、パートナーとの別れを積極的に考える「別れ志向」、関係に侵入してきたライバルと接触する方向での解決を予測する「ライバル志向」の5下位尺度からなる。ABSII は尺度の信頼性が確認されており、また提示された刺激への認知的評価、嫉妬深さ、ストレス反応、投資モデルを測定する尺度との関連から、おおむね尺度の構成概念的妥当性を支持する結果が得られている。

嫉妬した際、浮気された際に個人が常に一種類の行動のみを選択するとは Guerrero et al.(2011)の CRJS や本章第1節にて作成した ABSII の下位尺度同士が必ずしも無関連でなかった点からも考え難い。すると浮気場面に対する複数の反応・行動は、実際にはどのよ

うな類型・組み合わせで選択されるのだろうか。浮気・嫉妬に際しての反応行動に関しては Bevan(2013)も指摘する通り、研究の絶対数が少ないために体系的な検討が薄いのが現状である。そのため、嫉妬や浮気に際しての個々の対処行動が他の変数とどのように関連するかを検討した研究は CRJS の開発者である Guerrero(2014)などの一連の研究や本章第 1 節の他に、国内でも Rusbult(1987)の EVLN モデルを用いた相馬・山内・浦(2003)や金政(2006)なども少数ながら存在するが、類型についての研究はほぼ見受けられない。

嫉妬した際の行動選択による類型的な試みとして、先行研究では Guerrero et al.(2011)による CRJS で得られた結果を中心に嫉妬した際の個人の行動に関する先行研究を概観した、Bevan(2013)による Jealousy Expression Profile Theory(JEPT)がある。JEPT では Guerrero et al.(2011)の CRJS の 4 つの下位尺度それぞれに対応した 4 タイプ(破壊的嫉妬表出、建設的嫉妬表出、回避的嫉妬表出、ライバルに向けた嫉妬の表出)が仮定されており、嫉妬がどのように表出されうるかについて、各タイプに属する者の心理的特徴について複数の観点から記述されている。例えば、嫉妬した際に「破壊的嫉妬表出」を行う個人は関係に不満足で疑い深く、反対に「建設的嫉妬表出」を行う個人は関係に満足しており、(関係を喪失する)恐怖を感じている、等である。この JEPT は個人の関係満足感や関係の進展度、嫉妬傾向や性別などを統合して嫉妬への反応行動を捉える有用な理論であるとされる(Bevan, 2013)。ただし、JEPT では嫉妬への反応行動がどう複合して選択されうるかは言及されておらず、各タイプにはそれぞれ象徴的な一種類の行動が仮定されるのみである。ゆえに例えば「破壊的嫉妬表出」を行う者が「回避的嫉妬表出」を行わないか等は定かでない。また JEPT では各タイプ間で人物像が似通っており、弁別が困難である点に問題がある。

浮気場面や嫉妬に対して選択される行動は一種のストレスコーピングでもあると考えられ、コーピング研究の領域では尾関・原口・津田(1994)や中村・上里(2004)など、各種のコーピングをクラスター分析によって類型化して捉えるコーピングパターンの先行研究も散見される。葛藤やストレスに際して、コーピング行動の組み合わせによるパターンを検討することには、中村・上里(2004)が指摘するようにより現実生活上のコーピングや行動を反映できるという観点で、意義があると考えられる。ゆえに浮気場面への反応行動がどのような類型で選択されうるかを検討することは、親密な関係において個人が葛藤を抱えた際の反応やその心理的要因を理解するにあたり、現実的な実態を捉えることに貢献するであろう。

そこで本研究では本章第1節で作成した ABSII の各下位尺度得点を用いてクラスター分析を行い、ABSII の尺度得点とその他の尺度得点を用いることで、得られる類型とその特徴・違いを探索的に検討することを目的とする。ABSII の他に類型の検討に用いる尺度として、まず個人の浮気場面に対する認知的評価が予測される行動に影響を及ぼすと考えられるため、加藤(2001)の認知的評価尺度を用いる。また、親密な関係での嫉妬深さも、浮気場面に対して選択される行動を左右すると考えられる。そのため、Pfeiffer & Wong(1989)に倣い、第2章で作成した嫉妬傾向を認知・情動・行動の三次元から捉えられる多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いる。本研究ではこれらの尺度得点が、クラスター間でどう異なるか比較検討を行うことで、各クラスターの考察を行う。また、これら2つの尺度は既に本章第1節で ABSII との関連が報告されており、本研究ではクラスター分析を行う前に尺度間の相関関係の確認を行うこととする。

ABSII で測定される架空の浮気場面に対する予測行動と、実際に浮気された際の冷静さを欠いた行動との間には乖離が考えられる。しかし一定の浮気場面に際し予測される行動の類型を捉え、各種の類型の特徴を検討することで浮気という葛藤に際してどのような個人がどのような解決を試みるか、その心的力動を捉えることにつながるだろう。その意味で、ABSII の類型の研究には意義があろう。

なお、和田(2015)、Bevan(2013)でも指摘されているが、嫉妬や浮気に関する研究では親密な関係での嫉妬傾向等に関しては性差に注目した研究も多く、しかしその知見は一貫しているとは言い難い。本章第1節では記述統計量として ABSII の「攻撃志向」で女性が、「ライバル志向」で男性が有意に高かったが、本研究でも用いる多次元恋愛関係嫉妬尺度や認知的評価尺度を含む他の全ての尺度得点で男女差がみられなかった。先行研究の少なさ・不一致からも仮説を導くことが困難であるため、本研究では安易な性差についての結論づけは目的としない。ただし知見の蓄積のため下位尺度得点とクラスターの人数分布が男女で異なるか、併せて検討することとする。

## 方法

**調査協力者** 大学生 777 名に対して質問紙調査を行い、そのうち回答に欠損がなく、現在恋人がいると回答した 18~23 歳の大学生 205 名（全体の 26.38%、男性 67 名、女性 138

名, 平均年齢 19.58 歳,  $SD=1.13$ ) を本研究の分析対象者とした。

### 測定尺度

**ABSII** : Rusbult(1987)の EVLN モデルや Guerrero et al.(2011)の CRJS を参考に, 「対話志向」「別れ志向」「攻撃志向」「沈黙志向」「ライバル志向」の 5 下位尺度計 22 項目で構成された尺度である。教示として, 現在交際している人物の名前を X さんとして想起させた上で, 「この質問ではある場面を想像して回答して頂きます。《想像場面: あなたはとある土曜日の夜, あなたの恋人 X さんが, あなたの知らない人物 Y さんとデートしているように見える姿をたまたま目撃してしまいました。》もしも仮にこのようなことがあったら, あなたはその後, どんな行動を取ると思いますか。あるいはどんなことを考えると思いますか。」という教示を与え, 「1.当てはまらない」～「5.当てはまる」の 5 件法にて回答を求めた。尺度の信頼性と妥当性については本章第 1 節で検討されている。本研究での  $\alpha$  係数は順に  $\alpha=.86, .86, .80, .83, .68$  であった。

**多次元恋愛関係嫉妬尺度** : ABSII と同様に現在交際している X さんとの普段の関係の中で各項目がどの程度当てはまるか, 「1.全く当てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。恋人が第三者に奪われることを疑う「猜疑的認知」, 関係への第三者の侵入に対する否定的感情を示す「排他的感情」, 関係の裏に第三者の存在を警戒・詮索する度合いの「警戒行動」の 3 下位尺度各 5 項目からなる。尺度の信頼性と妥当性は第 2 章で確認されている。 $\alpha$  係数は順に  $\alpha=.88, .82, .84$  であった。

**ストレスターの認知的評価尺度 (加藤, 2001)** : ABSII にて想起して貰った浮気場面をストレスターとしてどのように認知的に評価するか, 回答を求めた。「対処効力感」4 項目, 「脅威」3 項目, 「重要性」2 項目からなる。本尺度は「1.当てはまらない」～「5.当てはまる」の 5 件法にて回答を求めた。尺度の信頼性については加藤(2001)で確認されている。 $\alpha$  係数は順に  $\alpha=.75, .70, .70$  であった。

**調査手続き** 2016 年 10 月～2017 年 1 月に上記の尺度を含む質問紙を関西地方・北陸地方の 4 つの大学の講義中に実施, および調査者の知人を通じて質問紙の配布・回収を行った。倫理的配慮として調査の匿名性, 回答の非強制性, 回答に困難を感じた場合に中断できることを説明し, 質問紙のフェイスシートにも同様の旨を明記した上で, 回答に不備のない協力者を分析対象とした。なお質問紙は 2 種あり, 他の質問項目も含まれるが, 本研究では報告を省略する。

## 結果・考察

### 1. ABSII の確認的因子分析結果

ABSII の 22 項目について本章第 1 節と同様に確認的因子分析を行った結果、適合度は GFI=.833, AGFI=.793, CFI=.873, RMSEA=.077 となり、それぞれの因子から該当する項目への有意なパスが確認された。そのため 5 つの下位尺度についてそれぞれ項目得点の平均値を算出し、以降の分析に用いることとした。

### 2. 記述統計・相関分析結果の確認

まず、ABSII と多次元恋愛関係嫉妬尺度、認知的評価尺度の各下位尺度得点について、男女別で対応のない *t* 検定を行った結果を Table5-6 に示す。その結果、ABSII の「ライバル志向」において男性が女性に比べ 5%水準で有意に高い得点を示したが、その他の全ての尺度得点は男女で有意な差が得られなかった。

Table5-6 各変数の男女別記述統計量

尺度	変数	女性(N=138)		男性(N=67)		<i>t</i> 値	<i>Cohen's d</i>
		<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		
ABSII (1~5点)	1. 攻撃志向	2.56	0.99	2.34	1.00	1.47	0.22
	2. 沈黙志向	2.30	0.90	2.33	0.96	- 0.21	0.03
	3. 別れ志向	2.39	1.08	2.53	1.05	- 0.91	0.13
	4. 対話志向	3.86	0.84	3.62	0.94	1.87	0.27
	5. ライバル志向	2.56	0.87	2.87	0.96	- 2.28*	0.34
嫉妬傾向 (1~7点)	6. 猜疑的認知	3.07	1.39	3.21	1.46	- 0.69	0.10
	7. 排他的感情	4.58	1.33	4.47	1.28	0.57	0.08
	8. 警戒行動	3.20	1.38	3.32	1.34	- 0.62	0.09
認知的評価 (1~5点)	9. 対処効力感	2.62	0.77	2.77	0.86	- 1.26	0.19
	10. 脅威	4.03	0.81	3.80	0.84	1.90	0.28
	11. 重要性	3.89	0.91	3.92	0.98	- 0.19	0.03

\*  $p < .05$

本研究では男女で「ライバル志向」以外の全ての変数で得点に男女差が見られなかったため、ABSII と多次元恋愛関係嫉妬尺度、認知的評価尺度の各下位尺度得点間の、調査協

力者全体での相関係数を算出した結果を Table5-7 に示す。相関分析の結果、本章第 1 節と比べ「別れ志向」と「猜疑的認知」が無関連( $r=.13, n.s.$ )となり、「沈黙志向」と「警戒行動」の関連が有意な正の関連( $r=-.20, p<.01$ ), 「ライバル志向」と「重要性」が有意な正の関連( $r=.18, p<.01$ )を示し、細かな係数・有意性の違いはあったが、本章第 1 節とおおむね同様の相関係数が得られた。また、本章第 1 節では報告が省略されていたが、多次元恋愛関係嫉妬尺度とストレスへの認知的評価尺度との関連は「警戒行動」「対処効力感」のみ有意とならなかったが、他では有意な関連が得られた。嫉妬傾向は全般的に「対処効力感」との関連では負の( $r=-.11\sim-.26, n.s.\sim p<.001$ ), 「脅威」「重要性」との関連では正の有意な関連( $r=.23\sim.54, p<.001$ )を示した。

Table5-7. ABSIIと他尺度の相関係数(N=205)

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
ABSII	1.攻撃	-.24***	.44***	-.08	.09	.30***	.33***	.32***	-.12	.30***	.26***
	2.沈黙		-.05	-.28***	.03	-.06	-.29***	-.20**	.21**	-.40***	-.39***
	3.別れ			-.31***	.10	.13	-.05	.01	-.03	.05	.00
	4.対話				.23**	.03	.30***	.16*	.05	.23**	.34***
	5.ライバル					.19**	.19**	.18**	.01	.04	.18**
嫉妬傾向	6.猜疑的認知					.51***	.29***	-.16*	.29***	.24***	
	7.排他的感情						.37***	-.26***	.54***	.45***	
	8.警戒行動							-.11	.23***	.28***	
認知的評価	9.効力感								-.34***	-.27***	
	10.脅威									.57***	
	11.重要性									-	

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

### 3. 標準化した ABSII 得点を用いたクラスター分析・多重比較

次に ABSII の各下位尺度の標準化得点を投入した K-means 法によるクラスター分析を行い、クラスター数を 3~5 個に変えて分析を繰り返した結果、解釈可能性から 5 個による解釈が妥当であると判断した。クラスター分析の結果得られた人数は、第 1 クラスターが 45 名 (男性 10 名, 女性 35 名), 第 2 クラスターが 48 名 (男性 15 名, 女性 33 名), 第 3 クラスターが 28 名 (男性 9 名, 女性 19 名), 第 4 クラスターが 33 名 (男性 14 名, 女性 19 名), 第 5 クラスターが 51 名 (男性 19 名, 女性 32 名) であった。性別とクラスターの人数の偏りについて検討するため、 $\chi^2$  検定を行ったところ、有意とならなかった( $\chi^2(4)=4.20, n.s.$ )。そのため、クラスターに所属する人数には性別による偏りは認められな

ったといえる。

最終的に得られたクラスター分析での最終クラスター中心を Table5-8 に示す。まず第 1 クラスターは「対話志向」が高く、また「攻撃志向」以外の他の下位尺度が全て低いことから、恋人と冷静に話し合おうと試みる群と考えられたため、「対話群」とした。次に第 2 クラスターは「別れ志向」「沈黙志向」「ライバル志向」が他の群に比べやや高いことから、恋人への別れ、ライバルに対する働きかけによってストレスの解決を試みる一方、消極的な反応も予測しており、提示された刺激に対する反応を決めかねている・反応を保留している群であると考えられたため、「保留群」とした。第 3 クラスターは「沈黙志向」得点が最も高く他の下位尺度が全て低いことから、提示した刺激である恋人と第三者とのデート場面について、自分からは事を荒立てない群であると考えられたため、「沈黙群」とした。第 4 クラスターは「別れ志向」「攻撃志向」の高さ、「対話志向」「沈黙志向」の低さが特徴的で、激情のままに恋人に対し攻撃的になり、別れ行動を予測する群と考えられたため「別れ群」とした。第 5 クラスターは「ライバル志向」と「対話志向」の高さが特徴的である一方、他の下位尺度は相対的に平均的かやや低めで、能動的に恋人やライバルに働きかけることで解決を試みる群と考えられ、「能動群」とした。標準化した ABSII の下位尺度得点について、クラスターを要因とした多重比較を行った結果も Table5-8 に示している。

Table5-8. クラスターを要因とした標準化後のABSII下位尺度得点の分散分析結果

	1.対話群 (N=45)	2.保留群 (N=48)	3.沈黙群 (N=28)	4.別れ群 (N=33)	5.能動群 (N=51)	F値(4, 200)	$\eta^2$	多重比較
攻撃	- 0.51	0.26	- 0.88	0.94	0.09	24.12 ***	.33	3・1<5・2<4
沈黙	- 0.38	0.84	1.17	- 0.95	- 0.48	72.53 ***	.59	4<5・1<2・3
別れ	- 0.80	0.50	- 0.45	1.20	- 0.30	47.63 ***	.48	1<5<2<4, 3・5<2<4
対話	0.79	- 0.33	- 1.14	- 0.60	0.63	50.58 ***	.50	3<4・2<5・1
ライバル	- 0.83	0.48	- 0.77	- 0.53	1.05	77.53 ***	.61	1・3・4<2<5

\*\*\* $p<.001$

### 3. 認知的評価・嫉妬傾向から捉える各クラスターの特徴

各クラスターの多次元恋愛関係嫉妬尺度や認知的評価尺度の下位尺度の平均得点を算出し、クラスターを要因として一要因分散分析を行った結果、全ての下位尺度において群間の得点差が有意であった( $F(4, 200)=2.82\sim 13.35$ ,  $p<.001\sim .05$ ,  $\eta^2=.05\sim .21$ )ため、Tukey 法

による多重比較を行った(Table5-9)。多重比較の結果、「猜疑的認知」では「保留群」「能動群」「別れ群」が高く、「沈黙群」が最も低い群となり、「対話群」はどちらとも有意な差がなかった。「排他的感情」では「能動群」が「保留群」より高く、「別れ群」「対話群」「保留群」は最も低い「沈黙群」より高かった。「警戒行動」は「猜疑的認知」とほぼ同様に「能動群」「別れ群」「保留群」が高く、「沈黙群」が最も低い群で、「対話群」はどちらとも有意な差が得られなかった。「対処効力感」は分散分析では有意な差が得られたが、多重比較の結果では群間に有意な差が見られなかった。「脅威」に関しては「別れ群」「能動群」「対話群」が高く、「保留群」「沈黙群」が低かった。「重要性」では「能動群」「別れ群」「対話群」が高く、「沈黙群」が最も低い群であった。「保留群」は「能動群」「別れ群」より有意に低い得点だったが、「対話群」「沈黙群」とは有意な差が得られなかった。

Table5-9. クラスターを要因とした多次元恋愛関係嫉妬尺度、認知的評価尺度得点の分散分析結果

		1.対話群	2.保留群	3.沈黙群	4.別れ群	5.能動群	F値(4, 200)	$\eta^2$	多重比較
嫉妬傾向 (1~7点)	猜疑的認知	2.79	3.42	2.37	3.30	3.41	4.02 **	.07	3<4・5・2
	排他的感情	4.75	4.21	3.45	4.77	5.13	10.31 ***	.17	3<2<5, 3<2・1・4
	警戒行動	3.06	3.23	2.40	3.47	3.71	5.00 ***	.09	3<2・4・5
認知的評価 (1~5点)	対処効力感	2.74	2.90	2.79	2.46	2.45	2.82 *	.05	n.s.
	脅威	4.17	3.63	3.37	4.33	4.16	10.12 ***	.17	3・2<5・1・4
	重要性	3.99	3.57	3.11	4.21	4.36	13.35 ***	.21	3<1・4・5, 2<4・5

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

## 考察

### 1. 記述統計・相関分析の結果から

記述統計の結果から、本研究では「ライバル志向」のみで有意な差が得られていたため、浮気場面を提示された際にライバルに接触して解決を試みる傾向は男性で特に見られる可能性があることが、本章第1節や本研究の結果からも示された。しかし「ライバル志向」以外の変数では有意な差が得られなかったため、本研究で得られたほぼ全ての変数には大

きな性差がない可能性が示唆された。

相関分析の結果では、既述のように細かな係数の違いや有意性の変化は見受けられたが、ABSII と多次元恋愛関係嫉妬尺度および認知的評価尺度の関連は本章第1節とおおむね同様の結果が得られたといえる。多次元恋愛関係嫉妬尺度と認知的評価尺度の関連では、一般的に嫉妬深いほど提示された浮気場面に対する効力感が低く、また浮気場面を自身にとっての脅威、重要な影響を持つものとして評価しやすいことが示唆された。嫉妬傾向は一般的に親密な関係への強い執着を表すため、妥当な結果が得られているといえよう。

## 2. クラスタ分析・多重比較の結果から

まず「対話群」は「排他的感情」「警戒行動」や「脅威」がやや高い群であったため、恋人に対する執着がやや強いことに起因して相手との関係を修復しようとする群であることが考えられる。この群では ABSII の「攻撃志向」「別れ志向」「ライバル志向」が特徴的に低かったことも特徴に挙げられる。そのため、「対話群」に分類される青年は恋人に対する執着が強く、Andersen, Guerrero, Eloy, & Spitzberg(1995)が示すように、嫉妬した際に腹を割って対話を試みる傾向は関係満足感を高めるとされるため、関係の継続に対して最も積極的な群であるといえよう。この群の特徴は、Bevan(2013)による JEPT の建設的嫉妬表出とされる型と共通する部分があるといえる。なお本章第1節では「対話志向」は投資モデルのコミットメントや関係満足感とは正の関連にあったが、ストレス反応全般と無関連であったため、「対話志向」の高さがそのまま精神的に健康であることとは結びついていない可能性にも留意する必要があるだろう。

「保留群」は「猜疑的認知」や「排他的感情」などの嫉妬深さを持ち合わせる一方で状況をさほど脅威、重要とも評価していなかった。さらに特徴として「沈黙志向」や「別れ志向」、が高く、「ライバル志向」や「攻撃志向」もやや高いことが挙げられる。そのためこの群は相手への執着自体は強く「浮気」となる刺激の閾値が低い嫉妬深さを見せる一方で、「対話群」とは違い、提示された刺激はさほど重要ではなく、脅威ではないと評価しているために明確に一つの方向の対処行動を選択しかねている、あるいは保留するような群である可能性が考えられた。一方「保留群」の「脅威」「重要性」がやや低いことはこの群の「別れ志向」や嫉妬傾向全般が高いことと併せて考えると、関係への執着の強弱という観点からは矛盾が生じているようにも捉えられる。この点について解釈するに、まずこの群は一般的に嫉妬深い群であるため、親密な関係に対して持つ期待や重要度は相対的に高いと考えるのが自然であろう。しかしそのような青年でも、パートナーが不誠実であるな

らば問題を無視することでも、別れることでも、ライバルに接触する形ででも何とかなるはず、という選択肢の多さを自覚していることによって、パートナーの浮気場면을自己にとっての脅威と見なさない状態につながっている可能性が考えられる。また Bevan(2013)による JEPT では嫉妬深く、回避的な行動で嫉妬を表出する回避的嫉妬表出という型が得られており、「保留群」の特徴が当てはまる部分が見受けられる。JEPT の回避的嫉妬表出型の他の特徴として、関係の初期段階であることが多いことが指摘されており、本研究の「保留群」も比較的短期の関係にある個人が多いとするならば、この群が関係への執着が強い割に沈黙行動を予測し、事態を脅威と見なしにくい傾向は、一種の自己防衛的な反応の表れと捉えることもできるだろう。

「沈黙群」は浮気場면을脅威とも重要とも評価せず、多次元恋愛関係嫉妬尺度得点全般も他の群より有意に低い。そのために関係に執着しない群、もしくは恋人と第三者のデート場면을葛藤と見なさないような、「浮気」と認識する閾値が他に比べ高い群と解釈できる。

「別れ群」は他の群に比べ全般的にやや嫉妬深く、また提示された刺激を自身への脅威、重要な影響を持つものと評価しやすい群であった。この群は JEPT の破壊的嫉妬表出の型と一致する部分があると考えられ、パートナーの浮気そのまま脅威と直結するために、早急な関係の崩壊を目指すことで対処を試みる群と解釈できる。

「能動群」は「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」「脅威」「重要性」が高い群であった。そのため疑い深さを含めた全般的な嫉妬深さを示す群であるが、葛藤に際しては能動的にパートナーとの対話、ライバルへの働きかけによって事態の解決を試み、攻撃や別れによる対処はさほど行わない群であると考えられる。

群同士の対比では、「能動群」と「対話群」は「ライバル志向」の高さ以外ではある程度類似した特徴を持つ群と考えられ、この2群の対比や相関分析の結果から、「対話志向」自体は「ライバル志向」と正の相関を示す一方で、「対話志向」を示しても全く関係に侵入してきた第三者に対して働きかけようとはしない群と、能動的に恋人と第三者にも働きかけることで事態の解決を試みる群とが存在することが示唆されているといえよう。本研究の相関分析結果や本章第1節、Guerrero et al.(2011)の結果ではライバルに向かう傾向と関係の修復を目指す傾向はおおむね共通して正の関連が示されているが、類型別の分析を行うことで関係の修復のみを目指す群が存在する可能性が見出せたといえる。しかしこれらの群の違いが生起する要因については本研究で得られた変数から解釈するには限界があり、群間の違いを検討していくことが今後の課題といえるだろう。

「保留群」と「別れ群」では互いに「別れ志向」「攻撃志向」が相対的に高い一方で、両者は「沈黙志向」「ライバル志向」「脅威」「重要性」において異なっていたといえる。つまり、両群は関係や恋人に対して破壊的な傾向を持ち、浮気場面を脅威・重要とする「別れ群」では明確に破壊的な方向のみを目指す反応行動のみが選択されやすいが、その状況に対する脅威性を（自己防衛的に歪められた評定の可能性も含め）さほど評価しない「保留群」では恋人への攻撃や別れる行動のみならずライバルへの接触、一旦状況を沈静化するという、問題への他側面からのアプローチも同時に予測されうるということが示唆された。そのため関係の質や継続に対し破壊的と考えられる「攻撃志向」「別れ志向」を示す場合でも他の行動を選択しないわけではない可能性がこの対比からも示されたといえる。

ほかに「沈黙群」と「保留群」は「沈黙志向」が比較的高いという共通点を持っているが、他の特徴については異なる部分が多い。これは「沈黙志向」の高さの要因として、提示された刺激が「沈黙群」のように「浮気」とならないほどの閾値の高さゆえに見過ごされた場合と、「保留群」のように嫉妬深く、恋人への攻撃や別れの企図、ライバルへのアプローチなどを予測するものの一方で状況を重要でないと判断するため特に能動的に行動しない、と半ば自己防衛的に予測する場合が混在する可能性を結果から解釈することができるだろう。さらに、この「保留群」での「沈黙志向」の高さは、「沈黙群」のそれとは違い、他の「別れ志向」とも同程度に選択されていること、「攻撃志向」がやや高く「対話志向」がやや低いことなどから、「パートナーへの無言の圧力・抗議」として予測されている可能性も考えられるだろう。Guerrero(2014)は嫉妬した際の回避的な行動は複数の動機が交絡しており、それぞれのもたらす結果が異なる可能性について指摘しているが、本研究におけるデート場面に対する ABSII の「沈黙志向」にも複数の動機によって用いられうるということが考えられる。すなわち、提示された刺激を問題視しない「沈黙群」的動機と、提示された刺激に対して幾分攻撃的にもなり別れを検討し、ライバルに向かう行動をも選択する一方で刺激を脅威でなく重要とも認知的に評価しない「保留群」的動機である。今後の研究ではこれらの「沈黙志向」の高さに伴う動機の違いが個人や関係に対してどのように違った意味を持ちうるか、検討する必要がある。

### 3. 本研究の限界点・今後の課題

本研究の限界点として、本研究は浮気に対する行動の類型を抽出したにすぎず、関係満足感やストレス反応等、関係・個人にとっての適否を測る尺度を用いた分析を行っていないため、どの群がどういった意味で適応的か等については結論づけられない点に留意する

必要がある。Buss(2000)が指摘するように不誠実な相手との不本意な関係が長期間続くことは適応的とはいえず、「別れ群」のように早々に関係からの離脱を目指すことの方が個人の適応に貢献する可能性も存在するためである。個人の適応と関係の維持を必ずしも同一視しない視点によって、各要因がどの意味で適応的・非適応的かを整理・検討していくことが今後の研究に求められるだろう。また、ABSII はあくまで場面想定法を用いた尺度であり、場面想定法は現実場面での行動を必ずしも反映しないため、実際に浮気された際、裏切られた際に個人が選択しうる咄嗟の反応を正確に捉えているものではない。そのため、結果の解釈には慎重になる必要があるだろう。さらに今回得られた 5 つのクラスターが別のサンプルにおいても頑健に観察されうるかどうか、また提示する刺激の強度を変えても観察されうるか検討されるべきであろう。そしてクラスター間の違いを生み出す要因やクラスターの特徴について、他の変数なども併用して今後研究を重ねていくことが求められるだろう。最後に、本研究や本章第 1 節では実際の浮気経験等について考慮した分析を行っていないが、浮気した・浮気された等、実際の経験を持つ者は浮気の判断基準が厳しいことが指摘されているため(植田・新内・宮崎, 2017)、提示した浮気場面に対する行動も厳しいものを予測しやすい可能性が考えられる。これらの点について考慮することで、さらに青年の恋愛関係の実像に迫った検討を行うことができるだろう。

## 6. 本節のまとめと次章への導入

本節では、ABSII の各下位尺度が実際にはどのような類型で選択されうるかを検討するため、ABSII の各下位尺度得点を用いてクラスター分けを行い、嫉妬傾向やストレスの認知的評価を考慮することで、得られたクラスターの特徴を捉えることを目的としていた。

結果として ABSII の回答パターンから 5 類型が得られ、それぞれ「沈黙志向」のみが高い「沈黙群」、 「対話志向」のみが高い「対話群」、 「対話志向」以外全て高めの「保留群」、 「対話志向」「ライバル志向」が高い「能動群」、 「別れ志向」「攻撃志向」が高くそれ以外が全て低い「別れ群」が得られた。「沈黙群」は最も嫉妬を示さず、提示した刺激としてのデート場面を重要視しない群であった。「対話群」と「能動群」は「ライバル志向」得点のみが大きな違いの群であったが、その違いについては本研究では実証的に示すような変数は得られなかった。「沈黙群」と「保留群」は「沈黙志向」の高さのみ共通するが、「保留群」は「沈黙志向」以外の得点も高い群であり、「沈黙志向」の高さが示すものは、場合に

より「攻撃志向」「別れ志向」「ライバル志向」とともに「沈黙志向」を選択するような、行動を決めかねているような場合も混在する可能性も示唆されていた。

続く第6章では、本章で作成されたABSIIに加え、第2章で作成された多次元恋愛関係嫉妬尺度を併用し、「何によって嫉妬がもたらされるのか」ということを検討するために、嫉妬との密接な関連が指摘される愛着の観点から検討を行うこととする。

#### 引用文献

- Andersen, P. A., Eloy, S. V., Guerrero, L. K., & Spitzberg, B. H. (1995). Romantic Jealousy and Relational Satisfaction: A Look at the Impact of Jealousy Experience and Expression. *Communication Reports, 8*, 77-85.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press.
- Feldman, S. S., & Cauffman, E. (1999). Sexual betrayal among late adolescents: Perspectives of the perpetrator and the aggrieved. *Journal of Youth and Adolescence, 28*, 235-258.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the Green-Eyed Monster: Conceptualizing and Measuring Communicative Responses to Romantic Jealousy. *Western Journal of Communication, 59*, 270-304.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The communicative responses to jealousy scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures, 5*, 223-249.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication, 78*, 586-611.
- Hall, J. H. & Fincham, F. D. (2006). Relationship dissolution following infidelity: The roles of attributions and forgiveness. *Journal of Social and Clinical Psychology, 25*, 508-522.

- 金政 祐司 (2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について 社会心理学研究, 22, 139-154.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 中村 菜々子・上里 一郎 (2004). 中高年者の日常いらいら事に対するコーピングのパターンとストレス反応との関係 健康心理学研究, 17, 18-28.
- 荻野 恒一 (1983). 嫉妬の構造 紀伊國屋書店
- 尾関 友佳子・原口 雅浩・津田 彰 (1994). 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 健康心理学研究, 7, 20-36.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Rusbult, C. E. (1987). Responses to dissatisfaction in close relationships: The exit-voice-loyalty-neglect model. In D. Perlman., & S. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration* (pp.209-237). California: Sage.
- 相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.
- 植田 智・新内 風香・宮崎 まどか (2017). 青年期女子における浮気行動の判断基準 広島文教女子大学心理学研究, 3, 53-61.
- 和田 実 (2015). 恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応: 嫉妬の強さおよび性との関連 応用心理学研究, 40, 213-223.

## 第6章 嫉妬傾向、架空の浮気場面への予測行動と 愛着の関連

ここでは、「嫉妬が何によってもたらされるのか」を検討するため、嫉妬傾向との密接な関連が指摘される愛着の観点から検討を行う。具体的には、愛着のこういった特性が嫉妬の経験に影響を及ぼし、また具体的な浮気場面における行動を規定しうるのか、というプロセスを検討することとする。

## 問題・目的

嫉妬に関する言及や研究は数多く存在し、嫉妬の関連要因については様々な考察がなされているものの、嫉妬が何によって生まれるか、という嫉妬の原型に関してはそう多くは語られていない。White & Mullen(1989)の定義には自尊心の傷つきや関係から得られている利益への喪失への恐れから嫉妬が発生するとも考えられるが、そもそもそういった恐れが個人によって大きく異なること、すなわち関係に対する価値づけの違いや、同程度のパートナーの些細な浮気の予兆に対する反応性の個人差をどのように説明できるだろうか。この点について、古くから有力な理論的観点として注目されているのが Bowlby(1969)に端を発する愛着理論である。

愛着理論においては、幼児は愛着対象に近接ないし接触することで情緒的な安心感 attachment security を得ることができ、そのことによって幼児が安心して周りの世界を探索できるようになるとされる(Sharpsteen & Kirkpatrick, 1997)。さらに個人が幼児期など発達の早期段階において、安心感を確保できるような養育環境にあったか、また獲得できていた安心感の度合いや質に応じて、自分の対人関係への期待をどのように修正する必要があったか等の経験が、後の個人の人格および各種の社会的スキル、他者に対する期待に大きな影響を及ぼすとされる内的作業モデルが仮定されている(Bowlby, 1973; Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。Ainsworth et al(1978)や Sharpsteen & Kirkpatrick(1997)によれば愛着の型は大きく分けて3つのパターンになるとされ、愛着対象が自分の要求を満たしてくれるものと考えられる安定型、愛着対象が信用できず、いつも応答してくれるとは限らないと考える両価型、そして愛着対象は自分を無視するか置いていってしまうと考える回避型であるとされる。そして Hazan & Shaver(1987)はこれら幼児にて観察される愛着スタイルが先述の内的作業モデルにより成人にも比較可能で類似した愛着スタイルが存在することを見出し、青年期や成人期では愛着対象が母親ではなく恋人となり、さらに母子関係・恋愛関係の間の共通点を挙げることで恋愛関係も一つの愛着関係であると指摘している。さらに Hazan & Shaver(1987)の研究では各愛着スタイルによって恋愛の経験も異なることを指摘しており、安定型の愛着を持つ者はその他の愛着の型の者よりも嫉妬しない傾向にあり、両価型の愛着を持つ者が最も嫉妬深いことが示されている。なお Hazan & Shaver(1987)では愛着スタイルの測定については3つの愛着スタイルを説明するような短

文を提示し選択させる強制選択式の方法が採られていたが、詫摩・戸田(1988)が指摘するように、複数のタイプに当てはまる場合やどれにも当てはまらない場合への対処法が存在せず、カテゴリー内の個人差を無視することにもなる問題点が存在する。後年の心理学者はこれらの問題点に対応するため、例えば詫摩・戸田(1988)では Hazan & Shaver(1987)の成人の愛着尺度で用いられた表現をベースに連続変数として3つの愛着スタイルの傾向を測定するような尺度が作成されている。

その他にも Bartholomew(1990)や Bartholomew & Horowitz(1991)では愛着のパターンを自己モデルと他者モデルの2軸を組み合わせ、4つの類型を抽出している。それらは、自己モデルがポジティブかつ他者モデルがポジティブな安定型 **Secure**、自己モデルがポジティブかつ他者モデルがネガティブな拒絶型 **Dismissive**、自己モデルがネガティブかつ他者モデルがポジティブなとらわれ型 **Preoccupied**、最後に自己モデルも他者モデルもネガティブである恐れ型 **Fearful** である。Brennan, Clark, & Shaver(1998)によって作成された **Experience in Close Relationships**(以降 **ECR** と略記)はこれらの自己モデル・他者モデルに対応した下位因子を持つ尺度であり、「不安」が自己モデルのネガティブである程度に、「回避」が他者モデルのネガティブである程度に相当するといえる。**ECR** は日本でも中尾・加藤(2004a)にて恋人用の **ECR** や中尾・加藤(2004b)にて一般他者用の **ECR-GO**、古村・村上・戸田(2016)により両親的人物・恋人・友人など複数の愛着対象用の日本語版 **ECR-RS** などが邦訳・作成されており、愛着の捉え方として国内外を問わず注目されている理論的観点といえるだろう。

さて、これらの愛着と嫉妬の関連については Hazan & Shaver(1987)以降も複数の研究が行われ、検討がなされている。Sharpsteen & Kirkpatrick(1997)によると、愛着と嫉妬の共通点は、第1章でも述べたように(1)親密な関係を維持するためのメカニズムであり、(2)愛着対象(世話を焼いてくれる人や恋人)との分離や分離の脅威によって顕在化されるもので、(3)基本的な感情としてともに恐怖や怒り、悲しみを伴い、(4)親密な関係と自己の心的表象に関わる定量的な苦悩の個人差を示すものである、という点で密接な関係にあるとされる。これらの共通点から、Guerrero(1998)によれば個人の愛着のスタイルの違いが個人の嫉妬への反応の違いを説明するのに役立つと指摘されている。すなわち、幼児が保護者と分離を経験し、また再開した際に起こす反応から愛着の型が観察されるように、成人においても個人が浮気と思しき場面に遭遇した際、どのような反応をするかがそのまま愛着の型の違いを表すのではないかということが先行研究では想定されており、実際に実証的

研究が行われてきた。Bevan(2013)がまとめるように愛着と嫉妬の関連について検討した研究の手法は主に個人を3つの、あるいは4つの愛着の類型に当てはめ、類型間で嫉妬傾向やその他の変数の得点の差がどのように異なるかについて分析する手法と、Bartholomew的観点から、個人の示す「不安」ないし「関係不安」と、「回避」ないし「親密性の回避」の程度を連続変数として算出し、嫉妬の各側面との関連を調べるものであった。

それらの結果として、まず嫉妬の経験 *jealousy expression* に関わる結果を紹介すると、愛着の型の間で嫉妬深さが異なるとするような研究では Buunk(1997)や Sharpsteen & Kirkpatrick(1997), Guerrero(1998), Marazziti et al(2010), Karakurt(2012)などにおいて、安定型の愛着を持つ個人は不安・両価型の愛着を持つ個人よりも全般的に嫉妬しにくいという結果が得られている。金政(2006)でも、恋愛相手が自分以外の異性とある行為を行ったことに対する不快感として「排他感」を測定し、その得点が ECR の「関係不安」得点が高い群の方が「関係不安」が低い群よりも高かったことはこれらの結果と同様のものではあったといえるだろう。また愛着スタイルを連続変数として捉えるような研究では、愛着の不安定性が高い個人ほど嫉妬や、あるいは排他感を示す結果が得られている研究も複数見受けられる(e.g., Knobloch, Solomon, & Cruz, 2001; Bringle & Rydell, 2007; Marazziti et al., 2010; Karakurt, 2012; 金政, 2006)。特に Knobloch et al(2001)では Pfeiffer & Wong(1989)による MJS の *cognitive jealousy* と *emotional jealousy* と ECR の「関係不安」との関係を調べ、ともに有意な正の相関を得ている。これらの結果から、安定型の愛着を持つ個人は両価型の愛着を持つ個人よりも些細な裏切りの兆候を見つけてもそれを被害妄想的に解釈せず嫉妬しないこと、また両価型の愛着傾向や関係不安のような愛着傾向が高い個人ほどパートナーを疑いやすく些細な出来事に対しても嫉妬や排他感情を覚えやすいことが考えられる。一方で回避型の愛着傾向と嫉妬との関連については、少々知見が複雑になっている(Bevan, 2013)。愛着を3つの類型に分けて検討するような研究では、両価型、回避型、安定型の順で嫉妬深いとする結果が得られているが(Hazan & Shaver, 1987; Buunk, 1997; Sharpsteen & Kirkpatrick, 1997), Marazitti et al(2010)の結果では拒絶型が最も疑い深さや独占欲等については得点が低く、愛着を4類型で捉えるような研究では、3類型で捉える研究にて「回避型」とされていた群が「関係不安」の高低によって更に細分化されるため、その限りではない結果が得られている。また愛着を連続変数として捉えるような研究では Marazitti et al(2010)の結果では ECR の「親密性回避」は嫉妬の認知的な過敏さや情動的な排他感情の強さに関わると考えられる変数とも有意な正の関連を示す部

分があり、また Guerrero(1998)でも嫉妬の認知的な過敏さと愛着の回避的な側面との間に正の関連が見出されていた。それに対し、Knobloch et al(2001)では「親密性回避」と MJS の cognitive jealousy とは有意な負の関連、emotional jealousy とは無関連であったことから、連続変数として捉えた場合にも回避型あるいは「親密性回避」とされるような変数と嫉妬との関連は一貫していないようにも見受けられる。

嫉妬の表出に関しては Bevan(2013)が指摘するように愛着との関連を検討した研究は嫉妬の経験の研究に比べると少ない。Sharpsteen & Kirkpatrick(1997)では回避型の愛着を持つ個人は両価型の個人に比べ、ややライバルに対して怒りを表出し、安定型の愛着を持つ個人は両価型の個人に比べ嫉妬した際にパートナーに対する怒りを表出しやすく、また両価型がその他の型に比べ嘆き悲しみやすいという結果が得られている。その他に、Guerrero(1998)では Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy(1995)の CRJ と ECR を用いて愛着の型ごとの違いや変数間の関連について調べ、その結果として愛着スタイルごとの違いとしては、安定型ととらわれ型の個人が拒絶・恐れ型の個人に比べ嫉妬を表出する際に建設的な行動を取りやすく、また回避的な行動を取らないこと、とらわれ型が他の型に比べネガティブな情動を表出し、相手を探るような行動に出やすいこと等を明らかにした。また変数間の関連についても同様に回避的な愛着傾向は相手との統合的なコミュニケーションと負の関連、距離を置くような対処と正の関連を示し、不信やとらわれの傾向があるほどネガティブな感情表現や探るような行動を取りやすい傾向が示された。変数間の関連についてはライバルへ向かうような行動や暴力的な行動は愛着の諸次元と関連を示さなかった。上記から、Guerrero(1998)の研究では愛着の回避的な傾向が関係に対する関係の維持に対してやはり回避的な行動と関連しており、関係不安の傾向が相手に自分の気持ちを訴え、相手を詮索するような行動につながりやすいことが考えられる。

ECR に基づいた愛着の 2 次元と排他感情、そして相手の浮気への対処行動の関連を統合的に検討した研究として、他に金政(2006)の研究がある。金政(2006)では Guerrero の CRJ ではなく、独自に作成された排他感情尺度、および Rusbult & Zembrodt(1983)の EVLN モデルを参考に作成された相馬・山内・浦(2003)の対処行動尺度によって、個人がどのようにパートナーの浮気に対する感情を経験し、またそれに対する行動を表出するかを検討した。その結果として、愛着の「親密性回避」は「別れ行動」へ正の、「無視行動」へ正の、「話し合い行動」へ負の影響を及ぼしており、「関係不安」は浮気された際に経験する排他感情経験の悲しさ・苦悩等を意味する「悲哀・未練」に正の影響を及ぼし、分析の一部で

は「忠誠行動」に正の影響を及ぼしていた。また排他感情経験の嫌悪・失望等を意味する「拒絶」は「別れ行動」や「無視行動」に正の影響を及ぼしていた。金政(2006)の結果からは、愛着の「親密性回避」は基本的に裏切ったパートナーを見捨て、関係の質にも維持にも破壊的な行動と関わり、「関係不安」はパートナーの浮気に際して具体的な行動とはさほど関わらず、葛藤の解決を自ら試みない「忠誠行動」とのみ関わる可能性が考えられる。Bevan(2013)が示すように、これらの嫉妬や嫉妬時の行動を愛着的観点から捉える研究領域は実際の間人関係上の力動を捉える上で非常に重要であるにも関わらず、その研究の絶対数の少なさからもっと取り込まれるべきであると考えられる。

上記の議論を受け、本研究では国内の研究として愛着の次元が嫉妬感情（排他感情）に関わり、さらにパートナーの浮気への具体的な対処行動に関わるとするプロセスを検討した金政(2006)に倣い、愛着の基本的な次元が個人の嫉妬の経験にどのように関わり、さらにそれらが嫉妬時、ないし浮気された際の個人の行動にどのように影響を及ぼしうるか、検討することを目的とする。なお、愛着研究の基本となる3タイプを特性的に検討している研究がこの領域では見受けられず、愛着と嫉妬との関連を検討する際にはまず、幼児にて観察されるようなそれぞれの愛着のタイプあるいはそれらの特性が成人の嫉妬の経験や表出とどのように関わるかを検討することにより、応用的・発展的な議論が可能になると考えられる。そこで本研究では金政(2006)や他の海外の嫉妬研究で用いられているような、ECRで仮定される主に成人の愛着の捉え方として知られる2軸4類型の捉え方ではなく、Ainsworthらが仮定した愛着の3タイプを、Hazan & Shaer(1987)や詫摩・戸田(1988)が捉えたように成人が持ちうる愛着のタイプとして、特性的に捉えることで個人の愛着傾向を測定する。また嫉妬傾向については本博士論文にて作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度を用い、浮気された際の個人の行動については同じく作成されたABSIIを用いることとする。

仮説として、まず愛着の「両価」型傾向はKnobloch et al(2001)の結果などから嫉妬傾向の「猜疑的認知」「排他的感情」と正の関連を示すと考えられる。また金政(2006)の結果ではECRの「関係不安」と裏切った相手に対して能動的に働き掛けない「忠誠行動」が正の関係を示していた一方、Guerrero(1998)では同様の複数の下位尺度が正の関連、あるいは無関連となっていたため、これらの変数は基本的に正の関連にある可能性が考えられるが、頑健な知見が得られているわけではない。そのため測定尺度の違いはあるものの、それらとある程度類似した構成概念を測定すると捉えられる愛着の「両価」型傾向と「沈黙志向」は正の関連を示すか、あるいは明確な関連を示さない可能性が考えられる。また「両価」

型傾向と他の対処行動の関連については、Guerrero(1998)や金政(2006)でも明確な関連が示されているものが少ないため、基本的には関連が薄い可能性が考えられる。さらに愛着の「回避」的特性は先行研究にて知見が一貫していないことから嫉妬傾向との関連については確認する必要がある、また金政(2006)の結果から直接的に回避的な行動と考えられる「沈黙志向」や「別れ志向」に正の影響を、「対話志向」に負の影響を与える可能性が考えられる。「安定」型の傾向は ECR では測定変数として採用されていないが、Hazan & Shaver(1987)などの先行研究の結果から嫉妬傾向とは全般的に負の関連を、浮気への予測行動との関連では「対話志向」とは正の、「別れ志向」「沈黙志向」とは負の関連にあることが予測される。

## 方法

### 1. 調査協力者

大学生 456 名に質問紙調査を行い、欠損値のみられなかった 400 名(平均年齢 19.54 歳,  $SD=2.09$ , 18 歳～49 歳, 男性 157 名, 女性 243 名)のうち, さらに 25 歳未満で結婚しておらず, 現在恋人がいる 99 名(平均年齢 19.53 歳,  $SD=1.02$ , 18 歳～23 歳, 男性 29 名, 女性 70 名)を分析対象とした。

### 2. 測定尺度

フェイスシートにて学年・年齢・性別について回答を求め, さらに現在交際中の恋人の有無と以下の質問紙への回答を求めた。

#### (1) 多次元恋愛関係嫉妬尺度 :

現在の関係での嫉妬傾向を測定するために, 現在交際している人物の名前を X さんとして想起させ, X さんとの普段の交際の中でどの程度当てはまるか, 「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」各 5 項目で, 「1.全く当てはまらない」～「7.非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。本研究での  $\alpha$  係数は順に,  $\alpha=.84, .81, .76$  であった。

#### (2) ABSII :

現在の恋愛関係において浮気に関する葛藤があった際に個人がどのような行動を予測するかを測定する尺度で, 「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」

の5下位尺度22項目からなる。回答者への教示として、現在交際している人物の名前をXさんとして想起させた上で、「この質問ではある場面を想像して回答して頂きます。《想像場面：あなたはとある土曜日の夜、あなたの恋人Xさんが、あなたの知らない人物Yさんとデートしているように見える姿をたまたま目撃してしまいました。》もしも仮にこのようなことがあったら、あなたはその後、どんな行動を取ると思いますか。あるいはどんなことを考えると思いますか。」という教示を与えた。各項目に対して「1.当てはまらない」～「5.当てはまる」の5件法にて回答を求めた。本研究での $\alpha$ 係数は順に $\alpha = .80, .86, .84, .82, .54$ であった。最後の「ライバル志向」に関しては $\alpha$ 係数が.60を下回ったものの、他の調査時にある程度の信頼性係数が得られていたことや、本研究での調査人数が少なく、少数の極端な回答結果に左右されて信頼性係数が低下した可能性も否めないと判断し、項目の削除は行わず、4項目全ての平均値を算出して分析に用いた。そのため本研究における「ライバル志向」の結果はあくまで参考程度のもとなることに留意する必要がある。回答の際には(1)の交際経験に基づき、実在の恋人あるいは自分に将来できた恋人の名前を「Xさん」として、回答を求めた。

### (3) 愛着スタイル尺度：

詫摩・戸田(1988)の成人版愛着スタイル尺度を用いた。対人態度を愛着理論的観点から測定する尺度で「安定」「回避」「両価」の3下位尺度各6項目からなる。「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の7段階評定(1~7点)で回答を求めた。本研究での $\alpha$ 係数は順に $\alpha = .78, .66, .67$ であった。

## 3. 調査手続き

2017年6月~12月に上記の質問紙を関西地方の大学の講義中に実施した。倫理的配慮として調査の匿名性、回答の非強制性、回答に困難を感じた場合に中断できることを説明した上で、回答に不備のない協力者を分析対象とした。

## 結果

### 1. 記述統計量

本研究で用いる各変数について記述統計量を算出したものをTable6-1に示す。なお、本

研究に用いる変数について性差を検討したところ、全ての変数において男女間に性差が見られなかったため、以降の分析では男女を分けず分析を行うこととした。

**Table6-1 各変数の記述統計量**

尺度	変数	Mean	SD
嫉妬傾向 (1~7点)	1.猜疑的認知	3.06	1.37
	2.排他的感情	4.71	1.36
	3.警戒行動	3.29	1.26
ABSII (1~5点)	4.攻撃志向	2.42	0.94
	5.沈黙志向	2.42	1.03
	6.別れ志向	2.32	0.99
	7.対話志向	3.77	0.97
	8.ライバル志向	2.80	0.91
愛着 (1~7点)	9.安定	4.21	0.96
	10.回避	3.36	0.93
	11.両価	3.66	0.94

## 2. 相関分析

次に、各変数間の関連を検討するため、相関分析を行った結果を Table6-2 に示す。多次元恋愛関係嫉妬尺度と ABSII の関連については概ね尺度作成時と同様の相関パターンを示していたといえるが、細かい値の変動についての報告は省略し、結果が大きく異なっていた部分についてのみ報告する。なお、尺度作成時には男女による得点の違いを統制するために「性別」を統制した偏相関係数を算出しているため、厳密に同じ分析ではないことに留意する必要がある。ABSII の「沈黙志向」と多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」の関連が、尺度作成時にはほぼ無関連であったのに対して( $p r = -.02, n.s.$ )、本研究では有意な正の関連を示した( $r = .25, p < .05$ )。それと同様に、「対話志向」が「猜疑的認知」と、尺度作成時には無関連を示していたのに対して( $p r = .09, n.s.$ )、本研究では有意な負の関連を示した( $r = -.21, n.s.$ )。

愛着スタイル尺度と多次元恋愛関係嫉妬尺度は「猜疑的認知」は「安定」と有意な関連を示さず( $r = -.11, n.s.$ )、「回避」「両価」と有意な正の関連を示していた( $r = .33, .48$ , ともに  $p < .001$ )。「排他的感情」は「安定」「両価」と有意な関連を示さず( $r = -.11, .08$ , ともに  $n.s.$ )、

「回避」とのみ有意な正の関連( $r=.26, p<.01$ )を示した。「警戒行動」は愛着スタイル尺度の全ての下位尺度と有意な関連を示さなかった( $r=.07\sim.10, n.s.$ )。

さらに愛着スタイル尺度と ABSII の下位尺度間の関連について報告する。「攻撃志向」「別れ志向」および「ライバル志向」は愛着の全ての下位尺度とほぼ無関連( $r=-.07\sim.13, n.s.$ )であった。「沈黙志向」は愛着スタイル尺度の全ての下位尺度と有意な関連を示し、「安定」とは負の( $r=-.31, p<.01$ )、「回避」「両価」とは正の関連を示した( $r=.35, .40$ , ともに  $p<.001$ )。

「対話志向」は「安定」と有意な正の関連を( $r=.26, p<.05$ )、「回避」「両価」と有意な負の関連を示した( $r=-.36, -.32, p<.001, p<.01$ )。

Table6-2. 多次元恋愛関係嫉妬尺度, ABSII, 愛着尺度の各下位尺度の相関分析結果(N=99)

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.猜疑的認知	.50***	.38***	.16	.25*	.13	-.21*	.10	-.11	.33***	.48***
2.排他的感情	-	.53***	.43***	-.20*	.07	.27**	.39***	-.11	.26**	.08
3.警戒行動	-	-	.46***	-.18†	.07	.28**	.40***	.10	.07	.09
4.攻撃志向	-	-	-	-.16	.29**	.19†	.27**	-.05	.13	.02
5.沈黙志向	-	-	-	-	.05	-.59***	-.28**	-.31**	.35***	.40***
6.別れ志向	-	-	-	-	-	-.13	.14	-.04	.10	.12
7.対話志向	-	-	-	-	-	-	.34***	.26*	-.36***	-.32**
8.ライバル志向	-	-	-	-	-	-	-	-.07	.00	-.03
9.安定	-	-	-	-	-	-	-	-	-.46***	-.44***
10.回避	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.47***
11.両価	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

†  $p<.10$ , \*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ .

### 3. 因果モデルのパス解析

本研究では個人の持つ各種の愛着傾向が、個人の嫉妬傾向に影響を及ぼし、さらに愛着傾向と嫉妬傾向が、個人が想像した架空のパートナーの浮気場面への予測された行動の度合いに影響を及ぼすというモデルを検証することが目的であったため、それらの尺度得点を用いて共分散構造分析を行った。理論的な考察や相関分析の結果に従い、愛着スタイル尺度から ABSII への直接的なパスも想定した。分析の結果を Figure6-1 に示す。モデルの適合度は GFI=.962, AGFI=.910, CFI=1.000, RMSEA=.000 であった。なお RMSEA は.05

を下回ると適合度が良いとされるため、適合度は充分であると考えられる。

分析の結果、まず愛着スタイル尺度と多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度間では、愛着の「安定」は「猜疑的認知」に有意傾向の正の影響を示したのみであった( $\beta=.17, p<.10$ )。愛着の「回避」は「猜疑的認知」に有意傾向の正の影響を示し( $\beta=.16, p<.10$ )、また「排他的感情」に有意な正の影響を及ぼしていた( $\beta=.22, p<.01$ )。愛着の「両価」は「猜疑的認知」のみに有意な正の影響を示した( $\beta=.48, p<.001$ )。

また、愛着スタイル尺度と ABSII の各下位尺度の関わりとして、愛着の「安定」は直接的に ABSII の「沈黙志向」に負の影響を及ぼしていた( $\beta=-.18, p<.05$ )。愛着の「回避」は ABSII の「沈黙志向」に直接的に正の影響を( $\beta=.26, p<.01$ )、また「対話志向」には負の影響( $\beta=-.36, p<.001$ )を与えていた。愛着の「両価」は ABSII の下位尺度に対して直接的な影響を示さなかった。

そして、嫉妬傾向から ABSII の各下位尺度へ及ぼす影響としては、「猜疑的認知」は「沈黙志向」に有意な正の、「別れ志向」に有意傾向の正の影響を示し( $\beta=.36, .16, p<.001, p<.10$ )、また「対話志向」へは有意な負の影響を示した( $\beta=-.37, p<.001$ )。「排他的感情」は「攻撃志向」と「対話志向」へそれぞれ有意な正の影響を示し( $\beta=.27, .44, p<.01, p<.001$ )、「沈黙志向」へ有意な負の影響を示した( $\beta=-.47, p<.001$ )。最後に「警戒行動」は「攻撃志向」「対話志向」「ライバル志向」にそれぞれ有意な正の影響を示していた( $\beta=.32, .19, .25, p<.001\sim p<.05$ )。

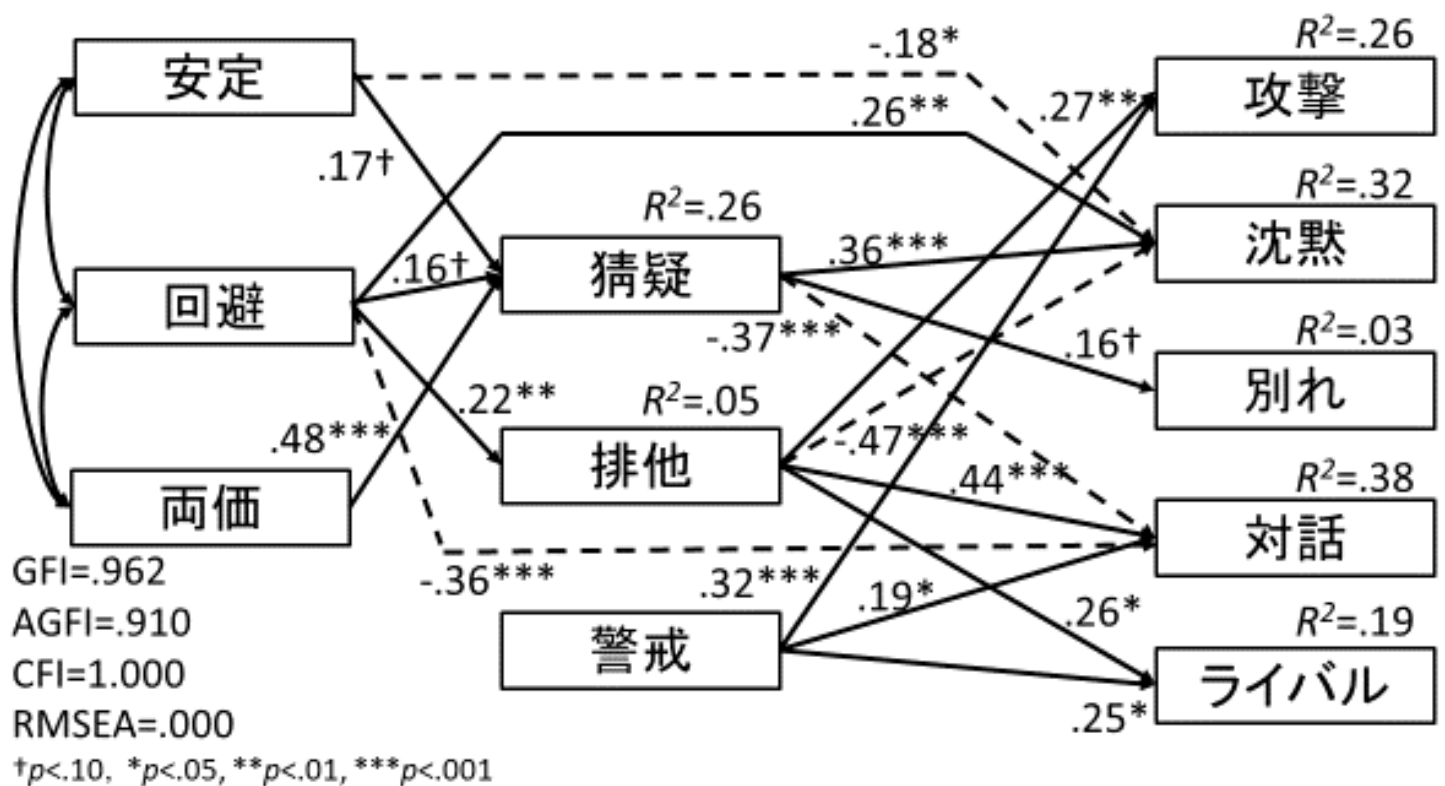


Figure6-1. 愛着傾向と嫉妬傾向がABSIIの各下位尺度に及ぼす影響 (誤差変数・共分散は省略)

## 考察

本研究では愛着の3類型を特性的に捉え、嫉妬深さや浮気された際に予測された行動とどのように関わるかを検討し、さらに愛着傾向が嫉妬深さに影響を与え、さらにそれらが浮気された際の予測された行動の傾向にどのような影響を与えるかを検討することを目的としていた。

### 1. 相関分析から

相関分析の結果から、嫉妬深さについては「猜疑的認知」が、「安定」とは無関連を示したが、「回避」「両価」とは有意な正の関連を示していた。また「排他的感情」は「安定」「両価」と無関連、「回避」と負の有意な関連を示していた。この結果は「両価」については仮

説通りであったが、「安定」「回避」については仮説から外れたものであった。「安定」が嫉妬深さのどの下位尺度ともほぼ無関連となったことは、「安定」型の傾向を測定する尺度が支配的な ECR 等には含まれないとはいえ、理論的想定や Hazan & Shaver(1987)などの先行研究の結果にやや合致しない方向の結果であったと考えられる。この点については、結果から「安定」型の傾向を持つ個人ほど嫉妬しないのではなく、その他の不安定な愛着傾向こそが各種の嫉妬傾向をより強く規定する可能性が示されているといえよう。「回避」が嫉妬深さと関連を示した結果については Marazitti(2010)や Guerrero(1998)などの結果と共通する部分があるとも考えられ、疑い深く裏切りに対して過剰に嫌悪感を募らせてしまう個人はそれだけ安定した愛着が持てておらず、また気軽に他人と打ち解けるのも苦手で、さらに疑い深い場合には自身の相手に占める価値への悩みに晒されていることが示唆されている。Knobloch et al(2001)などでは ECR の「親密性回避」と MJS の cognitive jealousy の負の関連が見出されていて、「関係不安」と emotional jealousy の正の関連が見出されている結果とは違う結果となったが、この違いの要因の一つとして、やはり使用している愛着尺度の違いがあることが考えられる。ECR の「関係不安」と「親密性回避」はおおむね無関連であることが複数の研究において報告されているが、本研究で採用した成人版愛着スタイル尺度の「両価」「回避」間の相関係数は  $r=.47(p<.001)$ であったため、両者の厳密な比較は困難である可能性がある。一方で「警戒行動」は愛着スタイル尺度のどの下位尺度ともほぼ無関連を示した。先行研究では Karakurt(2012)の結果では嫉妬の行動的な側面と愛着の「関係不安」との関連が見出されているが、本研究で用いた「警戒行動」は MJS の behavioral jealousy よりも破壊的でない、日常会話でパートナーに探りを入れるような項目のみで構成されているため、愛着の次元とは明確な関連を示さなかった可能性が考えられる。

ABSII と愛着の 3 次元との関連について、まず「攻撃志向」はほぼ無関連を示していた。この結果は Guerrero(1998)で暴力的な行動などと愛着の諸次元がほぼ有意な関連を示さなかったことに一致する方向の結果であり、こういった葛藤に際したパートナーへの攻撃は愛着の次元のみでは説明されにくいことが本研究の結果からも支持されたといえよう。

「沈黙志向」は「安定」とは負の、「回避」「両価」とは正の有意な相関を示した。この結果は金政(2006)と共通する部分があり、特に回避型の傾向が高い場合にはもともと恋人を含む他者への執着が薄い傾向にあると考えられるため、自分からは関係の行く末を左右するつもりがなく、相手の選択に委ねていることが考えられる。また両価型の傾向が高いほ

ど、他者との親密さを過剰に求めるために関係の行く末が死活問題となりうるが、それがゆえに衝動的な行動を取らずに次の一手を決めかねて沈黙を選択するのもかもしれない。また逆に安定した愛着傾向を持っている場合には、パートナーや周りの親しい人物からの分離を過剰に恐れることをしないため、自分の思うままに葛藤状況を解決の方向へ導こうとする傾向にあることが考えられる。

「別れ志向」は愛着の「安定」「回避」「両価」の全ての下位尺度とほぼ無関連となった。この結果は金政(2006)の結果やそれに基づく仮説に一致しないものであったといえる。「回避」型傾向については、「回避」と「沈黙志向」の正の関連からも、葛藤状況で自ら関係の行く末を決めるような行動には出ない傾向にある可能性が考えられた。あるいはそもそも親密な関係に執着が薄いのであれば、今回提示した「デート場面」が「回避」型傾向の強い個人にとっては「浮気」とはならない閾値の高さが関係していた可能性も考えられるだろう。「安定」型傾向については「回避」型傾向と同様、今回の「デート場面」を浮気と思うかどうかについては、愛着とは別の次元の問題である可能性が考えられ、Eastwick(2016)が指摘するように関係が存続することのみが必ずしも適応的であるとは限らない。安定型の愛着傾向が高い個人の中でも今回刺激として提示した程度の「裏切り」を重く見て、関係を切り捨てる場合と、安定した愛着があるために相手の行動を「裏切り」と判断せず、別れを志向しない場合とが混在していた可能性が考えられる。これらの点についてはABSIIのやや投影的な文章表現により、ABSIIで提示した自分の恋人と第三者のデート場面の受け取り方が調査協力者によって二極化していた可能性についても留意する必要があるかもしれない。

「対話志向」は「安定」と正の、「両価」「回避」と負の有意な関連を示した。葛藤が起きた関係を何とか自ら修復しようとする傾向は安定した愛着と正の関連にあるという結果は愛着の理論的観点に沿うものと考えられる。「対話志向」が「両価」と負の関連を示したことは、先行研究のGuerrero(1998)や金政(2006)では同様の下位尺度が無関連を示したことはやや異なる結果であったといえる。本研究では「両価」が「回避」や「猜疑的認知」「沈黙志向」などと強く関連していたことから、両価型の愛着傾向が高いほど、恋人との良好な関係を求めるものの、見捨てられる・関係を放棄されることを恐れて自ら能動的に事態の解決には踏み出さず、相手との対話にも能動的に行動を起こさないという正にアンビバレントな傾向にある可能性が示された。さらに「回避」と「対話志向」が負の関連を示し、この結果はGuerrero(1998)や金政(2006)の研究と合致しているため、金政(2006)

が指摘する通り回避的な愛着の傾向は、愛着対象からの回避や二者関係を拡散させる動機として働いている可能性が考えられた。

「ライバル志向」は、愛着スタイル尺度の各下位尺度とはほぼ関連を示さなかった。先行研究では金政(2006)では「ライバル志向」に関する結果は存在せず、Guerrero(1998)ではライバルに向けた下位尺度は愛着の諸次元と無関連であったため、この結果はGuerrero(1998)とは一致した方向にあるといえる。つまり、浮気・嫉妬に際して関係への侵入者たるライバルに接触を試みるかどうかは、対人関係上他人に安定した信頼を寄せているか否かの次元とは少々異なった次元の問題であることが考えられる。今回得られた結果が安定したものであるかどうか、今後の研究で検討していく必要があるだろう。

## 2. 因果モデルから

共分散構造分析の結果を概観すると、愛着⇒嫉妬傾向⇒浮気への予測された行動のプロセスは複雑な構造を有することがわかる。第5章第1節の尺度作成時には妥当性を支持するような結果が少なかった「沈黙志向」であったが、本研究におけるパス図を参照すると、「安定」から直接的に負の、「両価」から直接的に正の影響力が示され、「安定」「回避」「両価」それぞれが「猜疑的認知」を介し正の、「回避」が「排他的感情」を介し負の影響力を持ちうることを確認された。Guerrero(2014)も指摘していた通り、こういった行動を差し控える下位尺度の動機は複雑であると考えられ、今回の結果からは「猜疑的認知」と「排他的感情」が正負の真逆の影響力を示した上に、それらを介さない「安定」「回避」の愛着スタイルの傾向による影響力も見受けられたといえるだろう。愛着の「両価」型の傾向については、相関分析では「沈黙志向」と有意な正の関連を示したが、因果モデルでは有意でなくなっていたのは、「両価」と正の関連を示す「猜疑的認知」によって「両価」「沈黙志向」間の関連を媒介された可能性が考えられる。つまり、愛着の両価型の傾向は本研究では「猜疑的認知」を介して「沈黙志向」に影響を与え、その他の安定型、両価型の傾向は部分的に「猜疑的認知」に媒介されるが、これらの傾向は直接的に「沈黙志向」へ影響を及ぼしうることが示唆されていると考えられる。

「攻撃志向」に関して因果モデルでは嫉妬傾向を考慮した場合でも、愛着傾向は直接的には関わらないことが見出された。「排他的感情」と「警戒行動」がともに正の影響を及ぼしていることが確認されたため、裏切ったパートナーへの過剰な攻撃反応はパートナーを愛着対象として見なせるか否かといった次元はさほど関わらず、強い排他感情や普段から相手に対して探りを入れているような行動傾向がより直接的な規定因となりうることが示

された。

「別れ志向」については「猜疑的認知」が微弱な正の影響を示したのみで、愛着の諸次元は因果モデルにおいても直接的な影響力を示さなかった。そのため、浮気への反応として別れを選択する行動は、必ずしも嫉妬や精神内的な関係への執着から強く説明されうるものではなく、投資モデル等の関係の具体的な状態・プロセスから説明されうる傾向である可能性が考えられるだろう。

「対話志向」に関しては「安定」「回避」「両価」から「猜疑的認知」を介して負の、「回避」から直接的に負の、「回避」から「排他的感情」を介して正の、「警戒行動」から正のパスが確認された。そのため、今回のデータでは特に両価的な愛着傾向に由来する疑い深さや回避的な愛着傾向によって、自分から葛藤状況を平和的に解決しようとする行動の予測は抑制され、また一方で例え回避的な愛着傾向を持っていたとしても、パートナーとの関係に第三者が侵入することへの排他的な感情を持っている場合や、日常的にパートナーに探りを入れる行動傾向が高い場合には対話行動は促進される方向にあることが示された。

「両価」と「対話志向」の間には負の相関( $r = -.32, p < .01$ )が示されていたが、因果モデルでは「両価」から「対話志向」に対して直接のパスが見られなかった。そのため、「両価」型の愛着傾向は「対話志向」の低さに直結するというよりも、「猜疑的認知」のような疑う嫉妬につながった場合にのみ「対話志向」を抑制する方向にあることが考えられる。相手から見捨てられることを恐れ、相手を疑う場合でも、さらに自分から探りを入れるような行動もしない場合、疑わしい葛藤が起きた際に関係の修復を諦め、潜在的な怒りを心の底に貯めながら相手が自分から謝ってくるか関係の行く末を決める一言を告げにくるまで、ひたすら普段通りの関係を演じて待ちの一手に徹するのかもしれない。

最後に「ライバル志向」については「警戒行動」が正の、「安定」が負の影響を示していた。そのため関係に闖入した第三者を排除することで関係の平穏を取り戻そうとするほど普段から第三者の存在を警戒し、ひたすらパートナーに探りを入れる傾向が強く、逆に安定型の愛着を持つ個人ほどそういった第三者の方向からの解決を試みないことが確認された。

上記の結果から、愛着の3類型はまず「両価」型傾向が嫉妬の「猜疑的認知」に強く影響を及ぼし、架空の浮気場面への反応としては愛着の「安定」や、特に「回避」が嫉妬傾向を介さずとも複数の行動の予測に対して直接的に影響を及ぼすことが示唆された。そのため、愛着は個人の嫉妬傾向を特に疑い深さの観点から左右しうる精神内的な自己・他者

像を反映するものであることが実証的に示され、また青年において愛着対象が自分から離れるかもしれない危機を提示した際にはそれに対処する各種の行動を、嫉妬傾向を介さずとも直接的に左右するだけの影響力を持つ力動であることも確認されたといえよう。

### 3. 本研究の意義と今後の課題

愛着研究の草分けとなった愛着の3類型から、嫉妬と架空の浮気に関する予測された行動との関連を捉えると、愛着の3類型は特に嫉妬の経験を司る「猜疑的認知」「排他的感情」と関連を示し、関連としては「両価」型傾向と「猜疑的認知」との関連が理論的な考察や先行研究と合致する形で色濃くみられた。また愛着傾向は特にABSIIの「沈黙志向」「対話志向」との関連を示していた。これらの結果はどれも安定型の愛着傾向は葛藤に際しても関係を能動的に改善しようとする行動につながり、不安定な愛着とされる回避型、両価型の愛着傾向は葛藤に際して縮こまり、消極的な行動の予測を促進する方向のものであった。そのため、本研究の結果から嫉妬全般や関係内で葛藤が起きた際に即時に反応を示さず、表面上普段通りの状態を装う傾向はパートナーを安定して利用できる安全基地ではないと無意識的に判断する心の動きに拠る部分があるものと実証的に示されたといえよう。日本国内でこういった愛着と嫉妬、浮気や嫉妬に対する行動の関連を体系的に検討した研究は本研究でも参考にした金政(2006)に次ぐ二番目の研究となり、愛着をもとの3類型的観点から捉えた研究としては初の研究となる。そのため今後我が国の嫉妬研究として、幼児期からある程度引き継がれて表れる愛着の観点から嫉妬を捉える際の基礎的知見を提供する上では意義があるものと考えられる。「両価」型傾向に関してはやはり理論的な示唆や先行研究と一致して個人の疑う嫉妬を促進するものであった。幼児期・児童期の経験と成人の嫉妬を結び付けた考察としては愛着理論の他にFreudによるエディプス・コンプレックスへの言及なども存在するが、嫉妬のプロセスが何によってもたらされるかという感情体験の根本を検討する意味でも今回の結果は意義のあるものであったと考えられる。また今回、「沈黙志向」については、愛着的観点だけでも様々な動機が交絡している可能性を垣間見られた点に関しては、今後の研究につながる重要な知見となりうるだろう。今回得られた結果は先行研究であるGuerrero(1998)や金政(2006)と幾分異なる部分も散見されたが、領域として研究が少ないことや、本研究では愛着を3類型的傾向から捉えていることによって結果が異なっている部分ももちろんあると考えられる。また、本研究で得られた調査協力者の数は少ないため、知見の一般化可能性については細心の注意を払う慎重さが要求される。そのため、今後の研究においてはまず今回の結果がどの程度一般化して捉えうるもの

か、調査協力者の数を募って統計的な危険性を取り除いていく必要があるだろう。次に、愛着を ECR 的観点の 2 軸で捉える場合にどのような結果が出るかを繰り返し検討していくことで、愛着と個人の嫉妬の経験と表出がどのように関わりうるのかをさらに詳細に検討していくことが求められるだろう。

#### 4. 本章のまとめと次章への導入

本章では「嫉妬が何によってもたらされるのか」を検討するため、愛着の観点をを用いて、個人の持つ基本的な愛着の傾向が、多次元恋愛関係嫉妬尺度で測定される嫉妬傾向に及ぼす影響、および愛着傾向と嫉妬傾向が ABSII で測定される浮気場面に際して予測される行動に及ぼす影響について検討することを目的としていた。

結果から、3つの愛着の傾向のうち、「安定」は基本的に嫉妬の経験の「猜疑的認知」「排他的感情」や ABSII の下位尺度のうち「沈黙志向」とは負の関連を示し、「対話志向」とのみ正の関連を示した。「回避」は逆に「猜疑的認知」「排他的感情」、 「沈黙志向」と正の関連、「対話志向」と負の関連を示し、「両価」も類似した形で「猜疑的認知」、 「沈黙志向」と正の、「対話志向」と負の関連を示した。因果モデルの検討では、 ABSII の各下位尺度に対して、嫉妬傾向を考慮した場合でも愛着の「安定」と「回避」がそれぞれ独自に正のパスを示した部分が見受けられた。特に「沈黙志向」に対しては、「安定」から負の、「回避」から正の、また愛着の全下位尺度から「猜疑的認知」を介して正の、「回避」から「排他的感情」を介して負のパスが見られた。そのため個人が浮気場面に際して「沈黙志向」のような行動を取る場合、愛着的観点を考慮に入れると多種多様な動機、交絡要因が存在することが示されたといえよう。また先行研究からの指摘と合致する形で、愛着の「両価」型特性が特に病的とされる嫉妬傾向の「猜疑的認知」に強く影響を及ぼしうるということが確認された。他にも「回避」が ABSII の「対話志向」に影響を及ぼしていたことを確認できたため、回避的な愛着傾向を持っているほど、恋人と葛藤を抱えた際に能動的に解決するようなコミュニケーションを取りにくい、ということが Guerrero(1998)や金政(2006)など、複数の先行研究と一致する形で見出された。

本章では嫉妬の根本となる心理的力動に着目したが、続く第 7 章では、嫉妬や浮気場面に対する個人の行動予測がどのようなことにつながりうるか、つまり「嫉妬が何をもたらすのか」を検討するために、恋愛関係上の問題行動と嫉妬の経験・表出の関連を検討することとする。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships, 7*, 147-178.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of personality and social psychology, 61*, 226-244.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol.1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田 実郎・大羽 稔・岡田 洋子・黒田 聖一 (訳) (1991). 母子関係の理論 I. 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田 実郎・岡田 洋子・吉田 恒子 (訳) (1991). 母子関係の理論 II. 分離不安 岩崎学術出版)
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences, 23*, 997-1006.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment - style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships, 5*, 273-291.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication, 78*, 586-611.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the green - eyed monster: Conceptualizing and measuring communicative responses to romantic jealousy. *Western Journal of Communication,*

59, 270-304.

Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process.

*Journal of personality and social psychology*, 52, 511-524.

金政 祐司 (2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について. 社会心理学研究, 22, 139-154.

Karakurt, G. (2012). The interplay between self esteem, feeling of inadequacy, dependency, and romantic jealousy as a function of attachment processes among Turkish college students. *Contemporary Family Therapy*, 34, 334-345.

Knobloch, K. L., Solomon, H. D., & Cruz, G. M. (2001). The role of relationship development and attachment in the experience of romantic jealousy. *Personal Relationships*, 8, 205-224.

古村 健太郎・村上 達也・戸田 弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価 心理学研究, 87, 303-313.

Marazziti, D., Consoli, G., Albanese, F., Laquidara, E., Baroni, S., & Dell'Osso, M. C. (2010). Romantic attachment and subtypes/dimensions of jealousy. *Clinical practice and epidemiology in mental health: CP & EMH*, 6, 53-58.

中尾 達馬・加藤 和生 (2004a). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.

中尾 達馬・加藤 和生 (2004b). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.

Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.

Rusbult, C. E., & Zembrodt, I. M. (1983). Responses to dissatisfaction in romantic involvements: A multidimensional scaling analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 19, 274-293.

Rydell, R. J., & Bringle, R. G. (2007). Differentiating reactive and suspicious jealousy. *Social Behavior and Personality: an international journal*, 35, 1099-1114.

Sharpsteen, D. J., & Kirkpatrick, L. A. (1997). Romantic jealousy and adult romantic attachment. *Journal of personality and social psychology*, 72, 627-640.

相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナー

との葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, 43, 75-84.

詫摩 武俊・戸田 弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度 成人版愛着スタイル尺度  
作成の試み 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.

White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*.  
New York: The Guilford Press.

## 第7章 嫉妬傾向、架空の浮気場面への予測行動と 恋愛関係上の問題行動との関連

ここでは、「嫉妬が何をもたらすのか」を検討するために、個人が経験している実際の恋愛関係上の問題行動と嫉妬の経験・表出との関連を検討する。具体的には、恋愛関係上の各種の問題行動は、嫉妬の経験のどのような側面、あるいは架空の葛藤へのどのような行動を予測する傾向により説明されうるのかを明らかにする。

## 問題

恋愛関係に関する研究として、全世界的に注目の的にあるのがデート DV 研究、もしくは Intimate Partner Violence(IPV)研究である。デート DV とは、青年期の恋愛関係にあるカップル間に生じる暴力のことである(赤澤他, 2016)。2015 年度の内閣府の「男女間における暴力に関する調査」の調査結果では、女性では 19.1%、男性では 10.6%が交際相手からの暴力を受けたことがあるとしており、一度でも交際相手から暴力を受けたことのある割合は我が国においてもそう低い率ではないことがわかる。

White & Mullen(1989)では嫉妬による暴力は多くの場合家庭内暴力、パートナーに向けた暴力であるが、嫉妬がどう暴力につながるかということについては不透明であるとしている。瀧田(2009)では、DV 関係では相手の行動や好みなどを制限し、制限を加えるという暴力が多いとされ、そういった暴力のなかでも嫉妬による束縛が多いと指摘している。こういった場合の束縛、好意や愛情を盾にした暴力は個人の判断力を鈍らせることが多いとされやすい。「これは相手が自分のことをそれだけ好きでやっていることだから」と思い、「彼/彼女のために」と自己陶酔的に相手に従ってしまう青年の多さが瀧田(2009)や遠藤(2007)によって指摘されている。この意味では、多くの嫉妬者はいつも暴力を振るうのではなく、日常的には半ば無意識的にパートナーの行動をコントロールすることに動機づけられて日常的な恋愛関係の中では小さな影響力を持つ束縛めいた行動を取ることが考えられる。一方で、パートナーを自分が思った通りにコントロールができない場合、特にそれが自分以外の誰かに対する並々ならぬ関心を伴ったものであると知った場合には多大なストレスを抱え、より強大な影響力を振るおうとして最悪の場合に暴力を振るう、といったメカニズムが考えられるだろう。Pines(1992)、Buss(2000)や Guerrero, Spitzberg, & Yoshimura(2004)などによれば、嫉妬の反応として暴力を振るう者は比較的稀ではあるが、しかし嫉妬はやはり IPV の大きな動機の一つであるとされる。Pines(1992)や Buss(2000)、Bevan(2013)がまとめるようにそういった暴力はもちろん怪我や配偶者殺人、自殺、離婚の問題などに直結しやすく、また直接的な暴力でなくとも、言葉などによる精神的暴力もあれば、望まないことを強制させることや、つきまとい等の暴力も存在する。

実際に嫉妬深さと各種の IPV 傾向との関連を裏付けるような研究としては、例えば既に配偶者暴力などで逮捕歴のある臨床群と一般的な成人とを比較して臨床群において嫉妬得

点が有意に高いことを示す研究などが散見されるが、嫉妬と IPV、あるいはデート DV の関連を指摘するような先行研究では大半が嫉妬を一次的に捉えており、Pfeiffer & Wong(1989)の MJS で捉えるような多次元的な嫉妬と IPV の関連についてはそう多くは報告されておらず、また Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy(1995)の CRJS のように、嫉妬に対してどのように対処する個人が IPV を行いやすいかといった観点からの研究はほぼ見当たらないといえる。MJS と IPV の関連を示すような研究として、Rodriguez, Dibello, Øverup, Neighbors(2015)では MJS の cognitive jealousy と behavioral jealousy と IPV 加害傾向とが有意な正の関連を示し、emotional jealousy と IPV 加害傾向とは無関連であったことから、特に嫉妬の中でも疑い深さや実際に相手を詮索するような行動を取る傾向は個人の親密な相手への暴力を促進する要因となる可能性が考えられる。さらに越智・喜入・甲斐(2017)では MJS を参考にした多面的嫉妬尺度の中で嫉妬の認知的側面がデートバイオレンス・ハラスメントの被害傾向とも関連していたため、特に認知的な嫉妬傾向は恋愛関係上の問題行動の加害のみならず被害とも関連している可能性が示唆されている。

ただし片岡・園田(2016)が指摘するように、一般の恋愛研究では恋愛関係上の問題行動は一般的に生じる恋愛行動の一つとして取り扱われるのに対し、デート DV 研究ではより重大な危害に発展する可能性を見込んでか絶対にしてはならない行動として取り扱う点に研究領域間の温度差があるようにも思われる。この点に関しては、暴力を代表とする恋愛関係上の問題行動は、片岡・園田(2016)がまとめるように、進化心理学的観点の配偶者維持行動 mate retention behavior として捉えることもできれば、大野(2010)が指摘するようなアイデンティティのための恋愛の途上で未成熟な青年の起こす行動と考えることもできるだろう。デート DV や、パートナーや他者を深刻に傷つけるような恋愛関係上のトラブルは、全てが突然に発生するものではなく、様々な段階を踏んで、やがて大きなトラブルにつながる暴力等に派生すると考えられる。そのため、個人のとる恋愛関係上の問題行動が例えば誰もが親密な関係の中で経験しうる嫉妬など、どのような心的力動から発生しうるかを検討していくことには意義があるだろう。

上記から、恋愛関係内で生じる暴力やそれに類する問題行動の生起に関連する要因を検討することは、今後青年の恋愛関係を研究していく上でも意義のあることと考えられる。また、恋愛関係の中で生じる暴力や問題行動が嫉妬や浮気に対する反応等に関連するのであれば、本博士論文で作成した尺度が個人が恋愛関係上で示す暴力的傾向とどのような関

連を示すか、詳細に検討を行うことで、尺度の有用性や限界を知ることにもつながると考えられる。そこで、本研究では恋愛関係内で生じる暴力的傾向を捉える概念として片岡・園田(2014)による「恋人支配行動」を設定し、この「恋人支配行動」尺度と本章までに作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度、および ABSII を用いることで、恋愛関係内で起こりうる相手を支配するような問題行動の加害傾向を、嫉妬の経験と表出という観点からどれだけ説明しうるか、検討することを目的とする。

デート DV や暴力の程度を評定するのは赤澤他(2016)や White & Mullen(1989)が指摘するように困難とされる。「恋人支配行動」は片岡・園田(2014)によれば「恋人の行動を制限する行為」とされるが、片岡・園田(2016)では「自身の恋人が他の異性と関係を築くことを阻止するためにとる行動」と再定義されており、携帯電話の監視や返信の強制、他の関係より自身の恋愛関係を優先させるという束縛的な行動や、身体的・精神的・性的な暴力を用いて恋人を従わせようとする行動と捉えられており、回答者は例えば「○○をわざといやな呼び名で呼んだり、馬鹿にしたりする。」といった項目に、○○を自分の恋人の名前として、自分がどの程度当てはまるか評定する形式をとっている。そのため、この尺度では個人がどの程度自らが関係内で恋人を支配するような行動を取っていると自覚しているかを測定しているものであると考えられる。この「恋人支配行動」尺度は日本の一般的な青年が恋愛関係の中である程度経験することが予測される程度のデート DV につながりうる問題行動を取り扱う尺度で、項目数も少ないことから調査協力者への負担・侵襲性に関しても他の複雑な因子構造と膨大な項目数を持つ尺度に比べると幾分簡便で扱いやすいものと考えられる。「恋人支配行動」は「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」の2下位尺度から構成され、「暴力的支配行動」は片岡・園田(2016)によればデート DV の身体的・精神的・性的暴力の3領域と概ね合致するとされ、また「束縛的支配行動」は社会的暴力と対応しているとされる。先行研究の結果から、「恋人支配行動」の2下位尺度はともに多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」「警戒行動」と正の関係にあることが予測される。また、ABSII の下位尺度については尺度内容から、「攻撃志向」は「恋人支配行動」と全般的に正の、「対話志向」は「恋人支配行動」とは全般的に負の関連にあることが考えられるだろう。

さらに先述のように、個人が恋愛関係の中で示す暴力的傾向については、男女の差が論じられることも極めて多いため、本研究においては性別についても分析に含めることで考慮することとする。また、片岡・園田(2014)の研究では交際期間の長短が「恋人支配行動」に影響を及ぼすことについて言及されており、交際期間が短い場合に恋人が自分から離れ

ていくことへの不安を示す「恋人分離不安」が高いと、特に直接的な暴力傾向が抑制されるが、交際期間が長い場合にはその傾向は見受けられないことが報告されている。そのため、本研究では交際期間の長さについても分析に含めることとした。

## 方法

### 1. 調査協力者

大学生 456 名に質問紙調査を行い、欠損値のみられなかった 400 名(平均年齢 19.54 歳,  $SD=2.09$ , 18 歳~49 歳, 男性 157 名, 女性 243 名)のうち, さらに 25 歳未満で結婚しておらず, 現在恋人がいる 99 名(平均年齢 19.53 歳,  $SD=1.02$ , 18 歳~23 歳, 男性 29 名, 女性 70 名)を分析対象とした。なお, この調査協力者は第 6 章と同一のものである。

### 2. 測定尺度

フェイスシートにて学年・年齢・性別について回答を求め, さらに現在交際中の恋人の有無と以下の質問紙への回答を求めた。なお, 交際期間については得られた回答を月換算したものを分析に用いた。

#### (1) 多次元恋愛関係嫉妬尺度 :

現在の関係での嫉妬傾向を測定するために, 現在交際している人物の名前を X さんとして想起させ, X さんとの普段の交際の中でどの程度当てはまるか, 「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」各 5 項目で, 「1.全く当てはまらない」~「7.非常に当てはまる」の 7 件法で回答を求めた。本研究での  $\alpha$  係数は順に,  $\alpha=.84, .81, .76$  であった。

#### (2) ABSII :

現在の恋愛関係において浮気に関する葛藤があった際に個人がどのような行動を予測するかを測定する尺度で, 「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の 5 下位尺度 22 項目からなる。回答者への教示として, 現在交際している人物の名前を X さんとして想起させた上で, 「この質問ではある場面を想像して回答して頂きます。《想像場面: あなたはとある土曜日の夜, あなたの恋人 X さんが, あなたの知らない人物 Y さんとデートしているように見える姿をたまたま目撃してしまいました。》もしも仮にこのようなことがあったら, あなたはその後, どんな行動を取ると思いますか。あるいはどんなことを考えると思いますか。」という教示を与えた。各項目に対して「1.当てはまらない」~

「5.当てはまる」の5件法にて回答を求めた。本研究での $\alpha$ 係数は順に $\alpha = .80, .86, .84, .82, .54$ であった。最後の「ライバル志向」に関しては $\alpha$ 係数が.60を下回ったものの、他の調査時にある程度の信頼性係数が得られていたことや、本研究での調査人数が少なく、少数の極端な回答結果に左右されて信頼性係数が低下した可能性も否めないと判断し、項目の削除は行わず、4項目全ての平均値を算出して分析に用いた。そのため本研究における「ライバル志向」の結果はあくまで参考程度のもとなることに留意する必要がある。回答の際には(1)の交際経験に基づき、実在の恋人あるいは自分に将来できた恋人の名前を「Xさん」として、回答を求めた。

### (3) 恋人支配行動尺度：

片岡・園田(2014)による恋人支配尺度を用いた。恋人の行動を制限するような恋愛関係の中での行動を測定する尺度で「暴力的支配行動」「束縛的支配行動の2下位尺度各5項目からなる。多次元恋愛関係嫉妬尺度での回答で思いうかべてもらった実際の恋人Xさんとの関係の中で、各項目の内容がどの程度当てはまるか、「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」の7段階評定(1～7点)で回答を求めた。なお、少しでも調査協力者がイメージしやすく、また回答しやすい項目となるよう、原版では「〇〇にメールを返すことを強制する」などの文章で用いられている「メール」の表現を「メールやLINEなど」に表現を修正して調査に用いた。本研究での $\alpha$ 係数は順に $\alpha = .71, .67$ であった。

## 3. 調査手続き

2017年6月～12月に上記の質問紙を関西地方の大学の講義中に実施した。倫理的配慮として調査の匿名性、回答の非強制性、回答に困難を感じた場合に中断できることを説明した上で、回答に不備のない協力者を分析対象とした。

## 結果・考察

### 1. 記述統計量

本研究で用いた尺度得点および交際期間の長さの性差について検討したところ、「暴力的支配」「束縛的支配」の両得点のみで有意な差が得られ、女性に比べ男性の方が5%水準で有意に高いという結果となった(Table7-1)。片岡・園田(2014)や片岡・園田(2016)などでは

「暴力的支配」得点に有意な性差は得られておらず、逆に「束縛的支配」得点において女性が男性よりも有意あるいは有意傾向で高いとする結果が得られているが、本研究ではそのような結果は得られなかった。

Table7-1 各変数の男女別記述統計量

尺度	変数	男性(N=29)		女性(N=70)		t値
		Mean	SD	Mean	SD	
嫉妬傾向 (1~7点)	1.猜疑的認知	3.15	1.40	3.03	1.37	- 0.41
	2.排他的感情	4.56	1.35	4.77	1.36	0.72
	3.警戒行動	3.30	1.31	3.29	1.24	- 0.02
ABSII (1~5点)	4.攻撃志向	2.41	0.80	2.43	0.99	0.12
	5.沈黙志向	2.32	1.04	2.46	1.03	0.61
	6.別れ志向	2.47	0.90	2.26	1.03	- 0.92
	7.対話志向	3.88	0.83	3.72	1.02	- 0.74
恋人支配 (1~7点)	8.ライバル志向	2.93	0.75	2.74	0.97	- 0.94
	9.暴力的支配	2.15	1.10	1.66	0.67	- 2.71*
	10.束縛的支配	2.06	1.16	1.71	0.68	- 1.83*
	11.交際期間	13.14	12.94	11.27	11.59	- 0.70

\* $p<.05$

## 2. 相関分析結果

次に、恋人支配行動尺度の各下位尺度と、多次元恋愛関係嫉妬尺度と ABSII の各下位尺度と交際期間との関連を相関分析にて検討した(Table7-2)。また、恋人支配行動尺度の下位尺度「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」の相関係数が  $r=.60(p<.001)$  と、下位尺度間に強い正の関連がみられたため、「束縛的支配行動」を統制した場合の「暴力的支配行動」、 「暴力的支配行動」を統制した場合の「束縛的支配行動」との偏相関係数についても併せて算出した。

まず「暴力的支配行動」について、「猜疑的認知」「警戒行動」は「暴力的支配行動」と有意な正の関連を示していたものの( $r=.35, .34$ , ともに  $p<.001$ )、偏相関分析では有意傾向、あるいは無関連となり、係数も低くなっていたため ( $pr=.17, .09, p<.10, n.s.$ )、これらの関連は「束縛的支配行動」と「暴力的支配行動」との重複による部分があった可能性が考え

られる。「排他的感情」は「暴力的支配行動」とは相関・偏相関分析ともに有意な関連を示さなかった。また、「暴力的支配行動」と ABSII の各下位尺度の関連については、「攻撃志向」「別れ志向」がともに有意な正の関連を示し( $r=.33, p<.001, r=.22, p<.05$ ), 「対話志向」は有意傾向の負の関連を示した( $r=-.17, p<.10$ )。「攻撃志向」は偏相関分析にて有意な関連を示したが ( $pr=.20, p<.05$ ) 「別れ志向」「対話志向」は偏相関分析においては有意な関連を示さなかった。相関分析の結果から、日頃からパートナーを疑いがちで、相手の人間関係をチェックするような行動を取り、また葛藤が起きた際にパートナーへの攻撃や別れを予測する個人ほどやや暴力的な傾向を示し、一方で葛藤が起きた際にパートナーとの関係を修復しようとする個人ほど普段の関係においても暴力的な行動をやや抑制する傾向にあるといえる。これらの関連は基本的には想定に沿った結果であったといえる。しかし、「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」の重複について考慮してもなお「暴力的支配行動」との有意な関連が得られたのは「猜疑的認知」と「攻撃志向」のみであったことには留意する必要があるだろう。

「束縛的支配行動」との相関・偏相関分析結果については、多次元恋愛関係嫉妬尺度の「排他的感情」は相関分析・偏相関分析とともに有意傾向の正の関連を示し( $r=.18, p<.10, pr=.18, p<.10$ ), また「猜疑的認知」と「警戒行動」はともに相関分析・偏相関分析において有意な正の関連を示していた( $r=.38, p<.001, pr=.23, p<.05, r=.47, p<.001, pr=.35, p<.001$ )。特に「警戒行動」は共通して比較的強い関連を示していたが、これは「警戒行動」がそもそも恋愛関係の中で普段からパートナーに対して潜在的な浮気の可能性を探るような行動の度合いを測定するものであり、それはパートナーの連絡の相手を気にするような内容も概念的に含むため、同様の概念的内容・及びその内容に相当した項目を含む「束縛的支配行動」との関連が特に示されたと考えられる。またその一方で ABSII の各下位尺度は「束縛的支配行動」との相関・偏相関においては「攻撃志向」「別れ志向」が有意な正の関連を示した( $r=.40, p<.001, pr=.23, p<.05, r=.30, p<.01, pr=.21, p<.05$ )。そのため、葛藤に際して攻撃や別れを対処法として予測する個人ほど、現在の恋愛関係の中で束縛めいた恋人支配行動を取っている傾向にあることが結果から示唆された。

Table7-2 暴力・束縛的支配得点と諸変数の  
相関・偏相関分析結果

	暴力		束縛	
	相関	偏相関	相関	偏相関
1.猜疑的認知	.35***	.17 <sup>†</sup>	.38***	.23*
2.排他的感情	.05	-.07	.18 <sup>†</sup>	.18 <sup>†</sup>
3.警戒行動	.34***	.09	.47***	.35***
4.攻撃志向	.38***	.20*	.40***	.23*
5.沈黙志向	.13	.13	.04	-.04
6.別れ志向	.22*	.05	.30**	.21*
7.対話志向	-.17 <sup>†</sup>	-.16	-.07	.03
8.ライバル志向	.09	.05	.08	.04
9.交際期間	-.04	-.06	.01	.04

<sup>†</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ .

### 3. 階層的重回帰分析結果

性別、交際期間、多次元恋愛関係嫉妬尺度、ABSII の各下位尺度と個人が評定する関係内での「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」の関連を詳細に検討するため、恋人支配行動の2下位尺度それぞれを目的変数とした階層的重回帰分析を行った。Step1 ではデモグラフィック変数として「性別」（男性=1, 女性=0 で名義尺度化している）、「交際期間」（月計算）を投入し、Step2 で多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度得点を投入し、Step3 でABSII の各下位尺度得点を全て強制投入法によって投入した。また一次の説明変数間の交互作用項をステップワイズ法にて投入し、「暴力的支配行動」に対しては「性別」と「攻撃志向」間の交互作用項と「警戒行動」と「沈黙志向」間の交互作用項が有意となったので、「暴力的支配行動」の Step4 ではその2つの交互作用項を強制投入法によって投入した結果を報告する(Table7-3)。「束縛的支配行動」に対しては「性別」と「交際期間」間、「性別」と「別れ志向」間、「性別」と「猜疑的認知」間の交互作用項が有意となったため、これら3つの交互作用項を Step4 にて強制投入法によって投入した結果を報告する(Table7-4)。なお、両分析のステップ4におけるVIFは最大でも2.25であったため、多重共線性の問題はないと判断した。

「暴力的支配行動」に対する Step3 までの階層的重回帰分析の結果を概観すると、やは

り男性において「暴力的支配行動」が示されやすい傾向にあることがわかる。また、Step1からStep2, Step2からStep3での $R^2$ の変化量がそれぞれ有意となったため( $\Delta F=9.90$ ,  $p<.001$ ,  $4.62$ ,  $p<.001$ ), 多次元恋愛関係嫉妬尺度とABSIIがともに実際の恋愛関係の中で生起している軽度の暴力を有意に説明しうる尺度内容を含むことが実証的に示されたといえよう。しかしStep3の結果を参照する限りでは、ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」のみが有意な標準偏回帰係数を示したのみで、その他は有意な結果を示さなかったため、葛藤時に攻撃的な行動を予測する傾向が、実際の恋愛関係上での暴力的な問題行動を予測しているのみとも捉えられるだろう。多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度に関しては、「排他的感情」の結果が相関分析からは異なり、相手の裏切りに過剰に嫌悪感を抱く傾向は他の嫉妬の側面を統制した場合にはむしろ暴力的な行動を抑制しうる方向にあることが結果から考えられた。この結果はABSIIの各下位尺度得点を投入したStep3や交互作用項を投入したStep4でも頑健に見受けられたため、Pfeiffer & Wong(1989)やAttridge(2013), Elphinston, Feeney, & Noller(2011)など、嫉妬の感情的な側面を関係に対して比較的ポジティブな側面と捉える先行研究と整合する方向の結果であったといえよう。

Table7-3 「暴力的支配行動」に対する階層的重回帰分析結果  
(強制投入法,  $N=99$ )

変数	step1		step2		step3		step4	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
性別	.50	.27 **	.43	.23 **	.45	.25 **	.51	.27 ***
交際期間	.00	-.06	.00	-.06	-.01	-.08	-.01	-.12
猜疑的認知			.22	.35 ***	.19	.31 **	.13	.21 †
排他的感情			-.18	-.29 *	-.22	-.35 **	-.20	-.32 **
警戒行動			.25	.37 ***	.19	.28 *	.19	.29 **
攻撃志向					.35	.39 ***	.38	.43 ***
沈黙志向					.01	.01	.00	.00
別れ志向					.03	.04	.03	.04
対話志向					-.15	-.17	-.23	-.26 *
ライバル志向					.01	.01	.03	.03
性別 * 攻撃							.19	.21 **
警戒 * 沈黙							.19	.21 *
$R^2$		.07 *		.30 ***		.44 ***		.52 ***
調整済み $R^2$		.05 *		.26 ***		.38 ***		.45 ***
$\Delta F$		3.81 *		9.90 ***		4.62 ***		6.46 **

†  $p<.10$ , \*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ .

「束縛的支配行動」の Step3 までの結果に注目すると、「束縛的支配行動」とやや合致する形で、男性で有意傾向に多いことがわかる。また Step1 から Step2 での  $R^2$  の変化量( $\Delta F=13.24, p<.001$ ), Step2 から Step3 での  $R^2$  の変化量( $\Delta F=3.63, p<.01$ )で、ともに有意であった。そのため、「束縛的支配行動」に対しても、多次元恋愛関係嫉妬尺度と ABSII が独自に持つ影響力が存在することが考えられる。Step3 までの結果を参照すると多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度では「猜疑的認知」「警戒行動」が有意な正の影響を、「排他的感情」が有意傾向ながら負の影響を示していた。この結果は「暴力的支配行動」の結果とほぼ同様のものではあったといえるが、得られた標準回帰係数から、「束縛的支配行動」と概念的な類似性の高い「警戒行動」が相対的に強く関係内での束縛めいた行動を予測している、と捉えることができるだろう。また ABSII の下位尺度については、相関分析の際に「束縛的支配行動」との関連を示した「攻撃志向」と「別れ志向」が階層的重回帰分析においても同様に有意な正の影響を示していた。そのため、これらの葛藤時に攻撃や別れを予測しやすい傾向は個人の嫉妬傾向とは独立して実際の恋愛関係上での束縛を予測しうることが示唆されたといえよう。

Table7-4 「束縛的支配行動」に対する階層的重回帰分析結果  
(強制投入法,  $N=99$ )

変数	step1		step2		step3		step4	
	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$	B	$\beta$
性別	.34	.18 <sup>†</sup>	.29	.16 <sup>†</sup>	.31	.16 <sup>†</sup>	.26	.14 <sup>†</sup>
交際期間	.00	.00	.00	-.02	.00	-.07	-.01	-.08
猜疑的認知			.19	.30 <sup>**</sup>	.16	.26 <sup>*</sup>	.18	.29 <sup>**</sup>
排他的感情			-.13	-.20 <sup>†</sup>	-.14	-.21 <sup>†</sup>	-.16	-.26 <sup>*</sup>
警戒行動			.32	.46 <sup>***</sup>	.29	.43 <sup>***</sup>	.28	.41 <sup>***</sup>
攻撃志向					.24	.26 <sup>*</sup>	.24	.27 <sup>**</sup>
沈黙志向					-.03	-.04	-.03	-.04
別れ志向					.15	.17 <sup>*</sup>	.14	.16 <sup>*</sup>
対話志向					-.09	-.10	-.09	-.10
ライバル志向					-.11	-.11	-.07	-.07
性別 * 交際期間							-.15	-.18 <sup>*</sup>
性別 * 別れ							.18	.19 <sup>*</sup>
性別 * 猜疑							.26	.30 <sup>***</sup>
$R^2$		.03		.32 <sup>***</sup>		.44 <sup>***</sup>		.59 <sup>***</sup>
調整済み $R^2$		.01		.29 <sup>***</sup>		.37 <sup>***</sup>		.53 <sup>***</sup>
$\Delta F$		1.66		13.24 <sup>***</sup>		3.63 <sup>**</sup>		10.51 <sup>***</sup>

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$ .

### 「暴力的支配行動」に対する交互作用の効果

階層的重回帰分析では複数の交互作用項が有意となったため、標準化したそれぞれの尺度得点間の交互作用について検討を行う。「暴力的支配行動」に対して、まず「性別」と「攻撃志向」の交互作用について検討する(Figure7-1)。単純傾斜検定の結果、「性別」が高い場合、つまり男性では、「攻撃志向」が高いほど「暴力的支配行動」も有意に高くなりやすいという結果が得られた( $\beta=.65, p<.001$ )。一方で「性別」が低い場合、すなわち女性では、「攻撃志向」の度合いが高いほど、「暴力的支配行動」も有意傾向で高くなるという結果が得られた( $\beta=.20, p<.10$ )。

次に「警戒行動」と「沈黙志向」の交互作用について検討する(Figure7-2)。単純傾斜検定を行った結果として、「警戒行動」が低く「沈黙志向」が高い場合には「暴力的支配行動」の得点が有意傾向で低くなることを見出され( $\beta=-.22, p<.10$ )、また「警戒行動」が高く「沈黙志向」が高い場合には「暴力的支配行動」が有意傾向で高くなるという結果が見出された( $\beta=.23, p<.10$ )。

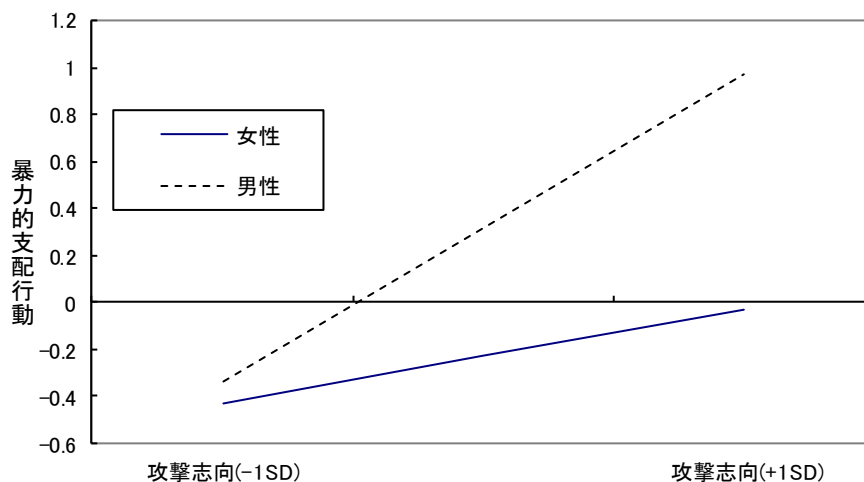


Figure7-1 暴力的支配行動に対する性別と攻撃志向の交互作用

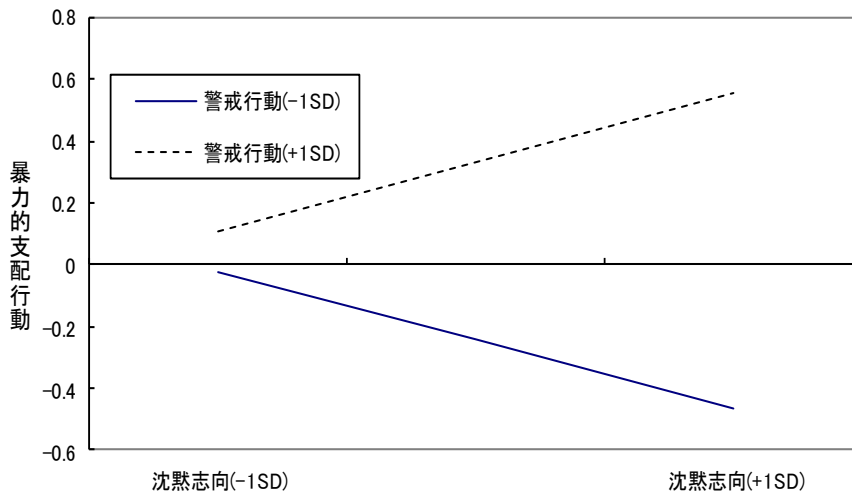


Figure7-2 暴力的支配行動に対する警戒行動と沈黙志向の交互作用

### 「束縛的支配行動」に対する交互作用の結果

「束縛的支配行動」に対しては、Step3 では有意となる説明変数が「警戒行動」のみであったのに対し、Step4 では「性別」に関わる 3 つの交互作用項が有意となった。この結果に関しては、本研究で投入した多次元恋愛関係嫉妬尺度や ABSII では「束縛的支配行動」のごく一部分のみを説明するにとどまっており、さしあたっては「性別」に関わる交互作用項などの特定の変数の組み合わせ・条件を考慮することである程度「束縛的支配行動」を説明することができると思われる。

まず「性別」と「交際期間」の交互作用項に関して、単純傾斜検定を行った(Figure7-3)。その結果、男性では「交際期間」が長くなるにつれて「束縛的支配行動」が有意に減少するが( $\beta = -.25, p < .05$ )、女性では「交際期間」の長さで「束縛的支配行動」は有意には変化しない( $\beta = .10, n.s.$ )という結果が得られた。

次に「性別」と「別れ志向」の交互作用項について単純傾斜検定を行った(Figure7-4)。この結果については、女性では ABSII の「別れ志向」の高低は「束縛的支配行動」に対して有意な影響を示さず( $\beta = -.04, n.s.$ )、男性では「別れ志向」が高いほど「束縛的支配行動」が有意に高くなる( $\beta = .37, p < .01$ )、という結果であった。この結果から、男性では、パートナーの裏切りに際して別れを選ぶ傾向が強い場合、実際の恋愛関係内での束縛めいた問題

行動を取りやすいが、女性ではその傾向が見られないことが示唆された。

最後に、「性別」と「猜疑的認知」の交互作用項について単純傾斜検定を行った(Figure7-5)。その結果として、女性では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」の高低が「束縛的支配行動」に対して有意な影響を示さなかったのに対して( $\beta = -.01, n.s.$ ), 男性では「猜疑的認知」が特に高い場合に「束縛的支配行動」が強く見られる( $\beta = .59, p < .001$ )という結果であった。この結果から、男性の疑う嫉妬の強さは束縛めいた支配行動に直結しやすいのに対して、女性では疑う嫉妬の強さと束縛的な支配行動とは必ずしも関連を示さないことが考えられた。

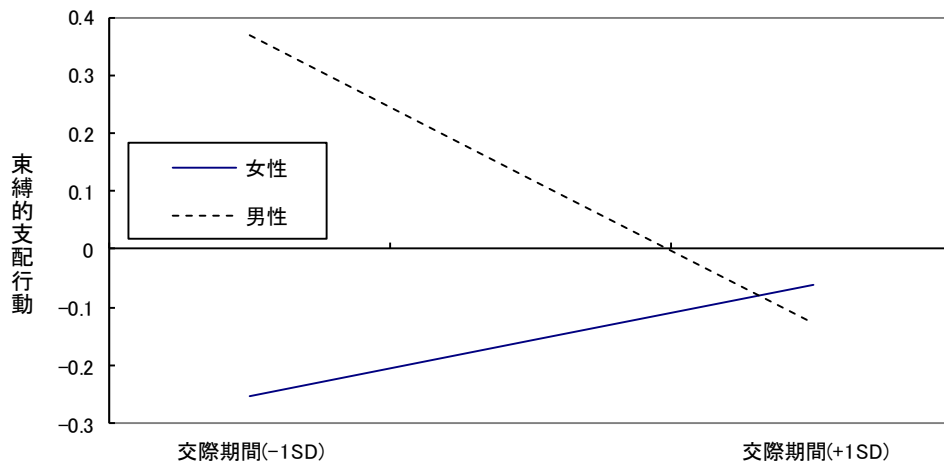


Figure 7-3 束縛的支配行動に対する性別と交際期間の交互作用項

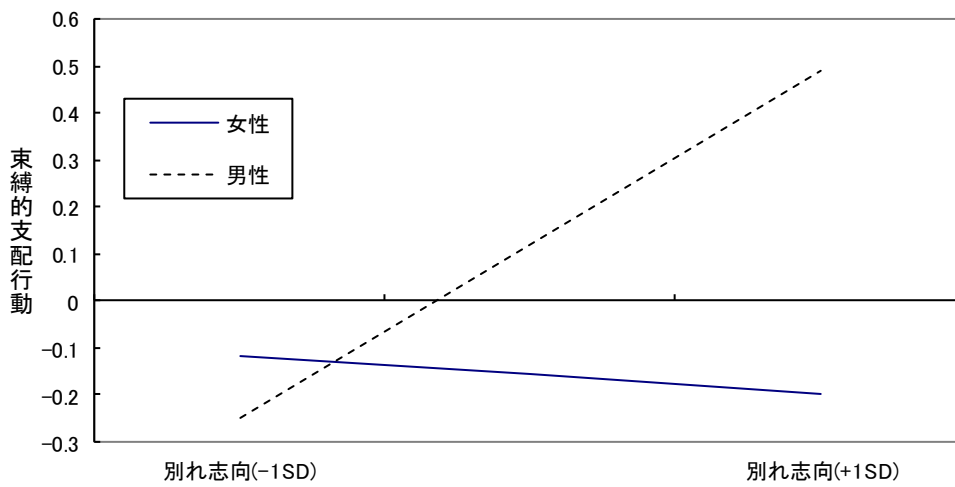


Figure7-4 束縛的支配行動に対する性別と別れ志向の交互作用

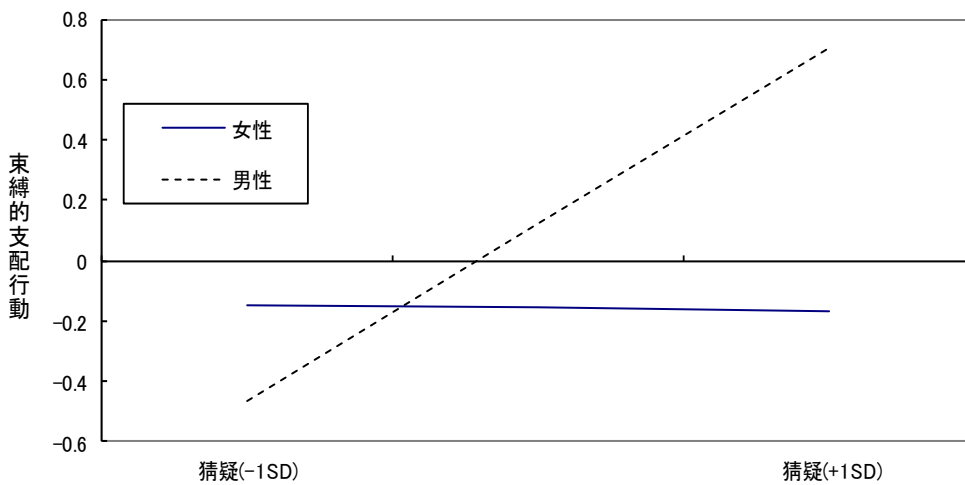


Figure7-5 束縛的支配行動に対する性別と猜疑的認知の交互作用

### 総合考察

本研究では、DV や DaV にもつながりうるような、実際の恋愛関係で起こりうるレベルの問題である「恋人支配行動」が、嫉妬の経験と表出について検討可能である本博士論文

で作成した二つの尺度、多次元恋愛関係嫉妬尺度と ABSII とその他デモグラフィック変数によってどの程度説明されうるかを検討するため、恋人支配行動の各下位尺度「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の2つの変数を目的変数とした階層的重回帰分析を行った。

階層的重回帰分析を行う前に、測定尺度について男女別の記述統計を算出した結果、「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」はともに男性の方が女性よりも高いという結果が示された。先述の通り、この結果は片岡・園田(2014)や片岡・園田(2016)とは合致しない結果であった。この不一致は本研究も両研究においても調査対象者の少なさが関係している可能性も考えられる。また、先行研究においては本研究の結果を支持するような、男性が女性に比べ暴力的であるとする研究結果や言説については枚挙に暇がないことから、本研究の結果が特異な結果であるとも考えられない。そのため、単純な得点の性差については本研究の結果からは安易に結論づけることはできないだろう。さらに今回得られた「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の平均値を参照すると、得点範囲が1~7点となっているうちの1.66~2.15点程度でしかないことにも留意する必要がある。すなわち、本研究で得られているデータではほとんどの調査協力者が、恋愛関係上の問題行動を取っていない、と自己評定しているため、結果の一般化・解釈には注意すべきであろう。

## 1. 暴力的支配行動に関して

相関分析や階層的重回帰分析の結果から、「暴力的支配行動」に対しては多次元恋愛関係嫉妬尺度、ABSII のどちらの尺度も独自に関連する部分があることが示されたため、作成した尺度が現実的な関係における暴力行動に関する問題を予測する上で有用である可能性が示唆されたといえよう。「暴力的支配行動」に対しては本研究では性別として男性においてより見受けられる行動で、さらに「猜疑的認知」や「警戒行動」など、日頃からパートナーの裏切りを疑ってしまう傾向や実際に関係に侵入する第三者がいないか、パートナーに詮索するような行動、さらに浮気場面が起きた際にパートナーへネガティブな感情を爆発させるような「攻撃志向」を予測する個人ほどパートナーとの関係において暴力的な傾向にある可能性が考えられた。これらの結果のうち、特に「猜疑的認知」「警戒行動」の結果は Rodriguez et al.(2015)の結果を支持するものであったといえる。逆に「排他的感情」を持つ、パートナーに裏切られることに対して過剰に嫌悪感を持つ傾向はこの直接的で暴力的な傾向を抑制する部分もあることが階層的重回帰分析の結果からは考えられた。Pffifer & Wong(1989)より広まった嫉妬を多次元的に捉える方法は嫉妬を一次元で捉える観点よりも詳細に嫉妬に関して考察できる点で優れているとされるが(Elphinston, Feeney, &

Noller, 2011), 本研究の結果でも嫉妬の認知・行動的側面がネガティブな方向を示し, 情動的側面がポジティブな方向の結果を示した点からも, 嫉妬を多次元的に捉える利点は示されたといえよう。

## 2. 束縛的支配行動に関して

また「束縛的支配行動」に関しても, 多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」「警戒行動」との関連がみられたため, こちらの方向の恋人支配行動に関しても, 特に多次元恋愛関係嫉妬尺度を用いることである程度予測が可能であることが考えられる。ただし先述のように, 概念的な想定として多次元恋愛関係嫉妬尺度の「警戒行動」は「束縛的支配行動」と非常に似通った部分が存在するため, これらの関連はある意味当然と考えられるかもしれない。しかし, 「束縛的支配行動」は文字通りパートナーの社会的な活動や社交を制限することを目的とするような行動を測定する尺度であり, 関係に侵入しうる第三者をそれとなく探るような行動を測定する「警戒行動」とは必ずしも同一のものではないだろう。両変数の相関係数も  $r=.47(p<.001)$ であったことから, いきすぎた「警戒行動」はやがて「束縛的支配行動」へとつながる, という解釈ができると考えられる。

また, 「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の双方に関して, ABSII の下位尺度では「攻撃志向」と「別れ志向」との正の関連が示され, 「束縛的支配行動」に対してはこれら2つの下位尺度得点は階層的重回帰分析においても全ての Step で正の影響を示していた。ABSII の「攻撃志向」は葛藤に際してパートナーに対して攻撃的に振る舞うことを予測する傾向であり, この得点が高いほど実際の恋愛関係においても暴力的・束縛的な行動を行っていると感じていることに関しては妥当な結果であるといえるだろう。一方で, 葛藤に際して別れを選択する傾向は関係からの離脱を目指す点で, 特に束縛とは逆の性質を持つようにも捉えられる。この点については, Hall & Fincham(2006)で浮気をされたことによって別れを切り出した個人は, 自らが浮気したことによって別れを切り出した個人よりもゆるし得点が低いと報告されていることや Davidson, Lozano, Cole, & Gervais(2015)によって IPV 経験と自己・他者・コントロールできない状況へのゆるし得点の間に負の関連が見出されたことから解釈を行うことができるだろう。すなわち, 自分の思い通りにならないパートナーを許容できない個人ほど, パートナーを暴力・束縛によって支配し, また浮気された場合には即座に別れを選択しやすい, という可能性が考えられるだろう。なお, ABSII の他の下位尺度は有意な関連を示さなかったため, 関係に葛藤が起きた際にどういった行動を予測するかという傾向は, 普段の関係における束縛めいた行

動とは基本的には直線的な関係にないことが示唆された。「対話志向」は「暴力的支配行動」とは有意傾向の負の関連を示したものの、「束縛的支配行動」と明確な関連を示さなかったことについては想定とはやや異なる結果であった。そのため、束縛でパートナーの社交を制限する問題行動の傾向は、パートナーを暴力で支配しようとする傾向とは違い、葛藤時のパートナーとの対話の予測を阻害するものではないことが示唆されているといえよう。

### 3. 交互作用項に関して

本研究では「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の両変数に対して、探索的に一次の交互作用項を投入した。「暴力的支配行動」に対しては、まず「性別」と「攻撃志向」の交互作用項が有意であった。すなわち、本研究の結果では相関分析や階層的重回帰分析の Step3 までの結果でも示されていたように、男女ともに ABSII の「攻撃志向」が高いほど実際に恋愛関係上で暴力的な問題行動を起こしている傾向が高いが、男性の場合では女性に比べさらに ABSII での「攻撃志向」と「暴力的支配行動」との結びつきが強く、ABSII で裏切ったパートナーに対して強く攻撃的な態度を取ることを自ら予測している個人ほど、現実の恋愛関係においても自分がパートナーに対して暴力的な支配行動を取っていると評定しやすいことが示された。また、「警戒行動」と「沈黙志向」の交互作用項も有意となっていたため、双方ともに有意傾向ではあったものの、普段からパートナーに対して詮索するような行動を取っていて、かつ裏切りに際して消極的な行動を選択する場合にはどちらかといえば暴力的な行動を行っているとは評定しやすく、また逆に普段からパートナーに対して詮索するような行動をせず、かつ裏切りに際して消極的な行動を選択する場合には最も暴力的な行動を行っていないと評定する傾向にあることが示された。嫉妬に際して消極的な態度を取る傾向には複数の動機が潜在する可能性については Guerrero(2014)や本論文の第 6 章などでも指摘されているが、本研究の結果からも、関係に対する執着を示すような行動が普段からあるかどうかで、葛藤に際して沈黙する行動の意味が変わる可能性が示されたといえるだろう。

「束縛的支配行動」に対しては「性別」と「交際期間」、「性別」と「別れ志向」、「性別」と「猜疑的認知」の 3 つの交互作用項が有意となった。まず「性別」と「交際期間」の交互作用については、男性において交際期間が短い場合には束縛が強いが、交際期間が長くなれば低減される、という結果であった。この点については、高坂(2009)では「恋愛関係の影響」尺度の下位尺度の「関係不安」(その人の気持ちがいつも気になる、など)の得点が、男子大学生のみ交際期間が短い群の方が長い群に比べて高いという結果が報告されている

こととやや合致する方向の結果であるようにも捉えられる。高坂(2009)の結果から、男性では交際の後の段階に比べ、初期段階に強く恋人の気持ちを気にしてしまう傾向にあるのだとすれば、その不安から交際期間の初期段階において男性が、片岡・園田(2016)が指摘するように「悲しき関係維持方略」として束縛に近い行動を取ってしまう可能性があることにも一定の理解ができるだろう。なお、交際期間と束縛という点では高坂(2009)では交際が長期に渡ると女性の方が男性よりも有意に強い「関係不安」を示すことも報告されており、また片岡・園田(2014)では強い恋人分離不安と長期の交際期間という条件が揃った場合に束縛的支配行動が促進されることが見出されているが、本研究ではそれらに合致する方向の結果は得られなかった。

「性別」と「別れ志向」, 「性別」と「猜疑的認知」の交互作用項については、ともに男性のみ, 「別れ志向」や「猜疑的認知」が強い場合に「束縛的支配行動」が促進される, という結果が確認された。これらの結果から、特に男性ではパートナーを常に疑い、仮に裏切ったとすれば即座に関係の崩壊を選ぶ傾向が強いほど、普段の恋愛関係でも束縛行動が促進されていることが示された。「別れ志向」も「猜疑的認知」も「束縛的支配行動」に対しては単独で有意な主効果を示しているため、恋愛関係上の暴力や束縛はパートナーの行動を制限しようとするものである(片岡・園田, 2014)と考えると、パートナーが自分の思い通りにならないことへの許容のできなさが関連している可能性が考えられるが、その傾向が男性ではひととき強い可能性が示唆されているといえよう。特に「束縛的支配行動」に対しては、ABSII の下位尺度や多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度と性別の交互作用項を投入することで様々な有意な影響が示されていた。そのため、個人の束縛めいた支配行動を説明する上では嫉妬の経験と表出を測定する尺度を単純に投入するだけでは不十分である可能性が考えられ、それらの交互作用について検討すること、あるいはさらに多くの人数を募って、性別ごとに関係への満足感等他の変数も考慮することではじめて説明される部分、理解できる部分も多い可能性が示されたといえるだろう。

#### 4. 本研究の意義と今後の課題

本研究では青年が恋愛関係の中で起こしうる問題行動を片岡・園田(2014)の「恋人支配行動」尺度を用いることで測定し、その2つの下位尺度得点に対して本博士論文で作成した尺度である多次元恋愛関係嫉妬尺度とABSIIを用いることで、嫉妬の経験と表出という観点から恋愛関係上の問題行動がどの程度説明されうるか、検討を行うことを目的としていた。得られた結果から、多次元恋愛関係嫉妬尺度もABSIIも、「恋人支配行動」尺度の2つ

の下位尺度得点とある程度関連を示すものであり、特に多次元恋愛関係嫉妬尺度の全ての下位尺度は2つの問題行動をともに有意に説明しうるものであることが確認され、さらに多次元的に捉えた場合の嫉妬傾向には「猜疑的認知」や「警戒行動」のように恋愛関係上の問題行動を促進する方向の結果を示すものと、「排他的感情」のように問題行動をどちらかといえば抑制する方向の結果を示すものがあることを見出したことも大きな意義といえるだろう。一方で多数の交互作用項が有意となったことから、これらの支配行動は単純に重回帰分析的に投入されるだけでなく、変数の組み合わせや性別による特定の条件によっても説明される部分が多くあることが示された。そのため、恋人支配行動は全般的に単純な変数の主効果のみでは説明しきれない部分のあるものとして理解できることが、片岡・園田(2014)の結果からも、本研究の結果からも示されたといえるだろう。

本研究では片岡・園田(2014)や高坂(2014)が示すような交際期間の経過による支配的行動傾向の変化等については「束縛的支配行動」と「性別」「交際期間」の交互作用のみで確認された。関係が進展すれば、それだけ親密性も促進されると考えられるが、高坂(2014)の結果などから交際期間の長期化により暴力行動が観察される場合も考えられる。今回の研究では全般的に交際期間の短い大学生のデータをもとに分析を行ったが、年齢層が上がればより長期的な恋愛関係や夫婦関係が生まれ、その中では交際期間や関係の段階が進展することによる問題行動の顕在化、あるいは沈静化も考えられるため、今後の研究においては大学生のみならずさらに上の年齢層も含めた調査を行うことで、より長期の交際関係において恋人を支配するような行動が嫉妬やその他の要因によってどの程度説明されうるか、検討を重ねる必要があるだろう。

本研究で得られた調査協力者は99名と、交際中の恋愛関係にある者のみを対象とした研究としてもまだ数が少ない。また、「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の尺度得点は尺度の性質上ともに低い値を取ったこと、階層的重回帰分析でも性別に関わる交互作用項が多く有意となったが、少数の偏った回答によって考察・結論が導かれている危険性があることには留意する必要がある。そのため、結果の解釈や知見の一般化に関しては細心の注意を払う必要があるだろう。今後の喫緊の課題としては、今回得られた変数間の関連、あるいは交互作用による効果が、調査協力者を増やした場合にどの程度再現されうるかを確認することが挙げられるだろう。

さらに、本研究はあくまで嫉妬の経験と表出という観点から恋人支配行動をどの程度説明しうるかを検討するという目的との関係上、恋愛関係における問題行動を規定しうる他

の関係変数を用いた分析を行っていないため、得られた知見は嫉妬の経験と表出に関する尺度によるものであり、非常に限定的であることに留意する必要がある。また、関係内での暴力の認知に関しては、自身とパートナーで食い違う可能性があることが先行研究で示唆されている(e.g., Dutton, Van Ginkel, & Landolt, 1996)。また越智他(2017)では嫉妬の認知的側面が主にデートバイオレンス・ハラスメントの被害経験と正の関連を示すことを見出しており、嫉妬と恋愛関係上の問題の関連をより詳細に捉えるためには、カップル単位で分析を行うことで、どの程度恋愛関係上の問題行動やデート DV の程度について主観・客観の不一致が存在するかということに対する配慮を行い、問題行動の加害・被害の認知をともに測定することで、より精緻な恋愛関係内の問題の実態について知ることができるだろう。さらに本研究は横断的研究に過ぎず、時系列的な検討に関しては行っていない。恋愛関係の、しかも関係上の暴力にまつわる縦断研究を継続的に行うことには大変な困難が考えられるが、個人の内的な変化・あるいは外的な変化としてどういった要因があれば恋人を支配するような行動を取りやすくなるか、あるいは取らないままでいられるかということについて、縦断的に検討を行っていくことも研究として必要とされるだろう。

## 5. 本章のまとめと次章への導入

本章では、個人が実際の恋愛関係の中で捉えている問題行動について、それらがどの程度、嫉妬の経験や表出を測定する尺度によって説明されるか、交際期間や性別による影響も含めて検討することを目的としていた。

相関分析の結果から、「暴力的支配行動」に対しては多次元恋愛関係嫉妬尺度の中では「猜疑的認知」「警戒行動」が正の関連にあり、ABSIIの「攻撃志向」「別れ志向」が正の、「対話志向」が負の関連にあることが示されていた。「束縛的支配行動」では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」「警戒行動」が正の関連を示し、ABSIIでは「攻撃志向」「別れ志向」が正の関連を示した。階層的重回帰分析においては、「暴力的支配行動」に対しては「性別」が一貫して有意な標準偏回帰係数を示していたため、女性に比べ男性においてより強く見られることが考えられる。また「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」の両尺度に関して。多次元恋愛関係嫉妬尺度を投入したステップ、ABSIIを投入したステップともに有意な $F$ 値の増加量が示されたため、どちらの尺度も個人の恋愛関係上の問題行動を説明する上では独自の影響力を持つと考えられる。一方で「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」に対してはどちらも一次の交互作用項が複数有意となり、「束縛的支配行動」は特に「性別」

に関わる交互作用項によって説明される部分が見受けられた。そのため関係における問題行動のうち、束縛めいた支配行動については、今回用いた多次元恋愛関係嫉妬尺度や ABSII といった嫉妬に関する尺度を投入する場合は単純な変数の主効果のみならず、性別や交互作用項による特定の条件下で説明されうる可能性が考えられるため、今後の研究において、より多くの人数を募った上で男女別の分析を行うことや、交互作用項を用いた検討を行うことでより詳細な理解につなげるのが可能であろうと考えられる。

第 2 章から本章まで、実証的研究による検討を重ねてきたが、続く第 8 章では最終的に本博士論文で得られた結果について、各章での結果の整理と、研究間での知見の比較から総合的な統括を試みることにする。

## 引用文献

- 赤澤 淳子・野寺 綾・中村 信次・脇 忠幸・竹盛 浩二・若松 正晃・杉原 千紗 (2016). 国内におけるデート DV 研究のレビューと今後の課題. *人間文化学部紀要*, *16*, 128-146.
- Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good (Reactive) and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open*, *3*, 1-17. doi:10.1177/2158244013476054
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦 疆子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Davidson, M. M., Lozano, N. M., Cole, B. P., & Gervais, S. J. (2015). Relations between intimate partner violence and forgiveness among college women. *Journal of interpersonal violence*, *30*, 3217-3243.
- Dutton, D. G., Van Ginkel, C., & Landolt, M. A. (1996). Jealousy, intimate abusiveness, and intrusiveness. *Journal of Family Violence*, *11*, 411-423.
- 遠藤 智子 (2007). デート DV—愛か暴力か, 見抜く力があなたを救う KK ベストセラーズ
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian*

- Journal of Psychology*, 63, 243-251.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication*, 78, 586-611.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the Green-Eyed Monster: Conceptualizing and Measuring Communicative Responses to Romantic Jealousy. *Western Journal of Communication*, 59, 270-304.
- Guerrero, L. K., Spitzberg, B. H., & Yoshimura, S. M. (2004). Sexual and Emotional Jealousy. In J. H. Harvey, A. Wenzel, & Sprecher (Eds.), *The handbook of sexuality in close relationships* (pp.311-345). Mahwah, NJ; Erlbaum.
- Hall, J. H., & Fincham, F. D. (2006). Relationship dissolution following infidelity: The roles of attributions and forgiveness. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 25, 508-522.
- 片岡 祥・園田 直子 (2014). 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 23, 13-28.
- 片岡 祥・園田 直子 (2016). 2 つの恋人支配行動の生起メカニズムの違い 応用心理学研究, 42, 40-47.
- 高坂 康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂 康雅 (2014). 大学生の恋愛行動の進展 和光大学現代人間学部紀要, 7, 215-228.
- Rodriguez, L. M., Dibello, A. M., Øverup, C. S., & Neighbors, C. (2015). The price of distrust: Trust, anxious attachment, jealousy, and partner abuse. *Partner abuse*, 6, 298-319.
- 内閣府 (2016). 男女間における暴力に関する調査  
([http://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-6.pdf](http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-6.pdf))  
(2017年9月4日)
- 越智 啓太・喜入 暁・甲斐 恵利奈 (2017). 多面的嫉妬尺度の作成とデートバイオレンス・ハラスメントとの関連: 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(4) 法政大学文学部紀要, 74, 119-127. URI: <http://hdl.handle.net/10114/13000>

- 大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久(編) エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房, pp.79-105.
- Pfeiffer, S. M. & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, 6, 181-196.
- Pines, M. A. (1992) *Romantic Jealousy*. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子(訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- 瀧田 信之 (2009). それ, 恋愛じゃなくてDVです WAVE 出版
- White, G. L. & Mullen, P. E. (1989). *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: The Guilford Press.

## 第8章 総合的考察

ここでは、これまでの各研究を通して明らかになった知見をまとめるとともに、各研究で得られた知見について比較・考察を行うことで、本論文の統括を行う。

## 総合的考察

### 1. 第2章を通して

第2章では、先行研究において特に今日の海外の嫉妬研究でも使われている Pfeiffer & Wong(1989)や Buunk(1997)の嫉妬尺度の問題点に配慮して、多次元からなる信頼性および妥当性の確認された嫉妬尺度である「多次元恋愛関係嫉妬尺度」を作成した。下位尺度としては「猜疑的認知」「排他的感情」「警戒行動」を仮定し、探索的因子分析・確認的因子分析の結果から、仮定した3因子構造が妥当であることが明らかになった。「猜疑的認知」は親密な関係への第三者の侵入やパートナーの心変わりを疑う病理的・妄想的過敏さ、「排他的感情」は「猜疑的認知」より幾分正当とされる、嫉妬喚起状況への否定的感情の強さ、「警戒行動」は関係の裏の第三者を警戒・詮索する度合いを示す。抽出された15項目のうち、4項目では床効果が得られたが、因子負荷量や項目内容等の関係上、削除せずに採用している。また $\alpha$ 係数も十分高かったため、内的整合性の観点からの信頼性には問題ないことがわかった。尺度の妥当性については、松井他(1990)の LETS-2 の Mania 項目群との関連において併存的妥当性が確認され、また多次元恋愛関係嫉妬尺度の下位尺度全てが益子(2008)による見捨てられ不安尺度、勝谷(2004)の再確認傾向尺度と正の関連が示されたこと、そして「猜疑的認知」のみが谷・原田(2011)の親密性尺度と負の相関が得られたことから、構成概念的妥当性が確認された。

第1章の第1節や第2節で論じたように、先行研究の多次元的な嫉妬尺度、特に MJS は今日に至っても用いられているが、一方で測定上の問題点として、回答形式が下位尺度ごとに統一されておらず、そのために因子分析に用いる際に得点の偏りで固まってしまうことが考えられた。第2章では先行研究の問題点の一つとしてその点に配慮して尺度項目の作成を行ったが、項目表現が同じ因子に含まれる項目同士で似通ってしまっている問題点を抱えていることには留意する必要があるだろう。また、先行研究の問題点として平均得点の低さが挙げられていたが、本研究でも床効果がみられる項目が散見されていることから、必ずしもその点に関しては配慮しきれているとはいえない。

しかし、上記のような課題は残るものの、日本語の論文で個人の嫉妬傾向を多次元的に捉えうる妥当性の検討のなされた尺度が作成されたのは初めてであり、この尺度の作成を行ったことは個人が恋愛関係上で経験しうる多次元の嫉妬を同時に捉えるうえで意義のあることといえるだろう。今後は筆者のみならず、幅広く嫉妬に興味のある研究者が用いる

ことのできる尺度として、あるいは日本国内の嫉妬尺度の最初の叩き台として、参照されることが今後期待される。

## 2. 第3章を通して

第3章では、嫉妬研究の黎明期に個人の嫉妬深さ・嫉妬傾向との関連が示唆されていた自尊感情との関連における知見の不一致について、知見の整理を行うことを試みた。第3章ではかねてから指摘されている一次元的な自尊感情の測定に関する問題点が嫉妬傾向との関連においても影響が及ぼされている可能性を考慮し、谷(2006)による Narcissistic Personality Scale(NPS)短縮版によって測定される自己愛傾向を分析に用いることでその解決策となるかどうかを検討した。相関分析の結果、自尊感情は多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度とほぼ無関連を示した。さらに階層的重回帰分析において、性別、自尊感情の次に自己愛の誇大性を投入した Step3 において、多次元恋愛関係嫉妬尺度の全下位尺度が NPS 短縮版の自己愛の「有能感・優越感」に正の影響を受け、「猜疑的認知」「排他的感情」に対しては「自尊感情」が負の影響を示したことが、先行研究の論争への一つの結論をもたらしたと考えられる。つまり第3章で想定した通り、一次元的な自尊感情の、自己愛の特に「有能感・優越感」と重複する部分を統制した場合には、自尊感情の高い個人ほど認知的・情動的な嫉妬傾向を示さない、ということが結果から示唆された。この結果から古典的な嫉妬研究に関する研究者たちの指摘は確かに正しい部分があったが、自尊感情や肯定的な自己評価の測定に際して上記のような自己愛的な部分を統制できていなかった場合が混在したために知見の混乱がもたらされた可能性が考えられるだろう。

第3章ではさらに一次元的な自尊感情では測定しきれない自己評価の不安定な側面として、自己愛の過敏性に相当する変数や「注目・賞賛欲求」を階層的重回帰分析に投入したところ、上記で観察されていた自己愛の「有能感・優越感」や自尊感情による有意な標準偏回帰係数の値が低減されたため、結局個人の嫉妬傾向を左右しやすい自己評価変数は、特に自己愛の過敏性や注目・賞賛欲求など、不安定な自己評価に関わる変数であることも同時に明らかにされた。

第3章の課題として挙げられるのは、全体として用いた変数が各種の嫉妬傾向を説明する度合いが低かったことである。研究の目的上、 $R^2$  を高めることはさほど重要ではなかったが、単純な自己評価の高低はいずれにしろ個人の嫉妬傾向をさほど左右するものでもないということが示されたともいえよう。

### 3. 第4章を通して

第4章では、第3章と重なる部分もあるが、個人の親密な関係への満足感、関係満足感と嫉妬傾向との関連についても知見がさほど一貫していないことについて、本論文なりの結論を示すことを目的とした研究を行った。Guerrero & Eloy(1992)や Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)で得られている、相反した部分のある結果でも、嫉妬の認知的側面についてはおおむね一貫して関係満足感と負の関連を示していたという報告から、疑い深い個人が関係に不満になりがちなのは、パートナーの些細な行動を裏切りの予兆と考えてしまいがちで、関係に対する一種の学習性無力感にも似た状態に陥りがちであるために、結果として関係に不満な状態になるのではないかと考えられた。そのためそういった無力感とは正逆の「関係効力感」およびネガティブな事柄を繰り返し考え続けてしまう「ネガティブな反すう」傾向を考慮することで、嫉妬傾向と関係満足感が負の関係にあるとするプロセスを解明することを計画した。

結果的に関係満足感と多次元恋愛関係嫉妬尺度の全ての下位尺度は相関分析では有意な関連が得られなかったが、「猜疑的認知」では「関係効力感」と有意な負の相関が示され、強制投入法による重回帰分析においても同様の結果が得られたため、ある程度想定したプロセスが実証的に確認できたといえる。また副産物として、相関分析ではほぼ無関連であったが、「関係満足感」に対する重回帰分析結果においては多次元恋愛関係嫉妬尺度の「排他的感情」が有意傾向の正の標準偏回帰係数を示していた。この結果は Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)の結果で、嫉妬の情動的側面に相当すると考えられる reactive jealousy が関係満足感と正の相関を示したとする知見に沿う結果であり、Pfeiffer & Wong(1989)や Attridge(2013)においても嫉妬の情動的な側面は比較的正当でパートナーへの愛情等と正の関係にあるとするような指摘とも一致する結果であった。重回帰分析においては「ネガティブな反すう」傾向は「関係効力感」に対してはさほど影響を示さず、「ネガティブな反すうの統制不可能性」が有意な負の標準偏回帰係数を示していたため、個人の持つ関係に対する効力感「猜疑的認知」「ネガティブな反すうの統制不可能性」の2つの要因によって低減されることが示された。一方でこれらの結果についても、得られた係数は全て低めで、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度はさほど関係への満足感や効力感に対しても大きな影響力を持つ変数ではないことが示唆された。

#### 4. 第5章を通して

第5章においては、まず第1節にて嫉妬の表出にあたる尺度である「架空の浮気場面に對する予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity(ABSII)」の作成と信頼性と妥当性の検討を行った。先行研究のレビューから、Guerreroの一連の研究(e.g., Guerrero, Andersen, Jorgensen, Spitzberg, & Eloy, 1995; Guerrero, Hannawa, & Babin, 2011; Guerrero, 2014)で作成されているCRJSの構造的な問題点を考察し、また嫉妬を伴うような葛藤に対する反応として「別れ」を志向する行動を考慮する必要性と、同時にこの「別れ」と裏切ったパートナーへの「攻撃」を別の下位尺度で測定できる尺度を作成することの必要性を指摘した。そのうえで、Rusbultの一連の研究で作成された(e.g., Rusbult & Zembrodt, 1983; Rusbult, 1987; Rusbult, Yovetich, & Verette, 1996)EVLNモデルとの統合を行い、「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の5つの下位尺度からなる場面想定法を用いた尺度ABSIIの作成を行った。ABSIIは探索的因子分析・確認的因子分析の結果からもおおむね5因子構造を有することが確認され、また $\alpha$ 係数を算出したところ、内的整合性の観点の信頼性に関しては十分な値が得られた。尺度の構成概念的妥当性の検討として、ストレスナーへの認知的評価尺度との関連から、特に「沈黙志向」は提示した浮気場面であるデート場面を対処可能で脅威でないと認知的に評価した場合に採られやすい行動と考えられ、一方で脅威と感じた個人は仮説通り「攻撃志向」「対話志向」を示す傾向が示された。ストレス反応を捉えるSRS-18との関連においては「攻撃志向」「別れ志向」がストレス反応と正の関連を示し、おおむね仮説通りストレスを抱える個人ほど関係の質や維持に対して積極的に破壊的な行動を予測することが示された。また2章で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度との関連においては、「猜疑的認知」を含む嫉妬深さを見せる個人は特に「攻撃志向」「ライバル志向」を予測し、「排他的感情」「警戒行動」の嫉妬深さを見せる個人ほど「対話志向」の行動を予測することが示された。さらにRusbultによる投資モデルを反映する投資モデル尺度との関連から、信頼性係数の問題で除外された「代替肢の質」以外の傾向が高い、関係の継続を希望する個人ほど「対話志向」を示し、また「コミットメント」「関係満足感」の低い個人は「別れ志向」を示した。「投資量」に関しては一部仮説から外れた、あるいは仮説にない結果が確認され、「投資量」が高い個人ほど「攻撃志向」「ライバル志向」を示し「別れ志向」は無関連であった。上記を総合して、おおむね仮説通りの結果が得られたため、ABSIIの全下位尺度について、ある程度構成概念的妥当性が確認されたといえる。ABSIIはあくまで場面想定法を用いた尺度であり、結

果をどの程度一般化して考えられるかという点では課題が残るが、個人が浮気場面を想定した場合に予測する行動は、おおむね心理学的理論に沿った傾向を示すものが多かったといえよう。第5章第1節の課題としては、投資モデル尺度を調査協力者への負担の配慮から原版より少ない項目数で実施して「代替肢の質」の信頼性係数が低いことに起因して、当該因子については報告ができなかったことが挙げられる。また、第5章第1節で作成したABSIIに対する反応は全て「デート場面」を提示した場合の反応であり、他のレベルの刺激を提示した場合にどういった違いがみられるか等についても検討する必要があるといえる。

第5章第2節では、ABSIIで測定する内容は捉え方によっては仮想の対人ストレス場面へのコーピングであるとも考えられるため、それが国内のコーピング研究の中でも代表的な加藤(2001)によるISI-Aによる一般的な友人関係におけるコーピング傾向とどの程度関連するかを検討することを目的としていた。得られた結果から、ABSIIの本来の使用用途である現在交際中の個人のABSIIへの回答傾向とISI-Aとの関連は「沈黙志向」と「解決先送りコーピング」を除きほぼ無関連となった。一方で具体的な恋人ではなく仮想の恋人との葛藤を思い浮かべて貰った交際なし群においてはABSIIへの回答結果はISI-Aと比較的関連する部分があり、回答する際に具体的な恋人との関係を想起して貰う場合には、個人がその関係で得てきたコーピング資源などの影響により、ABSIIで回答される内容はISI-Aによって測定されるような一般的なコーピング傾向とは違った法則に支配されることが示唆された。一方、「ポジティブ関係コーピング」が両群において「別れ志向」と有意あるいは有意傾向の正の関連を示したことについては、さほど説得力のある説明が用意できなかったため、今後の研究においても検討される必要があるかもしれない。

第5章第3節では、第5章の第1節と第2節のデータを合算して、ABSIIの各下位尺度得点を実際にはどのようなパターンで選択されうるかを検討するため、ABSIIの各下位尺度得点を投入したクラスター分析を行い、多次元恋愛関係嫉妬尺度やストレスの認知的評価尺度の得点から各クラスターの特徴を考察することを目的としていた。結果から、5類型が得られ、「沈黙志向」のみが高い「沈黙群」、「対話志向」のみが高い「対話群」、「対話志向」以外全て高めの「保留群」、「対話志向」「ライバル志向」が高い「能動群」、「別れ志向」「攻撃志向」が高くそれ以外が全て低い「別れ群」が得られた。その結果、第5章第1節の結果と重なる部分があるが、やはり「沈黙群」は最も嫉妬を示さず、提示した刺激にも重要視しない群であった。また「対話群」と「能動群」は「ライバル志向」得点のみが

大きな違いの群であったが、第 1 節の結果でも「対話志向」と「ライバル志向」は正の相関を示していた一方で「対話群」は最も「ライバル志向」が低い群であったため、葛藤時に際して対話を示すような個人には関係に侵入してきた第三者にも接触しようとする個人と、全く接触しようとししない個人の 2 種類が混在しうることが示唆された。同様に「沈黙群」と「保留群」は「沈黙志向」の高さのみで共通するが、「保留群」は「沈黙志向」以外の得点も高い群であったため、「沈黙志向」は他の ABSII の下位尺度と常に違う分布を示すのではなく、場合によっては「攻撃志向」「別れ志向」「ライバル志向」とともに「沈黙志向」を選択する、行動を決めかねているような場合も混在する可能性も示唆されていた。第 5 章第 3 節に関してはあくまで探索的な検討であったため、この結果がどの程度再現されるか、今後確認していく必要があるだろう。

## 5. 第 6 章を通して

第 6 章では、「嫉妬のプロセスが何によってもたらされるのか」、検討するために、嫉妬の経験を測定する多次元恋愛関係嫉妬尺度、嫉妬の表出を測定する ABSII の両方を用いて、愛着の観点から、個人の持つ愛着傾向が、多次元恋愛関係嫉妬尺度で測定される嫉妬傾向に及ぼす影響と、さらにこれらの愛着傾向と嫉妬傾向が ABSII で測定される各種の行動の予測に及ぼす影響について検討することを目的としていた。相関分析の結果では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」は仮説通り、愛着の「両価」「回避」とは正の関連を示していた。「排他的感情」は「両価」とは有意な関連を示さなかったが、「猜疑的認知」と同様に「回避」とは正の関連を示した。「猜疑的認知」「排他的感情」はともに「安定」と負の関連が想定されていたが、これらの関連は有意とはならなかった。「警戒行動」は愛着とは無関連であった。ABSII の各下位尺度に関しては、「沈黙志向」は「安定」と負の、「回避」「両価」とは正の関連を示し、その他には「対話志向」が「安定」と正の、「回避」「両価」と負の関連を示した。共分散構造分析の結果では、「沈黙志向」に対して引かれるパスの多さが目立ち、「回避」から直接的に正の、「安定」から直接的に負の、「回避」から「排他的感情」を介し負の、「両価」から「猜疑的認知」を介し正の影響を受けていることが確認された。これらの結果から、単純に多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度から「沈黙志向」を捉えた場合には「猜疑的認知」との関連が示唆されるのみであったが、愛着傾向を考慮に入れることにより、個人がパートナーに浮気されたと想定した際に「沈黙志向」的行動を取る背景には、多種多様な動機が存在しうることが考えられる。愛着の「両価」型

特性が特に病理的とされる嫉妬傾向の「猜疑的認知」や「沈黙志向」と正の関連に、また「対話志向」と負の関連にあることを確認できたため、両価型の愛着傾向を持つ個人はやはり親密な対人関係をより良くすることを望みはしても、具体的な行動としてはどこか関係から逃避したり、関係を直接的には改善しないような心理的傾向に誘導されてしまう部分があることが本研究の結果からも確認できたといえよう。なお、6章及び7章のデータについては、調査協力者の数が99名と、やや少数のデータを分析しているため、少数の極端な値を取るようなデータによる影響で、本来取るべき値から歪んだ数値が算出されている可能性も大いに考えられるため、結果の一般化・解釈には細心の注意を払う必要があるだろう。

## 6. 第7章を通して

第7章においては、「嫉妬のプロセスが何をもたらしうるか」、検討するために、個人の実際の恋愛関係の中で生起している問題行動を片岡・園田(2014)に倣い「恋人支配行動」という観点から捉え、それらがどの程度、本論文で作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度やABSIIによって説明されうるか、交際期間や性別による影響も含めて、嫉妬の経験と表出という観点から検討することを目的としていた。結果から、「暴力的支配行動」に関しては、相関分析では多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」「警戒行動」との正の関連、ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」「別れ志向」との正の関連、有意傾向で「対話志向」との負の関連がみられていた。階層的重回帰分析に投入した場合、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度は全て「暴力的支配行動」を有意に説明していて、ABSIIの下位尺度では「攻撃志向」のみが有意な標準偏回帰係数を示した。特に「排他的感情」は相関分析では「暴力的支配行動」と無関連であったが、相手の裏切りに過剰に嫌悪感を抱く傾向は他の嫉妬の側面による影響が統制された場合にはむしろ暴力的な行動を抑制しうることを示唆されるような結果であった。また「暴力的支配行動」は男性において強く見られる傾向が示唆された。さらに、「束縛的支配行動」に関しては説明率の増加量からも、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度によって、特に「警戒行動」によって説明される部分が大きく、多次元恋愛関係嫉妬尺度の説明力に比べると、ABSIIの各下位尺度による説明率の増分は有意ではあったものの相対的に小さかった。また第7章の結果では2つの「恋人支配行動」のどちらにも交互作用項が有意となり、「暴力的支配行動」は、「性別」「攻撃志向」の交互作用項と「警戒行動」「沈黙志向」の交互作用項によって説明される部分が見られた。一方で「束縛的支

配行動」に対しては、「性別」「交際期間」，「性別」「別れ志向」，「性別」「猜疑的認知」の間の交互作用項が有意となり，男女で束縛めいた支配行動がとられるメカニズムが少々異なる可能性が考えられた。まとめると，「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」のどちらに対しても，嫉妬の認知・行動的側面がどちらかといえばネガティブな影響力を示し，情動的側面がポジティブな方向の結果を示した点からも，嫉妬を多次元的に捉える利点は示されたといえよう。「束縛的支配行動」は特に性別の交互作用項によって説明される部分も見受けられたため，少なくとも今回用いた多次元恋愛関係嫉妬尺度や ABSII といった嫉妬に関する尺度を投入する場合は，人数を募った大規模調査による性別ごとの検討も必要であろうと考えられる。

## 7. 研究全体を通して：多次元恋愛関係嫉妬尺度について

ここまで，各章の研究知見について紹介を行ってきた。研究全体を通じた討論として，ここからは本博士論文が作成した二つの尺度について，その二つの尺度が示した実証的なデータが持つ意味を検討していきたい。まず，Table8-1 には本博士論文全体を通して得られた多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度が他の変数とそれぞれ正負，あるいは無関連のうち，どの関連を示したかをまとめた。同様に Table8-2 には ABSII の結果を，最後に Table8-3 には多次元恋愛関係嫉妬尺度と ABSII の関連についてまとめている。もちろん本博士論文では単純な相関分析に留まらない様々な分析結果を最終的な結果として考察に用いる章の方が多いが，多くの変数を用いた本博士論文の結果を振り返る手段として，このような Table を用意した。以降はこれらの Table や各章の結果を振り返ることで，本博士論文の意義の再確認および本博士論文全体を通じた知見の統括を行うこととする。

まず多次元恋愛関係嫉妬尺度について，この尺度は既述の通り Pfeiffer & Wong(1989)と Buunk(1997)の尺度に端を発する，嫉妬を認知・情動・行動の 3 次元から捉えることを目的とした尺度で，日本語の研究で嫉妬をこのような多次元から捉える尺度が存在しなかったために，その必要性を考慮して，先行研究の問題点についても配慮して本博士論文にて作成した尺度である。その下位尺度としては，まず「猜疑的認知」は Pfeiffer & Wong(1989)の他に Elphinston, Feeney, & Noller(2011)など数多くの先行研究が指摘するように，嫉妬の病理的側面を表す下位尺度として作成された。Table8-1 を参照すると，この「猜疑的認知」は本博士論文においては「自尊感情」や「関係満足感」などとは無関連を示すものの，

基本的には他の「見捨てられ不安」や自己愛の過敏性に相当する変数や「注目・賞賛欲求」、不安定な愛着の傾向とされる「両価」「回避」、恋愛関係上の問題行動とされる「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」などと正の関連を示しており、おおむね関係維持や個人あるいは他人にネガティブな方向の働きを示すとされるような変数全般と関連を示していることがわかる。これらの結果は各章でも論じられている通り、おおむね先行研究と合致する方向の結果であるといえる。このようにパートナーが自分を裏切るかもしれないという懸念を抱え続ける傾向は、個人の不安定な愛着や自己愛的な自己評価の不安定さに拠る部分があると考えられる。またそのような不安定さを抱えているからこそ、パートナーとの関係でも継るような行動や、時に暴力や束縛などによってパートナーの行動を制限しようとするような行動を取ることもつながりかねない。その意味でこの「猜疑的認知」をどのように個人の中で低減させていくことができるか、あるいは高い「猜疑的認知」を抱えていても当人が自分で疑いの気持ちをマネジメントできるような要因について、検討していくことが今後の嫉妬研究にて求められる大きな課題となるだろう。まとめると、この嫉妬の認知的側面は、まさに「愛着の両価性など、(幼児期の体験に根差した)対人関係上の脅威を過剰に認知する傾向によってもたらされるもので、個人や関係に対して多くの観点で負の影響を及ぼしかねないもの」とすることができるだろう。

Table8-1. 本博士論文における多次元恋愛関係嫉妬尺度と他尺度の単相関結果の早見表<sup>a)</sup>

章	変数	猜疑的認知	排他的感情	警戒行動
第2章	Mania	正	正	正
	見捨てられ不安	正	正	正
	再確認傾向	正	正	正
第3章	親密性	負	無	無
	自尊感情	無	無	無
	優越感・有能感	無	無	正
	自己主張性・自己中心性	無	無	無
	自己愛性抑うつ	正	正	正
	自己愛的憤怒	正	正	正
	注目・賞賛欲求	正	正	正
第4章	ネガティブな反すう	正	正	正
	ネガティブな反すうの統制不可能性	正	無	無
	関係満足感	無	無	無
	関係効力感	負	負	無
第5章 第3節	対処効力感	負	負	無
	脅威	正	正	正
	重要性	正	正	正
第6章	安定	無	無	無
	回避	正	正	無
	両価	正	無	無
第7章	暴力的支配行動	正	無	正
	束縛的支配行動	正	正	正

a) 報告しているのは論文中に数値が報告されているものに限定しており、有意傾向の結果は、「正」または「負」として報告している。また、ABSIIとの関連についてはTable8-2を参照されたい。

次に「排他的感情」に関しては、Pfeiffer & Wong(1989)には必ずしも忠実には作成されておらず、多次元恋愛関係嫉妬尺度においては関係への第三者の侵入に対する否定的感情の強さとして作成されている。Table8-1の結果を参照する限りでは基本的には「猜疑的認知」とよく似た相関パターンを示していることがわかる。しかし「親密性」「ネガティブな反すうの統制不可能性」、愛着の「両価」、「暴力的支配行動」との関連においては無関連と

なっており、必ずしも「猜疑的認知」の結果に追従する変数ではないことが示唆されている。重回帰分析や階層的重回帰分析の結果を参照すると、例えば第4章では「関係満足感」に対して「猜疑的認知」が有意でないものの負の標準偏回帰係数を示したのに対し、「排他的感情」は有意傾向ながら正の標準偏回帰係数を示していた。また、第7章の「暴力的支配行動」「束縛的支配行動」に対しては同じ多次元恋愛関係嫉妬尺度の「猜疑的認知」や「警戒行動」が有意な正の標準偏回帰係数を示していた際に有意、あるいは有意傾向の負の標準偏回帰係数を示し、単相関の結果からは少々異なる結果を示している。Attridge(2013)や Barelds & Barelds-Dijkstra(2007)で指摘されるように、嫉妬の情動的側面は特に認知的側面と比較した際にやや適応的、幾分正当な嫉妬の側面と説明されていることから、「猜疑的認知」とはやや違う側面を伴うことが考えられる。これらの先行研究の指摘や、各章で示されている「猜疑的認知」や「警戒行動」との相関係数が比較的高めであることから、この「排他的感情」は単純な変数としては疑い深さや具体的な詮索・警戒するような行動傾向を伴う可能性はあるものの、重回帰分析的手法によって多次元恋愛関係嫉妬尺度の他の下位尺度と同時に投入された場合には、互いに重複する部分が統制されるために、先行研究で指摘される「排他的感情」の適応的側面が観察されやすくなっていると考えられるだろう。これらの結果から、嫉妬の情動的な側面は恐らくは「嫉妬の認知的な過敏さ等によってもたらされるもので、精神的な不安定さと関わるが、疑い深さを抜けば関係の質の向上をもたらさるもの」と捉えられる。嫉妬を一次的に捉える場合には、これらの嫉妬の適応的側面や「猜疑的認知」に代表される嫉妬の非適応的側面について分けて捉えることができなかったものの、本博士論文において、嫉妬を多次的に捉える多次元恋愛関係嫉妬尺度の開発によってこの点について日本人を対象とした研究においても見出すことができたのは、本論文の大きな意義の一つといえる。しかし一方でこの「排他的感情」は単相関では「猜疑的認知」とかなり近い相関パターンを示しているため、嫉妬の適応的な側面を抽出できているとは言い難い。この点については今後の研究において更なる改善を行っていくべきかもしれない。

「警戒行動」は関係の裏の第三者の存在を警戒・詮索する度合いを測る下位尺度で、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)によれば海外のMJSを用いた研究などでは、この行動的側面にあたる behavioral jealousy は特に用いられることの少ない下位尺度でもある。その理由としては、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)によれば Pfeiffer & Wong(1989)によるMJSの時点ではこの下位尺度が測定する行動がパートナーを他のライバルから守ろうと

する、パートナーを独占しようとする防衛的な行動と、パートナーの裏切りの証拠をつかもうとするような探索的な行動とが同じ下位尺度内に混在し、他の下位尺度に比べて明確な結果を示してこなかったためとされる。本博士論文においては、Elphinston, Feeney, & Noller(2011)の指摘を参考に幾分項目内容を統一した形で「警戒行動」が作成されたが、その結果としてはある程度他の変数との関連を明確に示すものであり、一方で例えば愛着傾向との関連においては、「猜疑的認知」や「排他的感情」と比べると明確な関連は得られていない。やはりある程度実際のパートナーを詮索するような行動の傾向を測定する下位尺度であるため、具体的な行動とさほど結びつかない精神内的な心的力動を捉える変数とは明確な関連を示さないであろうことが、本博士論文の結果からも読み取れる。基本的には「警戒行動」は「猜疑的認知」あるいは「排他的感情」と類似の相関パターンや分析結果を示していたため、この下位尺度は「猜疑的認知」「排他的感情」のどちらとも関わる変数であるように見受けられる。一方で第7章の「束縛的支配行動」を予測する意味では、「警戒行動」はその概念的な共通性からも、相関分析においても階層的重回帰分析においても数値として大きな意味を持っていたように見受けられる。そのため、やはり本論文においてもこのような日常的な行動に現れる嫉妬傾向を測定する下位尺度を作成したことにも、意義があったと考えられるだろう。嫉妬の行動的側面は「嫉妬の認知・情動的側面によってもたらされ、関係への執着を示す行動を促すもの」といえる。

## 8. 研究全体を通して：ABSII について

次に ABSII の各下位尺度の結果について検討する。ABSII の下位尺度構造は、基本的に先行研究では嫉妬に対する個人の対処行動を検討している研究が Guerrero の一連の研究による CRJS に限定されているため、そちらをまず参考に行っている。しかし、第5章第1節でも述べているように、Guerrero の嫉妬への対処行動の捉え方にはいくつか限界点や問題点があったため、本博士論文においては他に葛藤時に個人が取りうる行動を捉える上で有用な理論として、Rusbult の一連の研究による EVLN モデルを持ち出し、CRJS との統合を図ることで新たな尺度の下位尺度構造を考案した。しかしこの EVLN モデルでも、特に相手との関係を放棄する内容を包含する Exit には相手を口汚く罵るような要素も含まれており、関係にある相手を「攻撃する」行動と「別れる」行動を分けて捉えられない限界点がある。本博士論文では上記の先行研究の問題点について指摘した上で、この「攻撃する」行動と「別れる」行動を弁別して捉えうる尺度を作成するため、場面想定法による教示を採用した。さらに先行研究の知見の整理から、葛藤に際し「沈黙する」「対話する」「ライ

バルに向かう」行動を測定可能な尺度として、ABSII の作成を試みた。

Table8-2. 本博士論文におけるABSIIと他尺度の単相関結果の早見表b)

章	変数	攻撃志向	沈黙志向	別れ志向	対話志向	ライバル志向
第5章 第1節	抑うつ・不安	正	無	正	無	無
	無気力	無	無	正	無	無
	不機嫌・怒り	正	無	正	無	無
	コミットメント	無	無	負	正	無
	関係満足感	無	無	負	正	無
	投資量	正	無	無	正	正
第5章 第2節 <sup>c)</sup>	ポジティブ関係コーピング	無	無	正	無	無
	ネガティブ関係コーピング	無	無	無	無	無
	解決先送りコーピング	無	正	無	無	無
第5章 第1節・ 第3節	猜疑的認知(第5章第1節)	正	無	正	無	正
	猜疑的認知(第5章第3節)	正	無	無	無	正
	排他的感情(第5章第1節)	正	負	無	正	正
	排他的感情(第5章第3節)	正	負	無	正	正
	警戒行動(第5章第1節)	正	無	無	正	正
	警戒行動(第5章第3節)	正	負	無	正	正
	対処効力感(第5章第1節)	無	正	無	無	無
	対処効力感(第5章第3節)	無	正	無	無	無
	脅威(第5章第1節)	正	負	無	正	無
	脅威(第5章第3節)	正	負	無	正	無
	重要性(第5章第1節)	正	負	無	正	無
	重要性(第5章第3節)	正	負	無	正	正
	第6章	安定	無	負	無	正
回避		無	正	無	負	無
両価		無	正	無	負	無
第7章	暴力的支配行動	正	無	正	負	無
	束縛的支配行動	正	無	正	無	無

b) 報告しているのは論文に数値が報告されているものに限定しており、有意傾向の結果は、「正」または「負」として報告している。

c) 報告しているのは交際群の結果である。

ABSII の得られた「攻撃志向」と「別れ志向」はいずれかの点において違いが見出され

ることが期待されていた。そのためこれら 2 つの下位尺度の結果から報告を行っていきたい。Table8-2 を参照すると、第 5 章第 1 節の投資モデル尺度との関連において、「別れ志向」が「コミットメント」「関係満足感」と負の関連、嫉妬傾向全般とほぼ無関連、「投資量」と無関連を示したのに対し、「攻撃志向」は「コミットメント」「関係満足感」と無関連、一貫して嫉妬傾向全般と「投資量」と正の関連を示している。また、「別れ志向」が「ポジティブ関係コーピング」と正の関連を示し、「攻撃志向」が無関連であったことや、逆に「攻撃志向」が認知的評価尺度の「脅威」「重要性」と一貫して正の関連を、また「束縛的支配行動」と正の関連を示したのに対して「別れ志向」が無関連であったことから、この二つの変数が違った性質を持ちうる可能性があることが示されているといえるだろう。なお、「別れ志向」については第 5 章第 1 節と第 5 章第 3 節で「猜疑的認知」との関連が異なっているが、この関連についてはさほど強いものではなかった、と考えるべきかもしれない。一方で葛藤に際して攻撃を選ぶ傾向と、別れを選ぶ傾向に関しては、第 5 章第 1 節の下位尺度間の相関結果やストレス反応尺度との関連がほぼ一致していること、第 5 章第 3 節のクラスター分析にて「別れ志向」「攻撃志向」がさほど違った結果を示していないことから、別れ志向」と「攻撃志向」はある程度類似したパターンで選択されうることも示唆されている。これら二つの変数がいかに選択されうるかということについては、今後研究を重ねていくことが求められるだろう。得られた結果を総合して、「攻撃志向」は「刺激を脅威と認識する傾向、ストレス反応や関係への投資量、全般的な嫉妬深さによってもたらされ、恋愛関係上の暴力・束縛的支配行動をもたらすもの」として、一方で「別れ志向」は「ストレス反応や関係への不満感によってもたらされ、恋愛関係上の束縛につながりうるもの」と考えられる。「パートナーを攻撃するか、関係の放棄を選ぶか」という問題はデート DV や関係崩壊のメカニズムに大きく関わる問題であるため、この点に関して検討を可能とする下位尺度を含む ABSII を作成したことには一定の意義があるといえよう。

ABSI の「沈黙志向」に関しては、単相関では「解決先送りコーピング」「対処効力感」、愛着の「回避」「両価」と正の関連、ストレスの認知的評価の「脅威」「重要性」と嫉妬の「排他的感情」、愛着の「安定」と負の関連が示された。また第 5 章第 1 節と第 3 節では少々異なるが、「警戒行動」と負の関連を示す可能性も示された。その他にも第 5 章第 3 節では、ABSI の下位尺度得点を投入したクラスター分析から、「沈黙志向」のみが高く嫉妬傾向の低さや「脅威」「重要性」の得点の低さが見受けられる沈黙群と、「沈黙志向」以外に「別れ志向」「攻撃志向」「ライバル志向」も幾分高く、葛藤場面を対処可能と感じて

いるが同時に嫉妬深さも感じさせる保留群が得られていた。愛着との関連を検討した第 6 章の結果では愛着の諸次元と「沈黙志向」の強い関連がみられており、共分散構造分析の結果からは愛着の安定性によって抑制されうること、単純に回避的な愛着傾向によって直接的に、あるいは両価的な愛着傾向が疑い深い嫉妬傾向を媒介して促進されうることなどが考察されている。この「沈黙志向」が選択される際に複数の動機を見出している第 5 章第 3 節の結果と、第 6 章の結果は無関連ではないと考えられる。Guerrero(2014)がこのような回避的な行動を取る動機には様々な要因が交絡していることについて指摘しているが、本博士論文においても、「沈黙志向」は単相関分析の結果から推察されるような関係への執着の薄さだけでなく、詳細に検討した際には第 5 章第 3 節の混乱群、第 6 章の愛着の両価性に由来する「沈黙志向」の高さなど、回避的な理由以外からも選択されうることが示唆されているといえよう。「沈黙志向」は尺度項目の表現としても、能動的な行動を差し控える理由を記述しないため、表出される回避的・自己抑制的な行動がどのような意味合いを持つのかは、ABSII を単純に用いるだけでは判別がつかず、このように他変数との関連から推し量ることが重要となってくる側面がある。しかし、本博士論文においては実証的な研究のデータを積み重ねることによって、「沈黙志向」は疑い深いからこそ、衝動的な行動を取らずに冷静に相手の次の行動を推し量ろうとする個人にも選択されうるが見出された。総合して、「沈黙志向」は「刺激を重要視しない傾向や不安定な愛着によってもたらされるが、様々な動機が交絡している可能性があるもの」として捉えられるだろう。今後、この「沈黙志向」を強く選択する個人の特徴を考察するにあたり、有用な基礎的知見が得られたといえるだろう。

「対話志向」については、投資モデルの「コミットメント」「関係満足感」「投資量」、嫉妬傾向の「排他的感情」「警戒行動」、認知的評価の「脅威」「重要性」、愛着の「安定」と正の関連が、愛着の「両価」と「暴力的支配行動」と負の関連が得られた。「対話志向」は ABSII の下位尺度のうち、関係維持の観点では最も適応的にはたらく行動と考えられるが、その行動はやはり関係を継続する動機づけとして投資モデルの要素が正の関連を示したことや嫉妬の中でも幾分正当な側面とされる「排他的感情」や具体的な行動を伴う「警戒行動」と関連が示されたことなどから、妥当性が確認されている。第 6 章の結果では愛着の「安定」との正の関連、「回避」「両価」との負の関連から、愛着理論やそれをもとにした Guerrero(1998)や金政(2006)などの先行研究におおむね沿った形で、安定した愛着を示す者ほど葛藤が起きた際にも関係を修復しようとする一方で、疑念を抱きやすい不安定な愛

着を示す個人ほど素直な統合的コミュニケーションを行うことが難しいことが示されているといえる。本論文の結果から、「対話志向」は「安定した愛着や満足な恋愛関係、刺激を脅威と認識する傾向、比較的健全な嫉妬傾向によってもたらされ、暴力的な支配行動を抑制する方向にあるもの」と考えられるだろう。今後の研究においても、「対話志向」に関しては幾分社会的に望ましい変数との関連が示されることが推測されるが、一方で例えば ABSII の刺激の程度が上がった時、すなわち明確な浮気が行われている際に、この「対話志向」を示すことは関係の継続に対しては建設的ではあっても、果たして個人の精神的健康という点では建設的なのだろうか。様々な刺激に対する「対話志向」を比較検討することで、その点について検討することも求められるだろう。

最後に「ライバル志向」に関しては、多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度とは一般的に正の関連を示したが、その他の変数との関連では有意な関連を示したものが少なく、投資モデルの「投資量」と正の関連、愛着の「安定」と負の関連を示した以外には、第 5 章第 3 節においてのみ、認知的評価尺度の「重要性」と正の関連を示した程度であった。また第 6 章の愛着に関する共分散構造分析では、「排他的感情」「警戒行動」から正のパスが引かれていたのみであった。得られた結果から、「ライバル志向」は「嫉妬傾向全般や投資量など、関係への執着から選択されうるもの」と考えられる。明確な結果がさほど得られなかったことについては ABSII で作成した「ライバル志向」は Guerrero の CRJS など表現されるような、ライバルに対して威圧するような行動や、パートナーとの関係を見せつけるような項目内容を含まずに、「ライバルとの接触を試みる」などのような、あくまでコンタクトを試みるだけの内容にしていたことから、調査協力者の回答のしづらさを誘発した可能性も考えられる。第 6 章・第 7 章においては項目数の少なさもあつてか、信頼性係数に関してもやや低い値が得られてしまっているため、今後の項目の洗練や新しい項目の追加も視野に入れて検討していくべきであろう。この「ライバル志向」は、恋愛関係の嫉妬を扱うがゆえに必要な下位尺度である。荻野(1983)が過去の嫉妬・浮気にまつわる犯罪を統計的に調べて「配偶者を殺すか、ライバルを殺すか」と端的に論じたように、恋愛関係上で起きたトラブルはパートナーとの葛藤に留まらず、関係に足を踏み入れた第三者に対する接触や制裁を行おうとする傾向も捉える必要があると考えられる。

## 9. 嫉妬再考：各種の「嫉妬深い」ことの意味

ここでは本論文全体のまとめに替えて、本博士論文で測定できるよう尺度を作成した多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度の示す意味を再考したい。

多次元恋愛関係嫉妬尺度の各下位尺度は他変数との関連において、おおむね一貫した特定のパターンを示していたようにも捉えられる。やはりもとの研究となった Pfeiffer & Wong(1989)にはじまり、嫉妬を多次的に捉えようとした研究者たちが述べていた通り、まず嫉妬の認知的側面、多次元恋愛関係嫉妬尺度では「猜疑的認知」とされるような下位尺度については、一貫してパートナーとの関係や個人の精神的健康に対してネガティブな方向性の数値を示していた。Attridge(2013)では嫉妬の病理的側面とされるが、このようにパートナーの些細な言動もネガティブな方向性に解釈してしまう、すぐに裏切りの兆候を感じてしまう傾向は、例えば第 6 章の結果で示されたように大きく愛着の両価性によって説明される部分があり、そして第 7 章でのデート DV に関わるような 2 種類の「恋人支配行動」に関して有意な影響を及ぼす要因となっていた。この認知的な過敏さを伴う嫉妬の側面は、精神分析的な解釈からの「嫉妬」らしい要素と「羨望」らしい要素にさらに分けて考えることができるかもしれない。第 1 章で紹介しているが、Delpierre(1954)は精神分析的立場から“羨望とは、他人の勢力下にあるものを所有したいという欲望であり、嫉妬とは、自分自身の所有物を持ちつづけようとするときの邪推深い気遣いである”(pp.43-44)と表している。こういった指摘と Klein による初期的な「羨望」の考察を併せて考えると、病的な嫉妬者の疑いに満ちた嫉妬は、パートナーをまるで事物のように所有し続けようとするために疑い監視する心理と、本当はもっと自分を満足させられるはずの(現実的水準を超えて途方もない、そして自分はまだ貰っていない)愛情を持っているはずなのに、自分を満足させてくれないパートナーを憎む(多くは抑圧された)心理が共存するものではないだろうか。パートナーの諸々の言動を、あるいは何も証拠がないにも関わらず浮気の子兆を感じ取ってしまう、この認知の歪みとも乳幼児期の体験に根差した傷つきともいえる嫉妬の側面をどのように今後扱っていくかが、嫉妬に端を発する個人や恋愛関係上の葛藤・問題を緩和させていく中で一番の鍵となると考えられる。

一方で、「排他的感情」は「猜疑的認知」に比べ、位置づけが少々難しいようにも捉えられる。この「排他的感情」は「猜疑的認知」「警戒行動」と正の関係を示すが、重回帰分析などに投入すると、一転してどちらかといえばポジティブな方向の結果を示すことも散見され、Attridge(2013)などでは嫉妬の比較的正当な部分と称される変数である。先行研究の概観や、本論文で得られた結果を総合すると、「排他的感情」あるいは多次的に捉えた場

合の嫉妬の情動的側面は、確かに単一の変数としては、疑い深さや相手を詮索するような行動を取るような不安定さが付随するものの、そういった嫉妬の認知的側面、行動的側面による影響が統制されて残るのは、パートナーへの愛情や関係への純粋な執着などに近い心的力動であるように考えられる。同じく作成した ABSII の適応的な下位尺度と考えられる「対話志向」とこの「排他的感情」が一貫して正の関連を示していたことから、そのように解釈できるだろう。「嫉妬」に適応的な機能があるとすれば、それはこの「排他的感情」がそういった機能を持つと考えられる。Pines(1992)や Buss(2000)が指摘する嫉妬の適応的な意味は、関係がいかにか大事かを自他に知らせる能力や、関係がある種の危機に陥っていることを知らせる火災報知器のような働きにあるとされる。不安定で、自分に自信がないとしても、それでもパートナーとの関係を繋ぎ止めようとする、どこか未成熟な機能としてこの「排他的感情」は捉えられるのかもしれない。本研究の結果ではこれら「猜疑的認知」と「排他的感情」は密接な正の関連を示し続けていたが、同様の尺度を用いた海外の先行研究では必ずしも同様の関連ばかりが観察されていたわけではなく、ほぼ無関連を示した研究も散見される。本論文の結果から、青年にとっては疑い深さと関係への執着は限りなく近いものとして経験されやすいことが考えられるが、さらに上の年代では、これら2つの変数の関連がどのように変動しうるか、検討していくことも求められるだろう。嫉妬の認知的側面の持つ破壊的な要素と、嫉妬の情動的側面が持つやや建設的な要素の対比から考えれば、真に関係や個人に対して破壊的なのは、「猜疑的認知」が高く、「排他感情」が低いといった場合である可能性も考えられるためである。

「警戒行動」は、本研究の結果から、例えば自尊感情など、精神内的な変数とはほとんど明確な関連を示さず、あくまで各種の行動を予測するような関連を示す変数であった。そのため、この「警戒行動」は「猜疑的認知」や「排他的感情」といった関係に関わる動機づけによってどこまで能動的に詮索・警戒・探索を行うか、という変数であると考えられる。先述のように海外の先行研究においては MJS の中でも特に使用されないことの多い下位尺度ではあるが、「警戒行動」に関しては特に第7章の「束縛的恋人支配行動」に対して、重要な影響力を持つ変数であった。また ABSII との関連においても、「対話志向」と正の関連を示し、また「ライバル志向」とも正の関連を示していたため、葛藤を能動的に解決する方向の性質を帯びた変数であることが考えられる。そのためやはり関係上の問題行動やその他、親密な関係における具体的な行動傾向等を伴う変数を予測する際には有用な概念であることが考えられるだろう。

## 10. 本論文の残された課題と今後の展望

本論文は嫉妬の経験と表出に関する尺度を作成し、またその尺度を用いて、各種の嫉妬深さを持つ個人とは心的にどのような特徴を示すかというような、親密な関係における嫉妬深さの関連要因を探り、嫉妬の持つ意味を探ることを大きな目的とするものであった。ただ、この目的との関係上、例えば「猜疑的認知」の傾向が高い個人がそれでも比較的満足な恋愛関係を育むにはどのような関係を目指すべきか、愛着に由来するような疑い深さをどのようにマネジメントすべきかといった個人内の変化や関係の改善を促すような方向性の検討についてはできていないことが本論文の課題であると考えられる。第7章で、各種の嫉妬深さがパートナーに対する恋人支配行動に対してある程度有意に説明率を示していたことから、個人の認知的な嫉妬深さや、そこで生じたネガティブな感情への対処・感情表出の不器用さは、場合によってはそのまま関係内での暴力や葛藤につながる危険もあることが本研究の結果からも示唆されている。その意味では嫉妬深い個人こそがいかにして親密な関係を良好なまま維持しうるか、今後本論文にて得られた知見をもとに発展させた研究を行っていく必要があるだろう。

本研究で作成した2つの尺度に関しても、あくまで海外の有用な理論をベースに作成したものでしかなく、今後日本国内でも嫉妬研究が増えていくにしたがって、より良い新しい尺度に更新していく必要があるだろう。さしあたってはABSIIの「ライバル志向」に関しては、項目数や概念的な曖昧さもあり、信頼性係数の低さが懸念されるため、ABSIIの項目内容をさらに洗練していくことが喫緊の課題といえるだろう。

本博士論文で得られた知見をもとに今後行っていくことが必要とされるであろう研究についての展望として、まず考えられるのがペアデータを用いた横断的研究である。例えば「猜疑的認知」のように、病理的・ネガティブな変数が高い個人でも、長期的な恋愛関係にある者は存在することが考えられる。その際、重要になってくるのは嫉妬深い個人がどのようなパートナーと、どのような関係を築いているか、またそのパートナー自身がどのように嫉妬深い恋人の疑念や詮索に対処しているか、ということである。Bevan(2013)がその一端を担う研究を行っているが、本博士論文で得られた基礎的な知見を踏まえて、ペアデータをもとにした調査結果の分析を行うことで、嫉妬深くても関係が長続きしている恋愛関係の中では何が起こっているかということについて、詳細に検討が可能となると考えられる。

次に考えられるのが、嫉妬尺度を用いた年代別の比較検討を行うことである。もしも恋愛関係の中で経験される嫉妬が、アイデンティティのための恋愛のような、自我発達の未熟な青年のみが経験するものであったならば、それ以降の年代では単純な嫉妬得点は激減することが予測され、個人の示す各種の嫉妬の意味が異なってくることが考えられる。海外の研究では18歳以降を全て単一の成人と見なし、年齢や婚姻段階などのデモグラフィックデータによって嫉妬がどのように変化するかといった分析を行っている研究は稀である。しかし、日本においては恋愛関係、夫婦関係で求められる役割が異なることも考えられ、当然その関係の中で経験される嫉妬や、ABSIIで測定されるような刺激に対する反応、関係上の問題行動の種類も変わってくる可能性が考えられる。本研究で得られた知見をもとに、さらに上の年代で嫉妬がどのように経験されるのかを検討することも、今後の嫉妬研究に資することであると考えられる。

最後に、縦断的調査による研究が考えられる。個人が恋愛関係に足を踏み入れ、様々なイベントを経て親密になっていく過程で、個人の示す嫉妬深さは果たして一貫したものであろうか。だとすれば嫉妬深さは関係特有のものとするよりも、特性的な色の強いものとする方が強そうに見える。この点については昨今の海外の研究では基本的に、嫉妬傾向は特性的な部分もあるが、パートナーとの固有の関係の中で得られるものであるとする見方が強そうに見える。Bevan(2013)によれば関係の初期段階では関係の重要度が低いために嫉妬深さも、関係を守ろうとする行動も表出される程度が低いとされる。このように、恋愛関係の進展とともに嫉妬深さやそこであらわれる行動も変動する可能性が考えられるため、日本の青年や成人においてどの程度観察されるか、また時間の経過や関係の進展とともにどのように変化しうるものであるかを検討していくことが求められるだろう。この点について検討することは先述した個人の嫉妬深さの低減のために必要な要因を検討することにもつながりうるため、恋愛関係の中で経験される嫉妬という大きな力動を捉える上で重要な意味を持つと考えられるだろう。

## 引用文献

Attridge, M. (2013). Jealousy and Relationship Closeness: Exploring the Good (Reactive)

- and Bad(Suspicious) Sides of Romantic Jealousy. *Sage Open*, 3, 1–17.  
doi:10.1177/2158244013476054
- Barelds, D.P.H. & Barelds-Dijkstra, P. (2007). Relations between different types of jealousy and self and partner perceptions of relationship quality. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 14, 176-188.
- Bevan, L. J. (2013). *The Communication of Jealousy*. New York: Peter Lang Publishing.
- Buss, D. M. (2000). *The Dangerous Passion: Why Jealousy Is as Necessary as Love and Sex*. New York: Free Press. (三浦 彊子 (訳) (2001). 一度なら許してしまう女 一度でも許せない男 PHP 研究所)
- Buunk, B. (1997). Personality, birth order and attachment styles as related to various types of jealousy. *Personality and Individual Differences*, 23, 997-1006.
- Delpierre, G. (1954). *De le jalousie : Ses causes, ses conséquences, ses remèdes*. Paris: Aubier Montaigne (荻野 恒一・杉田 英一郎 (訳) (1961). 嫉妬の心理 中央出版社)
- Elphinston, R.A., Feeney, J.A., & Noller, P. (2011). Measuring romantic jealousy: validation of the Multidimensional Jealousy Scale in Australian samples. *Australian Journal of Psychology*, 63, 243-251.
- Guerrero, L. K. (1998). Attachment - style differences in the experience and expression of romantic jealousy. *Personal Relationships*, 5, 273-291.
- Guerrero, L. K. (2014). Jealousy and Relational Satisfaction: Actor Effects, Partner Effects, and the Mediating Role of Destructive Communicative Responses to Jealousy. *Western Journal of Communication*, 78, 586-611.
- Guerrero, L. K., & Eloy, S. V. (1992). Relational satisfaction and jealousy across marital types. *Communication Reports*, 5, 23-31.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., Jorgensen, P. F., Spitzberg, B. H., & Eloy, S. V. (1995). Coping with the green - eyed monster: Conceptualizing and measuring communicative responses to romantic jealousy. *Western Journal of Communication*, 59, 270-304.
- Guerrero, L. K., Hannawa, A. F., & Babin, E. A. (2011). The communicative responses to jealousy scale: Revision, empirical validation, and associations with relational satisfaction. *Communication Methods and Measures*, 5, 223-249.

- 金政 祐司 (2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について. *社会心理学研究*, *22*, 139-154.
- 片岡 祥・園田 直子 (2014). 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, *23*, 13-28.
- 勝谷 紀子 (2004). 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, *13*, 11-20.
- 加藤 司 (2001). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係. *心理学研究*, *72*, 57-63.
- 益子 洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と, 性格特性, 見捨てられ不安, 承認欲求との関連. *カウンセリング研究*, *41*, 151-160.
- 松井 豊・木賊 知美・立澤 晴美・大久保 宏美・大前 晴美・岡村 美樹・米田 佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成. *東京都立立川短期大学紀要*, *23*, 13-23.
- 荻野 恒一 (1983). 嫉妬の構造. 紀伊國屋書店
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. (1989). Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, *6*, 181-196.
- Pines, M. A. (1992) *Romantic Jealousy*. St Martins Pr. (鈴木 晶・川勝 彰子 (訳) (1995). ロマンチック・ジェラシー—嫉妬について私たちの知らないこと— 筑摩書房)
- Rusbult, C. E. (1987). Responses to dissatisfaction in close relationships: The exit-voice-loyalty-neglect model. In D. Perlman., & S. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration* (pp.209-237). California: Sage.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M., & Agnew, C. R. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal relationships*, *5*, 357-391.
- Rusbult, C. E., Yovetich, N. A., & Verette, J. (1996). An interdependence analysis of accommodation processes. In Fletcher, G. J. O., & Fitness, J. (Eds.), *Knowledge structures in close relationships: A social psychological approach* (pp. 63-90). Manwah, NJ: Erlbaum.
- Rusbult, C. E., & Zembrodt, I. M. (1983). Responses to dissatisfaction in romantic involvements: A multidimensional scaling analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, *19*, 274-293.

谷 冬彦(2006).自己愛人格尺度(NPS)短縮版の作成 日本教育心理学会第 48 回総会論文集,  
409.

谷 冬彦・原田 新 (2011). 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研  
究科研究紀要, 5, 1-7.

## 謝 辞

本論文は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に平成 29 年度博士学位授与申請のために提出したものです。

本論文を作成するにあたり、指導教員の神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授 谷 冬彦先生には、懇切丁寧にご指導を賜りました。心より御礼を申し上げます。先生には学部 3 回生の研究室配属から 9 年間もの長きにわたり、公私ともに大変お世話になりました。心理学や、実証的研究についてまだ右も左もわかっていない頃から、様々な学問的知識や、論文の書き方、研究の立て方、分析の仕方などを、一からご教示頂きました。先生のご指導を受けることができたからこそ、本論文を完成させることができました。先生の研究室で心理学を学ぶことができ、博士課程に進んで研究の道を志して、本当に良かったと、そう思います。この場をお借りしまして、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

副指導教員、及び本論文の審査委員を引き受けて頂きました、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の吉田圭吾先生、同教授の河崎佳子先生、同准教授の伊藤俊樹先生、同准教授の相澤直樹先生にも、心から御礼申し上げます。先生方には本論文の審査員として、多くの有益なご示唆を賜りました。先生方から頂いた多様な視点からのお言葉を自分の中で反すうし、吟味して論文に取り入れていく中で、また自分のテーマに対して幾つもの新鮮な発見をすることができました。おかげさまで研究の方向性を整えることにつながったと感じております。改めまして感謝申し上げます。

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の鳥居深雪先生、同教授の坂本美紀先生、同准教授の齊藤誠一先生、同准教授の赤木和重先生、同准教授の林 創先生、同准教授の山根隆宏先生、そして立命館大学総合心理学部教授の森岡正芳先生にも、深く御礼申し上げます。先生方には私の神戸大学での長い学部生～大学院生の生活の中で、また 5 年間務めた補佐員としての勤務の中で、多大なご配慮・ご指導を頂き、また大変お世話になりました。先生方とは普段お話をする中でいろいろとお教え頂いたことも多く、困った時には助けて頂いて、大学院生活をととても実りある充実したものにして頂きました。他の研究室の学生

であるにもかかわらず、自分を多くのお酒の席やゼミ旅行にまで誘って頂けたこと、教育心理学会総会の運営で燃え尽きるほど先生方とともに準備・運営ができたこと、補佐員としての自分の仕事のミスを優しくフォローして頂けたこと、調査に快くご協力頂けたこと、思い返せば私は神戸大学の心理の先生方全員にお世話になってばかりでした。まだまだ研究者としては未熟な自分ですが、いつかどこかで、先生方には何かしらの形で恩返しができるかと存じます。本当にありがとうございました。

谷ゼミの先輩である、岡山大学准教授の原田 新先生にも深く御礼を申し上げます。修士の頃に先輩にご指導頂けたことで、自分の現在の研究テーマに巡り合うことができました。卒業されてからも、自分の論文の進み具合等をいつも気にかけて下さり、誠にありがとうございました。

博士課程の同回生である、松木太郎さん、西尾裕美子さんにも厚く感謝を申し上げます。卒業するのは自分が最後になってしまいましたが、あなた方と過ごせた研究室の日々は楽しく、刺激に満ちたものでした。松木太郎さんには、修士の頃から同じ基礎論コースということで、院生生活を長年にわたって支えて頂きました。博士に進学してから、時間はかかってもこうして論文を完成させるまで頑張り続けることができたのは、研究のことや馬鹿話を、お互いにいつでも話せる太郎くんが近くにいてくれたからだと思っています。西尾さんには、いつも気さくに話しかけて頂いて、また自分の悩みや考えを聞いてもらうことで、支えて頂いていました。お二人とも、ありがとうございました。

博士課程の後輩である、田中美帆さん、雲財 啓さん、長田真人さん、丸山 綾さんにも感謝申し上げます。田中美帆さんには、私にとって修士の後輩ながら博士で自分よりも先に卒業された先輩という位置関係になりましたが、太郎くんと同じぐらい長く、そして近くで支えて頂きました。ともすれば論文投稿や発表等、現実的な問題から離れ、本や論文の世界に浸りがちな私は、恥ずかしながら田中さんとお話をする中で、研究者として、博士の学生として必要な多くのことを学ばせて頂きました。また、雲財さんにはいろいろなお話をする中で、荒んだ心を癒して頂いたことがよくありました。長田さん、丸山さんにも、同じ院生室の中で多々お話をさせて頂きました。皆さん、どうもありがとうございました。

博士課程の先輩である、竹井夏生さん、近藤龍彰さんに感謝申し上げます。竹井さんには補佐員としてともに勤務した4年間、本当にお世話になりました。近藤さんには研究についてお話を伺う中で、多様な示唆を頂きました。ありがとうございました。

補佐員として1年間ともに勤務した、柳川真緒さんに感謝を申し上げます。柳川さんの一を聞いて十を知る賢さと、その明るさ・笑顔に、実はとても救われていました。どうもありがとうございました。

谷ゼミの皆様、感謝を申し上げます。長らく谷ゼミに所属し、教えられ、やがて教える立場にもなることで、多くの成長を経験することが出来ました。特に後輩の惠本正輝さんには、私の博士課程の最後の2年間、同じゼミの学生として、また補佐員として、支えて頂きました。ありがとうございました。

博士論文に関わる各調査にご協力頂きました、学生の皆様と先生方に、御礼を申し上げます。学生の皆様、先生方のご協力なしには、この研究を行うことはできませんでした。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、これまで私を支えてくれた両親に御礼を申し上げます。父 郁夫様、母 みゆき様、尊敬するあなた方が愛情深く見守り、支え続けてくれたからこそ、私は何事もなく自分の興味を突き詰めて、この研究を続けることができたのだと思います。私の博士論文はあなた方のおかげで、やっと、本当に遅くなりましたが完成させることができました。ありがとうございます。

本論文は、以上のように多くの方々にご指導、ご支援を賜ったことで、提出することができました。ここに感謝の意を表しまして、謝辞とさせていただきます。

平成30年1月15日

## 博士論文に関わる研究業績

### ◆学術論文（学会誌）【査読有り】

神野 雄 (2016). 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 25, 86-88.

神野 雄 (2017). 架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 26, 140-153.

### ◆学術論文（紀要）【査読有り】

神野 雄 (2013). 青年の恋愛関係における認知的な嫉妬に関する一研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, 12, 32-39.

神野 雄 (2015). 嫉妬研究の概観と展望 神戸大学発達・臨床心理学研究, 14, 18-28.

### ◆学会発表【査読有り】

Kanno, Y. (2016). Personalities associated with romantic jealousy experience: considering self-esteem and narcissism in Japanese samples. *International Union of Psychological Sciences (The 31st International Congress of Psychology: ICP2016) at Pacifico Yokohama, Japan*, PS26P-07-293.

Kanno, Y. (2017). Predictors of various responses to imagined infidelity in Japanese undergraduates: examining the roles of stress and commitment to relationship. *Conference of the International Society for the Study of Individual Difference (ISSID2017) at University of Warsaw, Poland*, 393.

### ◆学会発表【査読無し】

神野 雄 (2013). 新たな多次元嫉妬尺度の作成 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 305.

神野 雄 (2013). 青年の多次元的な嫉妬と自我発達の関連 日本青年心理学会第 21 回大会発表論文集, 48-49.

神野 雄 (2014). 青年の恋愛関係における嫉妬と自己愛の関連について 日本教育心理

学会第 56 回総会発表論文集, 496.

神野 雄 (2015). 嫉妬深い人ほど不満足で不安定な自己像を持つのか?—クラスター分析を用いた探索的な検討— 日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集, P4-006.

神野 雄 (2015). 青年の関係満足感・関係重要度と嫉妬傾向の関連 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 354.

神野 雄 (2016). ネガティブな反すうと嫉妬傾向が恋愛関係の質に与える影響 日本発達心理学会第 27 大会発表論文集, 392.

神野 雄 (2017). 嫉妬者は恋人の裏切りにどう「過剰に」反応するか?—嫉妬場面への対処行動の作成— 日本発達心理学会第 28 回大会発表論文集, 434.

神野 雄 (2017). 浮気場面への予測された行動の類型化の試み—嫉妬深さ・認知的評価を考慮した検討— 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会発表論文集, 87.

## APPENDIX

### 1. 本論文で作成した測定尺度の項目内容

#### (1) 多次元恋愛関係嫉妬尺度 第 2 章, 第 3 章, 第 4 章, 第 5 章第 1 節, 第 5 章第 3 節, 第 6 章, 第 7 章

##### 【猜疑的認知】

1. 誰かに X さんをとられるかもしれないと考えることがある。
2. X さんが、自分を置き去りにして誰かのもとへいってしまうのではないかと思うことがある。
3. X さんが誰かに夢中になっているのではないかと思いがちである。
4. 自分の知らないうちに、誰かが X さんを誘惑しているのではないかと思うことがある。
5. X さんが、誰か他の人に魅力を感じているかもしれないと思うことがある。

##### 【排他的感情】

1. X さんが誰かといちゃいちゃしていたら、不機嫌になる。
2. 誰かが X さんとデートしていたら、嫌な気持ちになる。
3. X さんが誰かに寄り添って楽しそうにしていたら不機嫌になる。
4. 誰かが X さんに対して恋愛感情を持っていると知ったら、不愉快になる。
5. X さんが誰かに対してとても愛想よく微笑んでいたら不機嫌になる。

##### 【警戒行動】

1. X さんに、誰と何をしていたのか、何を話していたのかを聞くことが多い。
2. X さんがどこへ行くのか、どこにいるのかを聞くことが多い。
3. X さんにかかってきた電話が、誰からの着信だったのかを聞くことがある。
4. X さんに、過去や今の恋愛関係についていろいろと聞くタイプである。
5. X さんと仲が良い人たちのことについて、詳しく聞くことが多い。

#### (2) Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity (ABSII) 架空の浮気場面への予測行動尺度 第 5 章, 第 6 章, 第 7 章

##### 【攻撃志向】

1. 自分が受けた心の痛みを X さんにぶつける。
2. X さんに意地悪なことを言う。
3. X さんを傷つけるようなことを言う。
4. X さんに対して乱暴な態度をとる。
5. その件について X さんを責める。

**【沈黙志向】**

1. X さんが何も言わない限り、普段通りに接する。
2. 自分の勘違い・見間違いだったことにする。
3. この件は心に留めておくだけにする。
4. 時間が解決してくれるのを待つ。
5. 何もなかったかのように振る舞う。

**【別れ志向】**

1. X さんに別れ話をする。
2. X さんに別れようと言う。
3. X さんとどのように別れるかを考える。
4. X さんに、しばらく距離を置くことを提案する。

**【対話志向】**

1. 自分の正直な考えや気持ちを X さんに伝える。
2. いつもより X さんと話をするための時間をとる。
3. この件をどう乗り越えるか、X さんと話し合う。
4. 落ち着いて X さんの気持ちや事情について聞く。

**【ライバル志向】**

1. Y さんと直接会える機会を作ろうとする。
2. もし次に Y さんと会うことがあれば、自分が X さんの恋人であることを伝える。
3. もし機会があれば、Y さんに X さんのことをどう思っているのか聞こうとする。
4. Y さんについて、可能な限り調べようとする。

**2. 本研究で用いた測定尺度の項目内容 \*は逆転項目**

(1) Lee's Love Type Scale 2<sup>nd</sup> version( LETS-2)の Mania 項目 (松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田, 1990) **第2章**

1. 彼（女）が私を気にかけてくれないとき、私はすっかり気がめいってしまう。
2. 彼（女）が誰かほかの人とつきあっているのではないかと疑うと、私は落ち着いていられない。
3. 私は気がつくとき、いつも彼（女）のことを考えている。
4. 彼（女）が私以外の異性と楽しそうにしていると、気になって仕方がない。
5. 彼（女）は私だけのものであってほしい。
6. 彼（女）には、いつも私のことだけを考えていてほしい。
7. 彼（女）とケンカをすると、不安や心配でやつれてしまう。
8. 彼（女）からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じたときには、悩み苦しむ。
9. 彼（女）のことを思うと、強い感情が突き上げてどうしようもなくなる。

(2)見捨てられ不安尺度（益子, 2008) **第2章**

1. わたしは、他者からの拒絶にとっても敏感だ。
2. もしもわたしが大切に思っている人がわたしに腹を立てたら、その人が自分から去っていってしまうかもしれないとおびえるだろう。
3. 友達とケンカをしたあとには、できるだけ早く仲直りをしなければならないと思う。
4. わたしは自分がやりたくないことをしてでも、親しい人を喜ばせたり、助けたりすることができるよう、常に努力している。
5. わたしは、親しい人の感情を害したり、その人を傷つけたりしないように、とても気をつけている。
6. わたしは、自分を不幸にするような関係を断ち切ることに困難を感じる。
7. わたしは、親しい人を失ってしまう危険性について考えることがよくある。

(3)改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度（勝谷, 2004) **第2章**

【再確認願望】

1. 自分のことを受け入れてくれるのかどうか確かめたい。

2. 能力や性格など、自分のよいところを認めてくれるのかどうか確かめたい。
3. たとえ能力や性格などに悪いところがあっても、自分には価値があると相手が認めてくれるのか確かめたい。
4. 相手が自分を大事にしてくれているのか知りたい。
5. 自分のことを気にかけていて欲しい。
6. 相手から避けられているのかどうかは気にならない。\*

#### 【再確認行動】

1. 相手が自分のことを受け入れてくれるのか確かめたとしても、また気になってしまう。
2. 自分のよいところを相手が認めていると確かめたら、また確かめたりはしない。\*
3. 自分を好きかどうか確かめても、さらに相手にたずねたり、あるいは相手を試すようなことをする。
4. 自分のことを気づかってくれたとしても、自分のことを心からそう思ってそうしたのだろうかといつまでも考えてしまう。
5. 自分のことを気にかけてくれているのか気になって、相手の言動についてあれこれ考えてしまう。
6. 自分のことをいたわってほしくて、悩みをうち明けたり、あるいは弱音を吐いたりするようなことがたびたびある。

(注) 本尺度は二つの下位尺度からなるが、本研究では一次元性の尺度として用いた。

#### (4)親密性尺度 (谷・原田, 2011) 第2章

1. 自分が困った時に相談できて、相手が困った時に相談にのれる人間関係がある。
2. 相手の欲求を満たすことで、自分が満足できるような人がいる。
3. 人との付き合いは形式的なもので、自分は本当は孤独だと感じる。\*
4. 親しい人といるときに、お互いが満足し合える関係にある。
5. 自分を支えてくれる相手がいて、自分も必要なときに相手の支えになることができる。
6. お互いに信頼し、心を打ち明けることのできる相手がいる。
7. 他人に自分の心を打ち明けると、自分が呑み込まれそうに感じる。\*
8. お互いある程度の犠牲を払ってでも助け合えるような人間関係がある。
9. 人と表面的な付き合いしかできない。\*

10. 自分を見失いそうで，人を愛することができない。\*

**(5)自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）** 第3章

1. 少なくとも人並みには，価値のある人間である。
2. 色々な良い素質をもっている。
3. 敗北者だと思ふことがよくある。\*
4. 物事を人並みには，うまくやれる。
5. 自分には，自慢できるところがあまりない。\*
6. 自分に対して肯定的である。
7. だいたいにおいて，自分に満足している。
9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある。
10. 何かにつけて，自分は役に立たない人間だと思ふ。

（注）項目8は他の項目に対して異質であることが指摘されるため（谷，2001），本研究では除外した。

**(6)NPS 短縮版（谷，2006）** 第3章

**【有能感・優越感】**

1. 私は，自分が素晴らしい長所を持った人間であることを知っている。
2. 私は，才能に恵まれた人間であると思う。
3. 私は，周りの人達より，優れた才能を持っていると思う。
4. 私には，他の人が真似できないような利点がある。
5. 私には，隠れた才能がまだまだあると感じる。

**【自己主張性・自己中心性】**

1. 私は，自己主張が強い方だと思う。
2. 私は，自分の考えをはっきり言う人間だと思う。
3. 私は，自分独自のやり方を通す方だ。
4. 私は，人がどう言おうと，自分の言いたいことを主張する。
5. 私は，控えめな人間とは正反対の人間だと思う。

【注目・賞賛欲求】

1. 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある。
2. 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい。
3. 私は、みんなから一目置かれたい。
4. 人前で、みんなを驚かせるような発言をしてみたい。
5. せっかく発言するなら、私はみんなから賞賛されたい。

【自己愛性抑うつ】

1. 何かに失敗したとき、ひどく落ち込む。
2. 自分の話を熱心に聞いてくれないと、自信がなくなる。
3. 相手に無視されると、自分が小さな存在であるかのように感じる。
4. 自分の話や意見にはっきりした反応が返ってこないと、しばらく沈んだ気分になる。
5. 帰り際に誰も声をかけてくれないと、落ち込んだり悲しくなったりすることがある。

【自己愛的憤怒】

1. 自分の意見を少しでも否定されると、すぐ頭に来る。
2. 細かいことで注意を受けただけで、頭にきてしまう。
3. 自分と違う意見が述べられただけで、むっとする。
4. 自分の批判をされると、相手に怒鳴り返したくなることがある。
5. 私に恥をかかせた相手には仕返ししたくなる。

(7)関係満足感尺度（中村(1991)や金政・大坊(2003)などを参考に独自に作成) 第 4 章

1. 私は X さんとの関係に満足している。
2. X さんは私の要求を満たしてくれていると思う。
3. 私は今の X さんとの関係が理想的な関係だと思う。

(8)関係効力感尺度（浅野, 2009) 第 4 章

1. お互いに協力して、2人にとって望ましい理想の関係を築くことができる。
2. 2人の求めることのズレをうまく解決できる。
3. 2人の間で起きた問題について話し合うと、お互いが納得のいく結論にたどり着くこと

ができる。

4. お互いに協力して、2人の間で起こる問題を解決できる。
5. さまざまな困難に直面して動揺しても、お互いに相手の気分を和らげることが常にできる。
6. 問題の解決に向けて、うまく物事が運ぶようにし合うことが常にできる。
7. 2人の意見のズレをうまく解決するために必要な、コミュニケーション能力や問題解決スキルをお互いに持っている。
8. 2人の間で起こる良いことも悪いことも思いどおりにできる。
9. お互いに協力して、2人の間にやっかいな問題が起こらないようにできる。

(注) 自分の恋人 X さんとの関係について回答を求めた。

#### (9)ネガティブな反すう尺度 (伊藤・上里, 2006) 第 4 章

##### 【ネガティブな反すう傾向】

1. 何日もの間、嫌なことを考えるのに没頭することがある。
2. しばしば、嫌なことばかりを途切れなく考え続けることがある。
3. 一日中ずっと、嫌なことばかりを考え続けることがある。
4. 嫌なことばかりを 30 分以上途切れなく考え続けることがある。
5. 一度嫌なことを考え始めると、そればかりを途切れなく考え続ける方だ。
6. 同じ嫌なことを何度も繰り返して考える傾向がある。
7. 嫌なことがあると、そのことが一日の内に何度か頭に浮かぶことはあるが、長い間考え続けることはあまりない。 \*

##### 【ネガティブな反すうのコントロール可能性】

1. 嫌なことを考えていても、それに没頭せず何らかの行動をとることが出来る。 \*
2. やらなければいけないことがある時には、嫌なことを考えるのを中断して、それに取り組むことが出来る。 \*
3. 考えたくないと思えば、一時的にでも嫌なことを考えないことが出来る。 \*
4. 嫌なことを考えている時でも、頭をきりかえてそれ以外のことが考えられる。 \*

(10) ストレッサーの認知的評価尺度 (加藤, 2001) 第 5 章 第 1 節, 第 5 章 第 3 節

【対処効力感】

1. ストレスの原因をうまく解決できる。
2. そのストレスをうまく解消できる。
3. 自分の望み通りの結果が得られるように, そのストレスに対してうまく対応できる。
4. その状況を変えることができる。

【脅威】

- ・ th1. 自分にとって苦痛なことだと思う。
- ・ th2. 自分にとって, わずらわしいことだと思う。
- ・ th3. 自分にとって負担になることだと思う。

【重要性】

1. 自分にとって重要なことだと思う。
2. 自分に, 重要な影響を与えるものだと思う。

(注) 本研究においては, ABSII で提示した架空の浮気場面に対しての認知的評価として回答を求めた。

(11) SRS-18 (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野, 1997) 第 5 章 第 1 節

【抑うつ・不安】

1. 泣きたい気分だ
2. 悲しい気分だ
3. 気持ちが沈んでいる
4. 何となく心配だ
5. なぐさめて欲しい
6. 何もかもいやだと思う

【不機嫌・怒り】

1. 怒りを感じる
2. いらいらする
3. 怒りっぽくなる
4. 不愉快だ

5. 感情を抑えられない
6. くやしい思いがする

【無気力】

1. 根気がない
2. 話や行動がまとまらない
3. いろいろなことに自信がない
4. 何かに集中できない
5. よくないことを考える
6. ひとりでいたい気分だ

(12)投資モデル尺度 (古村・仲嶺・松井, 2013) 第5章第1節

【コミットメント】

1. 自分たちの関係を永遠に続けたい。
2. 私はXさんとの関係を維持しようと心に決めている。
3. 私は、自分たちの関係をずっと続けたい。

「関係満足度」

1. 私は、自分たちの関係に満足している。
2. 自分たちの関係は、私をととても幸せにしてくれる。
3. 自分たちの関係は、他の人たちの関係よりもずっとよいものだ。

「代替肢の質」

1. 自分たちの関係の代わりになるもの(例えば、他の人とのデート、友人と過ごすこと、自分一人で過ごすことなど)は魅力的だ。
2. 人と親しくしていたいという私の気持ちは、Xさんとの関係以外でも簡単に満たすことができる。
3. Xさん以外の、これから関わるかもしれない人たちはとても魅力的だ。

「投資量」

1. 私の生活の大部分はXさんとむすびついていて、関係が終わるとその全てを失ってしまうだろう。
2. 私は、自分たちの関係にのめり込んでいると感じる。

3. 私と X さんとの関係が終わると、友人や家族との関係がこじれてしまうだろう（例えば、X さんと私の親友が友達である）。

**(13)ISI-A (加藤, 2001) 第 5 章第 2 節**

**【ネガティブ関係コーピング】**

1. 無視するようにした
2. 話をしないようにした
3. かかわり合わないようにした
4. 人を避けた
5. 友達付き合いをしないようにした

**【ポジティブ関係コーピング】**

1. 積極的に話をするようにした
2. 相手の良いところを探そうとした
3. 相手の気持ちになって考えてみた
4. 相手のことをよく知ろうとした
5. 積極的にかかわろうとした

**【解決先送りコーピング】**

1. 何とかなると思った
2. あまり考えないようにした
3. 何もせず、自然の成り行きに任せた
4. こんなものだと割り切った
5. そのことは忘れるようにした

**(14)愛着スタイル尺度 (詫摩・戸田, 1988) 第 6 章**

**【安定】**

1. 私は人よりも知り合いがしやすい方だ。
2. 私はわりあいにとやすく人と親しくなる方だと思う。
3. 私は人に好かれやすい性質だと思う。

4. たいていの人は私を好いてくれていると思う。
5. 私は気楽に頼ったり頼られたりすることができる。
6. どんなことがあっても、友達は見捨てたりしないと思う。

【回避】

1. 人に頼るのは好きではない。
2. 私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやっていくことができると思う。
3. 人はあまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。
4. 私はあまり人と親しくなるのは好きでない。
5. 人は全面的には信用できないと思う。
6. 生涯つきあっていきたいと思うような友人はほとんどいない。

【両価】

1. 人は、本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
2. 私は時々、友達が本当は私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある。
3. 私は自分を信用できないことがよくある。
4. 私はあまり自分に自信を持ってない方である。
5. 私は誤解されやすい方だ。
6. 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人からうとまれてしまう。

(15)恋人支配行動尺度 (片岡・園田, 2014) 第7章

【暴力的支配行動】

1. Xさんをわざといやな呼び名で呼んだり、馬鹿にしたりすることがある。
2. Xさんを人前でバカにしたり、他人にXさんの悪口を言うことがある。
3. Xさんを押ししたり、つかんだり、つねったりすることがある。
4. 刃物などでXさんを傷つけようとすることがある。
5. Xさんに性的行為を無理強いすることがある。

【束縛的支配行動】

1. XさんにメールやLINEなどの連絡を返すことを強制することがある。

2. XさんのメールやLINEなどの履歴を勝手に見ることがある。
3. Xさんが自分よりも友人を優先すると私は怒ることがある。
4. Xさんと喧嘩をすると私はすぐに別れ話を持ち出してしまう。
5. Xさんの携帯をみて異性のアドレスを消してもらったことがある。